

あらすじ

平安時代の京都と昭和時代の東京のあいだを往ったり来たりする物語です。

後白河法皇は昭和時代の東京でゲンブが威張っているのがお気に召さない。

そこで、平安時代の流行歌の今様（いまよう）歌を東京で流し行させ、ひとのこころを平安にすればゲンブが威張るのはむずかしくなるはずだと、まあ、このようにお考えになったんですね、東京に住む声のいい女の子を拉致して京都に集め、今様の本場の美濃（みの・岐阜県）の青墓（あおはか）の歌い手たち、これを青墓傀儡（くぐつ）というんですが、のレッスンをうけさせ、東京に送りこむ作戦をたてた。

ここまでがいいが、さて、その先は、となると、ゴタゴタ、テンデンバラバラのくりかえし、昭和11年（1936）2月26日の恐怖の大事件が結末となる。

著者

高野 澄（たかの・きよし）

1938年埼玉県生れ。同志社大学卒業、立命館大学大学院修了、立命館大学助手を経て著述専業、これまで百十冊を刊行。おもな作品は『風狂のひと 辻潤』『武芸者で候 武蔵外伝』『オイツチニーのサン 日本映画の父 マキノ省三ものがたり』『京都の謎（シリーズ）』『文学でめぐる京都』（復刊タイトル）『古典と名作で歩く本物の京都』『大杉 栄』など。

[kuupachi@jade.plala.or.jp](mailto:kuupachi@jade.plala.or.jp)

<http://takanok-kiyoshi.com/>

[ctakanokiyoshi](http://ctakanokiyoshi)

(9)

「双葉山（ふたばやま）、勝ったんだろうね……？」

アヤが修二にききたいのは双葉山の勝負なんかじゃない。

ききたいことがききにくいから、ききたくないことを、わざとつよく、きく。

「負けちゃったの？」

ガラス戸越しに、修二はおもての通りを見ている。アヤのいうのが耳にはいったのはたしかだが、とおりすぎてしまったのも、たしか。

「おくれ、あてもの、いつかい！」

「はいよ、ヨシエちゃん、あてもの」

土間におりて、ヨシエの相手になる。

「ヨシエちゃん、まず、おまじない」

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な・だ・い・こ・く・さ・ま・の

・い・う・と・お・り……チチンブイのブイ……これ！」

ヨシエの指はあてもの箱の小窓のうえでぐるぐるまよい、「れ！」で止まった小窓をやぶり、銀色のくさをひきあげる。

「くさりだア」

「くさりだね、ネックレスだよ。ヨシエちゃんがお嫁にゆくときにつかえるよ、よかったじゃないか」

ヨシエは「ふーん」とうなずき、銀色のくさを指でまわしながら、かえっていく。

「ヨシエちゃんて、ヤリの子？」

「佐官屋さんの、二番目」

「佐官屋の……いい声だな」

アヤのからだの芯が、ぴくーんとふるえる。

いい声だ、なんて——このひと、やっぱり、おかしいんだ。

おもいきつてきいてしまおうかしら——ねえ、おまえさん、ほんとうにあんたはお相撲を觀にいつているんだろつね。お相撲を聞きにゆくなつて、ばかなこと、やつちやいないよね？

でも、いったんきいてしまったら、アヤの暮らしのなにもかも、この駄菓子屋の店も、夫の修二も、ひとりむすめの八ナエも、みんないっぺんに崩れてなくなつてしまふような気がして、きけやしな  
い。

ねえ、おまえさん——アヤが口をあけた途端にがらつと音がして、なにもかもいっぺんに崩れてしまふんじゃないか。

ききたいのに、きけやしない。

きいたら、おしまいだ。

(02)

四方修二とアヤのひとりむすめ、八ナエ、十歳。

八ナエのあと、子供はうまれなかった。

八ナエに手がからなくなったところでアヤは駄菓子屋をひらくことにした。

「やりたい、つていうならおれはかまわない。ひとつだけ……」

修二は、すこしでも儲かつたら派手につかつてしまふこと、と条件をつけた。

「おれのかせぎじゃやつていけないから女房に駄菓子を売らせていると、世間にそうおもわれるのも恰好のわるいはなしだから」

「ひとさまにみせるために派手にやるつていうのは、なんだかあたし、おてんとさまにすまない気がするんだけど……」

「一本ですむ鼻緒を二本買うとか、八ナエに、ちよつと見栄えのする着物を買つてやるぐらい、おてんとさまがどつこのどつこのといつものじゃないさ。それに、な……」

声をおとし、

「小銭をかせいでのにつかわない、さては貯めこんでいるなとおもわれたら泥棒にねらわれるよ。泥棒はふせげないことはないが、

世間のやつかみ、こいつはおそろしい。だから派手につかって、のこったら貯めればいい、というわけさ」

アヤはおかしくなった。派手につかって、のこりを貯めて——そんなに儲かるはずがない。

「八八……このへんのおかみさんと子供が相手じゃ、そんなに儲かるわけもないがね」

表通りに売り家が出たのを買い、おなじ町内でひっこしして、ちりがみ、石鹸、洗い粉に駄菓子をならべた。

店は「ハナエちゃんの店」と呼ばれた。

アヤは少々不満、内心では「アヤさんの店」と呼んでくれるとおもっていたからだ。

むすめの名前で呼ばれるのがいやだというんじゃない。いやどころか、うれしい。それでも、店にすわっているのは自分なのに、なぜ「ハナエちゃんの店」なんだろうかとおもうことはある。

儲かるというほどには儲からないが、仕入れの安い駄菓子と雑貨だから売れただけ儲けのような気がして、

「ちよつと貯まったから、あれ、買ってもいいだろうね？」

「あれといわれても、あれだけじゃ、わからないのであります!!」

修二は、すねる。

チコンキである。東京でチクオンキというと田舎ものにみられるから、チコンキと、気取ってなまる。

修二はチコンキでレコードを聴くのが好き、ひまさえあればレコードをかけてる。

ひとりのころに買った国産のチコンキはゼンマイ交換も何度か、ピックアップもあれこれと取り替えているうちに、ふるくなった。

舶来の新品を買ってもいいじゃないかという雰囲気にはなっている。

「やすいものじゃあ、ないからなあ」

「やすくないどころか、たかい買い物さ。だけど、この家じゃあ、

チコンキが二台あったって贅沢でも無駄でもないね。なにしろ……」

うらの縁側に視線をまわして、

「あれ、だからね」

レコードのケースが二十箱ばかり、ケースにはいりきらないレコードが数十枚、積まれている。おもいで床がぬけそうになったことがあって、修二がレンガで補強した。

「新品買うとして、ふるいのは、どうするかな。売っても二束三文だ」

「だめッ、おまえさん。売るなんて、とんでもない！」

アヤの剣幕に、修二はたじろぐ。

新品は修二の専用、ふるいのは店に出す、アヤの計画。

あがりかまちにチコンキをおいて、客がきたらレコードを鳴らしてよろこんでもらう。赤坂小梅の「ほんとにそうなら」なんか、景気づけにはもってこいだ。

駄菓子屋に景気づけはおかしいが、「また出たんだね、ミス・ロンビアの新盤！」なんていいながらとびこんでくる客があれば、うれしいじゃないか。

ひとにはなせば、

「そりゃ、ぜいたく」

わらいとばされるだろうが、ちかごろアヤは、さびしくって仕方がない。

ハナエはどんどんおおきくなっちゃって、手がかからない。

てもちぶさたで、手を出せば、

「いいんだよ、ハナエがひとりでやるの！」

店でチコンキ鳴らせば子供があつまり、子供の母親がやってくる。レコードかけてやって、お茶をだし、たまには菓子もふるまってる。店はにぎやかになる。

アヤの思惑は半分あたり、半分はずれた。

チコンキを店に出してから客はふえ、アヤが店にいる時間はなぐくなり、売上もふえたが、無料のお茶や菓子があるから売上がふえ

るわけではない。

それはソロバンに入れてあるからかまわないが、アヤのさびしさはいやされない。

ふるいチコンキと、「このほかは絶対に駄目」の条件つきで修二が店の専用にしてくれた三十枚ばかりのレコードは子供たちの専用になっちゃった。

ゼンマイまきも針の交換も子供たちがやる、アヤの出る幕がない。針をみがくのも子供が競争でやってしまう。

母親はおしゃべりに夢中。脱脂綿を買いにきて、すわりこんでしまっ女。子供をむかえにきて、子供はおいかえして自分はすわりこんでしまっ女。

「アヤさんのおかげ。歌はきける、はなしはできる、天国さ」

お世辞じゃないのはわかるんだが、いわれるたびに、からだの芯からひんやりとさむくなるのは、なぜなんだろう？

(02)

その男がやってきたのは師走のかけり、天気の良い昼ちかくだった。

あたふたととびこんできて、

「お悔やみのカネをつつむ、なんというのかな、あれ、ありませんか？」

「組になったのはおいてないんですが、半紙でつつんで黒白の紐をかければいかがでしょうか。紐は別にお買いただけますが……」

「それで結構。あわてたもので、肝腎なものをわすれちゃって。わずらっていたのも知らずにいたところへ、いきなり葬式の知らせですよ」

アヤが気をきかせて硯箱を出してやると、男は、

「おおだすかり、おおだすかり」

つぶやきながら紙包みに上書きした。

たぶん、あの家だ、きのう錦糸町にいったかえり、葬式の支度を

していた家を見た。

「ご愁傷さまなことでも、こんなにいいお天気で」

「ほとけがね、そりゃあもう、いいひとでしたから」

まこもこいつて出てゆき、それっきりになるはずが、

「先日は、どうもお世話に……」

「まあ、もう初七日ですか、はやいこと」

「こういふ男は油断がならない。お世話になった、なんていうが、半紙と紐を売っただけで」お世話」とは、おおげさすぎるじゃないか。

「いやあ、じつは、ですな……」

油断するな、ねらいはカネか？

「先日おみかけしたのですが、チコンキが二台、あんなにたくさん  
のレコード、よほどお好きなんですな。旦那さん、それとも、おか  
みさん？」

チコンキやレコードが、どこをどう通ってカネにつながるのか？  
いやいや、それだから油断がならないんだぞ。

「うちのひとが、まえから好きなものでね。わたしだつてきれいな  
わけもないから、こうして店において、お客さんにも聴いてもらっ  
て……」

「サーピスというわけ。いや、ご立派」

「あー、今日はなにを……？」

「えっ、ああそうですな、その花林糖かりんとう（かりんとう）を」

「花林糖、はい、まいどありがとうございまーす」

ガラスの箱の蓋をあけ、アルミ杓子しゃしやのながいのをつっこんで、茶  
色の花林糖をざらざらと紙の袋に入れたら、

「あ、もっと、たくさん」

「たくさん……これくらい？」

ちひびらちひびらちひびらちひびら。

「もっと、たくさん。そこにあるのを、ぜんぶ！」

「ぜんぶ、ですな。はい、まいど！」

こんなにたくさんの花林糖、いちどにはいる袋はない。子供のおやつだから、いちどに山盛り一合がせいぜいだ。

何度にもわければいいが、そんなことをしていると、不安の時間がいつまでもおわらない。

ガラスの箱をさかさまにして、いっぺんにぶちまけ、「はい、まいど」で送り出したい気分なのである。

「あ、風呂敷があります」

男がとりだした大風呂敷。

ちらばっていたレコードをかたづけ、風呂敷をひろげる。

アヤはもう、目をつぶりたい気持ちで花林糖をぶちまけたが、大風呂敷のうえではちんまりの小山にしかない。

「まだ、はいりますな。それじゃあ、その、ねじりん棒と黒玉もいっしょに」

あれもこれもと、大風呂敷いっぱいにつめさせ、アヤが汗をかきかき計算した代金をはらうと、

「今日はいいい買物をしましたよ。いずれまたお邪魔して、旦那さんとレコードの話、したいものですな。好きなんですよ、わたしも素人としちゃあ自慢できるぐらいに集めています、いやいや、この旦那さんとくらべりゃ、どうにもなりやあしない」

男がでてゆくと、店がガラーンとなった。空き樂ねらいにやられたといえば、おまわりさんも信用してくれそうな気配。

おない年、いちばんの仲良しのテイコが顔色かえてすっ飛んで、

「空き樂ねらいじゃなかったんだね。大風呂敷かついだ男が出てゆくのを見たから、てつきり、あたしゃ……」

「うちのひとと、おなじでね、レコードが大好きなんだとさ」

「あのひとが、ねエ。そんなに変わったひとにはみえないのに……」

——あのひとは、きつとまた来る。

ぼんやり気分のなかに確信の一本線が通っている。



男は、省線電車で両国から隅田川をわたって市電にのりかえ、音羽の護国寺までおりた。

音羽は坂だらけの街、あがって、さがって、またあがる。坂から坂へ、ぬけ穴みたいな小道もあって、あとをつけるにはもってこい。

男は坂をさがって、あがって、またさがって横丁にぬけ、表札のない家にはいった。

杉の板塀にコールタールをぬりたくったのは悪趣味だが、世間さまに文句はいいませんからこつちのことは放っておいてください、といっているような雰囲気の板塀。

男の帯には鍵の束がぶらさがっている。男も、鍵の束も、あやしげな雰囲気だが、塀のくぐり戸と玄関はこの鍵でひらいたから違法容疑がかかるわけではなさそうだ。

ひとり住まい、のようだ。

ソフト帽子をぬぎ、マントをはずして壁にかけ、大風呂敷の荷――風呂敷包みというにはおおきすぎる――をひきずって奥の座敷へ。

机は紫檀したんが黒檀こくたんのまがいも、そうみえるのはこの男のなんとはいあやしげなところからの連想、もしも本物の紫檀、黒檀なら、机にもうしわけない。

すわりこみ、片手を机のしたにつっこんで毛布をひきだし、膝にかけた。

火鉢もない、ストーブもない。東京の師走の夜の寒気を毛布一枚ですこすつもりか。

両手で頬づえをつく。

じーっとしている。

暗くなった。

ひょいっと立ちあがり、スイッチをひねって電灯をつけ、またすわって頬づえ、じーっとしている。

明かりをつけたんだから、眠るつもりじゃない。

かんがえこんでいる、とっていいのかどうか。ひとがかんがえ  
ことをするのに、あぐらと類づえが不可欠なわけでもあるまいから、  
断言はできない。

夜半までそうしていて、立ちあがった。

さあ、いよいよ行動にうつるぞとおもわれたが、なんとということ  
はない。台所へいき、大薬罐おおやかんに湯をわかし、急須いっしょに座敷  
にもってきた、それだけ。

番茶をいれ、おおぶりの茶碗にふうふうと息をふきつけ、のんで  
いる。

やはり、かんがえこんでいるらしい。二杯目をつぐとき、ちゃー  
んと目でみていながら、こぼした。

雑巾をとり台所へいったが、足つきがたよりない。

つかれてるはずはない。とすると、やはり、かんがえこんでいる、  
こういう結論になる。

「……………」

つぶやき、ためいきをついた。

さあ、ためいきをつくぞと、自分で自分にいきかせてついた、  
手間のかかるためいき。

ためいきのおわりが、またつぶやきについで、

「マサヒトさま……………」

この男の、なんとはないあやしげな雰囲気はマサヒトという人物  
に關係があるらしい、そういうふうに見当をつけていいわけだ。

マサヒトという名はありふれているが、この男の口からきくと、  
なにやらうさんくさい。

きよるきよる、みまわしている。よほど大事なもの？ いや、そ  
うじゃない、例の大風呂敷。

ずるずるとひきよせ、包みをひらき、まずは花林糖から食いだし  
た。

番茶をのんでは花林糖ポリポリ、黒玉ペチャペチャで番茶ガブガブのくりかえしのうちに朝になった。

おおあくびを三度、横になり、やがて寝息をたてる。

花林糖の食い過ぎが気にかかるが、アヤが「なにをさしあげましたよ」「ときいたら即座に「花林糖！」と指名したのをみれば、よほど花林糖が好きなんだ。

花林糖の大食いは趣味かともおわれ、趣味ならば腹をこわすこともあるまい。

それはそれでいいが、かれはこれを三日三晩つづけた。あやしげ、というくらいでは追いつかない、奇っ怪というべきだ。

三日三番にわたって男の所業を観察したところ——とはいっても番茶ガブガブに花林糖ポリポリ、ときたま「マサヒトさま」のくりかえしだから骨のおれない観察でだが——さらに奇っ怪なことが判明した。

チコンキである、レコードである。この家のどこにもチコンキはない、一枚のレコードもない。

「好きなんですよ、わたしも。素人としては自慢できるぐらいには集めています」

駄菓子屋「ハナエちゃん店」で言明したのだ。

あれは、いったい、どうなった？

うそを言ってもなんにもならない場面だったのに。

(05)

男は、ふかい疑惑のなか。

知ってか知らずか、四日目の朝、さっぱりした顔で目をさました。いち、に、さーんと調子をつけ、筆笥のまえまであるき、下から二番目の引出しに手をかけ、

——あれッ、なんだッ、この筆笥は？

いちばん下と二番目の引出しの前板が、いっしょにパカーンとは

ずれた。

奥には小型の金庫。

鍵をさしこみ、ダイヤルをまわして合わせ、また鍵をまわし、うすい鉄板の扉をあけた。

鉄板の奥に桐の扉がある。

三段の引出しの真ん中をひいて、横にながし紙の包みをひっぱりだした。畳紙たとう(たとう)の包みである、よほど大事なものにちがいない。

包みを机のうえにのせ、わずかに頭をさげ、てのひらをこするのは敬意をしめすのと花林糖の汚れをおとすのと、両方を一度にやっているのだ。

印刷した紙がかさなっている。ネズミ色の鳥が飛んでいるような、でなければネズミのひっこしのような、にぎやかな図柄が印刷してある。

よくみると、鳥とみえたのはカラス、赤いのは朱印、とするとこれは、

なんとまあ、熊野牛王くまのこおう(くまのこおう)の起請誓紙きじかうせいし(きじしようせいし)じゃないか！

明朗なる二十世紀、かくわしき昭和の聖代の首都の東京に熊野牛王の起請誓紙とはおくゆかしさと荘厳がきわまってはずかしい気分になりそうだが、ご本人はしごく真面目な顔でたちあがって筆筒の上から硯箱をおろし、厳粛な様子で墨をすり、書きはじめた。

「雅仁さま……」

マサヒトは「雅仁」と書くんだな、率直な、いい感じの手である。花林糖ポリポリも番茶ガブガブも、みんなこの雅仁さまに関係があるらしい。

紀州熊野の起請誓紙はおおげさだが、「雅仁」なら、なるほど、熊野牛玉にふさわしい古風な名ではある。

大判の起請誓紙三枚、夜明けまでかかって筆をはしらせた。

大判といってもたったの三枚、それが夜明けまでかかったのは書

くよりも頬づえつきの時間のほうがながいからだ。

とはいつても、「この男の頬づえは」やれやれ、うんざり」「とか」だめだ、俺には書けない！」といった絶望・疲労・倦怠の気配はまったくなく、まさにいま、おおきな仕事をやりつつある自覚にあふれ、しかし興奮におしながされることのない、意気たからかな頬づえなのである。

いやしかし、興奮だけは、なかなか高かった。

どれくらい興奮かというと、アンコダマをぱくつと口に放りこんでしまったのに自分では気がつかない、それくらいの興奮。

(06)

さて、とつぜんあらわれたアンコダマ、それはなんだ？

アンコダマは駄菓子のひとつ、「ハナエちゃんの店」の花林糖の瓶のとなりに横長のガラスぶたの箱があつて、これにはいつていたのがアンコダマ。

菓子ずきにも種類があつて、花林糖型とアンコダマ型にわかれるらしい。

男は花林糖は好きだがアンコダマは嫌いのようだ。花林糖をどっさり注文したのに、すぐ横のガラス箱のアンコダマには目もくれなかつたのが、男のアンコダマ嫌いを証明している。

しかし、駄菓子屋「ハナエちゃんの店」では、男の好き嫌いの基準とは関係なしに事態が展開した。

一刻もやく男を追い出したいばかりに、アヤは額にうつすらと汗をうかべて花林糖を風呂敷につめていた。

その、かいがいしい姿が男の色気を刺激したものだから、男は興奮のあまり、

「そ、そ、そのアンコダマも入れてください！」

我が身のアンコダマ嫌いもわすれ、さげんでしまった。

アンコダマを知らぬひとのためにちょっと説明しておく、こしあん 漉餡こしあん（こしあん）に甘味をつけたのをピンポン球よりすこしちいさくま

るめ、濃い葛湯をかけて型くずれをふせぎ、かつ腐敗防止とする。

葛湯とはいっても、じつはジャガイモ澱粉の片栗粉の湯だが、とにかくそれをアンコのタマにかけたのが冷えると、胴のふといテルテル坊主の形になり、すわり具合もよろしい。

駄菓子にはカサカサした舌ざわりのものがおおいが、このアンコダマはツルリとした感触で、かすかながらも高級和菓子のおもむきがある。

「そうだ、このアンコダマのことも……」  
筆をとり、

——ここで雅仁さまにもうしあげておくべきことがら、とい  
いますのは、駄菓子屋「ハナエちゃんの店」の品、あるいは  
格について、であります。不肖資徳すけのり(すけのり)、邪心をさ  
り、ひたすら謙虚に観察いたしましたすえにもうしあげるの  
でございますが、「ハナエちゃんの店」は納言でもうさば大  
納言、将でもうさば大将、僧でもうさば大師に相当すると  
うしてよろしいかと愚考いたします。理由いかんといえ、  
この店がつねにアンコダマを用意して客の要望にこたえてお  
ることをもうしあげれば充分かとぞんじます。そもそもアン  
コダマともうしますのは——

もうしますのは、のあとに「グエーッ」ときた。嫌いなアンコダ  
マをおもわずしらす飲みこんだのが苦汁となって醜酔して、胃の腑  
をつきあげたにちがいない。

アンコダマのことを書けば「グエーッ」と絶縁できないと判断し  
たらしく、起請番紙をあたらしいのに換えて書きなおしをする。

三日三晩して、男の名が「資徳——スケノリ」だとわかった。

用紙は熊野の起請番紙、発信者が藤原資徳、宛て先が「雅仁さま」  
とくると、『平家物語』や『大鏡』かなんかを読まされているよう  
な気分だ。

夜明けに書きおわった。

しっかりと封をして、机にのせ、居すまいをただして、うやうやしく一礼。

封書を懐に入れ、横になったのは、まずは大仕事をはたした安堵感をあじわいつつ、ねむりたかったのだろう。

それが、ねむれない。

目が冴えた、というやつである。

大風呂敷をうらめしそうにみているのは、嫌いなアンコダマが気にかかって眠りを邪魔されたからだ。

それッ、と掛け声をかけておきあがり、風呂敷づつみに手をつつこんでアンコダマの紙袋をひき出した。

うらみかさなるアンコダマを捨てるらしい。ほかに手はない、ま  
ず賢明な策。

素足に下駄をひっかけ、がらりと戸をあけて出れば師走のひるちかく、しずかな街も、ざわめいている。

音羽から小日向、小日向から小石川にぬけたころには疲労で眠気さえ感じてきた。

このまま音羽にかえればったり、ぐっすりとなむれるはずだが、  
アンコダマを捨てずにかえるわけにはいかない。

だがしかし、困りはてた様子。ひろい東京に、アンコダマを捨てるにふさわしい場所がない。

うちしおれ、うるつくともなくうるつく資徳のうしろで、  
ギ、ギイツ！

虚をつかれ、たちすくんんだら、郵便局の前だ。

局員というよりは小僧、丁稚というのがふさわしい少年がドアをむりやりにこじあげ、ひるまえの掃除にかかるところだった。

ユウビンキョク——ああ、そくだ！

「おい、きみ！」  
いきなり腕をつかまれた少年、

「なにをするんですか！ 掃除をして……」  
少年をひきずって中にはいり、格子の奥におしこんだ。

ふところから封書を取りだし、

「平安時代まで、特急の書留！」

「あのお、ええと……」

「ぐずぐずするなよ、こっちは腹がへってるんだ！」

「書留はよろしいんですが、特急は鉄道のほうへ行っていたかな  
いと……」

「ほい、しまった。特急は鉄道、速達は郵便局さ。わかってるんだ  
よ、ちょっとまちがっただけさ。平安時代まで、速達の書留、たの  
む！」

ついでに油紙と麻の紐を実費でわけてもらい、アンコタマを小包  
にして、これも平安時代まで速達の書留でおくってもらった。二品  
とも宛て名は「雅仁さま」である。

アンコタマが無事に平安時代の雅仁さままでとどくか、どうか、  
とどいたにしても、はたしてアンコタマが雅仁さまのお口に合うか  
どうか、そこまでは男はかんがえていないらしい。かんがえても、  
どうにかなるわけでもないのだが――

(07)

「うらの、角から二軒めの空き家、売れたらしいよ」

「売れたかね」

佐藤千夜子(ちやこ)の「紅屋の娘」のレコードをふきながら、

修二がアヤにいう。

「雨情の詞もいい、中山晋平の曲もわるくはない。わるくはないが、  
これは千夜子の手柄だよ。『紅屋の娘のいうことじゃ、サノ、いう  
ことじゃ』の『サノ』をいかに唄うか、こいつは千夜子がきめる、  
雨情にも晋平にも手は出せない」

「うらの空き家が、さ……」

「売れたかね。せまい家じゃない、高かったらうに……借り手がき  
まっただけ、売れたんじゃないかもしれないな」



ところが、空き家の借手が挨拶にやってきたから、おどろいた。挨拶にきたのが花林糖の男だから、もっとおどろいた。

「年があらたまってから、ともおもいましたがね、なに、どうせ独り身、そんなもつたいをつけても仕方はないと……」

石鹼に歯ブラシ、手拭い二本、それに近所への挨拶用にと、半紙五束を買ってくれた。

「ひっこしはソバ、ときまつたようなものでしょうが、年越しソバとひっこしソバとかさなるのも面白いものじゃありませんから」

奥に目をやり、

「また、ふえたんじゃありませんか。いやいや、こちらのレコードは宝の山ですからな」

神妙な調子でかえっていった。

「それでね、あなた、そのひとはさ、奥のほうをみて、『また、ふえたんじゃありませんか』なんていうんだよ」

「こういうわけで資徳は、修二とアヤのあいだでは「レコードのひと」と呼ばれる。」

「ひろい東京だ、レコード好きはユマンといるさ。なーに、ただあつめて鳴らしてるばかり」

(08)

年がかわって両国の初場所、修二は朝と昼の二回の弁当をもって国技館につめつきりになる。

本場所十一日のあいだは、仕事は夜勤にしてみよう。

工業学校をでて腕はたしかな時計工だから、こんな自由もきいてもらえる。

修二の腕と学歴なら職長になっても不思議じゃないが、それがいまだに副長どまりなのは相撲好きのせい、といえないこともない。

アヤも相撲は嫌いじゃない。

いっしょになったところは芝の増上寺下に住んでいて、不都合はな

にもなかった。

「両国にやすい家がある、買う」と修二がひとりできめ、さっさとひっこしてきてから、修二の相撲好きがなみたいていではないのを知った。

アヤが相撲を好きになったのは両国にきてからだ。

「あたりまえだ。両国に住んでいて相撲がきらいだなんていえば、バチがあたる」

大分県から出てきた——大分とはなんのゆかりもないが——あきよし 種吉（あきよし）という力士がひょんなことから好きになり、昭和七年二月に種吉あらため双葉山がアヤの巖屋力士。

修二には巖屋の力士がいない。

「東京の、それも両国に住んでいて、だれのかれのとさわぐのは田舎ものさ」

相撲の全体が巖屋のつもりらしい。

アヤの巖屋の双葉山は昭和七年の十月場所は全休で、昭和八年の初場所は西の四枚目。

三日目の朝、

「今日は瓊ノ海たまのうみ（たまのうみ）だよ。あたしのぶんまで、声かけてやっておくれよッ」

アヤにおくられて国技館の木戸をくぐる修二、そのうしろすがたを柱のかけから見張る資徳。

きのうも、おととも、資徳は修二を観察していた。

便所や、棧敷席のうしろや、土俵の反対側から、じーっと修二を観察していた。

そして今日は、うちあげでこつたがえす出口のとこまで、

「おや、これはたしか、ハナエちゃんのお店の……」  
知らぬ顔ともいえないから、

「し」巖屋に

「ははあ、やっぱりそうだった。朝からずーっと、ですか。わた

しは終わりの五番にやっとまにあつたようなわけで。千葉のほうの仕事がながびきましてな、みてください、この荷物、あずけるひまもなし」

背中の大風呂敷をゆすつてみせる。

千葉のほうの仕事はともかく、終わりの五番しかみられなかったというのはうそなんだが、修二にはわからない。

家にもどり、レコードのひとに会った、そこまでいっしょにかえつたよとアヤにはなしたら、

「贋画はだれ、つていつていました、そのひと？」

「さあ、だれともいつちやいなかったようだが」

「荷物もつたまんまで終わりの五番にとびこむっていうんだから、よっぽどの贋画があるんだよ」

新聞の星取表を手に、あれかこれかと、アヤはひとしきりはしゃいだ。

つぎの朝、洗い粉を買いにきた客が腰をおちつけた。茶をいれ、レコードをかけてやると、

「あれ、おツルさんじゃないか。そんなに急いでも仕方はないよ、ちよつとお茶でものんでいきなよ……なんてね、自分の家でもないのにさ」

「ちよつとばかり、お邪魔しようかな。あたしもずうずうしいけど、あんたも相当なもんだね！」

「そうだ、アヤさん。あたしゃ、精油、きらしてたんだ」

客が客をよぶ大繁盛。

「あれッ、いまのは、あのひと……じゃなかったかしら？」

「だれさ、あのひと、つていうのは？」

「ほら、暮れにひっこしてきた……うちの空き家に」

アヤのおもつたとおり、資徳が店のまえをとおりすぎていった。

女の客がひきあげ、しずかになつたのを見すましたように資徳がはいってきて、

「きのう、国技館でこちらの旦那さんにお会いしましたよ」  
大箱のマッチを買い、

「それから、これは奥さん、あの……」  
いいにくいことをいいますが、という予告のつもりだろうか、わざと、どきまぎするふうになった。

おくさん、なんていわれるおぼえはない、おぼえがないから気持ちわるい。

「はじめはただ、気のせい、勘ちがいというやつだとおもっていたんです。しかし、どうも、そうじゃない、いや、こちらの旦那さんのことなんですがね」

修二が何をしたというの？

うちの修二はなんの取り柄もないのが取り柄、毒にも薬にもならないひとなんだよ！

「うかがっていましたが、相撲がお好きなことはわかります。しかし、きのうは、じっさいわたし、おどろきましたよ。見てはいるけど見えてはいない、というんでしょ？」

「見てはいるけど……それ、お相撲のことですか？」

「相撲のこと、そのとおり、ご覧になっていない、じーっと目をつむって……」

「目をつむって……それじゃ、お相撲が見えないじゃありませんか！」

「でしよう。だから、見てはいるけど見えてはいないんじゃないかと」

「だって、うちのひとは場所になると工場のほうを夜勤にしているって、朝から二回ぶんのお弁当もって……」

「相撲を見にゆくんじゃない、相撲を聞きにゆくんですな」

「相撲を聞きに……？」

「さよう、相撲を聞きに。旦那さんはね……いいですか奥さん、呼出しの声、行司の声……そんなものを聞きに国技館にでかけているんですよ。目をつむり、耳をすまして相撲を聞いているんです、勝

ち負けなんか気にはならないんですな」

うちのひとは相撲を聞きにゆく——「これは、どういふこと？  
わけがわからない、気味がわるい。」

霧のむこうに修二が遠ざかってゆくような——ねえ、あんた、あ  
たしを見ていて！

「ええと、マツチはおいくらでしたか。なあに、ちょっとばかり変  
わっているっていうひとは、すくないいいんだそうですよ」

(09)

修二がかえってきた。

「どうだった？ 今日外ヶ浜だけだ」

「こわい気持をおしのけるように、アヤはたずねてみる。」

「どうだった……ああ、うちのかみさんの鼻肩の双葉山か。勝った  
よ、いや、ええと、勝った……んじやなかったかな」

「はりあいがないねえ。双葉山、勝ったぞオぐらいはいってほしい  
もんだよ」

ああ、と修二は納得顔。

「わあわあの大騒ぎでね、行司の軍配なんか見えないのさ」

「人気が出てきたもんだ、双葉山も」

アヤは自分のほうからはなしをそらそうとした。「こうしないと、  
息苦しくってたまらないとおもったから。」

やっぱりこのひとは、相撲を見ていない。行司の軍配が見えない  
から勝負がわからないなんて！

レコードのひとは、修二のことを「ちょっとはかじ変わっている」  
といった。

ちょっと、のところでとまってくれればいいが、もっと悪く変わ  
ってゆく前触れかもしれない。

そうになったら、どうしよう？

ゆづべはそれでおわって、今日も修二はうれしそうな顔で国技館

にでていった。

「ちよいとオ、なにをぼんやりしてんのさ。年増女が背中まるめてぼんやりなんて……あやしいぞ、あやしいぞ！」

「やだね、テイコさん。そんなんじゃ、ないの」

「おや、そんなんじゃなければ、なんなのさ？」

いえやしない。

いえば、わらわれるだけ。わられれば、みじめな気持になるだけ。

チコンキのゼンマイを、テイコは自分で巻き、羽衣歌子の「女給の歌」をかける。

しのへ しのへと

雨が ふるウー

テイコが鼻唄で合わせる。

「ハナエちゃん、藤原さんと、すっかり仲良しになっちゃったね」

「ハナエ……あら、いやだ。学校からかえってきたのは知ってるけど、いつのまにか、どっかへ行っちゃった」

「だから、藤原さんといっしょだよ、駅の土手で」

「ちよっと、あんたッ。その藤原さんて、だれのこと！」

「だれって……喜れにひっこしてきた……」

「ハナエ！」

アヤはとびだした。

——ハナエ、逃げるんだよ、走るんだよッ、そのひとは、わるいひとなんだから！

両国駅のすみからすみまで探しまわった。

テイコもおおい顔をひきつらせて、てつだってくれた。

「ハナエ！」

「ハナエちゃん！」

国技館にいる修二を呼びに、ひとが走った。

息をきらせて、修二はやってきた。

「ハナエが、さらわれたんだよ！」

「ハナエをさらって、どうしようっていうんだ。子供がほしけりゃカネよこせ、なんていつてきたって、カネなんかありゃしない」

「そんなのんきなこと……ハナエがさらわれたんだよ！」

「だから、おれは……」

テイコが駅長室にかけこみ、駅長室から交番に報告がとどいた。

あの男、藤原資徳の借り家はもぬけのからになっている。

家主のいうには、資徳が家の明け渡しを告げたのは昨夜、家賃は半年分が前払い済み。家主はハナエのことより、カネばらいのいい客をにがしたのに気をとられている。

巡査がつきそい、店にかえた。

もしかすると、ハナエが先にかえっていて、

「おかあちゃんも、おとうちゃんも、どこに行ってたのさア！」

鼻さきを腹にこすりつけ、むしゃぶりついてくる感触を期待していたが、ハナエの姿は見えない。

見えるはずがない。

ハナエは藤原資徳にさらわれたんだ。

とつぜん、テイコの叫び。

「アヤさん、あれ！」

テイコのふるえる指がチコンキをさしている。指先がぶるぶるふるえて、チコンキをさしている。

「女給の歌」のレコードのうえに折った紙がのせてある。ピックアップでおさえてあるのは風にとばされない用心だろう。

「おかしな模様だな。なにか、まじないのような」

巡査は熊野牛王の起請誓紙を知らないようだ、無理はない。のびやかな字で、こういったことが書いてある。

——当方の勝手な事情で、娘さんをお預かりする。おさがわせしてもうしわけないが、ご両親や娘さんに悪意あつてのこ

とではないから、配なさらずにいただきたい。金銭をほしいわけでもない。娘さんの安全はいうまでもなく、食事や衣料、勉強の面でも充分以上のものを提供する用意がある。何故このようなことをするのか、娘さんがどこに住み、なにをするのかについては申しあげるわけにはゆかぬ。したがって、娘さんの行方をさがすのは断念していただかねばならぬ。無駄であるばかりか、危険でさえあるからだ。娘さんの安全については、娘さん自身から、しばしばお知らせすることになる。また、当方に悪意なきあかしとして、別送のものを受け取っていた。あくまでもあかしであり、娘さんの身を買った代金などではないのを理解ねがいたい――

署名も宛て名もない。

「カネかなにか、おくつてくるらしいな」

「そんな、あんた、おカネなんか！」

四方修二とアヤのひとりむすめのハナエはいなくなってしまった。

五千円の為替が書留速達でおくられてきた。

双葉山は白星をかさねているが、修二もアヤも相撲どころではない。

(第1章・終)



(91)

四方ハナエをつれ、藤原資徳は中仙道を京にむかう。

昭和の東京を出て、武蔵の熊谷あたりで室町時代、上州で過去の時代への遡及は急速になり、はやくも美濃で平安時代になった。

あるく、というよりはピョンピョンと飛んですすむハナエの横顔を、資徳は不安な気持ちでのぞきこむ。

——気がつきはしないか？ あたりの光景や、ひと様子がはげしく変わるのを、奇妙に思わないのか？

「藤原のおじちゃん……」

なんと返せばいいのか、まごついているうちにハナエの二の矢が飛んでくる。

「あしたの朝、ハナエはどんな着物を着るの？」

「着物……？ 洋服はもう着ないほうがいいだろうね。ハナエちゃんとおなじ年頃の女の子は、だーれも洋服なんか着ていない」

「洋服……なーに、それ？」

慎重を期したつもりが、裏目に出た。

昭和の東京を出るとき、ハナエは洋服を着ていたのに、昭和から平安へと遡及するにつれてつきつきと古い時代の少女の衣装に変わった、そのことをハナエはもうすっかりわすれている。

ハナエがわすれているのを、資徳は知らなかった。

「女の子の着物のことは、おじちゃんもよくは知らないんだ。あしたの朝、宿のひとにきいてみて、あたらしい着物を買おうよ」

フーンとハナエはうなずき、足元に目をやって、

「ちよっと足が痛いよ。血豆ができちゃった」

「ワラソーリだからね、ハナエちゃんは慣れていない」

「ハナエががまんすればすむこと、がまんする」

資徳は自信と不安と、半分ずつの気持ちになる。

ハナエのひとつがらは上出来、それが資徳の自信だが、肝腎の筋のほうは、いったいどんなものか？

父の修二の筋はとっくりと観察した、母のアヤの声も人並みよりは上だ。

ハナエの声も自分の耳でたしかめ、そのうえで平安時代への旅につれだしたのだが、その後に変化がないか、それが不安のたねになっている。

そろそろ美濃路もおわって近江、近江をすぎればいよいよ京だ。

近江と京の境の逢坂関を無事に通るためにも、ここあたりでハナエに、自分と資徳とは何の目的があつて京にゆくのか、知ってもらわなければならない。

それにしても、どうやってきつかけをつくれればいいのか？

フムフム、フム

フムフム、ファイ……

ハナエが鼻唄を唄う、その姿から資徳は一計を案じた。

たんたなりやの 波ぞ立つ

資徳は小声で唄ってみた。小磯の浜にこそ、ではじまる今様歌のおわりの一節だ。

どうするか——ハナエの横顔をうかがったが、表情にかわりはない。

もういちど、

たんたなりやの 波ぞ立つ

それでもハナエはあいかわらず フムフム、フムとやっているが、それが途中から変わった。

たんたたんた、たんたなりや

たんなたんな なんなたんな

きたぞツ、この機会をのがしてはならんと、

「ハナエちゃん、たんたなりや、の歌がじょうずだね！」

「ええ、なーに。ハナエが、なんか唄ったの？」

「唄ったじゃないか、 たんたなりや、って……」

「ふーん。これが歌だったのか。おじさんも知ってるんだね？」

「たくさんは知らないが、 たんたなりや、は知ってるよ。いちばんはじめはね、 小磯の浜にこそ、っていうんだ」

小磯の浜にこそ

紫檀赤木は寄らずして ながれこで

胡竹の竹のみ ふかれきて

たんたなりやの 波ぞ立つ

「おじさん、うまいね」

「いや。京にゆけば、もっとうまいひとがたくさんいるんだ」

「キヨウ……？」

ハナエの目にピカッとひかったものを感じ、資徳は背筋がさむくなる。

「キヨウ」から「トウキヨウ」を思いだすのではあるまいか、「トウキヨウ」を思いだせば「ドウブツエン」「アトバルーン」と連想はひろがり、「オオズモウ」「フタバヤマ」そして父や母の顔と声に記憶につながり——ああ、これですべてがだめになる！

「なかでも、サワっていう女のひとがいちばんうまいんだとさ」

「サワ……サワさん？」

「ハナエちゃんより七つか八つ、年上らしいよ」

これが、うまくいった。

七つ八つ年上のサワという女——これがハナエの競争心をかきたてたのだ。

「おじさん、あたしも、ハナエも、そのサワさんみたいに、うまく唄いたい！」

「そうか。サワさんみたいに、うまく唄いたいのか。それなら、風邪をひかずに、はやく着かなければ……」

キヨウに、といいそうになって、あわてて口をつくむ。

歌のはなしになると急に意欲を出した、これでハナエの声の筋の良さは確認された、余計なことはやるまい。

逢坂関では検問がきびしい。

源氏の総大将の源義朝は平清盛とあらずって惨敗を喫し、中仙道を東に逃げた。

美濃では源氏の勢力が強いから、義朝は美濃で勢力をもりかえして、ふたたび入京をはかるかもしれない。そこで逢坂関の検問がきびしくなった。

藤原資徳は平氏でも源氏でもない。

資徳の背後の雅仁さまは平氏や源氏の対立などは超越して、はるかに高く、聖なる権威の存在だが、それだけにかえって、逢坂関でこの名は出しにくい。雅仁さまの名は出さず、穩便第一で関所を通りたい。

ハナエとふたりで関守のまえに立つ。

関守のうしろに、資徳は視線をはしらせる。――

仲間ものがふたり、関の小役人に化けて出迎えているはずだ。

資徳は仲間の名も顔も知らない。先方は資徳の名は知っているものの、顔は知らない。

「その子供は、どうした？」

「はあ……？ どうしたといわれましても、本所さまのお召しによつて、東国から我が子をつれて……」

「本所は、何という？」

「ホウジュウジさま」

「ホウジュウジ……というと？」

べつの関守が「それは、院の御所のことではないかな」と口添えする調子でいう。これが仲間のひとりなのだろうか。ならば、知らん顔をしたほうがいい。

「インとは聞いておりませぬ、ホウジュウジとだけ」

「ホウジュウジという寺はない、聞いておらん！」

ハナエがうしろから資徳の袖をひいた、顔には不安の色がうかんでいる。

「本所の召しとはいうが、そのようなおさない子、京で、何のはたらきができるようか、あやしい。さては、その子が……！」

とめるひまもないうちに、関守のひとりがハナエの手をひつつかんで関屋の奥につれてゆこうとした。

小役人が数人、寄ってたかつて、たがいにささやくのが聞こえる

——クロウ、クロウ、ウシワカ、ウシワカ——源義朝の子の牛若丸こと九郎ではないかとの容疑をハナエにかけているのだ。

「この子は男ではない！」

ハナエをつれさるうとした小役人はハナエの手を放し、資徳につかみかかってきた。捕まえようとした感触でハナエが女であると知り、ならば資徳こそ義朝ではあるまいかと、途方もない嫌疑をかけたらしい。

「義朝の顔は知っておる。そのほうが義朝でないと判明したが、源氏ではない証拠はない、証拠を出せ！」

「証拠ともうされましても……」

「東国から来たともうしたの。ならばその東国の主から名札をわたされておるう、それが証拠になる」

名札がないからこそ関所でおびえている。資徳は関屋のうしろの小屋にほうりこまれた。

いつまで留置されているのか、出迎えの仲間はどうしているのやら、なにもわからないまま、覚悟をきめた資徳は腕をくんで眠りの姿勢になった。

仲間が来ているのは確信している、その仲間がどうやって自分とハナエをすくいだしてくれるのか、おもしろいとさえ思っているから、恐怖はない。

しかし、ハナエはそうはいかない。ハナエには仲間のことを知らせていない、知らせてもわからないはずだとかんがえたから。

——ハナエ！

さげぼうとして、やめた。

ここで下手にうごけば、ハナエを危険にさらすおそれがある。

天運、それを信じるしかない。

(03)

資徳は眠ってしまったから気がつかなかったが、

たんたなりや——たんたなりや——波ぞ立つ

ひとりぼっちで閑屋の外におかれたハナエは、さびしさをまぎら

そうという意識もないままに たんたなりやと、唄うともなく唄っ

ていた。

ハナエの歌に応えるかのように、

たんたなりやの 波ぞ立つ

「ああッ、おじさん。藤原のおじさん！」

ハナエは歌声のほうに顔をむけたが、すぐに失望して、腰をおろした。歌声は、資徳がつれてゆかれたのとは別の方角から聞こえてくるとわかったからだ。あの歌声は藤原のおじさんではない。

さびしさがとうとう恐怖に変わってきたハナエは、もうねむれない。

小磯の——小磯の——ながれこで——胡竹の——胡竹の——

小声の応えがあった。

小磯の浜にこそ

紫檀赤木は寄らずして ながれこで

胡竹の竹のみ ふかれきて

たんたなりやの波ぞ立つ

——だれだろう、おじさんじゃない？

ハナエの肩をそーっとたたたく男がいた。

「いつしよにきたひとは、何という名？」

正直にこたえて、いいんだろうか？

「あんたの味方だよ」

信じていいひとのようだが、なにかひとつ、味方の証拠になる言葉をいつてくれればいいのに！

その気持ちを何と表現したらいいのか、わからないままに、ハナエはただジーンツと男を見つめる。

じれったい時間がすぎて、ハナエがつぶやいた。

「おじさんがサワ……さん？」

「サワ……？ そうだッ、サワだよ、サワさんだよ。男だからサワさんじゃないが、おんなじことだ！」

資徳は監禁からすくい込まれ、ハナエと仲間ふたり、あわせて四人が月下の逢坂関で対面した。

「青墓<sup>あおはかくつ</sup>傀儡<sup>たたまる</sup>の多々丸（たたまる）です」

「多々丸さん……藤原資徳です」

「登利丸<sup>とりまる</sup>（とりまる）」

「登利丸さん……資徳です」

「あたしはハナエ！」

（4）

逢坂関を京にくだった四宮の河原で夜があけた。

「おお、かしらだ！」

かしらの名は栗王丸（くりおうまる）。

多々丸が藤原資徳に紹介すると、栗王丸は息せききつてはなしはじめた。

「やはり雅仁さま、冗談や遊びをおっしゃったのではない！」

恐怖の一夜の記憶もないらしいハナエは、河原で小石をあつめてあそんでいる。それを横目でながめながら、資徳がしみじみとした口調でいう。

「栗王丸よ、雅仁さまの深慮遠謀のすべてを知っているのはおまえひとりだけらしい。ここで、そのすべてを説明してくれぬか」

「さよう、ですな。藤原さまはお腹立ちでもありませんが、こう

なつたについては順序というものが……」

「わしに遠慮はいらんよ。雅仁さまにはそれなりの計略があつて、おまえには計略のすべてをおはなしになつた。わたしが後になつたからとて、気にはせぬ」

資徳のていねいな挨拶で栗王丸は気楽になつたようだ。声をおと  
して、

「おれなどには破天荒としかおもえないのだが、雅仁さまは……」

——雅仁さまはひさしい以前から今様歌いまようたに執着なされ、あまたの今様歌をあつめられたばかりか、自分でも唄い、声をき  
たえてこられた。

のどをやぶり、血をはくこと四度五度のすさまじさ。今様を  
好むといえは、だれかれなくお屋敷におよびになり、ともに  
楽しまれた。

われら傀儡にとつて、今様歌はなくてはならぬ芸のひとつ。  
その縁で、われらはいくどとなく雅仁さまのおまねきにあず  
かり、ついに乙前おとまえさまが京に定住し、雅仁さまの今様の師に  
なつた。

さて、雅仁さまの今様執着は暇にまかせてのことであろう、  
いずれは飽きられるにちがいないとおもわれていたのだが、  
なかなか、そうではない。ご自分でも意外ななりゆきで、ま  
ずは一天万乗いつてんばんじよう（いつてんばんじよう）の位、つぎに治天ちてんの君きみ  
（ちてんのきみ）、つまり政治をおこなう上皇さまにおなり  
になつてからは、まえにも増したはげしさで今様に執着なさ  
つた。

ある春の夜、それはわれらが京で今様を唄い、傀儡回しをや  
つておつたときじゃが、雅仁さまのお呼びで、おれひとりが  
御所にまねかれた。

「今様の歌を東国にひろめ、人心をおさめたい。それについ  
て、ぜひともおまえどものちからを借りたい」と、いきなり、  
おっしゃる。



わけもわからぬことながら、おれとしては「おおせのとおり、いかようにも」とお答えするほかはないではないか。

「すべては、これと相談せよ」、それだけいわれて雅仁さまはおさがりになった。

あとにのこられたのが藤原忠季さまといい、いまここにおられる資徳さまの叔父にあたるお方。

登利丸と多々丸は顔をみあわせる。

「今様など、ただの歌ですよ。ひろめる、なんていってもホトケの道とは訳がちがう。そのように大げさにあつかうべきものともおもえませぬが」

「おれが、破天荒というのも、そこなんだが」と栗王丸。

今様とは文字どおり「現代風」の意味だが、この場面では「現代風の歌謡」の意味でつかわれている。

それまでの歌謡の主流といえば、たとえば「催馬楽——さいばら」がある。

催馬楽の名義の由来についてはさまざまの解釈があるが、諸国からの貢ぎ物を都にはこぶ馬を駆り立てる内容の歌詞が主となっていたからだ、といった解釈がわかりやすい。

歌詞は和風、メロディーは唐風の組み合わせで、もっぱら宮中の奏楽の一種になっていたようだ。

催馬楽には「公的音楽」の性格が濃厚であった、そういつてさしつかえないが、それにたいして、平安時代のなかごろ、民間からおこって貴族のあいだに熱狂的に歓迎されたあたらしい歌謡が「今様——今様歌」である。

今様を歓迎、支持したのが貴族だ。だから宮廷でもうたわれたが、「八——五」や「七——五」の音階を主とする四行詞で唄いあげたのもっぱら庶民の人生の感情であった。

今様を得意の芸として稼ぐ集団があらわれ、そのなかで「名人」

の名を得たもののひとり法皇雅仁（後白河法皇）から「我が師」としてむかえられた美濃の青墓傀儡の乙前（おとまえ）という女性であった。

今様を得意とする芸能集団は男女の混成だが、声の質というものの関係からして、どうしても女性が優位、登利丸が今様に積極的になれないのはそのあたりにも原因があるようだ。

今様を東国にひろめるなんて、いうほうは遊び半分だろうが、いわれる身になってみれば、どこから手をつければいいのか、雲をつかむようなはなしとはこれか、といたい。

それを、かしらの栗王丸は、「おおせのとおり」と、うけたまわってきたという。

「雅仁さまは……これはおれのかんがえなのだが……やはり今様をホトケの道とおなじようにおもわれているらしいぞ」

「今様がホトケの道、ですか」

「ひろめる、とおっしゃるからには、そういうことではなかるうか  
と見当をつけたまでのことなんだが」

多々丸は栗王丸と登利丸の問答をだまってきたが、

「歌を唄っているあいだは悪事はできぬ、とでもいうのかな。おれにはおもいもよらぬことだが、天子ともなると、そんなことにまで  
気をつかわねばならんのか」

栗王丸がつづける。

——それはそれとして、あとにのこった忠季さまとおれは計画をうちあわせた。

東国には、われらのような今様唄いや傀儡回しはおらんらしい。

そこで手つとりばやいのは、われらがみんなそろって東国にゆくことではないかと忠季さまはいわれたのだが、おれは、きっぱりとお断りもうしあげた。「東国には、にぎわう宿駅がすくないときいております。それならば市もすくなかるうから、われらの暮らしが立ちませぬ」とな。

「それよりは、東国のものうちから声の筋の良いものをえらんで、それに今様をおしえる、そのほうがよろしいのではありませぬか、いそがばまわれ、とはこのことでございますよ」と。

忠季さまも同意なされ、東国へ、声の良い筋の者をさがしにゆかれたのが藤原資徳さま、そのほかの方々なのです。

(05)

京都。

鴨東の七条、四町四方の広大な敷地にそびえたつ法住寺殿（ほうじゅうじどの）。

法住寺殿といっても寺ではない、ありがたい仏法や坊さまが住んでいらっしやるわけでもない。

主人は法皇雅仁である。法皇は一天万乗の地位をさつさと次代にゆずり、いまは治天の君、法皇として法住寺殿にかまえている。法住寺殿は法皇雅仁の政庁なのだ。

- 3 5 -

まつりごとの本山たるべき法住寺殿だが、はて、それにしては――

「前代未聞！」

「それほどまでにわれらをいじめなさらんでも、よさそうなもの、

おお！」

「飢えて死ね、というのか！」

「乱世のいたり！」

とじられた扉をたたきこわさんばかりに怒り、泣き言をぶっつけてみたり。

「藤原忠季、出てまいれ！」

「出てまいれッ。いや、どうか、出てきてください」

連中が気弱になった。

それをみすかしてか、藤原忠季がしずかに姿をあらわした。

連中がどーっととりかこみ、なげくやら、うったえるやら、おもいておして怒鳴ってみせるやら。

「飢えて死ねというか」はおだやかではないが、忠季をかこんでさわぐ連中の顔に、なるほど精気はない。

「いや、そのように責められてはこまるのじゃ。あの件について、わが君が責を負うべきいわれはない」

「うわさがある！」

「火のないところに煙りはたたん」

「院の日頃がなよりの証拠。われらは噂だけにうごかされているではない。院の日頃の……口にするさえけがらわしい！」

強気が弱気になり、そのまま消えるかとおもつと、弱気の底でまた強気にもどる。

忠季の対応に余裕はあるが、多勢に無勢、いつまではつづくまい。

さて、法住寺殿におしよせているのは楽人である。

楽人——宮中で楽をかなでるものの往古ははなやかな地位と誇りにささえられていた。

雅楽寮の長官ともなれば、宮中儀式の生命を左右するほどの権能をもつか、とまでおもわれていた。楽が正しく奏されぬ儀式は正しくない、正しくない儀式によって決められた政治は正しくない——そういう理屈があったからだ。

この場合、正と不正とをわけるのは「あちら……唐ではこのようにする、このようにはしない」の基準である。

唐との関係がうすくなると儀式の唐風もうすれてゆき、楽人の晴れの舞台がすくなくなつた。官界における雅楽寮の地位はぐんぐんと落ちて、規模は縮小につく縮小である。

だが、そこはよくしたものといおうか、「笛を吹きたい」「和琴を弾きたい」「太鼓を打ちたい」という貴族が出てきた。ただの物好きや趣味ではなく、家の職として楽器を奏したいというものがおかつた。

楽人たちのまえには、そういう貴族の師匠として稼ぐ、あたらしい暮らしの途がひらけた。官界の外へ拡散する楽人たちの群れ、ということができる。

やれやれ、これで稼げる、と安心したのも束の間、「おかしな噂があるぞ」という噂が噂をよんで、

「宮中の儀式に楽などは不要である、やめてしまえ……と院がいったそうだ」

「楽の主流は声である、楽器ではない……と院がいったそうだ」

「楽器に重税をかければ、もちこたえられなくなつて手放すだろうから、それを一手に買い占めて法住寺殿におさめ、鍵をかけてしまおう……と院がいったそうだ」

京中だれひとり、法皇が今様歌に血道をあげているのを知らぬものはいないから、楽人たちは「ただの噂」とききすてるわけにもいかず、「院の真意をたださねばならぬ」と、おしよせてきた次第である。

おしよせるほうは生活がかかっているから真剣だが、つける忠季としては、

「噂でわが君を責められても、こまる」

この返答の一本槍。

あくまでも、こう応えていればいいのだが、と行って、いつまでも門前でさわがれては職務の手前からしておもしろくないので、そろそろ引き取ってもらいたい。「こまる」にうそはない。

「楽器が主流でないとは、まるで無学の徒の暴言、世迷いごと!」「忠季どの、あなたにはよくおわかりのはずだ。楽器は聖なる器ともいうべきもの、笛ひとたび吹かれればひとの心を清め、琴ひとたび弾かれれば清涼の気をまねき、鼓の音は邪気をはらう。これなくして、世を正しくはできぬということを」

「どうせ禁するなら、あの、下品きわまる今様歌をこそ禁するべきであろうぞ。いや、田夫（でんぶ）が野で唄うのを禁ずべしとはいわぬ。この京ではいかに、ゆるしてはならん、そうはおもわぬか、

忠季どの!」

いわしておいて、忠季が反論に出る。

「では、うかがおう。下品きわまる今様歌ともうされたが、今様歌の、どの歌の、どの文句が、どついつ節まわしが下品であるのか?」

「どついつ場合の常套手段、ずるい手で反論する。ずるいだけに、効果はある。」

楽人たちはひるんだ。

そこへ――

「わーい。傀儡回しだ、みんな、こいよ!」

「傀儡回しがくれば京は春じゃ。ほほー、くるぞくるぞ、美濃青墓の傀儡かな、三河かな」

(06)

鴨川からやってきたのは登利丸。

胸に、傀儡回しの舞台を吊っている。舞台に二体の人形をおき、床の下から両手であやつる仕掛け。

仕掛けといったところで粗末なものだが、ともかくも舞台のまえには幕をたらし、仕掛けや手のうごきが見えないようにしてある。くるりくるりと人形をまわしながら、登利丸がちかづいてくる。

登利丸をかこむのは子供だけではない、おとなもいっしょになっている。

登利丸は唄いながら、人形をまわす。

さアさ まわしてみよう

男の人形

泣かせてみよう

男の人形

笑わせようかな

女の人形

右にくるりは月が出る

左にくるりは日がしずむ

向かいおうての ハイ ごあいさつ

ハアーイ ヤット ヨウ!

登利丸をかこむ見物人の群れにおされ、楽人たちは法住寺殿の塀におしつけられたかっこうになった。

楽人と登利丸の正面对決!

ハアーイ ヤット ヨウを合図に、片方の人形が相棒をポカスカポカスカとなぐりだした。仕掛けものだけに、単純に、余念なくポカスカポカスカと、まことに快調。

「オーッ!」

なぐられ役の人形の手から小道具がこぼれておちた。

地面にコロコロツところがあったのを楽人がひろいあげ、てのひらにのせて、

「こ、これは!」

粗末ながらも、まぎれもない横笛の雛形。

「けしからん!」

楽人たちの怒りを横目に、なぐられ役の人形がこんどは太鼓を手にもつ、そのとたんにポカスカポカスカとなぐられて、太鼓がコロリ。

つぎは琴——ポカスカポカスカ——コロリ。

つぎは琵琶——ポカスカチャカポカ——スッテン。

つぎは鉦鼓——チャカポカポカチャカ——コロリ。

そのあいだにも登利丸は さアさ まわしてみよう男の人形、と唄う。

楽人たちは怒る。見物人の「ワッ!」という喝采にあおられ、怒りはいまにも火と燃えそうだ。

いや、もうすぐに火がついて爆発——そのとき、

われらが修行にいでしとき

珠州たますの岬をかいめぐり うちめぐり ふりすてて

ひとり越路こしじの旅に出でて 足うちせしこそ 哀れなりしかア

法住寺殿の塀のなかから、サワの歌声がきこえてきた。登利丸は

人形まわしの手をとめて、見物人といっしょになってサワの声に耳をかたむける。

楽人たちは、あっけにとられた様子、口あんぐりのものもいる。

足うちせしこそ 哀れなりしかア

おわりの一句をくりかえし、つぎには速い調子に変えて、

鈴はさやふる藤太巫女

目よりうえにぞ鈴はふる

ユーラユーラとふりあげて

目より下にて鈴ふれば

懈怠けたいなりとていまいまし

神はらたちたまう――

サワの声は法住寺殿の塀から煙りのようにながれて、聴くものの身体をつつむようだ。

つぎの歌は――みんなが塀のなかに気をむけたが、それっきり、

沈黙が「今日はこれでおわり」とつけた。

いつのまにか、藤原忠季も登利丸も姿を消していた。

見物人の輪がくずれ、散った。

楽人たちは無力、雑然たる群れとなって、三々五々と鴨の河原にむかう。

「ハッハッ、ハハアーツ！」

ねらいさだめた哄笑が塀のなかからきこえた。

忠季でも登利丸でもない。とすれば、これは、この法住寺殿の主、

治天の君、雅仁の哄笑にちがいない。

ちからなく河原にいそぐ楽人たちの背に哄笑は容赦もなくふりそそぐが、ふりかえるちからもなさそうだ。

「泣くな、俊輔（しゅんすけ）。今日はあの傀儡回しにしてやられたが、つぎには仕返した。いつまでも引っこんでいるものか！」

俊輔とよばれた男は肩をおとし、ながれる涙をぬぐおうともしない。



「くやしい！」

「わしも、くやしい。だから、仕返しだ」

「ち、ちがう。わしの口惜しいのは、あの女の今様だ、あの女の声だ」

「俊輔、なにをいうんだ。今様など、気にすることはない。あんなものを相手にすれば、こっちまで汚れてしまうわ」

ほかのものは五条の橋をわたり、ふたりだけ、橋の東にのこっている。

俊輔はしみじみと、いう。

「相良の家はずーっと和琴わこんをやってきた。わたしで七代とか八代とか。天下一のうぬぼれはないが一人前のつもりではある。それがな、あの女の声聞いて、自信はくずれたよ。あの女の声はわしのからだをつつんで、フウワリともちあげた。ことのついででいうが、わたしにも魂というもののあるのがわかったよ。ユサユサとゆれうごいたもの、あれが、わしの魂らしい」

「オイ、オイッ」

山階逸男やまかいはしな（やましなはやお）は相良俊輔あきらの肩をつかみ、ゆさぶる。瀕死のものの耳に、「気をたしかに持て、傷は浅いぞ！」と吹きこんでいるみたいだ。

「サガラッ、おい、おまえ、そんなことをいって、どうしようというんだ！」

「なにか考えがあるわけではない。だが、山階よ、わたしは今日かぎり和琴は弾かぬ、いや、弾かれぬ」

「ふーむ。おまえ、あの傀儡回しや今様唄いといっしょになるうとこのじゃ……」

「わからんよ、わしにも。今様唄いといっしょになる、それもよからうな、というぐらいのところだ。とにかく、山階よ、ここで別れだ」

「とめは、せん。おまえが自分できめたこと、

とめても無駄だろう」

相良俊輔をのこし、山階逸男はひとりで五条の橋をわたっていった。

(07)

「あのひとも、サワさん？」

小声で、おそろおそろ、ハナエが資徳にたずねる。

「サワさんじゃないよ。乙前さまといって、雅仁さまやサワさんのお師匠さまなんだ」

ハナエは今様歌を絶妙に唄う女をまとめて「サワ」というのだと思ひこんだらしい。

資徳は新鮮なものを発見した気持ちのいい驚愕を感じながら、ハナエの誤解を解いてやる。

昭和時代の東京から平安時代の京都まで、およそ六百五十キロメートルの空間距離はともかく、千百年をこえる時間の距離をくぐりぬけてきて平然としているハナエだ、強靱な神経の少女であるのは証明された。

そのハナエが「おそろおそろ」という熟語を絵にかいたような態度にならざるをえない雰囲気、それが法皇雅仁の政庁の法住寺殿である。

楽人としての地位も風前の灯火の山階逸男と相良俊輔が、まず登利丸の人形まわしの嘲笑の妙技で度肝をぬかれ、つぎには姿をみせないサワの声の技で圧倒された、その夜の法住寺殿——奥まった一室にくつろいでいるのは「かしら」とよばれる栗丸、登利丸と多々丸、藤原忠季、昭和の東京からもどったばかりの藤原資徳、ハナエ、サワ、そしてサワや雅仁の師の乙前など。

この部屋にあつまるまえ、ハナエは真先にサワに引き合わされた。「ハナエさん、あなたといっしょに昭和の東京へ行く日もちかい。東京に行ったら、よろしく、ね」

「トウキョウ……シヨウワ……？」

「サワさん、ハナエちゃんは、つまり、その……」

「ああ、そうだった。昭和も東京も、わたしもはじめて、ハナエさんもはじめて、そういうこと、だったわね」

ハナエは笑って、うなづく。

サワのあやまちがハナエの記憶を逆転させるのではないかと肝をひやした資徳だが、杞憂にすぎた。

昭和も東京もすっかり記憶の外へほうりだし、平安時代の京の少女になりきっているハナエなのだ。

ハナエはサワに 鈴はさやふる藤太巫女、の今様歌を即席でおしえられた。

わずか一度おしえられただけで、ハナエは資徳とサワを安堵させた。ハナエの歌の才能がそれほど希有のものである事実が、資徳をよろこばせた。

それからハナエはこの一室につれこまれ、忠季や乙前にひきあわされた。

御簾のおくふかく、わざと照明をくらくしてあるのが法皇雅仁の座、そこにひとがいる、とだけわかる雰囲気だ。

法皇の意をうけたまわってハナエにつたる忠季の、甲高い声がした。

法皇の意、それはハナエに、「ここで唄ってみよ」との指示であった。

鈴はさやふる藤太巫女

目よりうえにぞ鈴はふる

ユーラユーラとふりあげて

目より下にて鈴ふれは

懈怠なりとていまいまし

神はらたちたまう――

乙前は無言でうなずき、サワは「さきほどよりは、また一段と……」とうわずった声で称賛した。

御簾の奥に声はないが、ザワザワという、ハナエには耳なれない音がしたのは法皇が楽な姿勢にすわりなおしたからにちがいない、

それは法皇もハナエの唄いぶりに満足した証拠とつけとってよいものと思われた。

(08)

「東国の人心……」

忠季が法皇雅仁の耳となり口となつてはじまつた問答は、なれぬものには異様な感じをあたえずにはおかない、そういう種類のものだ。述語や助詞をなるべくはぶき、必要最小限の名詞や形容詞の単発で意志を通じてゆく。

「東国の人心」——「荒廢のきわみ」——「源頼朝」——「不明」

——「死生」——「死とも」——「生とも」——「判断保留」——

「楽」——「混乱」——「騒然」——「温和の兆候」——「皆無に  
あらず」——「断行」——「可否」——「断行」——「断行と決す  
べし」——最後の法皇の言葉で簡潔直裁の問答がおわり、それから  
ふつうの会話の調子になる。

「サワとハナエ、うたものは二人。資徳よ、うたものはあと何名必要か？」

- 4 4 -

「十五人あれば、二十人では多すぎましょう」

「うたものを、あと十二、三人。傀儡回しは？」

「登利丸と多々丸、そのほかに三名もあれば……」

うたものとは「歌者」「唄者」と書いて、「今様歌を唄う者」を意味する。

「資徳さま、まだまだ一段とちからを出していただかなくては……」

乙前がはじめて口をひらいた。

女の声にしては低音の部類、一語々々がピンピンとひびいて、聴くものの胸にというより、腹に直接にさしこんでくる。

ハナエのちいさな顎が乙前の一語々々に反応して、ピクッ、ピクッとうごく、無意識の反応だ。

「何度でも行きますよ、昭和の東京に……」

「楽——混乱——騒然ということですが、とすると、昭和の東京の

ひとびとが口をとぎして黙っているというわけではない……？」

「黙っているというより、混乱、騒然……ひとびとは唄ってはいるのですよ。それから、もうひとつ、これはわたくし資徳も、みなさまに何とって説明すればよいのか、方法がみつからなくて困惑の至りなのですが、チコンキとレコードというものがありません……」

「レコード、チコンキ……？」

乙前も、サワもハナエも登利丸も多々丸も、はじめてきいた「レコード、チコンキ」の単語の異様なひびきに魅入られ、膝をのりだした。

「レコード、チコンキ……それは何か、資徳よ？」

ハツと息をつまらせた資徳は、一瞬のあと、膝をすべらせて席をさがり、

「おねがいです、法皇さま。一日もはやく、いやいや、たったいまこの席から、わたくしをふたたび昭和の東京へ行かせてください。そうして、命令なさってください、レコードとは何か、チコンキとは何か、わかりやすく説明する方法を発見、飛んでもどってこいと！」

御簾の奥ふかくにむかい、資徳は平伏した。

(第2章・終)

(01)

アヤの店は「ハナエちゃんのお店」の名で繁盛している。

ひとり娘のハナエをさらわれたアヤに同情があつまり、

「ハナエちゃんがいないからといって、急にアヤさんの店って呼ぶのは気の毒だよ」

「そう思うね、あたしも」

修二もアヤも変わりはない。客がくれば茶を出し、レコードをかけ、駄菓子を袋に入れ、脱脂綿やベイゴマを売る。それまではことうっていた「郵便葉書切手売捌所」の看板を出したのが変化といえは変化。

修二はしばらくはしずんだ顔だったが、春めいてくると陽気になった。

「コロソピアの五月新譜、淡谷のり子、洋物」

アヤは、ああ、これでこのひとも大丈夫だと思う。

時計工場の景気はよくて月給もあがり、藤原資徳が書留速達でおくってきた五千円には利子がつくようになった。カネはあるのにレコードを買わないのは修二の気分が陽気じゃないせいだと、アヤは心配していた。

この調子、とおもってからアヤは、「淡谷のり子って、あれでしょ、

このまえには「三日月娘」を出した……」

「あそこだ、あるよ」

「まあッ、もう買ったのー！」

心配していたあたしにだまって、といたい。

「買うには買ったが、聴く気に、なれない」

「せっかく買ったものを、もったいないじゃないか」

むごい言い方だけど、わざとアヤはいう。あとひとおしで修二はレコードを聴く気になる。むごい言い方と思われても、かまうものか！

「気をつかってくれなくて、いいんだよ。そのうちに聴きたくなくなる」

修二のいうとおりになった。買ったまま箱にほづりこんでおいたレコードを、修二は聴く気になってきた。

「そっちに、あれ、ないか？」

「あれ、ばかりじゃ、わかりませんよ！」

「こっちないんだから、そっちにきまってるんだ」

ぶつぶついいながら出てきて、

「やつぱりここだ」

「やだね。その「黒い瞳」は、傷がついたから店におけばいいって、あんたがもってきたんじゃないか。まるで、あたしがだまってもってきたように……」

アヤは、ふくれっ面をしてみせる。

九時をすぎたから客はこないが、十時までは店をあけておく。こんな時間にレコードをかければ近所迷惑だが、新品のチコンキには修二が細工をしたから、ちいさな音で鳴る。

「すまん、すまん。ちょっと傷がついたぐらいでお払い箱にしたおれがわるかった」

ディック・ミネの「黒い瞳」を聴いてから、寝る。

「西洋にも、黒い瞳の女のひとがいるのかしら、ねエ？」

「さあ、な」

となりの部屋にはハナエの布団がしいてある。お母ちゃん、ただいま——ハナエが夜中にかえってきて布団がしいてなかったら、ハナエも自分もばつがわるい思いをするだろうから。

アヤは、修二になにか言いたいことがあるような気がしている。

不平や苦情ではない。

注文でもない。

なんだったかな、なんだろう、明日になれば思いだすのかな？

「……シイ、シイ……」

修二の寝言。

ハナエにオシッコさせてる夢でも見てるんだろっか。

ハナエのお尻は真っ白で、オシッコさせながら、あたし、あたしのお尻も子供のころにはこんなに白かったのかしら、なんてかんがえたことがあった。

夢なんて、おかしなもの。

ハナエを抱いてオシッコさせていたのは昔のことなのに、このひとはいまになっても夢をみて、

「シイ……、……シッ」

「……ガシイ、ヒガ、ヒガ、……シイ」

おかしいな、オシッコじゃないのかな？

カガミイワ——あらっ、まア、このひとは！

ハナエにオシッコさせているんじゃない。カガミイワ——鏡岩——

お相撲だ！

勝った負けたのお相撲じゃない。呼出しと行司さんだけの、声だけのお相撲だ。

「タマノウラア」

「トモエガタア」

いい気なもんだ。

このひと呼出の声に聞き惚れていたばかりに、ハナエはさらわれちゃったんだ。

それを知らぬはずはないのに、このひとは、ねむってからも——

むらむらと腹が立つのを予想したが、腹は立たない。

自分でもおかしな気分になって、ちいさな声で、

「フタバヤマア」

となりで修二が、

「……シイ、ムサシガワア……」



つぎの朝、テイコがぶりぶりしてやってきて、

「あーあ、レコード聴かせてよ、アヤさん」

「勝手にかけて、どうぞ」

「淡谷のり子だね。音楽学校出たばかりなんだよ、この歌手は」

アワヤノリコ——アヤの頭のなかでパチパチと火花が散る。

なんだったかな——アワヤノリコ——なにかあるんだ——なんだ  
ったかな？

テイコはゼンマイを巻き、ピックアップをのせ、

「それでは淡谷のり子の「三日月娘」、まいりまーす」

ミカツキムスメ——ええと、ええと——

波をうってレコードがまわり、

「お母さん、聞こえるウ？ あたしよ、ハナエよ！」

「アヤさん！」

テイコがさげぶよりもはやくアヤは走って、チコンキのまえにす  
わりこんだ。

「えーと……ハナエは元気です。藤原のおじさんは親切にしてくれ  
ます。おいしいものをたべました。お父ちゃんやお母ちゃんにあい  
たいけれど、ハナエは大事なお仕事のためにしっかりお稽古しなく  
てはなりませんから、がまんします。それからね、ヨシエちゃんに  
キシヤゴをかえしてください。ヨシエちゃんに借りたキシヤゴはあ  
たしの机の引出しの、千代紙（ちよがみ）の箱にはいつています。  
かえすのをわすれていたのです、謝ってかえしてください。それから、  
このレコードのことをけいさつにはいわないでください。それでは、  
このつぎまで、さようなら」

レコードは無音で回転している。

テイコはおずおずと手をのばし、視線の会話。

——もういちど、かけてみる？

——だめッ、さわらないで！

レコードは空転している。

ピックアップの金具はクロームメッキ、あかるく輝くはずなのに、

いまは鈍色にぶいろによどんで、ふたりの女の驚愕をひきつけている。

レコードがとまった。

「アヤさん、見てッ」

テイコがわたしたレコードをてのひらにのせ、指でこすりながらアヤは、いつか問屋の招待で行った煎餅工場を思いだしていた。

型抜きに失敗した煎餅生地が捨てられていた。手にとったら、両面の触感はツルツルしていた。煎餅の本来はザラザラした手触わりだから、ツルツルの感触が記憶にのこった。

「三日月娘」の片面もツルツルしている、針の溝がない。

「淡谷のり子はコロンビアだけど、これはコロンビアがつくったレコードじゃないね」

ラベルは、たしかにコロンビアだ。

これだって疑えばきりはないけど、ほかに何枚もあるコロンビアのラベルと地色や印刷の具合はおなじだ。だけど、駄菓子屋の娘のハナエの声をコロンビアが吹き込むはずはない。

ハナエが「お母ちゃん、聞こえるウ？」なんて呼びかける「三日月娘」のレコードを、修二はどこで買ったんだろう？

- 50 -

買ってきたのに、「聴く気になれない」なんていつて鳴らさず、ようやく聴く気になったとおもうと、「三日月娘」ではなくて『黒い瞳』だったのは、なぜなんだ？

「気味のわるいレコードだけど、ハナエちゃんが元気しているのがわかって、よかったじゃないか」

「そんなこと、テイコさん。元気でいるなら元気だって、それだけ知らせてくれればいいじゃないの。なにも、こんな気味のわるいこと、しなくても」

「そういえば、そうかね。ハナエは元気ですって、はがき一枚ですむことなんだからね」

しかしアヤは、テイコのこの一言で気が晴れた。

「テイコさんも、おかしなこというね。だってさ、相手の家にはがきをだすひとさらいなんか、いるわけないでしょ」

かわいた声でふたりはわらい、お茶をのみ、のりまき煎餅をかじった。

気は晴れたけれど、修二がかえってくるまでは長かった。

やっと帰ってきた修二は、アヤのはなしに目玉をひんむき、レコードをかけて、顎がはずれるほどおどろいた。

さっぱりわからないと修二はいう。

「ロンビアの新譜発売を知った二日目か三日目、昼のやすみに銀座にゆき、いつものデパートの、いつもの売場で買い、いつもの鞆にいれて工場にもどり、いつものとおりに家にもってきただけだ。

あの日は一日じゅう机にむかって設計図をにらんでいて、鞆は机にのせてあった。

帰りの電車でやられたというのも、この修二にかぎってはかんがえられない。

「それで、その……」

「口ごもって、修二がいう。」

「キシヤゴは？」

紙子の巾着が修二のまえにおかれた。

手にとると、ガラスのキシヤゴのふれあう音がする。

「ハナエのやつ、まだこんなものであそんでいたのか」

「あそぶっていうわけでもないんだけど、いちどあつめたものを、なかなか捨てられないものよ」

「ヨシエちゃんというのは、あの左官屋の子の、声のいい……」

「いつちゃ、だめッ。それをいつてはいけない！——さげぼうとして、もう手遅れなんだと気がついた。」

修二がヨシエのことを「いい声だ」といったときから不気味なことがはじまったのだけれど、起こったことは仕方がない、もっと悪くなりさえしなければ——

「ハナエのやつ、どうしてヨシエちゃんから借りたのかなあ。キシヤゴなんか、この店でいくらでも売ってるのに」

「いくらあったって、売り物だからね。自分の小遣いで買ったたり、

友達と取り替えたものでなければ、おもしろくないんだよ」「で、どうする、ヨシエちゃんに返しに行くか？」

あした返しにゆくつもり、とアヤはこたえた。

レコードのことはいわず、掃除のときに見つけた、もしかしたらハナエがヨシエちゃんから借りたんじゃないかしら、そういつて返す。

つぎの日にアヤがキシヤコを返しに行ったら、ヨシエがいなくなつて、大騒ぎをしていた。

いつものように学校に行つて、それっきり行方がわからないんだ。そうだ。

(03)

「タタマル？」

ヨシエは藤原資徳から多々丸を紹介されると、目玉をまんまるにして、うれしがった。

「タタマル……むかしのひとの名前みたいだな。おじさん、ほんとうはむかしのひとなんだろう？」

多々丸は苦笑するしかない。

「むかしのひとじゃない、いまのひとだよ」

ポンポンと足をふんでみせた。

「あーら、やだ。幽霊じゃないのは、わかってるのよ」

カラカラツとわらわれた。

「えーっとね、それじゃあ、ドウブツエン、知ってる？」

「ドウブツエン……さあーっと」

「ほーら、やつぱり知らない。じゃあ、アドバルーンは？」

雲行きがあやしくなったので資徳が割つてはいり、

「ヨシエちゃん、お弁当にするかね。朝からあるきどおしで、つかれちゃったよ」

ヨシエはひとりで水辺にゆき、足をバチャバチャやりながら弁当をたべる。

資徳と多々丸は木陰に腰をおろし、ヨシエを見張りながら弁当をつかう。

上州の高崎——ここでヨシエは資徳から多々丸にひきわたされる。高崎から先、江戸時代の江戸のほうにゆくのを多々丸はゆるされていない。

多々丸は、どこにでも自由にゆける資徳がうらやましくて、たまらない。

「この高崎までくれば……」

「こころもち背をのばし、南の方角を見やりながら、

「江戸時代や江戸の街がどういう具合になっているか、およその見当はつく。だが、その先にあるという東京や、大正や昭和ということになると、さっぱり見当がつかない。この、じれったい気持、資徳さま、あなたのようにどこにでもゆけるひとにはおわかりにはならない」

「わかつてはおるつもりだが、やはり多々丸の胸にあるものとはちがうのじゃろう。だが多々丸よ、おまえの焦りはそれとして、この資徳の気持をかんがえてくれたことはあるまいと思うのじゃが、どうかな？」

多々丸は、資徳にいったい何の不满があるのかと、疑惑の目つきになる。

「不满はない、しかし不安がある、といえばわかつてくれるかな」

「ふ・あ・ん？」

「不安に満ちているのさ、わたしの胸は」

「その不安と、わたくしの焦りと、どっちが……」

「くらべられない、別のものだ。わたしは、どの時代の、どの場所にもゆける。京の雅仁さまのおそばで今様を唄っているかとおもえば、昭和時代の東京では正体不明の金持に化けている。それが多々丸にはうらやましくみえるのだろうが、わたしは不安なのだよ。わたしは、どの時代のひとでもない、どの土地の者でもない」

多々丸は無言。

自分にだけ聞こえる声で、そういうものでございませうかねと、つぶやいた。

(04)

「フジワラのおじちゃん、お弁当たべちゃったよ。竹の皮はヨシエが自分で洗うからね、ヨシエはえらいでしょ」

「えらい、えらい。気をつけないと、川におちるよ」

「だいじょうぶ」

資徳は多々丸に、ヨシエをどう思うかねと視線でたずねた。

「声はいい、利発でもある。平安時代に慣れるのも手間はかかりませんまい」

「じつは、そこが気がかり」

「おや、そうですか。このまえのハナエはわけもなく今様唄いの女になって、まるで乙前さまの実の娘」

「ハナエも利発な子ではあったが、ヨシエの利発には、なんとというか、ケンがある」

「ケン、といますと？」

「江戸時代から先ではよく使う言葉だが、知らぬかな。ひとの気質にするどい角がある、ケワシイ、それがケン」

「それがハナエとヨシエの相違だといわれると、よくわかります。

で、ヨシエについて気がかりがあるといっていますのは？」

「ドウブツエン、アドバルーンをまだおぼえている、そこだ。ドウブツエン、アドバルーンはこまる、気がかりだ。あれは昭和時代の東京そのものだから、平安時代の女の今様唄いに変わるのに邪魔になりはせぬかと……」

「ハナエには、そんなところはまるでありませんでしたからね」

「わたしの失策でもあるな。この高崎で早くお前に会おうと、道をいそいだ。そのためにヨシエは、昭和の東京のことをわすれきらないうちに高崎に着いてしまった」

「ヨシエは、その、ドウブツエンやアドバルーンというものを平安時代までひっぱってゆくのでしょうか？」

「こまったことだが、そうなるのではないかという懸念がふたりに共通した。」

多々丸に、もうひとつ、なやみがうまれた。

なにも知らぬまま、ヨシエといっしょに西へ、京へ向かうのがいいのか？

ドウブツエンやアドバルーンなるものの、およそのところなりとも資徳におしえてもらい、ヨシエのまえではなにも知らぬ顔をしているのがいいのか？

ふたつにひとつ、多々丸が恐れているのは後者だ。

ドウブツエンやアドバルーンなるものの実態をすこしでも知ってしまえば、東京に、昭和という時代に行きたくて、矢も楯もたまらなくなるだろう。

多々丸は中仙道の高崎まで、その先に行つてはならぬぞと指示されているだけで、指示にそむいたら、どんな罰をうけるのか、なにも知らない。

京の雅仁さまや忠季さまも、罰などはかんがえてはいらっしゃらないだろう。だから、かえって、そこがおそろしい。

おもわず身震いしたのを、どう勘違いしたものか、資徳が、

「ドウブツエンというものを、おまえにおしえておいたほうがよるしいかな？」

「だめです、なりませぬ！」

とびついて、資徳の口に手で蓋をした。

ヨシエが勘違いして、

「ずるいッ、おじさんたちだけであそんで！」

(05)

ヨシエが寝ついたあと、ふたりは、つもるはなしをした。

まず多々丸から——京の乙前さまはますます健勝、雅仁さまへの今様伝授は夜も昼もなくつづけられ、われら唄ものにとつてこれほどうれしいことはない。サワにつづいてハナエも、声の良さが京のひとつびとの評判をあつめている。

「ハナエの両親は昭和の東京で元気にやっておる、そのことをおぼえていてくれよ」

「両親の健在を、ハナエにつたえよと……？」

「そうではない。ハナエが一人前になるまでは多々丸、おまえがハナエの父がわり、母がわりじゃ。父母の健在を知らねば、ハナエを見るおまえの目にうそが出る、そのことを申しておる」

多々丸の顔があかるくなった。

「ハナエだけでなく、ヨシエの親がわりでもありますな」

「それだけではないぞ。東京からは女の子がつぎつぎと京に行く。

わたしが選びにえらんだ、とびきり声の筋のいい、利発な女の子がこの高崎をとつて京に行く。娘どもの父がわり母がわり、すべて多々丸の役目じゃ！」

それから多々丸は、東国にたくさん出回っているというレコードについて雅仁さまがさらにくわしく知りたがっておられるという忠季の言葉を二点にまとめて資徳につたえた。

(一)レコードに音や声をたくわえる術、および、それをひきだす術について多々丸に理解できる言葉によって説明せよ。

(二)東国の民がレコードから声や音をひきだして聴くのを楽しんでいるのは理解できたが、そこで、レコードは新しい楽器ではあるまいかとの疑惑が生じる。この点について資徳の見解をのべよ。もしもレコードが楽器に属するのであれば、今様を東国にひろめる大策についてかんがえをあらため、重大な決意をかためなくてはならない。

これだけのことをいうのに、多々丸はおおいに苦しみ、額には大粒の汗さえ浮かんだ。レコード、チコンキ——言葉しか知らないのだから無理もない。



雅仁さまから忠季へ、忠季から登利丸へとつたわるうちに雅仁さまのお言葉の意味が変わっているのではないかという不安もある。

「レコードの仕組を言葉でつたえるのは、なかなかむずかしいことだ」

「どうせ、わたくしめは、雅仁さまのようにには聡明でありませぬから」

多々丸がすねるのを、

「まあ、まあ。多々丸ともあろうものが、そんな弱気で何とする」  
なだめておいて、

「どうじゃな、京に帰ったら栗王丸とも相談のうえで、レコードやチコンキをつくってみては……」

「レコードをつくとおっしゃるのですか、平安時代の京で……でたらめだッ。この多々丸をたぶらかすのは、やめてくださいッ」

「多々丸をたぶらかして、どうなるものか。昭和時代とおなじものは出来はせぬが、似たようなものならつくれるのじゃ。うまくすると、音や声が出るかもしれない」

「まじとこ？」

「雅仁さまのお智慧とお力、なんとかなるじゃろ」

(06)

「薄い円板がくるくるまわる仕掛けをつくる、板の片面に表に蠟(ろう)をつ(を)塗る、いや、蠟よりは漆(うるし)がよいな」

「板に漆をぬったのがレコード？」

「それではまだレコードにはならぬ。漆がかわく寸前に、線をきざむ」

「はあ、線をきざむ。どのように線をきざみますか？」

「まず、薄い、しかも腰の強い紙を円錐のかたちに巻く」

「エンスイ……？」

「子牛の角(つの)の、まっすぐなかたち」

「子牛には角は生えておりませぬが」

「理屈をいつておる場合ではない、ほれ、こういったかたち」  
「なるほど、子牛の角ですな」

「角の先に針をさしこみ、針の元を角の裏側に貼りつける」

「その、子牛の角はレコードなのですか、それともチコンキ？」

「ピックアップと違って、チコンキの一部」

「お聞きするだけなら、いかにも容易なことにおもわれるのですが」

「わしも作ったことはないが、理屈では、こうなる。さて、漆の板をくるくるとまわし、紙の角をかるくにぎって針の先を板におしつけておいて、角の手元の口から大声をふきこむ」

「男でも女でも……」

「かまわぬ。犬でも猫でもよろしい」

「鉦（かね）や太鼓は？」

「これッ、なにをいうのか！ 法皇雅仁さまをはじめ、われら一同、鉦や太鼓が大手をふつてのさばるこの世を正そうと……」

「アーツ。つい、うかうかと」

「声や物音は大気をふるわせる。大気のふるえが紙から針につたわり、針のふるえが漆の表面に線となってきざみつけられる」

「はあ……」

「これがレコードだ。漆がかわくまで、ゆっくりと待つ」

「はい」

「レコードに線をきざむのと反対のことをやる、これがチコンキ。

漆の板をくるくるとまわして、紙の筒の先をそーつと溝の刻みに当てる。すると、筒の口から音や声がきこえてくるはずだ」

「たしかに、たしかに聞こえまじょうか？」

「理屈では聞こえるはず。聞こえなくとも、そこは聡明なる雅仁さま、チコンキやレコードがどのようなものか、およそのところはわかりになられよう」

多々丸は頭のなかで反芻している——薄い板、漆をぬる、かわくまえに線をきざむ。

「作り方はそれでわかったとして、第二の件はいかにも重要である。さすが法皇雅仁さまだ、ご自分の目では見てはおられぬのに、見るべきところははずされておらぬ」

藤原資徳は重い気分。

レコードやチコンキは楽器なりや、ならずや——まさに一本取られたのである。東京では実物を毎日のように見ていたのに、この疑問をもつことはなかった。まったく恥ずかしい。

「あ、ヨシエにこれをかけてやってくれ。風邪をひかせてはならんフーッとためいきをついて、

「レコードやチコンキは楽器なりや、ならずや……雅仁さまはおたずねになられている。多々丸、どうじゃ、どう思うか？」

「いきなり申されても、わたくしはまだ実物を見たことがないのですから」

「おまえは作り方を知っておる、なにも知らんとはいわせぬぞ」

「ハーツ、かんがえます……はい、かんがえました。レコードは楽器ではありませぬ。なぜかともうせば、おなじレコードはおなじ歌しか唄いませぬ……さようですな……それならばレコードは楽器ではありませぬ」

「ふーむ。それなら、チコンキは、どうじゃ？」

「さきほどおしえていただいたところからすれば、チコンキはぐるぐるまわるだけのもののようにあります、轆轤（ろくろ）とおなじものようです。それならば、楽器とはもうされますまい」

「みごとじゃ、多々丸。それだけわかっておるなら、京でつくるレコードやチコンキからは本物の声や音が出るかもしれん！」

(07)

藤原資徳は昭和時代の東京を回想している。

チコンキの蓋をあけ、ゆっくりゼンマイを巻く。

巻きすぎるとゼンマイが切れるから、いいね、気をつけて！

そーっとレコードをのせる、傷をつけぬように、しずかに。

ピックアップの針は一回ずつあたらしいのと交換すること。

ピックアップをのせて、さあ、だまって聴きましよう！

「おなじだッ！」

「はあッ？」

「しきたりがやかましいだけが取り柄の、宮廷の奏樂の風景とそっくりだ」

チコンキやレコードは楽器ではないが、昭和の東京の民がレコードに聴きいる姿は、平安京の樂人が奏樂の場にすわっているのと、そっくりそのままだ。だまって、おなじく聴いているだけ。

東京の民がレコードの歌をまねて唄うことはある。あるにはあるが、レコードほどうまくはないし、ほがらかでもない。

もっとわるいことに、東京の民が歌を唄うといったらレコードの真似ばかりだ。

「多々丸よ、これはどうやら、大変なことになりそうだ。いそがねば、ならん」

「は、いそがねばなりませんか」

「京にゆけ、飛んでゆけ。まず栗王丸につたえるのじゃ、ぐずぐずしていると昭和時代の東京で、われらの出る幕のなくなるおそれがある、と」

「われらの出る幕がなくなつては、どうにもなりません」

「幕があるつと、なかるつと、われらは押しても出るつもりだが、それにはそれで構えがなくてはならん。栗王丸にかまえさせるのじゃ、多々丸が栗王丸に火をつけるのじゃ」

いくらいつても栗王丸が燃えなければ、かまわぬ、おまえか登利丸か、ほかのだれでもよい、栗王丸にかわつてかしらになれ——それでは謀叛とおなじ——おお、おお、いかに謀叛、いかにも反逆とはいえ、あの栗王丸も衆におされてかしらになつたほどの男、かならず燃えあがる。

栗王丸が燃えあがつたら、まずレコードとチコンキの雛形をつくれ。

仲間のほかに知られてはならんが、仲間のうちではだれひとり知らぬものはないように、おおさわぎして、難形（ひながた）をつくれ！

資徳の演説をさえぎるように、多々丸が、

「かくも奇ッ怪なるものはびこるのが昭和時代の東京なりッ。われら唄もの、生きのびる途はありや、なしや！」

資徳の驚愕の反応には、さげんだ多々丸のほうが照れてしまって、

「……というわけ、なんで、ございませう？」

「それじゃ、そのとおり。わかってきたようだな」

難形ができたなら、法住寺殿におとけする。

そのころには、この資徳からの書状が雅仁さまのお手元にとどいているはずで、それとこれを見れば、レコードやチコンキがどのよつなものなのか、昭和時代の東京でどのようなにつかわれているのか、その東京に今様歌をひろめるのが、どういう意味をもつのか、雅仁さまにはよくわかりになる。おわかりになれば、雅仁さまが適切な策をうちだされるのはまちがいない。

「雅仁さまのおちからとお智恵は、よく存じておるのですが……」

「わかってはいるなら、ですが、はなかるう」

「はあ、それが、その……」

「ですが、はおかしいという理屈がわかれば、それが、そのとなるはずはないが、まあ、出てしまったものは仕方がない。もうせよ、多々丸」

「ははーっ」

——われらが雅仁さまは一天万乗の位をあっさり次代におゆずりになり、おんみずからは不安定な治天の君になられた。そこに雅仁さまのご聡明はあきらかにしめされているのである——

「しかるに！」

多々丸の口調がとつぜん変わったから、資徳はおどろく。

「しかるに、聡明なる法皇雅仁さまにして、なぜ、昭和の東京にレコードやチコンキのあるのをご存じないのか？」

多々丸は気が重い。

レコードとチコンキの製造法を法皇につたえねばならない、その義務感がまず気を重くしている、うまくつたえられるか、どうか、不安にさせている。

法皇はすでにレコードやチコンキの製造法をご存じなのではないか、そうであれば自分は重苦しい義務感から解放されるのに――

資徳は多々丸の苦衷を察した。

「いかに聡明な雅仁さまにしても、先を知るのは容易ではない」

東の国へおもむき、今様歌をひろめよ――藤原資徳が法皇からうけたまわった指令はこれである。

ついでに、伊豆国へ流罪になっている源頼朝（よりとも）の身辺をそれとなく見張れ、とも指示された。

そうだった、伊豆にはあの頼朝がながされているはずだ――なつかしい気分です伊豆の葎山（にらやま）に行ってみたが、頼朝のかけもちたちもなく、蛭ヶ小島（ひるがこじま）にはアルミニウムに着色した看板がたっているだけだった。

「むかしむかし、この地には源氏の御曹司の頼朝が京都から流罪されてきていたことがある」

そっけない看板、蛭ヶ小島をぬけだした頼朝は相模の鎌倉に日本じゅうの武士をあつめて幕府という政権をつくったのだが、それは何百年もまえのことだという。

（08）

源頼朝はもはや生きてはおりませぬ、何百年もまえに他界の由――

――法皇への第一信で報告したら――頼朝は死んだか、おしいことだが、やむをえまい。いずれまた頼朝に代わる人物が出現するにちがいないから、よく気をつけること。武者というものは、あばれだすと手に負えないところもあるが、うまく手なづけさえすれば犬よりは役に立つものである、おそれることはない。いずれにせよ、今様伝播のことに精力を集中すべし――法皇の返書である。

「頼朝が死んだのは何百年もまえ……それを知っても、雅仁さまはおどろかれなかつたのですか？」

「度量のひろい、おおきな方じゃ。百年が千年になったとて、おどるきもなされぬ、疑いもなされぬ」

くびすじのうしろで両手をくみ、うーんとのばして肩の凝りをほぐした。

それから、おおあくび。

多々丸もつられて、おおあくび。

「夜明けもちかい、ひとねむり」

「ねむりたくない気分ですが」

「いそがねばならぬが、いそぐからといって焦ってはならん。まず、ぐっすりねむる」

「ヨシエはよくねむっておりますよ。うらやましいほど、ぐっすり」と

「そのようにして、東京やアドバルーンやドウブツエンのことをすこしずつわすれるだろう。木曾をぬけるころには平安時代の娘に変わっている、たのむぞ、多々丸」

多々丸の返事はない。ねむりたくない、といったくせに、もう高いびきだ。

よわったな、これは、と資徳はつぶやく。

相部屋のものに先をこされると眠れなくなるのが資徳の弱み、眠れぬなら眠らぬまでと、はらをきめる。

(09)

真つ暗の天井を見つめていたら、耳の奥に、かすかな声が聞こえ、明瞭になってきた。

「ホチョートレッツ！」

怒声とともに、おぞましく、いやらしい光景の記憶がよみがえってきた。

東京で宮城を見物したときのこと――

雅仁さまの血をひく方々が住んでいらつしゃるとおもえば、なつかしさがこみあげてきて、しかし、その雅仁さまの密命をおびる身とあつては名乗りでるわけにもいかず、せめて見るだけでもと、ずんずん歩いていったら、

「コラーッ」

つっころばされたあげくに、ふんづかまり、警官の詰所に連行された。

官位を名乗れば相手が平身低頭するとわかっているのに、名乗れないから苦しい。

釈放され、砂利の広場の安全なところから宮城を見ていたら、ガサツガサツとやかましい音がして、

「ホチョートレツ！」

ガサツガサツ、

「カシラーミギッ！」

ガサツガサツ、

「ナオレツ！」

ガサツガサツ

はなれているから突きとばされる心配はないが、兵隊の身体から発散する汗と脂の匂いにはたえられず、おもわず数歩、あとにさがった。

おなじ顔、おなじ服装、おなじ動き——人形を思いだしたのは自然の連想である。

「ヒトが人形になっている！」

ヒトを人形にしているのは「ホチョートレツ！」「カシラーミギッ！」の怒声だ。

愛嬌もない、節もわるい。

ヒトを人形にすることはできても、鳥を呼べない。

無情ものの目に、うれし涙をながせない。

泣いてむずがる赤ん坊の頬に笑窪をつくれぬ。

「これだッ。雅仁さまのおっしゃるのは、これなのだ。この、おぞ



ましくも、いやらしい声をやめさせるには今様の歌をひろめるほかに、手はない、ということをや雅仁さまはおっしゃっておいでなのだ！」

しかし資徳は、これまで、「ホチョートレッ！」の怒声のことや、怒声についてかんがえたことを法皇に報告していない。

(99)

「ホチョートレッ！」はグンプの言葉である。

グンプは「軍部」と書く。

資徳がはじめて「軍部」の文字を見たのは浅草のカフェだ。

浅草ではひとびとがさかんに唄っているときいたので、行ってみたら、うるさい、やかましいだけで、人間が唄っているといえる光景ではない。

街にながれるのは電気で強調したレコードの歌ばかり、小屋ではなるほど役者が唄ってはいるものの、見物人はゲラゲラキヤアキヤアというばかり、唄っているとはいえない。

がっかりするやら、ぼつとするやら、「黒竜江(くろりゅうがわ)」「と看板を出すカフェーにはいつてビールを注文、女給がなげてもした新聞の見出しの「軍部」が目だったので、

「イクサベが……」

「あーら、お客さん、それ、イクサベって読むんですかア？」

しまったとは思ったが、

「まあ、イクサベとも読めるな。まちがいではない」

「でもね、あたしが聞いたのは、ええと、なんてったかな、ちよつと待ってね」

奥に消え、ばたばたとひきかえしてきて、

「あたしの思ってたとおりさ。それ、イクサベじゃなくてグンプって読むんだよ」

「グンプさ、グンプにきまつてるよ。でもね、イクサベって読むのも、おくゆかしい気分になって、わるくはないや」

「ゲンブっていうえばホチョートレッツ！、カシラーミギッ！だけど、イクサベということになると、そこどころは、どうなるのかしら？」

「どうなるのかな。おれだって、イクサベのことは、よくは知らないのさ。まあ、ビール呑みなさい」  
女給は、うれしそうな顔のなかにもうひとつ別の、かしこい表情をつくって、

「ビールもうれしいけれど、おごってもらうんならキュラソーがいな。オアシが半分、お店から返ってくるの」

キュラソーとは抹茶の照り焼きのような飲物である。

「ビールのほうが好きなんだけど、仕方がないのよ。商売々々」  
ペロペロとキュラソーをなめて、

「ああッ、キュラソーのおいしいことー」

ほかに客のいない店のなか、いっばいにひびかせた。

ふたりは仲良くなった。

(10)

名前はクサカベミヨコだと、ミヨコが自分でいった。東京の下町の生まれだと。

「下町は、どこ？」

「下町は下町よ。山ノ手はそれぞれにちがうけど、下町はどこに行ってもおなじ下町よ」

「下町のミヨコさん」

「あ、あ、あ」

内緒ばなしでもするようだ、ミヨコは声をおとして、

「お客さん、さつき、イクサベっていったでしょ、あたし、ドキーンとしたのよ。イクサベミヨコっていうひとがこの東京のどこのかにいて、そのひとがあたしと、つまりクサカベミヨコと血がつながっているんじゃないか、なんて思ったものだから」

「イクサベミヨコ、ね。そういうひとがいるとして、どんな娘さん

だろっな」

「あたしと血がつながってるんだから、トテシヤンよ」

「トテシヤンのトテは」とっても『のトテ、シヤンは美しい、とっても美しいというんだったかな、やはり言葉は苦手だな」

「ドイツ語がオランダ語なんでしょうけど、シヤンとしているからシヤンだっというひとまいるのよ」

「シヤンとしていないと、グンプに『ホチョートレッ！』って、やられる」

「グンプは『ホチョートレッ！』で、イクサベミヨコさんは『トテシヤン、トテシヤン』なの」

「『ホチョートレッ！』はきれいだな、『トテシヤン』がいいよ、イクサベミヨコさんがいいよ」

「シィッ。そんなことをいって、グンプにきこえたら、ただじゃ済まないんだよ！」

「だから、きれいなのだ」

( 11 )

カフェー黒竜江にかようようになって、グンプというものがわかった。

わかつてはきたが、それを平安京の雅仁に報告しようとして筆をとっても、

「グンプはわれらの大敵とみなすべきものとかんがえられます。理由いかにと申せば……」

この先がすすまない。

そもそも藤原資徳のグンプぎらいは宮城前広場でのわずかの体験とカフェー黒竜江でのクサカベミヨコとの意気投合とによるもので、確固たるものがあつたのではない。

「あたし、グンプはきれいだよッ！」

「シィッ、おおきな声でいっちゃ、だめなんだろ」

「藤原さんがグンプをきれいなじゃないなんていうんなら、あたし、

藤原さんなんか、だいッきらいだからねッ！」

「きらい、きらい、グンプなんかだいきらいだよ」

「よろしいッ。グンプぎらいに乾杯しましょ、キューソーで乾杯！」

ホチョートレッ、カシラーミギツをきくたびに身の毛がよだつ。

いやな気分はグンプのせいだということ、これには確信があるが、  
気分を雅仁につたえるのは容易なことではない。

容易じゃないから、ひとは歌を唄うんだな。

そうだよ、唄わなくてはいけないんだ。

「ひとりでブツブツいって……気味がわるいな」

「歌を唄わなくてはいけない、といったのさ」

「なーんだ。藤原さん、歌を唄いたいの？　じゃ、レコードかけてあげましょうね」

あれーっ？

なんだい、これは？

ミヨコちゃんは、まちがっているぞ。

おれはただ、歌を唄わなくてはいけないっていっただけなのに、

ミヨコちゃんは「レコードかけましょうね」なんていう。

はなしの筋がまるつきり混線している。

「ミヨコちゃん、そうじゃないんだよ。レコードじゃないんだ！」

カウンターのそばに大型デンチクがおいてあって、ミヨコはレコードをえらんでいる。

「シヨウジタローの「国境の町」なんか、どうかしら。カフェー黒竜江にぴったりの歌なんだから。」

追いかけてきた資徳、

「ちがうんだよ、ミヨコちゃん。おれがいうのは、ねエ……」

「ちがう、なんて、いまさらおそいのよ」

「おそい、といわれても……」

「オッホッホー、手遅れ、／＼、／＼」

ミヨコは「国境の町」のレコードをターン・テーブルにのせ、ピ

ツクアップをのせた。

ほかにも客がいて、資徳とミヨロがじゃれあっているのを面白そうに見ている。

資徳としてはじゃれてるつもりなんかないが、女給と客のじゃれあいに見えても仕方はない。

「ここでミヨロにさからうと、どんなことになるやら、わかったものではない。

櫛（そり）の鈴さえ 寂しく響く

雪の荒野よ 町の灯よ

「いいわア、シヨウジタロー！

カウンターに肘をつき、ミヨロはうつとりしている。

それは資徳に、「ネエ、見て。あたしはうつとりしているのよ」「と通告し、同意を強要する表情である。

「シヨウジタローはいいさ、「国境の町」もいいさ。だけど、その

「やだなあ。だけど、その、なーんて……なんなのさア？」  
レコードがどうもね、とは、こういう場面ではいえるものではない。  
い。

おれはこのクサカヘミヨロを、どうあつかえばいいんだ？

そもそもおれは、クサカヘミヨロに、なぜ、こだわっているんだ？

「いったい、おれは――

( 12 )

あたらしい客が、どせどせとはいってきた。

「シィーッ、藤原さんッ」

「なんだい？」

「グンプよ。気をつけて……」

「あれがグンプ？」

「グンプといってもね、『カシラーミギッ』や『ホチョートレシ』

は、やらなこの

「そんなグンプがあるのかい？」

「あるのよ、ケンペイなの」

「ケンペイ？」

「そう。ケンペイっていうのはね……」

ミヨコが小声で説明にかかると、

「おーい、ミヨちゃん、ミヨちゃん。そんなタクアンの古漬（ふるづけ）みたいなやつはほうつておいて、こっちだ、こっちだ！」

タクアンの古漬は知らないが、自分の悪口なのはわかるから、

「タクアンの古漬が、どうしたというのですか。クサカベミヨコさんは、いま、わたくしといっしょに、シヨウジタローの「国境の町」

聴いているのです。だから、そっちには行きませんよ！」

それから――

「藤原さま、藤原さま、どうなさったのですか？」

「だまれ、ゲスめ！」

「なんですか、いくら藤原さまでも、この多々丸をゲスよばわりは、ゆるせません！」

「タタマル……ああ、おまえは多々丸、どうしてここに？」

「どうして、と申されても……」

「多々丸もカフェー黒竜江の客だとは、知らなかったぞ」

「なーんだ。藤原さまは夢をみていらっしやる。藤原さま、目をさましてくださいよ。もうすぐ夜明けです」

「夜明け……ああ、おまえは多々丸か。すると、ここは東京ではなくて、高崎、アツ！」

がぱつと、はね起き、ヨシエがすやすやと寝息をたてているのを見て安心のためいきをついた。

ぶるぶるっと身体がふるえたのは、悪夢につなされた記憶に冷や汗が出たからだ。

「うなされていらっしやいましたが……」

「そうか、ね」

「ホチョートレッツとか、カシラーミギツとか……それは昭和の東京の言葉なんですか、ずいぶん乱暴な調子の言葉ですな」

「言葉も乱暴だが、グンプやケンペイはもつと乱暴なのだよ」

「グンプ……なんですか、それは？」

「いわく、いいがたし、というものさ。とにかく手強い」

「敵、ですな」

「敵も敵、強敵のなかの強敵。さあ、多々丸、

平安京へいそいでくれ！」

(第3章・終)

(51)

ヨシエをつれて高崎から京へ、また高崎にもどって藤原資徳からあたらしい女の子を上げると高崎にとんぼがえり、多々丸はあわただしい。

京で、女の子は先輩の今様唄いから教えをつける。

藤原資徳がえらびにえらんだ子ばかりだから声の筋はいいが、声がよければすぐれた今様唄いになれるとはかぎらない。

笑顔——「ただ笑えばいい、というのではないだよ。相手がおもわず惹きつけられるような」

身の振り——「媚びてはいても、媚びているのを相手に気づかせぬように」

今様歌——「ひとりよがりは、いけない。おまえたちは歌は上手なんだからね、聴くひとが思わず知らず口ずさんむような唄いかたをするのがいいんだ。といって、下手に唄うのがいいわけではない。えらびぬかれた今様唄いの誇りをわすれないように」

男——「えりこのみをしてはいけない、なんていうひともあるが、とんでもない。その日その時、いちばん好きな、いちばんいい男をえらぶのがいい」

おしえられ、女の子たちは昭和も東京もドウブツエンもアドバルーンもわすれ、しっかりした平安時代の今様唄いにそだつ。

「多々丸さん、今夜はどこで泊まるの？」

「関ヶ原までいければ……」

「多々丸よ、それほどいそがなくとも、かまわぬ。女の子たちに、ひろい世間をみせるのも大事なこと。旅をいそぐと、世間がせまくなる」

「関ヶ原には、なにがあるの？」



「関ヶ原にはたいしたものはないが、そのさきに「ピワコ」が

「ピワコ」って、何ですか？」

「ピワコはみずうみさ、おおきなみずうみ。むこうの岸が見えない、それくらい広い」

「むこうが見えなくては、船でわたるに「まるでしよ」

「せまいところもあるからね、そこをわたればいいさ」

「ピワコ」の、そのまた向「こう」は？」

「京さ。乙前さまやサワさん、そして法皇雅仁さまもいらっしゃるひとり、が、」ああ、乙前さま！」と感きわまつた声をあげたのを

合図に、

「ああ、はやく乙前さまやサワさまにお会いしたい！」

「乙前さまのお唄いになるのを、この耳で、はやく聴きたい！」

だれもまだ乙前にもサワにも法皇にも会ったことはないが、耳にたこができるほど聞かされている名前だから、つまれたときから知っているように思っている。

「多々丸さん、はやく歩いて、今夜は関ヶ原に泊まりましょうよ。」

あたし、もう待てない！」

資徳と多々丸は顔をみあわせる——もう心配はないようだ、みんな、東京のことはすっかりわすれている。

「多々丸よ、もうすこし道をいそいで、今夜は関ヶ原に泊まるとするかな」

「ワ—イ、関ヶ原だッ」

女の子たちが歓声をあげる。

一歩々々、京へちかづく。

(02)

そのころ、京では、

「ぜひとも、その役目、わたくしに！」

山階逸男がさげんでいる。

逸男の相手は、おおッ、これはなんと平清盛！

桓武平氏の棟梁、平家にあらずんばひとにあらず、とまでいわせた平家全盛をきづきあげた清盛が下級公家の逸男を相手にしているのは腑におちないが、そこは乱世、いろいろと事情はあるわけだろう。

「ぜひとも！」

「いやに熱心だな。治天の君の雅仁さまに、なにか恨みでもあるのか？」

「よつくぞ、きいてくださった。それでこそ太政大臣！」

楽人の仕事をうばい、楽器の権威と効能を軽蔑し、あまつさえ田夫野人にまじって下品きわまる今様歌などに血道をあげている法皇雅仁の無道について、山階逸男は切々とうったえた。

「けしからぬ、と申さねばなりませんまい！」

「楽器の権威を否定するのは乱暴だと思つが、今様歌に血道をあげるぐらひは、どうということもないぞ」

「これはひどい。太政大臣平清盛ともあるうひとが、そのような暴言を吐こうとは思ひもよらぬこと。よろしいですか……」

逸男のいいたいのは、古来から正しく綿々としてつづいてきた宮廷奏樂の伝統が法皇雅仁の暴挙によって途絶えようとしていること、奏樂をともなわぬ礼式は正しくなく、したがって、奏樂をともなわぬ礼式によって決定された政策はすべて不正のものである、そういうこと。

「クックククッ」

清盛がわらう。

「山階、とかいったな。歳はいくつだ？」

「歳などきいて、どうなさる？」

「それぞれ、すぐにカーツとなるところをみると二十歳をすぎても二年か三年、わかい、わかい」

「わかいのがわるいことですかッ、罪ですか！」

「わるいな」

あっさりいわれて、逸男は拍子がぬける。

「おまえは、その役目をやらせてほしいとねがっておるそつだが、わかいがゆえの誤解をしておる」

「誤解ではない。あなたがた殿上人の肚はら（はら）は読んだつもりだ」

「われらの肚とはつまり、法皇雅仁さまの追放、またはお命頂戴とか……」

「凶星ではないか」

「なんのなんの。すこしばかり邪魔ではあるが、雅仁さまを追放してはこまるのだよ。だから、おまえにこの役目をまかせるわけにはいかない。さ、怪我をしないうちにおかえり」

逸男はうなり、清盛はほがらかにわらう、とても勝負にならない。

「よし、いや、わかりました。法皇を追放するとはいわない、いませぬ。せめて、なんなりと、あなたがたのお役に立ちたい、使い走りでも、なんでも」

「フフフ、とんでもないこと。たとえいちどでも雅仁さまを追放しようとかんがえたものに何かを頼むことはありえない、危険千万」

「これほど願っても？」

「くだいよ。くだいのはきらいだ」

若造あつかいされ、逸男はプリプリしながら深夜の京の街をあるく。

どこで読みちがったのか？

法皇雅仁と平清盛の対立がのっぴきならぬところまできているのは、だれ知らぬひとのない事実。

事実を確認したとき、逸男の頭にピーンときたのは、

—— ははあ、清盛のやつ、法皇さまを追放するつもりだ！

法皇が追放されれば、疑惑が清盛にかかるのは火をみるよりもあきらかだ。

いくら豪気な清盛でも、この疑惑は避けたいにきまっている。

自分は安全なところにいて、しかも法皇を追放したい——それならと、ピーンときたのだ、清盛は黒幕がほしいにきまっている。

——おれの出る幕だ！

法皇が宮中儀式から奏楽を廃止してしまおうとしている、という噂が出てから長い時間がすぎているが、山師逸男のみるかぎりでは計画は進行していない。

しかし逸男は気をゆるめない。雅仁が今様に血道をあげるのがやまぬかぎり、噂は事実である、いつかは決行されるものと覚悟している。

その覚悟が「雅仁を追放する」となるのはいささか飛躍ではあるのだが、本人としては真剣におもいつめた結果だ。

おそれおおいことながら不倶戴天の敵とは法皇雅仁さまのことだと逸男は思いつめている。法皇を追放して清盛に恩を売ろうなどは毛ほどもかんがえていない。ただただ、楽器と奏楽の伝統をまもろうという気持だけなのだ。

思いつめ、大歓迎されるつもりで清盛との面会にこぎつけたが、結果はさんざん、子供あつかいだ。

それでも失望しないのは、自分が子供あつかいされた事実を深刻にかんがえず、

——平家はだめだ。

相手に原因があるとかんがえているからだ、一本気のわりには楽天的な性格だ。

——平家がだめなら、源氏だ。

作戦転換もはやい。

平家から源氏にのりかえたのはいいが、そこで八々と気がついたのは、

——どこにゆけば源氏に会えるんだろう？

平家にあらずんばひとにあらず、の京都である、源氏の姿は消えた。ひとりもないはずはないんだが、平家にいじめられるのが怖いから、隠れているらしい。

隠れているを探す、これがなかなかむずかしい。

——それならば、いっそ、

「伊豆に行こう。頼朝は伊豆に流罪されたというはなしだから」  
荷物をまとめ、そこはひとり身の気楽さ、さつさと東海道をくだりだした。

伊豆で源頼朝をさがしだし、法皇の無道をつつたえて、  
「追放してしまえばいいのです。そうすれば平家は後ろ楯がなくなり、源氏の世が到来、まさに一石二鳥ではありませんか！」

「フーム。して、だれが追放するのかね、法皇さまを？」

「わたくし、山階逸男がひきつけます！」

胸をはって、いう。

「おまえが、やってくれるか。よろしい！」

頼朝がすつくと席をたち、逸男の肩をたたいて激励する——はやくもその場面さえあざやかに想起され、逸男の足は疲れをしらずに近江の草津にやってきた。

——伊豆は遠いが、伊豆へ行けばおれの出る幕がひらく。

(03)

「オレノデルマク、オレノデルマク」

つぶやきながら草津の宿にはいると、やや前方にひとだけり。

喧嘩狼藉のたぐいなら仲介してやるつ、ぐらいの気でちかづいて  
みたら、

あそびをせんとや 生まれけん

たわむれせんとや 生まれけん

遊ぶ子供の声きけば

わが身さえこそ ゆるがるれ

唄う女のまわりに、ひとが群れている。

「わるくない。ひなびた景色とは、まさにこれ！」

逸男は悦に入った。だいたい気がいい男なのである。  
もっとちかづくと、

恋しとよ

君恋しとよ ゆかしとよ

逢わばや 見ばや

見ばや 見えばや

ひとの輪からホーツという歓声があがる。

「これは！」

すっかりわすれていた。これぞ今様歌なのだ。

喝采の輪のなかにいるのは山階逸男の不倶戴天の敵、法皇雅仁が  
手なづけた今様唄いの群ではないか！

気分よく都を出た旅のはじめにいきなり不倶戴天の敵に出つくわ  
したそのことより、今様のことをすっかりわすれていた自分に逸男  
はあきれはてた思いである。

わすれていただけならともかく、たったいま、「わるくない」な  
どと感動してさえたのだ。

—— おれは、なんと ——

シヨンポリし、このまま退却するわけにはゆかないと気をとりに  
おし、ひとの輪に突っ込んでゆこうとしたところを、ポンと肩をた  
たかれ、ふりかえると、

「あーっ！」

相良俊輔がほがらかに笑っている。

俊輔が今様唄いの仲間にはいつているのはおどろかないが、こん  
なに早く、という意外の思いはある。

「サガラ、おまえは、いつ、京を出た？」

「おまえより一足おそく。そして、おまえの背中を見ながら」

「ええっ。すると、おれの後をつけてきた……？」

「後をつけた、なんていうのはひとときがわるい。おれはおまえに  
用事があるわけではないのだから」

( 04 )

相良俊輔はひろい世のなかを見たいとおもい、京を出た。

法住寺殿の塀のまえて我が身をゆるがした今様の歌、それを生ん  
だ空気は京ではなく、もっとひろい世間だろうと見当をつけたから

だ。

京を出るとすぐに、まえをゆくのが逸男だと気がついた。

逸男は足取りもかるく、気分よさそうにあるいているから声をかけず、ずーっと背中をみながら、草津についた。

「俊輔が今様唄いの仲間になったとみたのは、まちがいだったか」

「仲間にはならんよ、ここで会っただけだ。気づいたのはおまえよりもはやかったがね。おれのまえを山階逸男がゆく、逸男のまえに今様唄いの女がいて、男たちは人形をまわしているというのに、逸男は気がつかない。これはいったい、どういうわけなのか、気がついたらどんな騒ぎになるのか、かんがえているだけでも胸がどきどきしたよ」

「ひとがわるい」

「ひとがわるければ、肩をたたいたりはせんぞ」

「それは、まあ、感謝する。おまえに知らされなければ、いまごろは……」

「大騒ぎになっている。京でこそ、すこしは知られた山階逸男さまも、この草津では氏も素性もない。なぐられ、蹴られ、わるくすれば命はないところだった」

「縁起でもない！」

俊輔のいうとおりだから、逸男も苦情はいえない。

苦情はいえないが、ひとの下になるのはきれいな性分、折りをみて、反撃する。

「法住寺殿で聞いたときには、もうすこし年上の女かとおもったが、いま見ると、まるで子供。これはつまり、今様などは子供のあそびにすぎないということさ」

そういう逸男の、自信たっぷり顔を、あきれたものだな、というように俊輔が見つめる。

「おい、おまえは何をいつてる？」

「何を、と……」

「別人だというのが、わからんか？」

「別人……おれをからかうのは、命をすてる覚悟の後にしてくれ！」  
「ほんとうに、わからんのか？」

ゴクリ——この音は、逸男が生唾をのみこんだ結果として発した喉頭部の摩擦音だ。

「からかうのは、よせ」——もういちと言おうとしたところへ、「言っ  
つてはならん」と止めるちからが作用して喉頭部の筋肉が混乱した、  
その結果のゴクリである。

「山階の家はずーっと笙しょう（しょう）を吹いて内裏うちに仕えてきた。こ  
のおれも、唇と耳には自信がある。その耳が、法住寺殿の塀へいのなか  
で唄っていた女と、いま、あそこで唄っている女はおなじだと聴い  
た。ところがおまえは、別の女だという。おまえのというのが正しい  
なら、おれの耳に狂いがあるということになるのだが……」

絶望の予感に逸男の声はふるえている。

無理はない。ふたりの女が別人だということになったら、先祖代  
々ほこりにしてきた山階の家職の笙は、どうなる？ 逸男の自信は  
どうなる？

「山階よ、おおげさなことをかんがえるな。ふつうの耳があれば、  
あれとこれとが別の女の声だと聴き分けられるはずだ」

「ふつうの耳が、というのが余計に気にさわる。それではまるで、  
おれの耳がふつうの耳より程度がひくいようではないか！」

——おなじ女だ！

逸男は自分の耳が聴いた声にこだわらねばならない。

「あの女に、たずねてくれぬか。あの日、法住寺殿で唄ったのはお  
まえではないか、と」

「よしたほうがいい  
こだわるほどのことではない。

それに、もしも、ふたりは別人だということになったら——疑い  
なく、そうなる——逸男の立場がなくなってしまう。だから、逸男  
のために「そ俊輔は」「よしたほうがいい」といった。

「よしたほうがいいよ」



もういちどいい、

「どうしても、というなら、自分できいてみることだ」

俊輔につきはなされ、逸男は勇気をなくした。

「やはり、ちがうのか。おれの耳がわるいのか？」

「おまえには、今様歌や人形づかいの芸を芸としてみとめたくない下地がある、氏も素性もないものがその日の稼ぎとしてやっている下品な技だという思いこみがある。その下地と思いこみがおまえの耳に蓋をしている」

逸男は頭を垂れ、かんがえことをしている風情だったが、そこで居直った。

「ハッハッハー、そうさ、おれが思っているとおりさ、たいしたことではない。今様など、どうせ子供の遊び。そうさ、京の法住寺殿で唄った女が草津にながれてきて、いま、あそこで唄っている。

あの女の声はわるくない、おまえのいうとおりさ。だから、あれとこれとはおなじ女さ。声のいい女が二人も三人もいて、たまるものか！」

いいはなち、

「さーで、俊輔、またおわかれじゃ。おれはおれの道をゆく」

「ゆくといつても……どこへ？」

「いくら相良俊輔でも、こればかりはいうわけにはいかぬ。きかんでくれ」

「それなら、きくまい。身体に気をつけて……」

「おまえも、な」

山階逸男は東海道をくだり、相良俊輔は傀儡芸人の群れにちかづいてゆく。

「多々丸さん、ヨシエの歌は、いかがでした？」

「みごと、みごと。藤原さま、そうもつしてよろしいでしょうな」

「ヨシエ、多々丸のいうとおり、みごとであった。ただし、ここは近江の草津、京ではないのをわすれてはならぬ。京のひとの目と耳

はきびしい」

「はい、藤原さま」

(05)

京の法住寺殿。

みんな、そろっている。

法皇雅仁が藤原忠季をつうじて栗王丸にレコードとチコンキの製造実験を指示し、今日がその日。

飛驒（ひだ）から匠と漆師がよばれた。

「漆のかわき具合がそろそろ……」

法皇から次の指示があるまでにいささかの逡巡があった。だれの声を吹きこもるかとの思案の逡巡である。

「サワがよろしい」

乙前が指名した。

「このようなおおきな役目は、乙前さまこそ」

「サワよ、これは新しい仕事、わたしのよ様な年寄の出る幕ではない。さよつでございませぬ」

乙前の意見が忠季をつうじて法皇につたえられ、「乙前のいうようにサワが」との指示がくだった。

「はい、乙前さま」

なまがわきの漆の板がゆっくりと回転をはじめ。

子牛の角、と資徳がいう紙筒を登利丸がかかるくにぎり、ひらいた口のところからサワが口をよせて、唄うよりさきに、乙前の顔を見つめた。

——乙前さま、サワが唄います。

「サワ、さあ……」

乙前にうながされ、サワがゆっくりと唄う。

舞え舞え かたつむり

舞わぬものならば

馬の子や牛の子に 蹴らせてーん

踏みやぶらせてーん

まことに愛しく 舞うたらば

華の園まで あそばせーん

サワが唄いおわっても、漆の板は回転している。

「漆の板、回転、やめ！」

「かわくまで、何日？」

「五日」

その五日のうちも、今様唄いの訓練はつづく。

おしえるのはサワとハナエのふたり、乙前が後見する。

のどがやぶれ、血がふきだし、あらあらしく、猛々しい訓練。

昼も夜もなく、今様だけがある。外からは想像もつかぬ、法住寺殿の声の技の稽古。

「ヨシエ、そうではない！」

ハナエが叱咤する。

「ハナエさま。こんどはまちがいがなく。ですから、ハナエさま、ど  
うかいまの 讃岐の松山の、のところを、もういちど、どうか、ど  
うか  
うか」

法皇雅仁——忠季——乙前のあいだに緊張の対話。

「どうじゃ、乙前、あのヨシエは」

「ハナエがおしえるようには唄えます。ですが、ヨシエの自分の声  
と節とは、まだまだ」

「そういうものかな。この雅仁よりは上手に唄う、と見ているのだ  
が」

「君は男でいらつしやる。そのうえ、声の良い筋にお生まれになっ  
たとは申せませぬゆえに」

「くらへものにならぬ、というか。くやしいぞ」

「あきらめなされませ。だれにも不運はあるものとか」

乙前の責祿におされるばかりの法皇だが、それはそれで満足のよ  
うだ。

五日がすぎて、漆の板がかわききったとの報告。

飛驒の匠が漆の板のレコードを回転させ、多々丸が紙筒の先の針を溝にあてる。

サーッサーとかすかな音がして、

ウマノコヤ——そう、たしかに聞こえた。

ハナノソノ——また、そう聞こえた、たしかに聞こえた。

「聞こえましたな。これがレコードです、チコンキです」

資徳が「いかがでしょうか？」といった問いかけの視線を御簾の奥におくつて法皇雅仁の意見をうかがう——こんなものが昭和の東京ではまかりとおっているのです、われらとして、放置しておいてよろしいものでしょうか？

多々丸も御簾の奥からの意見を待っている。

はやく断言してほしい、はやく、はやく——レコードとチコンキは楽器なりや、ならずや？

「一夜、かんがえよう」

御簾の奥からは、ただそれだけの伝言があった。

(06)

「さあ、おまえたち、稽古だよッ」

サワの叱咤の音がとぶ。

ハナエ——駄菓子屋の娘

ヨシエ——左官屋の娘

タエコ——巡査の娘

トキコ——サーカス団でそだてられた

ユウコ——おでん屋の娘

タツヨ——品川の漁師の娘

ハル——神田の古本屋の女房の連れ子

ナミヨ——学校教師の娘

アキコ——孤児院にいた

ヤスエ——活動小屋の娘

キミ——某男爵家の女中の娘

サナエ——旅役者の娘

十二人の女の子がのどをやぶり、血を吐き、涙にくれて今様の稽古にはげむ姿、それは他人がみれば異様にちがいないが、娘たちには、それどころではない。

涙をながしているのに、顔はほがらかにわらっている。

娘たちが乙前を見る目には、いいようのない畏敬の気分があふれている。異様な光景ではあっても懐愴でないのは、そのためだ。

東京のことは、だれもわすれてしまった。

ヨシエもハナエも、おたがいにあそび友達だったこと、キシヤゴを貸し借りしていたことなんかけろりとわすれ、平安時代の今様唄いになりきっている。

ヨシエは東京からずーっと藤原資徳といっしょにきた。

東京のことをおぼえていて不思議ではないのに、すっかりわすれている。わすれるというより、過去を捨てきっているというのが合っている。

- 85 -

(07)

さて、一夜があけた。

御簾の奥からは、

「レコードもチコンキも楽器ではない！」

さわやかな判定がつたえられた。

「やはり、雅仁さまも……」

多々丸も「楽器ではありませぬ」という意見だし、資徳自身もレコードは楽器とはいえなかるうとおもっているが、法皇の判定をきくと、たたかいの目標をひとつ没収されたような気になる。

そこへ、

「あーっ！」

御簾がゆっくりとまきあげられ、うすぐらいなかに法皇雅仁のす

がたがあらわれた。

「レコードもチコンキも楽器ではない。しかし、まことにつまらめ  
ものであるな。あんなものでよろこんでいるのでは、昭和の東京の  
人間はかなしむべき状況にある、そういわねばならぬ」

「つまらぬもの、とおっしゃいますと？」

「まず、目がない。つきに匂いがない、そして暖かさも冷たさもな  
い。ないないづくしじゃ」

「たしかに、おっしゃるよう」

ウン、とうなずいて法皇は乙前の耳に口をちかづけ、なにかささ  
やいた。

乙前はすつくと立ち、法皇と資徳を視線でいざないながら、ふた  
りの先をあるく。

今様の稽古がきこえる。

三人は稽古場をみわたせる位置に立った。

かすかなざわめきがおこり、娘たちは居ずまいをただして敬礼の  
姿勢をとった。

乙前がそれを制し、すぐに稽古が再開。

「あのヤスエと……」

あごでヤスエをさしてから、

「こちらのタツヨと、くらべて、お聴きなされ」

ヤスエにはハナエが、タツヨにはサワがつきつきり稽古してい  
る。

法皇と資徳が耳をかたむける。

ヤスエは 山城茄子は老いにけり、タツヨは 垣ごしに見れども  
飽かぬ撫子を、をくりかえしている。

「藤原さま、いかが？」

「ヤスエはかなりじょうず、タツヨはヤスエにはおよばぬ」

「なぜか、おわかり？」

なぜかと問われると、資徳は窮する。今様を得意とはしない男な  
のだ。

目をつぶればわかるかも、と、資徳は目をつぶった。

「それではわかりませぬよ、藤原さま」

「資徳よ、乙前のいうとおりじゃ。今様を聴こつといつのに目をつぶってはなんにもならぬ。耳で聴き、目で見て、鼻で嗅いで、両腕でしっかりと抱く」

「腕で、抱く？」

「ホッホッホ」と乙前。

「ハッハッハ」と法皇雅仁。

資徳は慥然とせざるをえない。からかわれてばかりいる気がしてならない。

それなのに、反論する気力がないのを自認しているから、どうにもならない。

「藤原さま、タツヨをよーくくらんなさい。タツヨの、ふたつの目を」

「しっかりとひらいているようだが……」

あれで、なぜわるいのかと、いいたい。いえばまた笑い物にされるから、いえない。

「よろしゅうございますか。タツヨは目をひらいてはいるのですが、なにを、だれを見ているのか、自分でもわかっていない。歌の文句と節をまちがえてはいけない、まちがえると叱られる、それで頭がいつばいなのです。タツヨに比べるとヤスエの目はほそく、せまくひらいている。だれのために唄うのか、自分のまわりの景色はどういうものか、わかっているからです」

「頭のなかに、ひとや景色がうかんでいる」と法皇。

資徳には、ぼんやりとわかってきた。今様の今様たるところものが、ぼんやりとわかってきたような感じだ。

「レコードやチコンキは、ひとと景色も区別がつかない、そういうこと……？」

「そうじゃよ、資徳！」

稽古の邪魔にならぬよう、しずかにはなれた。

「レコードやチコンキは楽器ではない、したがってわれらの敵ではないのだが、昭和の東京の人間がレコードとチコンキを聴くばかりで自分で唄うのをわすれているというのならば、そのありさまをこそ、われらの敵としなければならぬ」

「そうです、そのとおりなのです！」

資徳は飛びあがるほど、うれしい。

レコードやチコンキは楽器ではないと法皇が断言したときには、これでふたたび東京にゆくこともなくなるのかと気落ちしたが、そうではない。

レコードやチコンキは敵ではない、東京の人間が敵だということでもない。東京の人間がレコードばかり聴いている、そのありさまこそが敵なのだと言仁さまはおっしゃる。

さすがは雅仁さま！

資徳の頭のなかでもやもやしていたのが、雅仁さまのお言葉になると、たちまち鮮明な姿になる。さすが雅仁さまと資徳が言いたいのは、それだ。

「資徳にも、今様とは何か、わかってきたようじゃ」

「はい、すこしずつ」

「そこで、きかせてもらおうではないか、昭和の東京において資徳がもっとも気がかりだという、そのグンプについて……」

(08)

浅草のカフェ・黒竜江でグンプのケンペイと喧嘩になりかかったことがある、その状況を資徳は、法皇にもうしあげた。

ダマレッツ、キサマ、ヒコクミン——グンプやケンペイのつかう用語のすべてが紋切り型で横柄、味もそっけもないといったことをはなした。

「そしてグンプの全体はホチョートレッツ、カシラーミギツ、ナオレッツ、ばかりだというわけだな」

「人間がまるで人形になって、すべてホチョートレッツでつくるので



す

「グンプやケンペイは唄うのかね？」

「あれが歌といえるなら……」

「たとえば？」

「えーっ、このわたくしに、唄えと？」

法皇がうなずいたのは容赦のない指示だとわかったが、こればかりはと、資徳は必死で辞退した。唄うに堪えない歌でございませうと理由をつけて。

「その、グンプというのは、どんな芸や業をして、かせいでいるのかね？」

「それが、わからないのであります」

「しらべなくてはならんな。芸や業をせずに生きてゆけるはずはないが、資徳がというような粗末な末な歌しか唄えないのでは苦しからう」

「わたくしも、そうおもいます」

「あの娘たちが一人前になるにはまだしばらく時がかかるが、そのときには資徳よ、いよいよじゃ」

「いよいよ、でございますな」

「源頼朝なども、今様歌にゆつくりと耳をかたむけるだけの気があつたならば平氏と適当に妥協して、なにも伊豆などにながされずすんだものを」

おや、と資徳は首をかしげる。

昭和の伊豆には源頼朝の姿など、きれいさっぱりと消えうせっていると報告したはずなのに――

「頼朝は昭和の伊豆にはすでに……」

「わかっておる。だがな、この場合は平安時代の京であり、源頼朝が伊豆に流罪になってから十年ほどしか過ぎておらん。昭和の時代では昭和のことを、平安時代には平安時代のことをやらねばならぬ。だれであるうと、時と地の制限にはしたがわねばならぬ」

近江路で稼ぐ唄ものの仲間の不審な男がちかづいてきて、仲間に入れてほしいともうしている、そういう報知があった。

江戸にひきかえす資徳は、近江の草津でひとまずその男の処置をつけなければならぬ。栗王丸とともに草津にかけつけた。

「不審な男とは？」

男がひとり、手足こそしばられてはいないが、地にすわらされ、屈強な若者にかこまれている。

「唄ものになりたい、と？」

「宮づかえの楽人であった、などともうすのですが」

「楽人が今様唄になりたい……？」

「おかしなはなしです。それで法住寺殿に急使を」

「なるほど、それは不審。しかし、おもしろくもあるな」

「和琴を弾かせてくれれば楽人であることを証明してみせるというのですが、この草津に和琴など、あるわけがない」

昭和時代からの回し者でさえなければ仲間に入れてやるのはかまわないが、などとおもいながら男にちかづく、

「おお、これで、わたしの身分が証明できる！」

男はうれしそうにさげんだ。

「おまえは、まるを知っておるようじゃな」

「藤原資徳さま」

「なるほど。で、楽人であるのは、どのように証明するかな？」

男——相良俊輔はしょんぼりしてしまう。資徳の顔を見あげて、

哀願の視線。

「おまえをこまらせる気はないのじゃ。敵方のものでさえなければかまわんのだよ。そうだ、まだ名をきいてなかったが」

「サガラ・トシスケ」

「サガラ……聞いたこともあるような名じゃが、おまえがサガラであるのが証明されねば意味はない。今様唄の仲間になりたいそうだが、なぜか？」

俊輔は法住寺殿の塀の外での体験をはなした。

傀儡回しにはおどろかなかったが、塀のなかから聞こえた女の今様歌に魂がゆすぶられた体験をはなした。

いや、あのときはじめて、自分にも魂のあるのがわかったのだ、ともいった。

「サワの声であるうな」

「傀儡回しは登利丸でございましょう」と栗王丸。

「わたしの願いとじて、この男を仲間にしてやってはくれぬかな。

身分の疑いがはれたわけではないが、宮づかえの楽人の椅子を捨てて唄ものの仲間になりたいというのはおもしろい」

「うそがまことになる、というはなしもありますな」

栗王丸が微笑する。

そして、

「いいでしょう、仲間に入れましょう」

「ありがたい！」

俊輔は立って、礼をいう。

「トシスケという名は唄ものらしくない。変えては、どうじゃ。トシマルは、どうじゃ」

「いや、栗王丸さま……かしらと呼んでいいのですな……トシとかスケにひっかかりのある名はつかいたくない。生きもの、たとえば獅子丸は、どうです？」

「獅子丸、よかるう」

「いっておくが、と栗王丸が説明する——おまえを仲間に入れるのは信用するからではない、今様唄いになりたいというのがおもしろいからだ。おまえは疑わしい仲間としてあつかわれるわけだが、べつに気にすることはない。おれたちも、おまえに信用されようとはかんがえておらんのだから。」

「それで結構です。いきなり信用されるのはかえって不安になります」

それから、今様唄いの獅子丸にはどんな仕事かふさわしいか、の検討になる。

「和琴のほかには、なんの技もない。みなさんのお手伝いをさせていただければ」

「はじめはそれでいいとしても、いつまでもそうでは、いかん。獅子丸は雅楽のことにはくわしいのだから、なにか、それを活かす道はないか？」

「栗王丸よ、今様では、あたらしい歌をつくってはならぬしきたりになっておるのかな？」

「さあ、そういったきびしい掟はないのが今様の今様たるところでしよう。いくらでもあたらしい歌をつくってかまわぬ、というものはありませんかな」

「それだ！」

わが意を得たり、とばかりに資徳はうなずき、

「獅子丸はあたらしい今様の歌をつくれ。節のない歌に節をつける、唄いにくい歌を唄いやすいように変える、これだッ」

獅子丸は興奮に顔をあかくしている。

「やれましょうか、このわたくし、獅子丸に？」

「できるさ。いますぐに、とはいわぬ。世間とひととをじっくりと見て、それからでよいぞ。ひとをよく知ったうえでなければ、ひとの胸を衝つ歌はつくれまい。この藤原資徳にしても、ながい宮廷ぐらしで、ひろい世間をせまくしてしまった。獅子丸の世間もわたしとおなじで、せまいものであつたはず。まずは、せまい世間をひろくする、それから歌づくりだ、よいか獅子丸」

「はい」

その夜は草津で泊まったが、夜半におそろしい体験をした。武者の一人が長者の館をおそつたのである。

宿は館からはなれているから危険はないが、

「ヤヤーッー！」

「逃げるなッ！」

「火を消せッ！」

攻めるもの、ふせぐものの叫喚は身体の芯にひびいてくる。

夜明けまえに武者はひきあげていった。

長者の館に死者はないが、負傷者はすくなくないという。

「木曾義仲の手のものだそうですよ」

「ほほお、木曾のあばれザル。しばらくしずかにしておった源氏だが、そろそろうごきだしたかな」

(第4章・終)

( 01 )

浅草、カフェー黒竜江。

藤原資徳がケンペイに「古漬のタクアン！」とのしられ、やりかえし、またケンペイが怒って――

「いけないッ。藤原さん、はやくかえって！」

「ミヨコさんがかえれというんなら、かえってもいいんだが……」

「ヨウヨウ、古漬のタクアン、妙な具合にモテルじゃないか！」

「モテルモテル、テルテル坊主！」

ケンペイのひとり、つかつかつとカウンターにはしって、

「おいッ、ねえちゃん」

クサカベミヨコの袖をつかんで、仲間の席につれてもどろろつとする。

「なにすんのよッ、いけすかないねッ」

「ミヨコの健気なる反抗に勇気づけられた資徳、両手をふりあげ、

「さげぼつとしたが、渾身の力をこめて喉を詰め、言葉を呑みこんだ。」

資徳がいおうとしたのは、ケンペイたちがろくな身分や位をもたないのを指摘、軽蔑する下品な言葉だ。

それをいえばケンペイたちがすすこと恐縮する、そうと知っていて、なぜ資徳はいわなかったのか？

ろくな身分や位がない、それはかれらの責任ではない。

平安京にもどれば相当の身分や位をもっている資徳だが、それは資徳自身の努力や奮闘で獲得したものでない。父祖から世襲の身分、位なのだ。それにくわえて雅仁法皇からは格別の勲賞にあずかっている。

ケンペイの威張りかえる態度が気に入らないからといって、それ

を身分や位の無いことに関連づけて軽蔑するのは平等なルールによる争いとはいえない。

咄嗟に気づいた資徳は、言葉を呑みこみ、たちあがって両腕を胸のまえであわせてから、しずかにいった。

「まろはスケノリじゃ。どうかしずかにしてほしい、まろのおりいっつの頼み」

みじかいセリフではあったが、音吐朗々、かつ肅々とした調子の声である。

今様を唄うのは得意とはしない資徳だが、法皇の身辺ちかくにつかえてきただけに、マツリゴトの発声法というものをこころええている。

ケンペイたちは哑然呆然、気味わるいものを見ている風情。

「わかってもらえたかな、まろはスケノリじゃ」

颯爽（さつそう）と名乗りをあげ、

「ミヨコさん、しばらくお別れ、元気でね」

いいのこしてカフェー黒竜江を後にした。

（02）

音羽の家で一晩をすごし、そのまま中仙道の旅にでるつもりだったが、奇妙な夢をみた。

場面はカフェー黒竜江、悪意に満ちた様子 of ケンペイたちがクサカベミヨコをとりかこんで意地悪をくりかえし、いつになってもやめない。

たまりかねた資徳が割ってはいって、法皇雅仁の名をもちだして懲（こ）らしめてやろうとした瞬間、ケンゴ隊長が「まあまあ藤原さん、そんなにカーツとならないで……」とかなんとかいいながらペロリと——それはまさにペロリというほかにふさわしい言葉がない——自分のつらの皮を剥ぎとった。ケンゴ隊長の顔は仮面だった。

仮面の下にあらわれたケンゴ隊長の顔は資徳にとってごくごく親しいなつかしい人物であり、そうと気づかなかった不明を恥じる自

分と、その自分を「だめなやつ」として糾弾するもうひとりの自分との分裂の意識をのこしたまま夢から醒めた。

夢の後味というものがあるなら、ふんわりとあたたかい後味の夢であった。

——放っておくと、あとできつと後悔する。

旅装をやめ、ふだんの着物に着替え、さつそく探索にとりかかった。

——あの五人のケンペイ諸君、ただのケンペイではない。なにか奥深いものとながっているにちがいない。

カフェー黒竜江のちかくに、それと気づかれないように張りこんでいたらケンゴ隊長以下の諸君がやってきて、一時間ばかりして機嫌よく出ていった——資徳はその後を尾(つ)ける。

雷門を南にぬけて駒形から蔵前に出てゆくから、これは浅草橋から秋葉原にカーブして千代田の城のちかくのケンペイ隊本部にもどるのだろうと資徳は見当をつけた。

浅草橋の手前の商店街でチンドン屋の一行とすれちがう。

大売出しに景気をつける五人ほどの小規模編成のチンドン屋が行ったり来たり、買い物客と子供がとりかこんで、なかなかにぎやかな光景。

ひとこみにおされ、歩きにくいなと感じたのが資徳の油断、前をあるいていたはずのケンペイ五氏のすがたを見失った。

しまった！とおもったが、ここでウロウロして先方に気づかれてはならんという警戒心がはたらいた。

大売出しをさいわい、安い買い物にきたひまじん、といった風をよそおい、あっちこっちの店に首をつっこみながら商店街はずれ、秋葉原の省線電車のガード下に来たところで——

あれは——？

チンドン屋の服装の男——男らしい——の背中が前方約五十メー

トルの家のガラス戸の奥に引っこんだのが見えた。



——このあたりはチンドン屋の事務所があつまっているのかなア。それでも気になったから、何気ないふうになつかつき、とおりすがりにガラス戸の奥に目をやると、

「みんな、いつしよだ！」

声が出てしまった。

五人のケンペン諸君全員、チンドン屋の服装から普通の服装に、ということとはつまりカフェー黒竜江から出たときの服装に着替えているのではないか！

——チンドン屋がケンペイに化けたのか、それともケンペイがチンドン屋に変装したのか？

(03)

「どうだ、気がついたかな、古漬のタクアンは？」

「気はついたようですが、何がなんだか訳がわからないといった顔で通りすぎていきましたよ」

「まあ、放っておけ。そのほうが仕事はやりやすい……しかし、おどろいたなア、いきなり『まるはスケノリじゃ』と名乗りやがったんだから、あいつめ！」

全体の状況が混乱してきた。

真相はつぎのような次第なのである。

五人のケンペイたちは本物のケンペイでもなく、本物のチンドン屋でもない。

昭和二年（一九二七）三月十四日、衆議院本会議の席上、片岡蔵相が「渡辺銀行がただいま破産」と発言し、議場は騒然となった。議場の外でも東京の「あかぢ貯蓄銀行」がとつぜんの休業となっていて、これが口火になって昭和の金融大恐慌がはじまった。

金融恐慌とはカネづまりだが、つまったものはいずれどこかに穴をあけて洩れ出さずにはいられない。

洩れて出たカネをたつぷり、こつそり懐におさめたすばやいひとのひとりがケンゴの父親だ。

世間ではきびしいカネづまりの風がふいているから、父親はせっかく手に入れたカネをおもてむき使うことができない、捨てられない。

「こまったあげくに息子にむかって、

「こつそりと使う道があれば、やるぞ。何か名案があるか？」

とつさにケンゴの口からとびだしたのが、

「ケンペイこつこ——まえからやりたいと思っていたんです！」

父親、にっこりと笑い、

「前代未聞、おもしろい。しかし、ほんもののケンペイさんの邪魔をしないように、な」

こういうわけで、ケンゴを隊長とする「ケンペイさんこつこ」「グループ」が誕生、秋葉原のガード下に本部をおき、おもてむきには五人のチンドン屋チームを営業しているようによそおっている。

それから三日三晩、藤原資徳の執拗な探索が実をむすんでケンゴのケンペイが本物ではない、ケンペイこつこにすぎないんだという事実は把握されたが、そのときの資徳の気持ちは、

——途方もない、しかし、おもしろいことをかんがえるやつがいるものだ！

こういうものだったから、ニセモノのケンペイと承知のうえで付き合ってやろう、という気になった。

ケンゴのほうとしても、藤原資徳をニセの平安貴族——平安時代にもどればれつきとした本物の貴族だが、昭和時代に貴族は存在していないのだからニセ貴族というほかはない——と認識したうえで、  
——あいつめ、何をたくらんでいるのかわからんが、相手に不足はない、どこまでも邪魔してやる！

決意をかためた。

こういう事情だから、これから先の展開が混乱しても仕方はない。

ケンゴ隊長のケンペイ隊がニセモノである事実をつきとめた資徳が微笑みの表情で中仙道を京にむかったあと、秋葉原のガード下では、

「古漬のタクアンとばかりにしていたが、あいつ、ただものではない！」

「スケノリ……聞いたような気がするんだが？」

聞いたような気、どころではない。

おおむかしのことは判然としないものの、検非遣使（けびいし）や弾正台（だんじょうだい）、探題（たんだい）といった国家の警察機構は警察機構としての連綿としたつながりを維持している。

王朝や政権には断絶があるが、警察機構は権力とともに断絶したようにみえて、その実は断固かつ堅固に連続している。

庶民のささやかなる抵抗を摘発して罪におとし、批判勢力の弾圧に血道をあげるのはねじまがった正義にほからならないのだが、これはこれで人間のひとつのタイプを形成していることもたしかなのである。

血のつながりといった動物的な筋ではなく、まさに人間的な筋を形成していて、これもまた歴史の動乱をくぐりぬけて確固たる連続を維持している。

機構は連続し、性格もまた連続している。

かれらはニセであるがゆえに、本物のケンペイ組織よりははるかに高度のケンペイ意識を持っている。

平安時代の、ある警察機構の記録に「法皇後白河は今様歌をひるめることで東国の人心をおさめようとした、云々」の一節があり、それが昭和の東京のニセ・ケンペイ組織に記憶としてつたえられている。

これはもちろん雅仁に敵対する勢力の側の記録である。

法皇雅仁が自分自身の警察機構をもっていたのはいうまでもないが、そうであればこそ、雅仁を敵とする勢力もまた独自の警察機構をそなえていて当然だ。

五人のニセ・ケンペイには「法皇後白河、云々」の記憶に異常な関心を持つ共通性でむすばれている。

フジワラノスケノリという古臭い名前をきいたような気がする、どころではない。記憶にみちびかれ、無意識のうちに強い興味をもっているのだ。

「そういえば、おれも聞いたような……」

「スケノリ……ふーん？」

そして四人目が、

「いや、おれはなにかの文書で読んだような気が……」

ニセ・ケンペイのケンイチ——ケンペイの一番だからケンイチ——

が、

「おい、ケンシ（ケンペイの四番）、ほんとうに読んだのか？」

「読んだ、ような、気がする。おぼえがある、ような、気がする。はつきりとはいいきれない」

「ケンシが読んだような気がするというなら、なんだか、おれにもそんなような記憶がある気がしてきたよ」と、これはケンサン、いささか頼りない。

「それなら、やる、のか？」とケン二。

「やる、ということになる、な」とケンコ。

藤原資徳を「あやしきもの」と認定し、ニセ・ケンペイ隊のケンペイゴツコの任務として追及する方針がこの時点で決定された。

資徳の名をきいたことがある——ような気がする——というだけではすぐには手は出せないが、記録として読んだ記憶があるというなら、それはかつて資徳が警察機構に睨まれた事実があるということだ。

そうである以上、これは事件にする必然性がある。

どの時代に、どんな事件があったのか、それは特定しなくてもかまわない。

いちど目をつけたものは永遠に追及する、そうでなければ警察機構として存在する理由がなくなる。

ニセ・ケンペイたちの記憶が、すこしずつもどる。

「平安時代だったな、たしか」

「ひどく流行歌の好きな天子さまがおいでになって・・・」

「天子じゃない、法皇だ」

「なんだ、その、法皇というのは？」

「それだから、ケンペイには賢いやつがいないとばかりにされる。関白が隠居すると太閤、天子が隠居すると上皇で、上皇が髪をおろして出家すれば法皇さま」

「ああ、そうなのか。豊臣秀吉は関白を隠居したから太閤秀吉なのか！」

「豊臣秀吉なんか、どうだってかまわない。その、流行歌ずきの法皇さまの家来のひとりの名が藤原資徳ではなかったのかと……」

「おれは、どうも、家来の名前までは……」

「いや、おれはおぼえている。スケ……なんとかという名前だ」

「しかしだよ、と呑気な声をはさんだのが五人のなかでいちばんわかそうなケンニ。わかいだけに、いちばんはやく酔っぱらって、あかい顔になっている。」

「音楽が好きだというだけで、どうしておれたちの記憶にのこっているんだろう？」

「おまえ、なにをいうのか。この緊迫した時世においては、音楽に血道をあげるだけでもゆるせぬ。音楽というものはだな、いいか、おまえ、人間の身体と精神をダラッとさせる。聖戦遂行に、これほど邪魔になるものはない！」

「軍歌があるじゃないか。軍歌なら身体も精神もダラッとさせるどころか、シャキッとするはず」

「あーあ、なさないケンペイもあったものだ。いいか、おまえ、地方人が軍歌なんかをよるこんで唄っていると、おもうのか？」

ケンゴがおおげさに、なげいてみせる。ちなみに、ケンプでは民

間のことを「地方——ちほう」とよぶことになっている。

「いいか、地方人がよるこんで唄うのは固くなるしくって陰気な軍歌ではない、カチユーシヤかわいや、だ。旅のつばくるさびしかないか、だ。わたしや夜咲く酒場の花よ、であるッ。断じて軍歌ではないのであるッ。おれは御国（みくに）をまもるケンペイとして、ほんとうに、ほんとうに、ああ、くやしいッ」

ケンゴはテーブルにつつぶし、声をあげて泣きだした。

「くやしい、くやしい！」

ケンイチ、ケンサン、ケンシもつられて泣きだした。

ケンニだけは、これは理解できないといった表情だったが、そこは若いだけに忍耐というものが無い。とうとうケンニも、くやしい、おれもくやしいと泣きだした。

(06)

それから数日、例によって五人のニセ・ケンペイはカフェー黒竜江でくだをまいている。

そこへドヤドヤツとはいってきた別の一団、かなり酔ってはいるが、ケンペイ諸氏ほどではなく、ケンペイ諸氏の死ぬも生きるもネエおまえー、の合唱に、おお、やっちよるなの視線をむけ、はなれたテーブルに席をしめる。

会合の二次会、ウイスキーでしずかにやっていたが、

「そんなことでは、せつかくあたらしいレコード会社をつくる意味がない」

「あんだ、そうはいつでもだね……」

「だから、さア」

「そもそもだよ、音楽というものは……」

これがケンゴ隊長の耳にはいったものだから、

「おいッー！」

さげぶなり、ケンゴはテーブルからテーブルに一直線のつもり、だがしかし、酔っているものだから、あっちこっちで予定のほかの

障害物との衝突をくりかえしたあげく、

「おまえたち、さては藤原資徳の一味同心だな！」

「なにをいうんです。一味同心だなんて、ふるくさい！」

ケンペイのケンゴ隊長だとは知らないから、鼻先でかるくあしらうつもり。

それが余計にまずかった。

「ふるくさいとは、なんだ。おまえこそタクアンの古漬の仲間くせに！」

ガツーン——なぐった。

「キャーッ。ケンゴさん、お客さんにむかって、なにすんの！」

クサカベミヨコがケンゴにむしゃぶりつくと、

「だまれッ、おまえもタクアンだッ」

ふりまわされ、リノリユームの床にたきつけられた。

それを待っていたかのようにケン二がかけより、ミヨコをたすける、というよりは大事なものを抱きかかえる感じ。

「ミヨコさん！」

よこたわるミヨコを背中にかばい、

「隊長ッ、ミヨコさんに乱暴はやめてください！」

見栄をきった、あっぱれ、ケン二！

「ケン二、おまえはケンペイのくせに地方人の味方をするのか！」

おどろいたのは新参の連中、ケンペイ、ケンペイとつぶやき、真っ青な顔を見合わせて、ふるえるばかり。

「なにいッ、ケンペイだと。そんなこと、だれがしゃべったんだ！」

ケンゴはわめいたが、ケンペイといったのは自分だと気づくぐらいいには酔いが醒めたらしく、

「ようしッ、正体がばれた以上は仕方があるまい。おうッ、いかにもおれたちはケンペイである、文句があるか！」

「いえ、あの、文句なんか、なんにもありません。わたくしどもが

この席で仕事のはなしをしていたら、そちらから、あの、ケンペイさまのほうから……」

「ほう。グンプと国民は聖戦遂行のただなかであるというのに、おまえたちは真つ昼間からウィスキー呑んで、カネモウケのはなしか！」

「はあ、もうしわけないことながら、これもいささか聖戦遂行のお役には立つかと……」

「ふむ。聖戦遂行に役立つカネモウケとはいったい何か、いつてみる」

「レコードでございます、音楽……」

音楽ですな、というつもりで「ですな」に「ガツーン」という衝突音を重ねなければならぬ。ケンゴがまた、なぐつたのだ。

酔いが醒めかけているから、まえよりは正確かつ強烈、ために男はうしろへひっくりかえり、床にたおれてもまだ三尺（約一メートル）ほどズルズルとすべった。

ケンニも、これはたすけようとはしない。ミヨコでなければ、たとえ母親でもたすけるつもりはないらしい。

「ケンペイのケンゴさまア……」

べつの男がケンゴのそばにかけよって、

「レコードがよほどおきらいのようですが、わたくしどもものつくるレコードはですな、そのオ、もっぱら軍歌を……」

「おいッ、林さん、何をいうんですか、それでは約束がちがう」

「シーッ」

林とよばれた男は、ふりかえって唇に指をあててみせ、ケンゴのほうにむきなおり、

「さようでございます。もっぱら軍歌のレコードをつくって国民の聖戦意識高揚に役立ちたいと、まあ、こういった計画であります」

「軍歌か、それはいいぞ。どうじゃ、カネはたっぷりあるのか？」

「はあ、それはまあ、なんとか……」

「足りなければ、おれがグンプに口をきいてやってもよろしい。軍歌のレコードなら、カネはいくらでも出る」

「ありがとうございます。いずれそのときには、なにかと、おちか



らぞえなぞ」

その場はおさまる。

「ミヨコは、自分をかかえているのがケンニだと気がつく」と、「フン、なにさ」と腕をふりきってカウンターの奥に消える。

(07)

カフエー黒竜江から、まずケンペイ五人が出ていった。

「林といったな。立派な軍歌のレコードをたくさんつくるんだぞ。

皇国(こうこく)の興廢(こうはい)、このレコード一枚にあり、だ。わかったな!」

そのあと、カフエー黒竜江におけるトラブルの展開は予想のとおり。

「林さん、軍歌のレコードをつくるなんて、それじゃ、約束がちがう!」

「ええッ、梅田さん、わたしや、本気ではありませんよ。うるさいから、ああいつてごまかしたまで。本気だと思ったですか、こいつはおどろいた」

「ことによると、ともかんがえましたがね。なにしろ、さっきの今だから」

「いやだなア、梅田さん、なかなか執念ぶかいんだから」

あたらしいレコード会社の方針策定について対立があったと想像される。

林はおおいに軍歌をつくるうという意見だが、軍歌はやめて流行歌専門でゆこうという意見もつよく、梅田が代表だ。

ガヤガヤともめていたが、今日の最終会議で軍歌はつくらないという意見が多数をしめ、林も納得、「シャンシャン、ハイ、みなさまお手を拝借、シャンシャンシャン」とうちあげてカフエー黒竜江にのりこんできた、という次第であったようだ。

「軍歌なんかつくるのは日本のレコード界のつらよこしだ」

「軍歌がわるいとは思わんがね、なんてったって、レコードは流行歌、この甘ったるい魅惑には勝てません」

「ジャズは、どうなるんです！」

「シイッ、さっきのケンペイさんがきいてるかもしれない。ジャズなんていったら、それこそ大変、非国民めッ、だよ」

ジャズ青年らしいのが、ヒエツと首をすくめた。

クサカベミヨコが「グンプとかケンペイなんていうはなしは、よしまししょうよ。あたし、こわくって仕方がないの」といいおわたのを合図のように、

「あのウ、こちらにチコンキというものが、あるんですか、ほんとうに？」

息せききつてはいってきた青年——どっかで見たようなとおもるのは無理もない、なんとこれが山階逸男、平安時代の近江の草津で相良俊輔とわかれ、それから走りづめとみえて、ヒエッファァーッと荒い息がおさまらない。

「チコンキ……ですか？」

クサカベミヨコは、わらってはいけない、失礼になるからと、てのひらで口をおさえ、

「チコ、チコ、チコンキなら……」

あつちにある、までがいえず、身体を「く」の字に折って、わらいをこらえるのに必死懸命、これがなかなか色っぽい。

ミヨコの苦勞も逸男の目にははいらぬようで、

「ここに証拠の絵が書いてある、チコンキとレコード！」

興奮にふるえる手でさしだすのはカフェー黒竜江の宣伝マッチ。

様子のおかしいのにたまりかねたマネージャーが出てきて、

「これはお客さまにさしあげているわたくしどもの宣伝マッチですが、マッチが、どうかしましたか？」

マッチの片面、大型朝顔ラッパのチコンキの絵がかいてある。

カフェー黒竜江ともなれば店においてあるのはデンチクだが、デンチクは絵柄としてはおもしろくないので、ラッパ型のゼンマイ式チコンキを絵にしてある。デンチクのデンは電気仕掛けのデン、すなわち電気式蓄音機を略してデンチク。

ラッパからは線が五本、ニルユニルツとながれ、そのさきで音符のオタマジヤクシが踊る。

裏には女給の姿。

「ウフフ、黒竜江のナンバー・ワンは、なんといってもクサカベミヨコさんですよ！」

モデルになったミヨコが腰をよじって誇るやら、はずかしがるやら。

(08)

東海道をくだる途中で逸男はマッチをひろい、ゆたかな音楽体験からしてチコンキの絵柄の何物であるか、およそのところを察知したにちがいない。これはすなわち昭和の東京の楽器であるつ、と。

「これは、どこにありますか？」

ここで勘ちがいがおこったのだらう。

逸男の、はげしい口調の質問をあびたそのひとは、まさかチコンキやレコードをしらぬ若者がいようとはおもわない、てっきりカフェー黒竜江の場所を質問されたとおもったわけだ。

よくあるはなし。お父さんが病気かなんかで、この青年の姉さんというひとが東京に出てカフェー黒竜江でかせいでいた。

お父さんの病気は快方にむかい、姉さんは田舎にかえることになった。

田舎にのこって父を介抱していた弟が、東京見物と姉の出迎えをかねて大井川の奥のあたりから出てきたのはいいが、たよりにするのは姉が送ってよこしたカフェーの宣伝マッチ一個だけ、よくあるはなしなんだよ。

「うん、これは浅草だな」

「アサクサというと？」

「遠いよ。とにかく、まず東京まで行く、浅草はそれからだ」

逸男の質問の意味が「レコードやチコンキはどこにあるのですか？」なんだとわかっていたら、「そんなもの、どこにもあるよ」

の返事になり、逸男はその場でレコードとチコンキにお目にかかってははず。そうなれば、カフェー黒竜江にたどりつくことにはならなかった。

ひとの世というものは偶然と必然、そしてデタラメの混在だから逸男がカフェー黒竜江に登場しないとはいきれないけれど、今日というこの日の、今の、このときに登場することにはならない。勘ちがいとはおそろしい。

ところで、さて、自分の店の宣伝マッチをにぎりしめてとびこんでくるお客さんなんてめったにあるもではない。

めったにない僥倖に感動し、うれしくなったマネージャー、  
「そのマッチ、どこでお手になさいました？」

「ああ、これ。これはアコオネです、アコオネでひろいました」  
アコオネ……？

みんな、首をひねる。

「わかった、アコオでしょ。あたし、知ってる、忠臣蔵の播州アコオでしょ？」

「アコオ……ちがいます。アコオネです、アコオネ」

アコオでもアコオネでも、どっちだっていいじゃないか、チコンキとレコードが重大なものと、不満顔の逸男。

すったもんだのはてに、アコオネすなわち箱根とわかった。平安時代の日本語はスペイン語とおなじで、HAを「ハ」と発音するのが苦手らしい。

箱根から東京のあいだには商店や個人所有の数千台のチコンキと数十万枚のレコードがあると推計されるのに、逸男はそれを知ること

ともなく、ただただ「東京の浅草はどっちですか？」とたずねて、走りにはしり、いまようやくにしてカフェー黒竜江にたどりついたのである。

カフェー黒竜江にいわせたものは、逸男が箱根から脇目もふらずに走ってきた事情は察したが、箱根のさきの、平安時代の京都からやってきたなんて、まったく知らない。

「チコンキなら、あそこ」

マネージャーが顔でおしえると逸男はすつとんでいったが、

「ちがうツ。これはチコンキではない。ほら、これを見なさい。チコンキというのは、ここが、こういうふうになっていて……」

マッチの絵柄のチコンキと、目のまえのデンチクとを見くらべ、首をふるばかり。

ああ、平安時代の京都からかけつけてきた逸男の壮拳も、今日ここでむなしくも砕けちるのか！

「お客さま、これはデンチクともうしまして、ふつうのチコンキよりはずーっと高級な品でございます。つまり、デンキのチクオンキですから」

「デンチクなど、おれの知ったことではない。おれは、絵にかいたチコンキではなく、ほんもののチコンキを見たい。チコンキの、ながれるような、この音を聴きたいのだ。ああ、チコンキ！」

(09)

表情をくずし、いまにも泣きだしたいのをこらえている逸男の姿が心やさしいクサカベミヨコの感動をさそい、名案をつかばせたのである。

「ねえ、マネさん、なんでもいいから、レコードかけて、聴かせてあげましょうよ！」

「ちよっと、待て。いまそなたは『レコード』ともうしたな。レコードとチコンキは組み合わせのものだときいた。ここにあるのはデ

ンチクであってチコンキではないというのに、なぜレコードが共にあるのか、納得のゆく説明をききたい！」

「ここで馬鹿にされてはならんぞ、とでもいうように逸男は肩肘をいからせているが、ミヨロには通じない。

「ねーえ。お客さまのお名前、まだうかがっていないんですけど、さしつかえなければ……」

「これは無礼、拙者、山階逸男」

逸男は東海道の三河あたりで江戸時代を通過したらしいと想像される。室町時代はかるく通過したから文化の影響をうけなかったが、江戸政権発祥地の三河の影響を強く受け、「拙者」なんていう下層階級独特の言葉を、それとは知らずにつかっているんだらう。

昭和の東京で自分のことを「拙者」なんていえば、あやしい、おかしいぞと思われるが、カフエー黒竜江にとびこんできたときからあやしく、奇妙な印象をあたえている逸男である、いまはもう、だれも不思議におもわない。

「山階さま……なんておくゆかしいお名前ですこと。それにまた、逸男というのも、とつても素敵ですわ！」

「いや、なに……」

「マネさん、ハイ、これ」

逸男が照れた際にミヨロは二村定一の「神田小唄」のレコードを手渡す。

マネージャーがデンチクのスイッチを入れ、レコードをのせ、ピツクアップをおいた。

逸男は、つまらぬものでも見るような、熱の冷めた目になっている。

——チコンキはどうしたんだ、おれはデンチクなんかにかかずらわっている暇はないはずなんだ！

チャンチャン、チンチン、ジリジリジッジ——前奏がおわって、

肩で風切る 学生さんに

ジャズが音頭とる 神田々々々々

ポカーン——逸男の大口に歌声と音楽がすいこまれてゆくような感じ。

屋並み屋並みに 金文字かざり

本にいわせる 神田々々々々

「これが、あの、チコンキ？」

「山階さま、ええ、これがチコンキなのですわ、デンキのチコンキ。そうして、このまーるい板がレコードですよ」

ミヨコの言葉づかいが、いつもとちがってきた。

ふだんのミヨコなら「なのですわ」とか「ですよ」なんて、決していわない。「まーるい板」なんて気分をこめた言い方はしないで、「まるい板」とあっさりかたづけろ。

逸男はデンチクのまえに歩み寄り、うやうやしく一礼をした。両手を前にのばし、掌を上にもむけ、かるく頭をさげたのは「拝戴の礼」のつもりなんだろう。

「なるほど、これが昭和の楽器であるか」

なつかしいものに再会、そういった気分らしい。

「あなたのお名前をうかがいたい、いかがであろうや？」

「へーエツ。いかがであろう、なんて、これじゃあ、まるであたし、お姫さまなんかになっちゃった気分だなあ」

「お姫さまではない、とでも？」

「そういわれてもねエ、こまっちゃうな。あたし、生みの親から、そのことについては何も聞かされていないのでございますから」

「それはあなたが真正正銘のお姫さまであるからだ。お姫さまにむかって『あなたはお姫さまだ』なんていうのは無駄であるから」

「ええ、そういえば、もしかすると……」

なにがなんだかわからないままに言葉をにこし、クサカベミヨコと名乗った。

「ミヨコ姫さまにおたずねしたい……」

逸男は腕をくみ、腹にちからを入れ、脚をふんばり、つまり、敵は幾万ありとても決してひるむものではない、といった意気たから

かな姿勢でいったのである。

「ミヨコ姫さま。このチコンキの訓練には、何年ほどの時間を必要とするのでありましょうか。いや、名人上手とはいかずとも、ひととおり弾けるようになるまでには？」

(10)

駄菓子屋「ハナエちゃんのお店」のその後は可もなし不可もなく、まずまずの景気。

夕飯のあとかたづけがすんだチャフ台で修二がひとり、一枚の名刺をいじっている。

親指と中指で名刺の対角をはさんで息をふきかけ、くるくるとまわしたり、ピシリピシリとたたきついたり——「ヤマト・レコード製造株式会社技術部長・四方修二」の名刺。

修二はヤマト・レコードにひきぬかれた。ゼンマイ関係の技術をみこまれた。

ヤマト・レコードはデンチク、チコンキもつくって売ることになっている。チコンキ製造の責任者が修二で、レコード製造のほうには別に音盤部長の役がある。

アヤは修二の転職を歓迎した。レコード会社は花形産業、そのレコード会社の技術部長だ。

「アヤさん、やっぱりレコードに縁があったんだよ」「テイコもよろこんでくれた。」

レコードといえばたちまちハナエを思いだしてしまうんだが、いまはもう、悲しくはない。

藤原資徳がおくってきた五千円は、手をつけないままに利子を産んでいて、ハナエはどこかで元気でやっているという思いのささえになっている。

ハナエは元氣——むりやりの思いこみではない。

(11)



ふたつきほどまえ、アヤが起きぬけに店の戸をあけると、油紙の包みがおいてあつて、なかに血のついた綿、と思つたのはじつは蒲の穂綿を干したものらしく、わすれようとしてもわすられぬ、あの熊野牛王の起請番紙に書いた藤原資徳の手紙が添えてある。

ハナエさんが女になりました、と書いてある。蒲の穂綿の血がそれだという。

まあ、ハナエが女になつた！

いたましい感じはしない。蒲の穂綿じゃ痛かろうとおもつただけ。母上さまとしてはなによりお慶びのことと存じますから、いささか奇妙な方法ではありますが、これをお知らせするのはわれらの義務とこころえますゆえに、とも書いてある。

藤原資徳さんはいいひとなんだ——アヤはすっかりうれしくなつた。

修二にいうと、

「フーン。そうすると、このつきには、オギヤアオギヤアの声がして、箱をあけると赤ん坊がわらつている、まるで桃太郎だな」

「まア、あんた。いくらハナエでも、まさかネ！」

ありえないわけでもないと思うから、われしらず気分が明るくなって、顔色に出さないように、これまた苦勞。

レコード——ハナエ——藤原資徳の連想がアヤに悲しい思いをさせるのではあるまいかと修二は懸念した。これがもし、血にそまつた蒲の穂綿をみるまえなら必要な懸念だつたかもしれないが、穂綿をみたあとだ、無用の懸念だつたのである。

ハナエとヨシエ——おなじ町内で女の子がふたりもさらわれたのは大事件だ。しばらくのあいだ、アヤは街をあるくのが嫌だつた。同情の言葉の裏の好奇の視線が、たまらなく痛かつた。

だが、それもすこしのあいだのこと。美濃部達吉という学者が政府ににらまれて騒ぎになったり、渋谷駅の忠犬八子公が死んだり、世間の好奇心を刺激する材料に不足はないから、ハナエとヨシエの行方不明はだんだんとわすれられた。

ヨシエの両親とはしばらくつきあいがあつたが、会えばたがい辛い思いをするだけなので、いつのまにか疎遠になつた。

このほうがいい、とアヤは思っている。

ヤマト・レコードへ出勤初日、修二は外出して昼飯をとり、会社にもどるとすぐに部長全員に招集がかつた。

修二の知らぬ顔がひとつ。

「紹介させていただきます」

専務の林が、もったいぶつた様子で新顔の重役を紹介した。

新発足のヤマト・レコードには資金の点で不安があるが、「この方」が「予想もつかなかつたほどの巨額の出資」を果たしてくれたので、その方面の心配はなくなった。重役および部長諸氏は安心して業務にはげんでいたきたいという、これ以上はない結構な話なのである。新顔重役は相談役と音盤部の顧問をかねる。

それぞれの自己紹介がつづいた。

「四方修二、技術部長です」

「四方さん、よろしく。山階逸男ともうします」

(12)

カフェー黒竜江の女給のクサカベミヨコがヤマト・レコードの専属第一号の歌手になつた。世の中、なにがおこるかわからないというこの見本である。

世間に、いくらかの、動揺とかトラブルといったものが起るのも無理はなかつた。

たとえば、黒竜江にミヨコをたずねていったのに、「ここにはもういない、ヤマト・レコードの専属歌手になつた」ときかされ、築地のビルの三階にミヨコを追いたけてきたニセ・ケンペイのケンニもトラブルの主人公であつた。

「ミヨコさん、もし、あんたが『いいわよ』といつてくれれば、ぼくはケンペイをやめて江差(えさし)の田舎にかえり、両親といっ

「しょにニシンをとろうとおもっただが……」

「ニシン……ああ、ニシン来たかとかもめに問えば、わたしや発（た）つ鳥、波に聞けホイ、のニシンでしょ。ケン二さんがケンペイやってるのは命令で仕方のないことでしょうけれど、ニシンとりのほうがよっぽど男らしいわよ」

「ミヨロさん、それは『ソーラン節』っていうんだ。よく知ってるね、おどろいたな」

幸先の良さにケン二は相好をくずす。

しかし、その先をはなすうちに、ケン二はミヨロと結婚して江差の田舎にかえるつもりなんだとわかり、たちまち激怒するミヨロ。

「なにいつてんのさア。あたしゃね、クサカベミヨロだよ、ヤマト・レコード専属歌手のクサカベミヨロなんだよ。ケンペイだろうがニシンとりだろうが、お嫁になる気なんかないんだよ。かえっておくれ、塩まくよー！」

ミヨロは「塩まくぞ」といっただけで、じっさいに塩はまかなかったが、ケン二のほうは、たっぴりと塩をまかれたナメクジみたいにしおれてしまった。

「ミヨロさーん」

消えいりそうな悲しい声をのこして、ケンペイのケン二はヤマト

・レコードの事務所から出てゆく。

出口で山階逸男とすれちがい、逸男はおやッ？ という顔つきになったが、それもそのときかぎりで、ケン二の恋はかなしい終幕をむかえた。

で、このままおわれれば何もいうこともないのだが、世のなか、なにが起こるかかったものではないという定理にしたがって、とんでもないことが起こる。

「ミヨロさーん」

かなしい声をのこしてヤマト・レコードの事務所から出たケン二は、江差どころか、秋葉原のニセ・ケンペイ隊本部にもどるしかな

い。

とぼとぼとたどる帰り道ははてしなく遠いようにおもわれたが、その途中で、

「アアーツ？」

足がとまったのは、ヤマト・レコードの事務所の出口で不思議な男の顔を見たような気がしたからだ。

「いつか、どこかで、見たことがあるような……そうだ、あの日に」

あの日というのは、藤原資徳がニセ・ケンペイたちに「タクアンの古漬」とからかわれ、それにたいして資徳が「マロはスケノリじや」と古式ゆかしく切り返してケンペイたちを仰天させた、あの運命の日だ。

あの日、カフェー黒竜江を出るときケンニは、むこうからはしつてくる男と正面衝突しそうになって、

「なんだ、気をつけるいッ。原っぱをのんびりあるいているのとは、わけがちがうんだからなッ」

啖呵をきって、それはそれなりでおわったのだが、今日ヤマト・レコードの出口でゆきちがったのは、どうもあのとときの男ではなからうか？

- 116 -

法皇雅仁の家来——らしい——藤原資徳といい、おれにぶつつかりそうになった男といい、そして、ええいッ、いってしまおう、あの愛らしくも憎らしいミヨコさんといい、どうもあのカフェー黒竜江は不審きわまりない雰囲気をかもしだしているではないか？

重大なる陰謀の巢窟！

酒色の隠れ蓑を着た反ゲンブの秘密結社！

「よし、こうなったら！」

ケンニは足をはやめてケンペイ隊にもどり、

「隊長、黒竜江の秘密搜索を提案いたします！」

「黒竜江……遠すぎるよ、予算もない。大陸派遣の関東軍にまかせておけ」

「ちかいですよ、浅草ですから」

「浅草……ああ、カフェー黒竜江が。あれが、いったい、どうした？」  
ケンニがコレコレシカジカと説明する。

説明に真実性を付与しようとして、クサカベミヨロに思いをかけ、相手にされなかった一件まで、恥をしのんでうちあげた。

「ミヨロがおまえを、振った？」

「はあ、もうしわけありません！」

「ということは、おまえは、あのミヨロに惚れていた……？」

ケンニがうなづく間もあらばこそ、ガッターンとケンゴ隊長になぐられた。

「ばかモン、ものごとには順序というものがあるぞ」

「ということは、隊長もミヨロさんに？」

「ウルセエー、もう済んだことだ」

ケンゴの目にも辛く悲しい色がうかんだようにみえたが、それを確認するひまもなく、

「出勤せよ、目標は浅草のカフェー黒竜江！」

( 13 )

夜の十二時すぎ、黒竜江がカンバンになるのを計算して表と裏から包囲する五人のニセ・ケンペイたち。

ああ、カフェー黒竜江の運命は風前のともしび！

行け——ケンゴの目の合図でケンサンがいきなりドアを蹴りあげた。

「みんな、うごくな！」

「ホホ、ケンペイさんたちよ、今夜はもう店じまいだよ」

藤原資徳は女給の膝にのっかって、ほろ酔いの上機嫌。

ケンゴも負けずに、

「藤原資徳ッ、法皇雅仁と手を組んでの陰謀のかずかず、すべてはお見通しだ！」

十手と捕縄のほうがふさわしいせりふだが、そこは昭和のニセ・ケンペイ隊長ケンゴ、小型高性能ピストルをかまえる。

「こわい、こわい。さあ、ねえちゃん、まるとともに隠れましょう」

女給の手をとって資徳は、カウンターの奥に身をかくす。

「にげるなツ、藤原資徳！」

「ハッハッハッハー、君子はケンペイには近寄らず、さ。おおーい、代わってくれい！」

資徳の声で姿をあらわしたのが、なんとこれは登利丸だ。

ヒヨイ、ヒヨイツとふざけた調子で出てきたかとおもつと、

サアサ まわしてみるかね 人形まわし

唄ってみるかね 京の今様

とどかばとどけ 空の上なる観音浄土

もぐらばもぐれ 大地の下なる地獄の底に

胸からつるした仕掛けの舞台で、くるりくるりと人形をまわしてみせる。

「そんな子供だましに、いやしくもケンペイともあろうものが、だまされるものか！」

さすがにケンゴ隊長、ピストルは野蛮乱暴だと自制したものが、腰のサーベルを引っっこぬいて登利丸に切りかかる。

バズーン！

火をふいたのは登利丸の胸につるした仕掛けの舞台である。舞台の下にかくしたピストルが発射されたのだ。

ケンゴの足元で、ダダターンと連続音がして、床に穴があいた。

登利丸のピストルの腕前、たいしたもの。

「ケンゴ隊長！」

「お怪我は！」

アツケにとられたケンゴ、サーベルを鞘におさめるひまもなく、

「に、に、にげる。おい、にげるんだ」

ケンゴの背中にぶつつけて、藤原資徳の坎だかいせりふ。

「少々お待ち、ケンペイのものども。いかにも藤原資徳、法皇雅仁さまのおそばにおつかえしてはいるが、ケンペイなどに干渉される

身分ではないのじゃ。なんとなればじゃ、よいかな、きけよ、ケンペイはケンブに關係ある者にたいしてのみ手を出すことがゆるされるはず。そしてこの藤原資徳、ケンブなどには無縁である。よつてケンペイの掣肘（せいちゆう）はうけぬ、わかつたであらうな！」  
女給の肩をだきながら颯爽（さつそう）といひはなつ、その権威の姿にケンゴは圧倒されてしまふ。

そこへまた、資徳の追い打ち。

「まろはスケノリじゃ。そちはケンペイの隊長であるな。では、位（くらい）は、なにほどじゃ、もうすがよい」

「おれの位をたずねて、どうする？」

「位があるなら、その位に相当の扱いをうける権利がある。この夜のケンゴ隊長の行動についてまろは千代田（ちよだ）のお城に報告しなければならぬが、なに、心配はいらぬ、位があるなら、さほど重い罪にはなるまいからの。まろも口添（くきぞ）えして進ぜようぞ」

千代田のお城——それは宮城、皇居ともいう。

ケンゴの身体に、ケンゴ自身には感じられない震えがきた。資徳の真にせまつた恐喝（おどくわく）に圧倒され、自分がまるで本物のケンペイであるかのような錯覚（さくかく）におちいつてしまったのだらう。

「千代田のお城……アアツ、資徳さま、どうか、それだけは」

「隊長ツ、千代田のお城といひますのは？」

「ばかモン、宮城であるぞ……おそれおおくも、かしくこも」

「あつ、はい、わかりましたツ」

ケンゴもだめな男ではないが、この場はどうにもならない。

登利丸のピストルで先手を打たれ、そこへ資徳の、千代田の城の権威を笠（かさ）にきた脅（おそ）しにあつては、ただもう、一刻もはやいこの場からの脱出（だつしゅつ）をはかるしかない。

復讐（ふしゅう）は、そうだ、復讐（ふしゅう）は、その後でかんがえればいい。

ケンゴをしんがり（しんがり）に、五人のケンペイはじりじりと後退（ごたい）してカフエー黒竜江（くろりゅうが）のドアの外に消えた。

「アアア、東京の浅草（あさくさ）、なんて騒（さわ）がしいんでしょう。ここで今様の

歌をひろめるなんて、藤原さま、わたくしの思っていたよりもはるかに困難なことももしれませぬ」

「まあ、あせってはならぬよ」

資徳の相手になっていた女給の、白粉の下の顔をよくみれば――  
サワだ。

( 第5章・終 )



(51)

サワを先頭に、威勢のいい今様唄いの女たちが昭和の東京に進出してきた。人形まわしの登利丸や藤原資徳、あたらしい仲間の獅子丸もいっしょだ。

東国に今様の歌をひろめる。

みだれ、つかれている人心を今様歌のちからによって正しくしなければならぬ——法皇雅仁の高邁なる政策はいまや浅草のカフェー黒竜江で堅実な第一歩をしるした。

クサカベミヨコがヤマト・レコードの専属歌手になったのには資徳も失望したが、そこでとっさに、サワを女給として黒竜江に売りこむ作戦をたてた。

黒竜江のマナージャーはナンバーワン女給のミヨコにげられて弱っているはず、声がよくて姿もいいサワの出現には渡りに船と乗ってくるにちがいない。

だが、もマナージャーは即座には首を縦にふらない。

「きみは、おれのことをサワのヒモだと思っているね」

「ありていにいえば……」

マネがうたがうのも無理はない。

ナンバーワンのミヨコがレコード会社にひきぬかれ、それでも毎日のようにやってきてくれる資徳は客としては上等だが、それだけに、「どうだね、この娘は、いい声してるだろう?」とはなしをもちかけてきたのが、おかしい。

毎日のようにやってきてカネをつかってくれるのも、ヒモとして女の働き場所を物色しているのではないか、こつ勤めるのが普通だ。

「なんですか、ヒモというのは、?」

「ヒモとは、つまり……」

登利丸に説明してやる。

「はなしがややこしくなりそうですな。どうです、いつそのこと、あの店を買収なさっては、いかが？」

「買収はたやすいが、それでは雅仁さまのおかんがえに背くのではないかと、おれは思うのだ」

カネはいくらでもある。法皇雅仁は平安王朝の財政をそっくりにぎっているともいえるわけだから、無尽蔵とはいえないまでも、たっぷりある。

だからといって、いまここでカフェー黒竜江を買収するのは賢明とはいえない。

いつだったか資徳は、法皇雅仁がいうのを耳にしたことがある。

「カネで人心をやわからにできるものなら、とつくに自分でやっている。それができないと知っているから、今様の歌でやる、歌のちからで」

カフェー黒竜江の買収、それはカネで人心をやわからにする政治ではないか？

「なるほど、雅仁さまのおっしゃるとおりですな。カネにものをいわせるのは良くない、わかりますよ」

というわけだから、資徳は頭をかかえて、難題と格闘の毎日。

資徳の格闘をみている登利丸に、不安はない。大仕事がはじまったのだ、ヒモといわれるぐらいで不安になっていられるものかと、はりきっている。

あの、ひとの良さそうなマネージャーを、さて、どうやって説得するか、資徳と登利丸の目下の課題が、これ。

「資徳さま！」

「なんだッ、名案ができたか？」

「これなら、まちがいなし！」

資徳は半信半疑だが、登利丸はかまわず、

「あのデンチクをぬすんでしまえば、いいんですよ！」

「ぬすむ……デンチクを……？」

かんがえてみれば、なるほど名案にちがいない。

今夜にでも店にしのびこんで、デンチクをぬすむ。

デンチクが売り物みたいなカフェーだから、明日からたちまち弱ってしまふ。

そこに付けこんで、サワを売り込む。

「サワさんの声と姿の良さには、あいつも感心しているのですから

」

「名案ではあるが、ねー」

ぬすむ、とういうところに資徳はひっかかる。ぬすみとうそとは人心荒廃のきわみではないか？

資徳の苦悩の様子をみすかして、登利丸が説得にかかる。

「わたくしどもがぬすむのですから、よろしいではございませんか。わたくしどもは東国の人間ではない、心が荒れているわけでもない。デンチクがほしくてぬすむのはよろしくありませんが、今様をひるめるための、いわば方便ですよ」

「方便、かね」

資徳は納得できないようだが、登利丸がつよくいうのにおされて、結局は賛成する。

デンチクぬすみだしは登利丸が簡単にやってのけて、音羽の家に  
はこんだ。

カフェー黒竜江にのりこむ。

「サワの件だが、かんがえなおしてくれないかね。おれたちはヒモなんかじゃないんだよ。サワの親御おやじさんに、ちよつとばかり義理があつてね、おかえしに、この黒竜江みたいな上品な店で稼がせてやりたい、そういうだけのことさ」

「ええ、それはまあ……」

昨日とは打ってかわるマネージャーの低姿勢に、はじめて気がついた、という顔で、

「おや、デンチクがないね。黒竜江は景気がいいとみえて、国産のデンチクから舶来の新品デンチクにきりかえるというわけだ！」

「とんでもない、藤原さん！」

目のまえにいる資徳と登利丸がデンチクをぬすんだとは露知らぬマネージャー、おもわず泣きがおになり、その虚をつかれて、サワと高給で契約させられる羽目になった。

(02)

サワの歌と姿はカフェー黒竜江に繁盛をよびこんだ。

デンチクがわりというのが契約の基本だから、ビールやキュラソーや塩味ピーナッツを給仕するあいだにサワは流行歌を唄う。

これが資徳と登利丸、マネージャーの予想をこえる出来ばえなのである。

ときにはお客の膝のうえに乗って、いわゆるオルガン・サーピスもやらないわけではない。

これが色っぽくて、上品で、

「アア、とてもこの世にいるとはおもえないよ、サワちゃん」

「あら。お世辞がお上手だわ。ここがこの世でなければ、どこなんでしょう？」

「きまったらア、観音さまのはらのつえさ」

「観音さまがお好きなのね。それなら、観音さまの子守歌を唄ってあげましょう」

いいぞオ、観音さまア、おサワさまア、の歓声と拍手のなかにサワはすつくと立ち、

今宵出船か お名残おしや

くらい波間に 雪が散る

勝田香月作曲、杉山はせを作詞の「出船」のビクター盤は藤原義江がふきこんだ。

ビクターの藤原義江にくらべると、サワの唄いかたはずーっとやさしい。

藤原の唄いかたは、聴いているものの細胞の一個々々を確実に刺激する。

サワのは、湯気みたいにあつたかくて、やさしい。

カフエー黒竜江の常連にとって、「われらがテナー」の代名詞つきの藤原義江は大スター、雲のうえの存在だが、サワはひとなつこくて、店の客の目の前で唄ってくれる。

腰のあたりを、ちよいとさわるぐらいなら、

「あーら。そういうこと、お店ではいけないのよ」

色っぽい目でしかりつけ、それがまた、なんともいえず、うれしい。

さて、サワの人氣がたかくなったのを見計らい、資徳は二の手を打つ。

カフエー黒竜江の呑み代は高くはないが、そこは東京の浅草、安い呑み代もはらえない男が店のまえをうるうるしている。

藤原資徳の二の手とは、一晩に二回か三回、サワが黒竜江の店のまえに立って唄う、これを聴くだけならタダでかまわない。

資徳からいうと角がたつから、サワの自主的な提案ということにしてマネージャーにいうと、警察がうるさいとか地まわりが厄介な文句をつけてくるとか、はじめはしぶっていたものの、評判になるのがわかっていいるから最後までは抵抗できない。

「やって、みましようか」

あんまり嬉しくもないが、といった顔で承知した。

そのくせ、

「看板、出しましょうか、黒竜江の歌姫サワの街頭無料奉仕絶唱、なんて、バーンと書いてー！」

乗り気になっている。

サワのほうは、

「あーら、わたしが唄えば、看板なんか出さなくてもお客はあつまってくるわ」

女給としての自信より、今様唄いとして京の街できたえた身体の自信サワの記憶にのこっている。

(03)

明日からサワが店のまえで唄うという夜、資徳は相良俊輔こと、いまは今様唄いの仲間の獅子丸をよんで、

「いよいよ獅子丸の出演」

サワは一晩に十曲ほどの歌を唄うが、そのなかに平安時代の今様歌を昭和のセンスとスタイルにあらためた昭和今様歌をませる。

昭和の流行歌を昭和の今様としてみとめるに異議はないが、資徳が検討したところでは、

「雅仁さまのおかんがえになるような、つまり、人心を正しくするには、どうもこれはと頭をかしげるような歌がすくなくないと、わたしは思う。そこで……」

平安時代の今様歌のなかから、資徳や獅子丸がこれならと評価するのをえらび、昭和の人間に歓迎される言葉になおし、いまふうの節をつけてサワに唄わせる。

- 1 2 6 -

計画のあらましをきいた獅子丸、

「なんと、それは……」

ふかいためいき。

唄いものの仲間になったときから予想してはいたが、さあいよいよといわれると、ためいきの百回や千回ではおいつかない、重い役目を痛感する。

獅子丸自身が今様歌をほとんど知らないのだから、資徳や登利丸がおぼえている今様をあれこれと唄い、それを聴いた獅子丸の判断で昭和の時代に合いそうな歌をえらび、昭和風の節をつけて、それをサワたちにおしえこむという順序だから、大変だ。

「獅子丸よ、大変なことはわかっておるが、おまえにしかできぬこと。とりあえず、明日のための一曲を……」

資徳がしめしたのが、

盃と 鵜(う)の食う魚(い)を(と) 女子(おんな)は

法なきものぞ

いざ ふたり 寝ん

「どうだね、獅子丸よ！」

資徳は得意気である。

資徳の得意気な表情にかくれるようにして、登利丸がいう。

「法なきものよ、ということ、よろしいのでしょうか。雅仁さま

こそ法そのものではないかとおもわれるのですが？」

「法は法さ、今様は法ではない。雅仁さまが今様に血道をあげるようになられたのも、まさにこの点にある。今様は歌なのだ、断じて

法ではない！」

「こそとばかり、資徳は力説する。

「登利丸のいうとおり、まことに雅仁さまこそ法そのものでいらっしやる。だが、そんなことではすこしも楽しくないのだな。法がイヤなものだということは、ほかならぬ雅仁さまがよくご存じでいらつしやる。だからこそ今様なのじゃ、歌なのじゃ、唄わなくてはならんのだ！」

つよくい、しずかな声で唄ってみせた。

盃と 鵜の食う魚と 女子は

法なきものぞ

いざ ふたり 寝ん

じょうずには唄えない。

それは資徳自身にもよくわかつているようだが、味わいのようなものはある。今様にかける雅仁さまの熱情の中身はだれよりもふかく理解している、その自信にあふれて唄った。

「これを昭和風につくりなおしてほしいのだ。おまえのほかにはだれにも出来ぬという、その意味は、あえていわずとも、わかるはず」

「やりましたよー！」

唇をひきしめて獅子丸はひきつけ、気がちるから灯を暗くしてほ

しいといった。

資徳と登利丸は灯を暗くして、しずかに去り、獅子丸がひとり、紙と筆をまえにして沈思の時に没入していった。

両手を膝にのせ、身体をやや前かがみにしているのは和琴を弾く姿勢のつもりである。和琴を弾くイメージのなかに自分をおいて、曲想をねっている。

目をつぶってまぼろしの和琴を弾きながら、ときには、かすかにつぶやく。

これを苦行というのであれば、苦行とはおごそかな感じがするものだ。

おごそかな感じの苦行は夜明けちかくにおわり、サーッと紙に書きつけて筆をなげだすと、横になって軒をかきだしたのはほとんど同時である。

足音をしのばせて資徳がちかづき、

「相良俊輔はなかなかの男ときいてはいたが、

これは、まさに噂にたがわぬ……」

相良俊輔こと獅子丸が書きつけた文句を、資徳は小声で読みあげて登利丸に聴かせる。

ナンノ掟が あるものが

玉の盃 まわせよ まわれ

呑んで吞ませて 吞ませて呑んで

グイツと干そうと舐めようと

ナンノ掟が あるものが

ナンノ掟が あるものが

サバ アジ イワシ イカにクジラに

鵜の目 鷹の目 魚をさがし

焼いて食おうと 食うまいと

ナンノ掟が あるものが

ナンノ掟が あるものが



あなたはあたし　あたしはあなた  
あたしはあたし　あなたはあなた  
だれと寝ようと　寝るまいと

ナンノ掟が　あるものか

(04)

カフェー黒竜江のまえは黒山のひとだけだかり。

ひっきりなしに、「サワ、サワ、サワッ」の歓声があがる。

「コラーッ、どけいッ。おまえひとりの店じゃないぞ！」

「そういうおまえこそ、ひっこめ。おれは夜明けまえから待っているんだ！」

カネをもった客が、ひとだかりをかきわけて店のなかにはいつてゆくこともあるが、とってその客が羨望の視線をあびるわけでもない。

カフェー黒竜江の本舞台が店のなから店のまえの道端にうつつたとおもえばいい。

「カネはらって、うまくもないビールなんか呑まなくっても、ここにいりゃあ、ただでサワちゃんの歌が聴けるんだからな」

「そうだ、そうだ。ブルジョワはつまらないものさ、ときたまもんだ！」

「サワちゃん、ブルジョワの相手なんかいいかげんにして、はやく出てきてくださいよッ」

「まったくだ、まったくだ……ナンノ掟があるものか！」

あとはすぐに　ナンノ掟があるものか、の大合唱へとつづく。

すこしはなれたところに資徳、登利丸、そして獅子丸がいる。

「これで、ほんとうに、よかったのでしょうか？」

獅子丸は、目のまえでおこっていることが信じられない。

信じられないのも無理はない。

京の法住寺殿でサワの声に魂をゆすぶられてからというものの、獅子丸は一切の自信をなくし、ぬげがらになって、ふらふらと今様唄

いの仲間にはいった。

それがいま、昭和の東京の人間が獅子丸のつくった昭和風の今様歌に酔い、サワの登場に歓呼の声をあげている。

「みごとであった」

「いいえ、わたしの曲や言葉のためではありませんまい。藤原さまの選択がよかつたのと、それに、なんととっても、サワさんの声と姿が……」

獅子丸の謙遜とばかりはいえない。

サワの唄う流行歌のすべてが道端の聴衆の拍手喝采でむかえられるのだ。「ナンノ掟があるものか」の人氣が飛び抜けているのはもちろんだが、ほかの歌が見向きもされないわけではない。

「獅子丸、これで満足してはならぬ。これくらいで済むような荒れ方ではないのだ、東京の人心というものは。ほら、あのうしろ姿をみなさい、サワの歌を聴いて楽しむのはほんの一刻、ここから一歩でもはなれば、また、もとの荒れすさんだ心にもどってしまう。」

雅仁さまは、それでは満足なさらぬ

「はあ……」

浅草のそこそこをあるきまわりながら、成功をはなしあつ。

資徳がいちばん興奮しているが、自分でそうとは気づかず、ほかの二人の興奮をはずめるのが自分の義務のように錯覚している。

「かれらはまだ、サワの歌を聴いているだけだ、自分で唄わなければ本物ではない。いやいや、自分の歌を自分で唄うところまで行かなくっては、雅仁さまの賢明かつ勇壮な御計画は成就せぬ」

自分の言葉に酔っている。

「藤原さま……」

登利丸の声には、酔っている資徳をたしなめる調子がある。

「もしもそのようなことになったら、われらは大変です、稼げなくなってしまうのですからな」

釘をさしたつもりで登利丸だったが、それくらいでひるむ資徳でもない。

「おやおや、登利丸という男はたのもしき若者ときいていたが、なにをうるたえていらっしゃる？」

「ははあ……？」

「われらが男であること、つまり、われらには平安時代もあれば昭和時代もあるということ、それをわすれているよ、登利丸は」

「ああ！」

「サワもハナエもヨシエも、彼女たちにはもう、昭和の現代のほかには時代はない。彼女たちは平安時代にはもどらない、平安の今様唄にはもどらない。女は、それでよるしい。過去など、どうであつてもかまわない。男を抱き、男に抱かれ、子を産んで……つぎつぎとあたらしい命をつないでゆく。われら男は、どうもそついうわけにはいかない、昭和になりきれない、東京の人間になりきれない。

京にゆけば源氏だとか平家だとか、つまらぬことに首をつっこむ。時代や場所にとらわれすぎるのだな、男というものは。雅仁さまは、はやくからそのことにお気づきなのではなかつかど、わたしはか  
んがえているよ。だからこそ昭和の東京に女と今様歌とをおくりこ  
んで、自分のことは成らずとも、せめて形なりとも永遠の生命につ  
ながりたい、それが雅仁さまのお気持ちではないのかな」

ふだんの資徳はしづかな男である。

めつたなことでは興奮しない。いや、興奮の様子をみせることがない。法皇雅仁の側近をながくやっていいる経験からくるものだろうが、いまこのときはかりは興奮を隠そうとしない。興奮を意識したうえで、登利丸を圧倒しようとして構えているようである。

「男は、女を通じてしか後世につながらぬ、と？」

「女を通じてというか、女によって、というか……女と、そして歌、そののみ」

登利丸はしばらく頭をたれていたが、

「わたくしなど、後世のことなど、まるでかんがえたことがないの

ですよ」

「登利丸にかぎったことでもあるまい。その日その日を満足しておくっているひとは、後世など、かんがえる必要もない。それはそれでよろしい。その日に満足できぬものが……登利丸には意外だろうが……おおいのじゃ。その日に満足できぬから、後世などというものをかんがえ、のぞみをつなぐ」

「とすると、雅仁さまも、そして資徳さまも……？」

「なさけないことだが、まさに、さよう。雅仁さまなど立場が立場だけに、余計に後世を思うところがお強いにちがいあるまいよ」

「さようですか。いや、それでは、サワもハナエもヨシエも、この昭和の東京でおおいにはりきってもらわなくてはならないわけですね」

「サワにもハナエにヨシエにもも、そして登利丸にも獅子丸にも、おおいにやつてもらいたい」

(05)

旅役者の娘のサナエは池袋の活動小屋に雇われた。

じつは、この活動小屋のヤスエという娘も、声のいいのを資徳にみこまれ、さらわれて京につれてゆかれて今様歌を稽古、声をみがいて東京に潜入してきた。

サナエが職業幹旋所の紹介状をもってはじめてたずねてきたとき、

「まあッ、ヤスエがかえってきた！」

これはもちろん、ひとちがい。

さらわれたヤスエと年恰好がおなじだから、活動小屋の妻が勘違いしたのも無理はないのである。

「ねエ、おまえさん、あたしにゃ、この子が他人だとはおもえないんだよ」

親父としても内心は、行方不明の娘のヤスエのかわりがサナエが神様から派遣されてきた、といったふうにおもいたいわけなのである。

サナエはさつそく活動小屋にやとわれ、切符売りや掃除のあいまに、「オセンにキャラメル、アンパンにラムネはいかがですか」と駄菓子を売りあるく。

サナエが雇われた活動小屋がじつはヤスエの親の家だった——まったくの偶然で、資徳が指示したわけではない。

そうと知った資徳は肝をひやしたが、サナエが気づいた様子はない。

はじめての休日、音羽の家にやってきたサナエは、

「あの活動小屋には、あたしとおなじ年頃の娘さんがいたのに、だれかにさらわれて、いまだにかえってこないんだそうですよ。それだものだから、オジさんもオカミさんも、あたしのことをまるで自分の娘のように可愛がってくれるんですよ！」

息をはずませて報告した。

「それなら、ごくろつなことだが、あの家の娘になったつもりで、しつかりやってくれよ」

「はいッ、それは、もう！」

サナエは「オセンにキャラメル」のほかに、もちろん歌を唄う。歌を唄う合間に「おセンにキャラメル」をやる、というほうがわかりやすいか。

センベイもキャラメルも売れないから手持ち無沙汰で仕方がない、とでもいった、なげやりの風情で、

たとえ火の雨 槍の雨

月が四角に 照ったとて

好いて好かれて 紅紐の

赤坂小梅の「ほんとにそうなら」を唄ってみた。

鼻唄の調子でやったのだが、ガヤガヤとやかましい客席が一瞬、オヤァッ？ というおどろきにつつまれた。

そうと見てとったサナエは、客の視線が自分にあつまったのも知らぬげに、

解けぬ二人は 縁結び

ほんとにそうなら うれしいね

「おい、ねえちゃん、歌がうまいねー。小梅にそっくりだよ」

「ほめてくれるんなら、おじさん、キャラメル買ってよ！」

「おおツ、歌もうまいが商売も上手だ。降参々々」

なんどかやるうちに、

「おい、みんなア、活動もいいが、このねえちゃんの歌もわるくないよ。まず一曲うたってもらって、それから活動っていうことにしちゃあ、どうだい？」

「異議なし、唄ってくれよ！」

休憩時間が一曲分だけのびたのをチャンスに、サナエは獅子丸が作詞編曲した「ナンノ掟があるものか」の池袋初公開をこころみ、大成功。

客のなかには、カフェー黒竜江の店のまえでサワが唄ったのを聴いたものもいて、

——ふーん、これが新しい流行歌らしいな。

自分で納得して、工事現場で唄うやら、東武鉄道沿線の家にかえって唄うやら、いつのまにか「ナンノ掟があるものか」はジワジワと最新流行歌の地位にのぼりつつある。

(06)

発足もないヤマト・レコードの幹部のあいだに、はやくも分裂の危機。

出資者、相談役、音盤(おんばん)部顧問の三役をかねる山階逸男が、

「時代と場所の相違をこえて、およそ掟は存在しなくてはならず、したがってまた掟は絶対に厳守されなくてはならぬ。昭和の東京において、しかり！」

編成会議で断をくださったのがきつかけだ。

逸男が「掟はまもられなくてはならぬ！」と決断するにいたった

経過は、つぎのとおりである。

まず、その日の編成会議の議題は「ナンノ掟があるものか」をめぐるものだった。

だれが唄うとも、だれが作詞作曲したともわからぬままに全東京市中はおろか、衣川における弁慶の身体につきささった無数の矢のごとくに東京に集中する私鉄沿線の駅と宿場に「ナンノ掟があるものか」の歌はひろまっていた。

「これこそ、わがヤマト・レコードが製作して売りだすべき傑作である！」

まず梅田重役が提案した。

そもそもが穩健な性格の梅田である、企画や営業戦略の検討では林重役におくれをとるが、このときばかりはふだんと変わって血相かえて、おれの意見に反対はゆるさぬと、はりきって提案したのだ。

「歌手はもちろんクサカベミヨコ！」

「つまり、「ナンノ掟があるものか」をクサカベミヨコの歌で吹き込む……なるほど」

機先を制せられた林は、とっさの反撃ができないまま、梅田の提案に賛成せざるをえない立場においこまれそうになった。

なんとかして反撃しないことには梅田重役との勢力関係が逆転してしまう、どこかに隙はないものかと頭をひねっていると、

「いいですなア、梅田さん。それは素晴らしい、売れますよ、これは！」

発言したのは四方修二だから、ほかの重役連中がおどろいた。

編成会議に技術担当部長の修二が出る必要はないのだが、いちおう部長であるからには出席はする、しかし発言しないのが暗黙のきまりだ。当人もまわりも、そういうものだとおもいこんでいる。

その四方修二が「売れますよ、これは！」と、まるで熱にうかされた子供みたいに真剣な表情でさげんだものだから、林重役が梅田重役に反撃するチャンスは遠のく。

ヤマト・レコードのラベルを張った「ナンノ掟があるものか」が

売れに売れ、重役ははじめ社員一同にはボーナスがたつぷり、クサカへミヨコの名はタコタコあがれ、天まであがれと夢がはてしなくふくれていると、

「掟はなくてはならぬ、掟は遵守（じゅんしゆ）（じゅんしゆ）されねばならん！」  
山階逸男相談役の発言が爆裂弾レベルの重量でひびいた。

（07）

「しかし、ねえ、山階さん……」

修二からみれば逸男はまだ青二才だから、

「掟がなくてはならぬ、なんていつても、たかが流行歌、レコードなんですよ」

たしなめたつもりが、

「なにをいうかつ、わたしは相談役として四方技術部長に警告を發するものである。レコード会社の重役として、たかがレコード、たかが流行歌などといった認識を表明するのはまことに不穩当。以後、嚴重に注意されたい！」

名指しされた修二はもちろんだが、梅田も、梅田提案に不服の林でさえ、逸男の爆彈宣言には呆氣にとられた。

宣言の内容もおおげさだが、それよりは、宣言する逸男の姿勢のほうがかつと奇妙きてれつな見物だったのである。

修二にむかつて警告したのだから修二の顔を見るのが当然なところ、修二の顔をみるどころか、天井をみあげ、いや天井を突きぬいて天そのものにむかつて警告する、おおげさな姿勢だった。

「相談役さま、これは失礼いたしました」

修二は畏れ入ったが、その畏れ入りかたも逸男の姿勢のおかしさに感化されて嚴肅を失い、かたちだけのものになって余計に滑稽な雰囲気だ。

「しかし、ですな……」

林重役が逸男に反撃をこころみたのは、これまた意外の展開である。梅田に反撃する隙をうかがっているうちに山階逸男相談役の爆



弾宣言がでたので、つい相手をとりちがえる結果になったものかもしれない。

「相談役さまに反抗するのは、こころぐるしくはありますが、「ナンノ掟があるものか」「はいまや国民こそって愛唱する、いわば国民歌謡ともうしてよいほどに」

「おだまり！」

林の反論をさえぎって、逸男、

「掟はなくてはならぬもの、守らなくてはならぬもの。それを、なんでしょうか、あの歌は、ナンノ掟があるものか、など、とんでもないことですぞ。そもそも宮廷には楽を演奏する掟と機関と人員配置があり、したがって予算も計上され、楽が正しく演奏されることによつてこそ正しい政治がおこなわれるもの。ところが、あの、けしからぬ法皇雅仁めは……ああ、おゆるしくだされ、雅仁さま……」

逸男は混乱してきた。

編成会議の席上であるのもわずれ、顔はクシヤクシヤ、涙をピシヤピシヤ、クシヤとピシヤの混乱に身をまかせている。

法皇雅仁にたいしてはげしい敵意をいだいているが、法皇という地位の権威についてはいいようのない尊敬の思いをもっている、逸男の混乱はここにあるようだ。憎悪と尊敬の板ばさみ。

「あなたが、あの、けしからぬ今様歌などに血道をあげず、奏樂の伝統の正統を守っていただきさえすれば、おそれおおくもこの山階逸男、わざわざ昭和の東京にまできて、かほどの苦勞をせずにするものを……」

「昭和の東京」といった瞬間、逸男の額にまたまたあらたな当惑のシワの線がきざまれた。

「アッ、わたしはいま、昭和の東京にいる！」

絶叫につづいて、

「諸君、まさしくそれに違いあるまいね？」

消えそうな声で念をおした。

重役一同の沈黙はまず啞然呆然の気分をしめし、つぎには、「さ

よう、相談役さまは昭和の東京にいらっしやいますよ」と、冷酷なる承認のしるしなのであった。

逸男はまたまた混乱のなかに泣かねばならない。

( 07 )

逸男の気持ちはよくわかる。

「昭和の東京」といった、その瞬間、源頼朝に会見して法皇雅仁の追放計画を練るためにはるばる平安時代の京からやってきた自分の目標を思い出したのだ。

「ああ、わたくしは、どうすればいいのだろう!」

悲痛そのもの、絶望そのもののセリフを吐くと、いくらか気分もおさまったらしく、

「泣いてばかりいても仕方はない。さあ、諸君、会議にもどりませう」

「相談役さま、マサヒトさまとおっしゃるのは、どなたのことだ

……?」

「林くん。あなたはまたそれをいって、この山階をこまらせようというんですか!」

「とんでもない。相談役さまは、どうやらそのマサヒトというひとのためにお苦しみになっておられるようだ。であるなら、なんとかしてマサヒトというひとの問題をかたづけ、よってもって相談役さまをお救いする手はないものかと」

「マサヒトなんか……ああ、おゆるしくください法皇さま……放っておけばいいんです。そのお方は遠い平安時代の京都におわしますのですから」

ヤマト・レコード株式会社編成会議のとげとげしい空気は、ハイアンジダイ、この言葉ひとつで、たちまちおだやかになった。

「ええーっと、ナクヨウグイスヘイアンキョウだから、ナクヨでもって七九四年すなわち延暦十三年が平安遷都でしたなア」

「オヤツ、梅田さん、あなたの中学校では西暦で国史をやったんですか？」

「キリスト教系の学校でしたから日本暦と西洋を併用」

「なるほどね、ミッシェンスクールとは、これはまたハイカラ。わたしがハイアンジダイでおもいだすのは歌ですな、小学唱歌」

「小学唱歌、ええ、わたしも、そうなんですよ」

修二の口がかるくなって、回想の仲間入り。

「小学唱歌、いいなア、のんびりと、あつたかくて」

「技術部長さんも、やつぱり」

「ええ、もう、唱歌の時間になると急にはりきつちやって」

「それがいまは、こうやっておたがい、レコード会社にいるわけだ。世のなか、でたらのようにみえて、これでなかなか必然的なところがあるんですな」

「小学唱歌、たとえば」

「なんといつても、アレ、アレ」

「アレですよ、アレのほかには、ちょっとかんがえられない」

林がトントンとテーブルをたたいてリズムをとって、

一の谷の　いくさ敗れ

「ふふふ、やつぱり、ソレソレ」と梅田。

「ソレですよ、なんてったって」と林。

みんなそろって、はじめから、

一の谷の　いくさ敗れ

討たれし平家の　公達きんたち（きんたち）あわれ

あかつき寒き　須磨のあらしに

きこえしはこれか　青葉の笛

「ああ、いいなア！」

「二番、いきましよう！」

更ふ（ふ）くる夜半よわに　門たを敲たた（たた）き

わが師に託せし　言ことの葉あわれ

いまわの際えびらまで　もちし籠えびら（えびら）に

のこれるは「花や今宵」の歌

おわりの「花や今宵の歌」の「歌」は「ウター」と伸びなくてはいけない。

逸男のほかの重役連中、いつのまにか椅子からたちあがり、「ウター」と伸びる自分の声の行方を、目をほそめて追っている。その視線の先には、少年のころの自分の姿がピチピチとびはねている。

大和田建樹作詞、田村虎蔵作曲の「青葉の笛」が発表されたのは明治三十九年、日露戦争が終ったつぎの年。

仲間はずれの逸男、しきりに首をひねっていたが、思い詰めた様子で、

「あー、林さん」

地位や身分の高さを自覚しているはずのひとが態度を急変して控えめになったとき、その原因のほとんどは、無知が暴露される危機にそなえての本能的な防禦か、下痢か、ふたつにひとつである。

「おお、相談役さま、これは失礼しました。あまりのなつかしさに、つい……」

「いや、それはそれとして、その、いまの歌は……？」

「ああ、これは「青葉の笛」ですよ。相談役さんは唱歌がお得意ではなかったように拝察されますな。この名曲をご存じないとは」

「ええ、まあ。それが、ですね。いまの歌によりますと、「討たれし平家の公達あわれ」という文句がありましたか……」

まっぴりした、とばかりに林、

討たれし平家の 公達あわれ

あかつき寒き 須磨のあらしに

「いやいや、その「討たれし平家の公達あわれ」によると、あれですか、平家が源氏に敗れたように聞こえるのですが……？」

「あれ工？ ますますおどろきましたな。相談役さまは唱歌のほかにも国史も苦手であられたようですね。いやいや、格別の人間という

のが、つまりそれでありましょう。わたしなどは国史は年代を記憶するのがいやだなどと、くだらん文句ばかりいってたものですが、いまになってみると、国史でおぼえたことはわすれていない、なつかしい。これはつまりですな、平々凡々たる人間の証拠なのですよ」「すると、平家はやぶれた？」

「完敗ですな。鴨越にはじまって、一の谷から讃岐屋島、それから長門の壇の浦へと、あわれ平家は敗走の一途をたどったのですよ、ねえ、梅田さん」

「泣けますなア、薩摩守忠度ただのり（ただのり）の最期！」

修二も口をはさみ、

「和歌は苦手なんですが、どういうものか、忠度の歌だけはわすれない」

行き暮れて 木の下かけを宿とせば

花や今宵の あるじならましー

目をつぶり、瞑想にふける修二。

「タダノリ、あのサツマノカミタダノリが戦死、それは、たしかですな？」

「この目で見たわけじゃないが、たしかなんでしょうなア。『平家物語』にもそう書いてあるし、わたくし自身、中学校の修学旅行で関西に行ったときには費用別途自弁ではるばる一の谷や鴨越、須磨に足をのびし、忠度塚というのにおまいりしたことがあるくらいだから……」

「忠度塚ですか。なるほど、それならまさしく平家はやぶれたのですな。いや、どうも、歴史には暗いものだから」

逸男は、なんとかこの場をこまかさなくてはならない。

平家がやぶれたというからには源氏に負けたのだろうが、とすると、勝った源氏は、どうなったのか？

頼朝はどうなったのか？

頼朝をそのかして平家打倒に決起させ、平家打倒によって法皇

雅仁の背後勢力の無力化をはかろうという崇高なる自分の目標は、  
いったい、どうなるのか？

まさか、この場では、そんなことはきけやしない。きけば、わが  
身の正体がばれてしまう。

と行って、いつまでも「歴史には暗いから」ばかりいつていると  
バケの皮がはがれてしまうから、このあたりで一発、バーンとした  
ところを言って劣勢を挽回しておかなくてはならない。

と行って、なにがいいか？

よし、これだ！

「平家もみじかい命でしたが、勝った源氏もながいとはいえませ  
んでしたな」

「まったく。平家も源氏もない、おこれるものはひさしからず、た  
だ春の夜の夢のごとし、ですよ」

よしよし、こまではいい。

「復讐、これが歴史の掟だからね」と逸男が念を押す。

「復讐……あれえッ、えーと、梅田さん、源氏をやぶったのは平家  
でしたかね？」

「さアてと、どうだったのかなア。源氏は負けたんですか？ いつ？

だれに？……おぼえていないんだが。四方さん、どうだったんで  
すかねエ」

「いや、わたしも鎌倉時代のおわりのほうになると、もう、さっば  
り」

なーんだ、これなら安心だ。ヤマト・レコードの重役連中の歴史  
知識もたいしたことはないわけだ。

急に勇気が出てきて、

「諸君、掟だ。掟は守られなくてはならない、そういうことを議論  
していたのですぞ、われわれは」

その逸男にたいして、修二は対等の論議をいどむ。

みんなで「青葉の笛」を唄ったあたりから、修二の態度が強硬に  
なってきた。

「相談役さん、ここはレコード会社なのですからな、掟を守るとか  
なんとか、むずかしいことに頭をつっこむのはやめようじゃありま  
せんか」

「そういえば、そうですね。掟を守るよりはレコードをつくるほう  
が簡単だから、まずはレコードづくり集中しましょうや」  
林重役も修二の味方にまわって、逸男と対立する形勢になってき  
た。

(09)

逸男は苦境に立つ。

わたしの見解どおりにならないなら資本をひきあげるぞと、脅し  
をかける手がないわけではないが、そうすると、逸男自身の壮大な  
計画が挫折してしまう。

ヤマト・レコードを手はじめに、日本のレコード業界を一手にお  
さめようというのが逸男の計画だ。レコード業界には平安王朝の楽  
人をこぞってひっぱってきて、いわば時代を越える集団転職を敢行  
する。

平家は源氏にほろぼされた、その源氏もどうやらほろんだらしい  
知って、とっさにうかんだ計画だ。

さまをくらんなさい、雅仁さま！

あなたが、あのくだらぬ今様歌なんかに血道をあげて宮廷奏樂の  
伝統を絶やそうとしても、そうはいかぬぞ。あなたが絶やそうとい  
うなら、そのまえに、楽人すべてを昭和の東京にひっぱってきてし  
まいますからね！

平安王朝の楽人によって占拠される昭和のレコード業界では、な  
によりも掟が厳守されねばならない。なぜなら、楽人たちは、掟の  
守られる聖なる場をもとめて時代超越の転職を決行するのだから。

それが、なんだ、ナンノ掟があるものか、とは！

「ゆるせぬ！」

おもわず逸男がさげんだとき、

あたしはあたし あなたはあなた

だれと寝ようと 寝るまいと

ナンノ掟があるものか

鼻唄のリズムから先に、クサカベミヨコが颯爽とはいってきた。

四季を超越、無視しきった勇敢きわまる服装のミヨコである。

黒貂の毛皮のコート、それもおもいつきり分厚く、たっぷりしたサイズのやつを着込んだその下には、これもまたおもいつきり薄くみじかいワンピース、腰のベルトがなければ何も着ていないみたいだ。

「おお、クサカベミヨコさん！」

「ご機嫌よろしゅう」

「どうか、どうか、コートはそのままに」

宝の山の女神のミヨコである、重役連中が総出の応対。

ただひとり、山階逸男だけは苦虫をかんだような表情。

巨額の資本を投入してヤマト・レコードの相談役におさまった逸男といえども、ミヨコの価値にはかなわない。そのミヨコが「ナンノ掟があるものか」を機嫌よく唄いながら登場してきても、とがめることができない。

苦虫顔の奥の逸男の怒りを察したのか、ミヨコは、

「ねーえ、相談役さま。あたし、待てない！」

黒貂コートの前を、あけてはしめ、しめてはあけ、ふいこで風をおくるようにしながらミヨコがちかづくので、逸男はミヨコの香水にむせかえる。

「ウフェツ、クシユン、ハツクシヨイ！」

いずれは、この件についても掟を確立しなければならぬ——香水にむせかえりつつも逸男は、みずからの任務のことをわすれるものではない。

昭和の女の香水といったら、ただただもう「香れよ香れ、天まで香れ」といったようなもので、フクイクなんていう微妙な表現には耐えられないものだ。



「ミヨコさん、何を待てない、とっ」

「アッリア、やーだ。相談役さまなら、とっくにおわかりのはずよ」

「おわかりのはず、といつても……クシユン、ハアー、ハクシユン！」

「やーだなア、きまっているでしょ。「ナンノ掟があるものか」のことよ。はやく吹き込まないと、よその会社に取りられてしまうのよ」

「ッ  
ああ、逸男がもつともおそれていた事態になった。

梅田であれ林であれ、四方修二であれ、逸男にとってヤマト・レコードの重役連中などはおそろしくもなんともない。

逸男がおそろしいのはクサカベミヨコなのだ、なぜなら逸男はミヨコに惚れてしまっている。

ミヨコが「ナンノ掟があるものか」のことをいいたさないうちに、この問題に徹底的にかたをつけてしまおうと逸男は決心していた。

競争相手のレコード会社に「ナンノ掟があるものか」を取られても仕方はないとさえ、おもっていた。

「ミヨコはミヨコで、いらいらしている。」

ヤマト・レコードが自分の歌で「ナンノ掟があるものか」を製作販売すれば売れるにきまっている。

そうなれば、相談役の逸男の手柄は一段とたかくなる。それがミヨコにはうれしいのだ。なぜなら、ミヨコも逸男に惚れている。

恋人たちの気苦労も知らずに、

「キヤーツ、ばんざーい！」

梅田重役が女みたいな声でさげんだ。

「ミヨコさん、ミヨコさん、さすがはミヨコさんだ。そうですとも一日もはやく「ナンノ掟があるものか」を製作しないことには、わがヤマト・レコードは他社に完敗だ。そうですよっ、相談役さま……」

山階逸男は、またまた苦境に立つ。

思想を立てればオトコが立たない、オトコを立てれば思想が立たない。

(51)

資徳の放った第一弾は的中した。

「ナンノ掟があるものか」は「雨後のタケノコ」のことわざの見本みたいに、東京はおろか、日本全国津々浦々でうたわれている。

老若男女、身分とカネとヒマのあるなしにかかわらず、ナンノ掟があるものか、と唄いまくっている。

だが、いつごろから唄いはじめたのか、知っているのは今様唄いの仲間だけだ。

それで、いい。

もしもサワが名誉心なんかにこだわって、「ナンノ掟があるものか」を最初に唄ったのは、このあたしなんだよ」なんていいだすと困ったことになるが、サワにはもともと名誉心なんかなく、心配はいらない。

- 146 -

「おどろいた。だって、あたしよりもじょうずに唄うひとがいるんだもの！」

音羽の家で、ハナエがいささか意気消沈といったふうではなすのをきいた資徳、

「ハナエよ、それでいいのさ。この歌にこめられている意味をほんとうにわかるのは、掟にしばらく苦勞しているひとだからね。そういうひとのほつがじょうずに唄うのは、あたりまえのこと」

「でも、藤原さま。あたし、くやしくなって……」

「ハナエがじょうずに唄ったから、これほどまでに流行するようになった。それをわすれるわたしではない」

「ほんとうに？」

「そうさ。わたくしは、よるこんでいるんだよ」

京の雅仁さまもちろんおよろこびになっておられる、そついお

うとして、やめた。

ハナエは法皇雅仁にお目にかかったことがあるのだが、いまはもうわすれている。

ハナエだけではない、彼女たちはだれもみな京のことはわすれている。法皇雅仁の名をきいて、それはだれのことですかと、関心を京に向けることもない。

蕎麦屋の出前持ちが店のおやじに叱られ、ナンノ掟があるものか、とやりかえし、かえってひどく叱られた。そのあとでおやじ自身がナンノ掟があるものか、と唄ったものだから、その場のしめしがつかなくなった、東京はそれほどまでにこの歌でわきかえっている、そういう新聞記事が出た。

タエコはその蕎麦屋に住み込みではたらいっている。

出前持ちとおやじの言い合いを耳にしたタエコがこっそりと報告してきたので、これは見ておかねばと資徳が客に化けて蕎麦屋の暖簾をぐくった。

注文をききに来たタエコが、あの小僧さんですよと目で合図する。

「四丁目の高橋さん、行ってきまーす」

岡持さげて出てゆきがけに、

ナンノ掟があるものが

アジサバイワシ イカにクジラに

気持ちよさそうな鼻唄。

資徳は京の法皇に以上の様子を知らせた。東京の人間はよるこんで唄ってくれておりますが、グンプは怒りをあらたにしているようですと書いた。

法皇雅仁から返書がきた。

「自分もうれしく思っている。グンプが機嫌をそこねているのは当然。人心がやわらかになればうれしいのがわれわれ、世が抑圧されればうれしいのがグンプ、人心と世の相違をわすれないようにしてほしー」

「法皇さまはつまり、世はみだれてもかまわぬ、人心がおさまり、やわらかになつていればよろしいと、こうおっしゃるわけですな」

「そういうことだね。人心がやわらかになつても世がみだれるのを嫌悪するのがゲンブ、というわけだ」

「そこで、ホチョートレッ、になる」

「カシラーツミギツ、さ」

「多々丸にも見せてやりたいものですな。あいつ、いつになつても東京からお呼びがかからぬものだから、さぞ腹を立てていることだろうと……」

それはな、登利丸よ、と説明してやりたいが、資徳にはできない。

栗王丸と多々丸は、いざというときの予備部隊だ。

女たちは昭和の東京に埋没して生きているから問題はないが、男は、そうはいかない。

もしも大事件がおきて昭和の東京から平安時代の京にもどれない事態になれば、今様唄いは全滅してしまう。

その、いざというときのために、栗王丸と多々丸は平安時代のことっている。

「腹を立ててはいるだろうが、栗王丸を見習いながら、つぎのかしらになる修業をするのも大事なこと」

残酷だと資徳は思う。

栗王丸の後継は多々丸と登利丸、ふたりのうちのひとりだと、だれも認めている。ふたりともそう思っていて、どちらが先にかしらになるかは実力と人気できまるものと覚悟している。

だが、裏にまわれれば、そうではない。

登利丸は東京で死ぬかもしれない。たとえ京にもどるときがあつても、そのときにはもう多々丸がかしらになっているだろう。登利丸がかしらになる日は予定されていない。

そういう裏の筋を書いたのは資徳だ。資徳は今様唄いではないにもかかわらず、かれらの外部から人事に介入したわけで、こころぐるしいものがある。

いまの自分の言葉で、登利丸が、裏の筋書きの存在に気づいたか  
もしれない。いまは気づかなくても、そのうちには気づく。

その日のおもえばますます苦しい資徳だが、登利丸よ、ゆる  
してくれ、おまえにもしものことがあっても、おまえたちの仲間  
がいつまでも今様歌を唄って生きられるようにと、かんがえにかん  
がえたすえの決断なのだ。

(02)

「藤原さま、つぎの歌の準備を……」

「わたしも、それをかんがえていたところ」

「ナンノ掟があるものか」につづく第二弾として資徳が選んだ今様  
歌は「あそびをせんとや生まれけむ」だ。

遊びをせんとや 生まれけむ

戯(たわぶ)れせんとや 生まれけむ

遊ぶ子供の 声きけば

わが身さえこそ 動(ゆる)がるれ

獅子丸が声に出して唄ってみた。

わが身さえこそゆるがるれ、の一節をくりかえして唄って、

「こういう歌を聴くと、今様のなんたるかがすこしずつわかってく  
るような気がします」

「そうだろうね。この歌の主題はおとなと子供の境界といったもの  
だろう。すぎさった子供のころの楽しさへの哀惜だが、それだけで  
はないな。おとなと子供の境界を越えて、もどりたい、しかし、も  
どれないとわかつている苦惱、切望がある。そこを「動がるれ」と  
唄っているところがすばらしく、また、せつない」

「藤原さま、これは、「ナンノ掟があるものか」の続編ともかんが  
えられますな、そうではございませんか？」

「おまえもそうおもうのか。じつは、第二弾はこれでゆく、ときめ  
たときにはそのつもりはなかったのだが、きめたあとで、オヤツと  
気づいた」

「おとなと子供の境界、それを掬とみれば……なるほど」

「ああ、獅子丸よ、乙前さまがこの歌をお唄いになるのを聴かせたい！」

「登利丸よ。乙前さまなら、どんなふう？」

「いかん、いかん、おれには真似もできないのだ。乙前さまがな、こつ、おれたちの目をじいーつとご覧になりながら わが身さえこそ動がるれ、とお唄いになると、おれたち子供は訳もなく悲しくなってしまうのだ。いまになって、あれが歌のちからというものとわかってきた」

「訳もなく悲しくなるのか」

「男は唄うのは苦手だが、それでもおれは今様唄いの仲間に生まれできてよかったとおもったものさ。ひとの心をつこかすちから、歌を持っている、こんなに素晴らしいことはないはずだもの」

「うん、それはわかった。もうひとつ、きかせてくれ、 わが身さえこそ動がるれ、を聴くと訳もなく悲しくなるといふ、その訳とは、いったい何だ？」

「何だといわれても……だから、訳もなく、と」

「うんうん、それはわかるんだが、訳のないはずはない、訳はある、かならずある」

「そう責めないでくれ。そうだな、子供にはおとなの哀しみなどわかるわけではないのに、わかった気になってしまふ、その悲しさ、あるいは辛さ、か」

「おとなの哀しみ……なるほど」

我が身さえこそ動がるれ

獅子丸は、前とはすこし違う節で唄って、

「藤原さま、この歌の重点は最後の一行だ、そうかんがえてよろしいのでしょうか？」

「そうじゃろつな。子供の歌ではない、おとなの歌だから」

「おとなが子供のことを唄うのではない、おとなが自分のことを唄う……」

「そうだ。おとなが自分のことを……登利丸はおとなの哀しみとい  
つたが……それを唄うのだよ。たのむぞ、獅子丸」

獅子丸はくちびるを噛みしめる。重い荷を、それと知って背負う  
気分になってきたようだ。

「哀しみを知り、哀しみを唄う、いや、哀しみを唄える人間……そ  
ういうひとの心はやわらかく、正しくおさまっている。そういう人  
間がふえれば世はみだれるが、人心はやわらかくなる。雅仁さまな  
ら、それでこそよらしいとおっしゃるはずだ」

(03)

ポロニーピローン、ポロポロピン——音羽の家からピアノの音が  
きこえてくる。編曲作業には和琴を買えばよかるうと資徳はいつた  
のだが、それは無用と獅子丸はいつた。

「和琴には手もふれたくない。それよりは、なにかあたらしい楽器  
を買っていただきたい」

「なにが、いいか」

「ピアノというのがありますな、あれを、ひとつ」

「和琴の名人がピアノをやるか、おもしろい！」

和琴がピアノにかわっても、そこは専門家の獅子丸、すぐに慣れ  
て、ポロポロピンと弾きだした。

しかし、肝腎の編曲作業は難航している。

このまえの「ナンノ掟があるものか」のときは思いのほかにす  
らすらといったが、こんどはさすがの獅子丸もくるしんでいる。

「あせることはない。先はながい、あせってはいかん」

「節ふしのほうでは、これと思うものを手にしたのですが、文句のほう  
が」

獅子丸の苦悩の表情には、「ナンノ掟があるものか」がすらすら  
とはこんだ、あの反動からくる自信喪失の気配さえある。

「わたくしにはよくわからぬが、いいかね獅子丸、乙前さまが昭和

の東京に出てきたとして、彼女なら、どう唄うか、それをかんがえてみればよい、そういうものではないのかね？」

「と申されても、わたくしはまだ乙前さまにお目にかかったことがない、乙前さまの唄うのを聞いたことがない」

ふてくされているようでもある。

資徳も登利丸も心配になってきた。

「藤原さま、二日か三日、獅子丸は節も文句もわすれて、わたしといつしよに東京じゅうをあるきまわっては、どうでしょう？」

「あるきまわって、どうする？」

「なんにもならぬかもしれませんが、すくなくとも、気はかわりましよう」

「気がかわる、うん、わるくないね。やってみるか、獅子丸」

「ええ、こうなったら、なんでも……！」

「その調子だ。エーイ、こんなものとも、しばらくおわかれッ」

登利丸はピアノの蓋をおろした。

(04)

獅子丸と登利丸は、あてもなく、ひろい東京の街をあるく。

あてはないはずが、どうしても視線が子供に向く。

子供が遊んでいるのをみると、その気もないのに、遊びをせんとや生まれけむ、の文句を口をついて出る。

「因果なものだね、それほどまで……」

「くるしいにはくるしいが、宮廷の床で和琴を弾いているのにくらべれば、気分は浄土というものだ」

「宮仕えが、よほど、いやだったらしいな」

「おまえにはわからぬ」

「うん、おれにはわからない」

活動小屋にもはいつてみた。

動物園にもはいつてみた。

電車にも乗つてみた。



相撲も観た。

カフエーのはしごもやった。

グンプの「ホチョートレッ」も見た、きいた。

十一月三日には、明治節の式典に参加する高官たちの大礼服の姿も見た。

そろそろ、どうかねとききたい気持ちをおさえるのに登利丸は苦勞する。獅子丸をあせらせてはならんぞと、資徳にかたくいわれているのだ。

あるきまわるのにも疲れてきて、音羽の家にももる日もおおくなつたが、それでも、うまい詞は生まれぬ。

資徳も気になってきた。

「そろそろ、どうかね。いや、せかすのではないぞ」

「できたのです」

「おお、できたか！」

「詞はできたのですが、こんどは節のほうで、どうにも……」

「そうか、節がうまくゆかぬか。それはそれとして……」

詞だけでもさきに披露してもらいたいものだ、といった顔つきの登利丸。

そうと察した獅子丸が、

「じらんください」

ふところから紙を出し、資徳のまえにおいた。

もどれないのかな

あの日 あのころ

知らなかったワ おとなの辛さ

仕事もすてて 亭主もすてて

イシケリ オハジキ アネサマゴッコ

もどれないのかな

ああ かなし

ウソじゃないかしら

みぎも ひだりも

うごけないのサ ゆきつまり

こつと知ってりゃ おことわり

あそんじゃいけない はたらけ はげめ

ウソじゃないかしら

ああ かなし

あれが本当サ

あの子に この子

いっておやりよ おとなにや なるな

子供見てれば わが身はこがれる

こがれこがれて こがれ死に

あれが本当サ

ああ かなし

(05)

「ふーむ」

目尻をつりあげ、口をわざとかたくむすんだのは機嫌がいいときの資徳の癖だ。

「獅子丸、やったな、天下第一！」

「節ができていないのですから、いいもわるいもないのです。節によつては手直しも必要になります」

「そういうことはあるだろうが、この文句はいいよ。もどれない

のかナ、の出だしが特にいい。節がどうなるうと、この出だしは変えてはならんというものではないか」

登利丸も口をはさんで、

「節がどうなるか、たのしみですな」

「どうなるか、おれにもわからん。詞にこだわると、節もつまくゆかぬ」

「獅子丸なら、なんともなるさ」

登利丸は獅子丸をばげましているつりなんだろうが、こつ簡単率直にはげまされると、当人としては具合がわるいこともある。

「いやいや、まだしばらくは、ためいきをつかねばならんのだ」

「そうだッ。サワかハナエにきてもらっては、いかがでしょうか、藤原さま」

「サワかハナエに、きてもらう……？」

「サワかハナエに……」

あとを口ごもるのは、もしかして獅子丸の気をわるくするのではあるまいかと懸念しているからだ、獅子丸の誇りをきずつけやしないかと。

「サワかハナエに節づくりを手伝わせる、と？」

「唄うのは彼女たちだから、彼女たちが唄いやすいようにとかんがえるのも大事ではありませぬか。彼女たちが唄いやすければ、ほかのものにも唄いやすいはず……とはいっても、獅子丸が承知したうえのはなしではありませんが」

「名案だ。おれはかまわんぞ、登利丸」

まずサワの意見をきいたところ、この詞なら自分よりハナエの声が似合いだという。

ハナエがよばれた。

「この詞のところがわかるまで、なんども読んでくれ。ところがわかった、と思ったら、最初の一行にだけ、唄いやすい節をつけてくれ。一行だけでいい。もどれないのかな、の出だしの一行がこの歌のすべてだ。あとの節はおれがつける、というより、出だしさえできれば、あとの節はひとりでに生まれってくる」

獅子丸は断言するが、ハナエはとまどった。

「もどれないのかな、といっても、あたしは自分の子供のころのことを何も知らないんだから、子供のころをなつかしむ気分がどういふものなのか……」

わからないはずだとおもつと、自分はこの役には適していないんじゃないかと――

「ハナエは思いちがいをしているよ」

「思いちがい、あたしが？」

「そうさ、思いちがい。あの歌は、いや、どの歌でもおなじだが、自分のことを唄うのではない。ハナエが唄って聴かせる相手のころ、そのひとが自分の子供のころのことを思って焦こがれるころを唄うのよ」

「でも、それではうそになっちゃってしまっ……」

「うそでいいのさ。いや、うそでなくてはいけない」

「それじゃ、もどれないのかな、の文句も獅子丸の本当の気持ちではなくて、うその気持ちなんだね？」

「うその気持ち、つくりものの気持ちよ」

「ふーん」

ハナエはこれで気分が晴れたようだ。

ムウ、ミヨウ、ミイーン――

ミュウ、ムウ、ミイーン――

頬をふくらせたり、すばめたりしながら、節のような音をだしている。

「やれそうかね？」

「本当の気持ちでなければ唄えない、なんて泣き言はいわないッ」

(06)

ハナエがあらすじをつくり、獅子丸が手直しして「もどれないのかナ」の節ができた。

「ナンノ掟があるものか」はかるく、はやい調子だが、こんどの「もどれないのかナ」の調子はゆったり、気分はのんびり。

板橋から十条、王子あたりは製紙工業地帯、ここにちらばる一杯飲み屋の一軒、会津屋がハナエの戦場。

会津屋という名前は知っているはずなのに会津屋とよぶ客はほとんどいないといえは、会津屋の性格は知れる。

「おいッ、おやじ。ハナエちゃんにおかしな男がくつつくのを知ら

ん顔をするっていうんなら、それが会津屋の店じまいだぞ。なにしろこの会津屋はハナエちゃんひとりでもってるんだから」

こういうときには会津屋の名前が出てくる。ハナエが女中・皿洗い・女給・看板娘の一人四役としてはたらきだしてから会津屋の名称が復活したとわかっていい。

会津屋の常連客全員が貧乏で、その貧乏を担保にしたような関係でもって単純率直、痛快明朗な性質のかたまりができています。

そういつかれらの胸に、そーつと風をふきこむような具合で「もどれないのかナ」の歌を注ぎこむ、それがハナエの任務だ。

さいしょの夜は 知らなかったワおとなの辛さ、をただ一回くちずさんだけ。

つぎの夜に もどれないのかナ、からはじめて イシケリ・オハジキ・アメサマゴッコ、まで、何度もくりかえして唄った。

「ハナエちゃん、それがいまのはやり歌なのかい？ はじめて聴いたなア」

そーら、ひっかかってきた！

「やだなア、ミネさんたちはなんにも知らないんだから。こんなない歌、はやらないわけじゃないでしょッ」

「降参々々。こう見えても中村峰吉、ひとがいいかわりに、世間じゃうといんだ」

「ひとがいいから出世しないっていう、言い訳かね？」

「あーら、めずらしい。ヨシさんがミネさんからむなんて」

「からみたいわけじゃないが、いつもこんな飲み屋ばかりじゃなくて、たまにはカフェーかなんかで、派手にやりたいものじゃないか！」

奥からおかみさんが顔をだして、

「あーら、ヨシさん、こんな飲み屋でわるかったわねッ」

「アリアーッ、聞かれたか！」

そのすきにハナエは ウソじゃないかしら、右も左も、うごけないのサ、ゆきずまり、と鼻唄まじりに、あっちの客こっちの客のあ

いだをはしりまわる。

あたしが一所懸命に唄っているのに、なにさア、ゲラゲラわらつて酒のんでばかり——という顔はしない。

客に給仕し、客のいたずらを適当にかわしているあいだに何気なく、というかたちでやるのがいい。カフエー黒竜江でサワが「ナンノ掟があるものか」をはやらせたのもこのやりかただった。

会津屋の常連はまず鼻唄でおぼえる。

なにがあつてもこの歌をおぼえてやるぞという意気込みはないかわりに、いったんおぼえたら、わすれることがない。

そこに火がつき、爆発する。

一週間もすると、会津屋のうちで音に敏感なやつが こがれこがれてこがれ死に、と唄いだした。この歌を天下で最初に唄った人間が自分だという意識はない。それがやはり歌というものだ。

オイ、ハナエちゃん、やっとあの歌をおぼえたよ——こう挨拶するものがない。

これこそ具合がいい証拠だ。はじめて唄ったのは会津屋のハナエだと記憶されているようでは、爆発的な流行はありえない。

ハナエがそれを資徳にいうと、

「さようか。では、あと三日だけ、待とう」

三日すぎ、黒竜江でサワが唄い、それから十日ほどして池袋の活動小屋でサナエが唄い、タエコが蕎麦屋で唄った。

どこへ行つても、もどれないのかナ、とやっている。東京は「ナンノ掟があるものか」と「もどれないのかナ」に攻めたてられている。

東京のひとびとは憑かれたように「なんの掟があるものか」と「もどれないのかナ」だけを唄って、時と日をすごしている。

顔色はいいし、疲労の様子はないから、ヤケツパチの心境になつ

ているわけでもない。

世は乱れている、そういえばいえるかもしれないが、人心は乱れてはいない、まずしくもない。

むしろ、ゆたかである。

(07)

ヤマト・レコードの重役連中、じーっとしていられない。

「山階相談役さま、こんどはよろしいでしょうな。こんどの歌は、掟については何も唄ってはいないのですから」

逸男としても、こんどは、「ゆるさぬ」とはいえない。

逸男が首を縦にふつたので、梅田がこぞとばかりに、

「どうぞでしょう。「もどれないのかナ」を吹きこむついでに、「ナンノ掟があるものか」もB面に入れてしまつては……？」

どさくさにまぎれての突破作戦だ。

すると意外にも、

「よろしい。しかし、ウラとオモテに分けて入れるのは智慧がない。二枚つくつて、同時発売ということにしよう！」

梅田の提案は「もどれないのかナ」をA面に、「ナンノ掟があるものか」をB面にというものだったが、それを逸男は、レコード二枚の同時発売とし、ふたつの歌を分けて入れようという意外も意外林と修二が興奮にわれをわすれてたちあがり、テーブルに膝をぶつつけるくらいに意外なる受け止め方をした。

「二枚……？」

「二枚、同時発売？」

「なにをおどろいているのかね。わがヤマト・レコード株式会社は営利事業をやっておるのであり、儲かるときには儲けなければ株主諸氏に申し訳が立たないのである」

ああ、山階逸男は決断をくだした。思想をすててオトコをたてると決意した。

「山階さん、すばらしいワ。それほどまでにクサカベミヨコの」  
とをかんがえていたただけるなんて!」

「まだそこにいたのか、ミヨコさん」

「まだいたのか、なんて、水臭いワ。ヤマト・レコードのレコード  
からはいつもかならずクサカベミヨコの美しい声がきこえる、山階  
相談役のそばにはいつもミヨコが影のように寄りそっている、そう  
と決まっているのに!」

「そういつてくれるのはうれしいんだが、ミヨコさん、いいかね、  
こんどのレコード二枚、吹き込むのはクサカベミヨコじゃないんだ  
よ」

またまた意外、また奇ッ怪。

ミヨコの顔がブーツとふくれたかとおもうと、つぎにはクチャク  
チャになって、

「ワーツ、ひどい、ひどいッ。クサカベミヨコともあるワ歌手に吹  
き込みをやらせないなんて、そんなことなら、このヤマト・レコー  
ドなんか、つぶれちまうからねッ。いやッ、このミヨコさんが、つ  
ぶしてやるよ!」

いさましく出ていこうとしたが、すぐにもどってきて黒貂の「一  
トを手づかみにし、

「おぼえてらっしゃい!」

こんどは本当に出ていった。

「相談役さま!」

「山階さま!」

「クサカベミヨコがでていってしまいましたよ!」

悲鳴と絶叫うずまく重役室。

逸男の沈黙がなおさら不気味である。

「ハッハッハー。諸君、よっくきいてもらおう。遠大にして正義こ  
のうえない、われらがヤマト・レコードの戦略を」



重役連中、ホツと安堵の胸をなでおろす。

なんだか、よくわからないが、山階相談役はものすごい経営戦略をおもちのようだ。

一同、静聴の姿勢。

(08)

「あの、けしからぬ歌がはやってからというもの、わがヤマト・レコードの売上は激減の一途、他社もおなじく惨憺たる成績だということだ。レコードを聴くよりは自分で歌を唄うほうが素晴らしいな」といふ、まことに由々しき雰囲気、東京ばかりか、日本全国に蔓延した。そこで諸君、どうすればよろしいか？」

重役にたずねているわけではない、これからいふことに重みをつける演技だ。

そうとは知らない、性格に軽はずみのところがある林が、

「相談役さまに相談をもちかけられる、この文法的矛盾を、どうすればよろしいのでしょうか？」

わざと剽軽せうけい(ひょうきん)にいったものだから、

「無礼もの！」

重役一同、またまた静粛かつ静聴の姿勢。

「けしからぬ歌が、ひとりで生まれて、はやるはずはない。仕掛けたやつがいるはずだ。最初に唄ったのは、たぶん、女だ。そいつを見つけて、痛めつけてやる。二度とこんなけしからんことが出来ぬようにしてやる！」

さすがは山階逸男、ただものではない。

昭和の東京にきて日はあさいのに、見るべきところはちやーんと見ぬいている。

「名案です。しかし相談役さま、そのけしからぬやつを、どうやって見つければよろしいのですかな？」

東京だけでもとてもつなく広いのに、けしからぬやつらが東京にいるとはかぎりらんでしよう、東京の外から攻めこんできているかも

しれない、簡単に見つかりますかな——梅田の質問には逸男の計画を軽蔑する調子があった。

梅田の質問をききながら、修二は首をかしげている——これは、さつき相談役がクサカベミヨコを追い出したことに関係があるのではないかな、はつきりはしないが、なにか、そんなような——

「梅田重役、わたしを軽蔑するものではないよ。計画は練りあげてある、狩りをするのだ」

「狩り……？」

「ヤマト・レコードは、あのけしからぬ歌のレコードをつくって売ります、と発表する。歌手はクサカベミヨコではなく、一般から募集する、声に自信の女性よ、ふるって応募すべしと大々的に宣伝する」

「わかった！」

修二がさげぶ。

「応募してくる女のなかでいちばんじょうずに唄うのが、あの、けしからぬ歌をはやらせたやつだから、そいつをつかえまえる、そういうわけですね、相談役？」

「おお、才は沈黙にあり。四方部長は希有の存在ですな！」

ほめられたが、修二はうれしい気はしない。

レコード会社がそんなことをやっていいのか、こいつはひとつ、アヤに相談しなくてはなるまい。おれはレコードとチコンキならわかるが、レコード会社のことはアヤのほうがよく知っているんだから。

林と梅田は狂気乱舞。

「名案だッ、こんな名案がほかにあるものか！」

「他社にも恩を売れますな！」

「レコードは飛ぶように売れ、人民はしずかに、だまってレコードを聴く、それでこそ聖なる昭和の御世（みよ）というもの」

山階逸男の得意気な顔——いかがですか法皇雅仁さまよ、あな

たの計画もここまでですよ、くやしかったら、ここまでいらっしやい！

おそるべき山師逸男の洞察力は、はるか平安の時代から昭和時代を操作しようという法皇雅仁の大計画を察知したばかりか、計画そのものの息の根を止めようとしているのであった。

(99)

クサカベミヨコはヤマト・レコード専属歌手第一号の名誉の地位を追われ、いちじは途方にくれたが、そこは元来がしつかりもの、復讐と保身の計画をたてるに時間はかからない。

「ケンニさんにお目にかかりたいのですが……」

「ケンニ……？ そんなものは、ここにはおらんぞ」

「おかしいわネ。ここはケンペイ隊でしょ？」

「いかにもここはケンペイ隊のケンゴ分隊じゃ。あれーッ、あなたはたしか、カフエー黒竜江のクサカベミヨコさん！」

「あらまあ、だれかとおもえばケンサンさん！」

「ケンサンじゃないよ、大山三郎だよ」

「三郎さんなら、やっぱりケンサンさんじゃないの。なつかしいワ、みなさまお元気でいらっしやる？」

「はーあッ。一同全員元氣いっぱい皇国の安全と繁栄、そしてグノプの名誉のために一身をささげる覚悟の毎日であります！」

「じゃ、ケンニさんは？」

ニセ・ケンペイのケンサンはあれこれと指をおつてかんがえた結果、ミヨコのいうケンニとは最年少ニセ・ケンペイの宍戸六平太のことだと見当をつけた。

「宍戸隊員なら、ただいまは隊長とともに市内探索に出動」

「ケンニさんもはりきっているのねH」

「ケンニじゃない、宍戸六平太！」

ケンサンの抗議もミヨコには通じない。

「いいのよ、ケンサンさん、あんたは気にしないでいいの。さーて、それじゃあたし、ここで待たせていただくワ」

秋葉原のガード下のニセ・ケンペイ隊室の椅子に黒貂コートのお

—— 珍妙なる取り合わせだが、ミヨコは平然たるもの。

「ねえ、ケンサンさん。ケンニさんはまだお嫁さんはきまっていないでしょう？」

許可もなしにドカドカと隊室にすわったミヨコの排除——ケンサンのやるべき仕事の第一はこれだが、なにせ、はなしがいきなり「お嫁さん」になったものだから、ケンサンは任務もわすれてミヨコのはなしにのつた。

「ミヨコさんにふられたのが、よほどこたえたんだね、あれは。一生を独身ですごすんだと宣言して、いまじゃ仕事第一の鬼ケンペイだよ。ちかぢか、でっかい表彰をつけるだろうと隊長もいわれている」

「かわいそつに。でもね、もう心配はないのよ。あたしがお嫁さんになってあげるんだから」

- 164 -

そこへもどってきたケンニに、ミヨコはむしゃぶりつく。

「あたしといっしょになって東京で暮らすのよ。ねえ、ケンニさん、いますぐにケンペイなんかやめて、結婚よ！」

おしつけたものだから、

「うるさいッ、かえってくれ。おれはミヨコなんか、ミヨコなんか大きらいなんだ！」

「なにをいうのよ、ケンニさん。いっしょになってくれ、いっしょになって江差でニシンをとって暮らそうって、あんなにたのんだのはケンニさんじゃないのサ！」

「あのおきはおのとき、さ。おれはもう、女なんか大きらいになっただぞッ」

ケンペイ隊室にはどうにもふさわしくない雰囲気になってきたから、隊長ケンコもよわりきって、

「まあまあ、ここはまず、お客さまのミヨロさんから先に言い分をきこつじやないか」

(10)

ケンゴ隊長が自分から先にたつて隊長室に案内したのは、ふたりのあいだをまとめようとか、きれいに別れさせよう、なんていうものであるはずはない。

パチーンとドアをしめ、ミヨロの身体を壁ぎわにおしつけ、

「おいッ、ここはケンペイ隊だ。地獄どころか、地獄の三倍はおそろしいという評価もあるんだ！」

「ケンゴさん、そんなおそろしいこと、いわないでッ」

「なぜヤマト・レコードから追い出されたのか、さっぱりと白状してしまえ！」

さすが、隊長ケンゴ、ミヨロがヤマト・レコードを追われたのはよくよくのこと、大変な理由があるにちがいないと、きびしく狙いをつけていた。

- 165 -

理由がなくても突っ込んでゆく、それがケンペイのケンペイたる所以、理由ありとにらんだからには放っておくはずがない。

「さあ、はやく吐きやがれ！」

ケンゴが突っ込む。

ミヨロはガタガタふるえ、コレコレシカジカと吐いた。

コレコレシカジカといったところで、ミヨロには罪の記憶はぜんぜんないんだから、ヤマト・レコード相談役の山階逸男の非道無道を涙ながらにうつたえるだけ、

「ひどいったら、ないのよ、ケンゴさん聞いてちょうだいな」

「ヤマシナハヤオ……」

「ケンゴさん、知らないの？」

「知らない名だが、どこかできたことがあるようないやうな」「とてもこの世のひととおもわれぬ、それはそれは、おっかしなひとなのよ」

山階逸男の名は『平家物語』や『吾妻鏡』には登場してこない——  
「だろ——」が、警察組織に脈々とつたえられる記憶には、平清盛  
に法皇雅仁の追放をもちかけてことわられ、それならばと源頼朝を  
そのかして平家打倒を計画した物騒きわまりない人物として明確  
に存在している。

「おカネがたくさんあって、その気になれば日本じゅうのレコード  
会社を買い取るのもオチャノコサイサイなんですって。それからネ

」

「ミヨコはペラペラとしゃべる。」

ケンゴは聞いているが、よほどイライラするんだろつ、ひっきり  
なしに指でテーブルをたたいている。

「トントントン、トントントン、トントントン——あつ、これはモー  
ルス信号だ！」

ケンイチがとなりの部屋に待機していて、ケンゴのモールス信号  
を受けている——ヤマシナハヤオ・ヲ・カンシ・セヨ・タダシ・ヤ  
マシナ・ニ・テキタイ・スルナ・カレ・ハ・ミカタ・ニ・ナルベキ  
・セイリヨク・ナリ。

「ミヨコにすべてをしゃべらそうと、こんな手間をかけている。」

「とは知らないミヨコの、しゃべること、しゃべること。」

「ツウシン・オワリ・タダチ・ニ・コウドウ・セヨ。」

「リヨウカイ・リヨウカイ・タダチ・ニ・コウドウ・ニ・ウツ

ル。」

三人のケンペイ、すなわちケンイチ、ケンサン、ケンシはミヨコ  
に気づかれぬように裏口から出勤してゆく。

「おーい、宍戸ケンペイ、こっちに来いッ」

ケンゴによばれた宍戸六平太ことケン二がはいつてくると、

「宍戸ケンペイは、このクサカベミヨコと結婚せよ。以上、命令で  
あるッ」

「そんな、ひどいことを、隊長——」

「命令である。さらに第二命令、ふたりは隊内に居住すべし！」

「まッ、ケンゴ隊長って素敵ねッ。あたし、まえからわかっていたのよ!」

ミヨコはケンニにとびつき、首をかかえて、もうなにがあっても放さないワとか、こうなるのも前世の約束なのヨとか、おもいつくかぎりの決まり文句をケンニの耳にふきこんでいる。

ミヨコの包囲からのがれようとケンニは必死にもがいているが、そのケンニを救おうともせず、

「そうだッ、その調子だ。ミヨコ、おまえたちは何があっても離れてはいかん、いや、離れられないんだ!」

ケンゴ隊長は宣告し、部下のあとから出動した。

( 第7章・終 )

(51)

世はみだれている。

コクタイという、ききなれない言葉がさかんにいわれるようになった。

コクタイをまもるのが良い国民で、コクタイについて無関心を表明したり疑ったりするものはわるい国民、非国民だということになってきた。コクタイを漢字にすると「国体」である。

グンブやケンペイはコクタイという霞(かすみ)を食って生きていくから、コクタイの乱れは死活問題だ。

それでは、世がみだれているなら人心もみだれているのかというと、これが案外に、みだれていない、やわらかな状態を維持していた。

「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」の大流行こそ人心がやわらかく、かつ正常であることの証拠にほかならないし、これがレコードに吹きこまれないのも人心穏和のしるしといえた。

掟は厳然と存在するのである、もどってはならん、われらはひたすらに前進あるのみ——なんていいだしたらそれこそ人心硬直と荒唐のきわみだが、まだそうなつてはいない。

「ただいま東京で流行している歌はどのようなものか」と法皇雅仁が平安時代から質問してきたので、藤原資徳は「目下の流行は「野崎小唄」や「上海リル」「二人は若い」「船頭可愛いや」などであります」とこたえ、熊野牛王の起請番紙に楽譜と歌詞をうつして、送った。

レコードを送れないのが残念だが、法皇のそばには乙前がいる、楽譜さえあれば再現は容易だ。

すぐに、返信。

——「二人は若い」のレコードはディック・ミネと星玲子の合唱だそうだが、乙前が、このディック・ミネとは男なりや女なりや、



知りたいと申しおる。至急返信せよ。

——ディックとは欧米人の男におおい名前であります。「二人は若い」を唄うディック・ミネは正真正銘の日本男児らしゅうございますが、欧米の雰囲気を出すためにディック・ミネと名乗っておるようです。

——乙前が苦情をいつておる。声のいい今様唄いの女がみんな東京へ出ていつてしまったから京都にはるくなものは残つておらん、資徳がうらめしい、と。それからまた、今様を正しく唄える男がないので多々丸を呼んで唄わせてみたが、あの多々丸の歌はひどいものだね。

法皇からの書簡を登利丸と獅子丸にみせると、「多々丸には気の毒なことばかり」と登利丸、「ディック・ミネと比較されては多々丸さんもかなわないよ」と獅子丸。

「雅仁さまはおよろこびになつておられる。とくに「二人は若い」の歌はよろしい、このような歌がはやるのも「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」の好ましき影響であろう、とおっしゃつておられる。獅子丸という男、さすがは宮廷楽人の将来に絶望して唄ものの仲間にとびこんだだけのことがある、ほめてやってくれ、ともおっしゃつておられる」

「身にあまる光榮、とおつたえください」

「承知した。さて、つぎの昭和今様をつくらねばならんな、獅子丸よ。たしかに人心はいま平静を維持しているともうしてよいが、人心ほどもろいものはない。ほんのわずかの隙をつかれても、ホチヨートレツ、になつてしまふのだ、油断はできぬ」

「そのあたりの事情が、すこしずつわかつてまいりました。人心というものは自分の歌を唄っているあいだはいいが、他人の歌を、他人の歌だけを唄うようになってくると腐敗してしまふ、そういうことのようにすな」

「いかにも！」

資徳は獅子丸の肩をたたいて信頼と同感をしめした。

「そこで藤原さま、こんどは、どの歌をおえらびになるか、わたしが当ててごらんにいれましょうか？」

「当たるかな？」

「見当はついておるのです」

ピアノの蓋のほこりははらって、

「ひさしぶりだなア」

ポロンピロンとやっていたのが、やがてメロディーになり、獅子丸は目をほそめ、気分がいいようだ。

ポロン、ピロン、ピョロピョロピイン——

「おおっ！」と資徳。

「いかがです」と獅子丸は得意顔。

「それだ、それだ、その「波も聞け」なんだよ。どうして、わかったのかな？」

波も聞け 小磯も語れ 松も見よ

われをわれという方の 風吹いたらば

いずれの浦へも なびきなむ

「先日から、この「波も聞け」や、ほかの歌をくちずさんでいらっしやいました。おまえなら何をえらぶかと質問されれば、この「波も聞け」とおこたえするつもりでした」

「わたしと獅子丸の気持ちがおなじになった、心強いぞ」

「すこしずつ、手をつけてはいるのです」

「いつまで待てばよいか」

「あと三日……」

「それは上々」

用意ができていただけに、こんどははやかかった。

波よ聞いてヨ わたしのこころ

氏もそだちも えらびはしないワ

ただひとこと おまえこそ

いってければ わたしのあなた

磯よ告げてよ おいらのこころ

顔やかたちは 問題外サ

ただひとこと あなたこそ

いってければ おいらのおまえ

松よ 語れヨ

明日は知れない かぜまかせ

待っているのヨ 待っている

風が吹くのを 荒れるのを

「結構。節のほうは？」

獅子丸がピアノにむかってピロンポロン、ピョロピョロポーン。

「言葉ははげしいが、メロディーはしずか。 モンダイガイ、がハ  
イカラな印象」

登利丸がポツンといった。

「しずかな節だから かえって言葉のはげしさが際立つ。わるくな  
いよ、獅子丸。これまでの最高」

「気がかりがひとつ」

「なんだね、獅子丸」

「雅仁さまや乙前さまのお気に入るか、どうか」

「気遣いは要らん」

資徳が断言した。

「平安時代と昭和とは、おのずからの相違がある。昭和では昭和  
の今様歌をつくれればいい、いや、昭和の歌でなくてはならない。そ  
れが雅仁さまのお好みだとおもってさしつかえない」

「では、わたくしのやりかたで、よろしいのですな？」

「もちろん！」

おでん屋の養女だったユウコが「波よ聞いてよ」をはやらせた。

ユウコは新宿にちかい村の大百姓の家で、住み込みの女中になっ  
てはたらいっている。

農閑期にはこの家の女房が裁縫の師匠になって、娘たちがあつまってくる、それがねらい。

娘たちといっしょになって、茶を入れたり座敷のかたづけをするあいだにユウコが 待っているのヨ待っている、をたった一回口ずさんただけで、そのときにはもう新宿から市内に逆流して、東京じゆうのはやり歌になっていた。

(02)

新宿の百姓家で女中をしているユウコが、やすみの日に音羽の家にやっできて、

「登利丸さん、あたしはね、怒ってるのよ！」

「なにを……」

「ひどいじゃないの、あたしにだまって、あたらしい歌をはやらせるなんて！」

「あたらしい歌……なんのことかね？」

ふくれつつらのユウコがいうには——裁縫をならいにくる娘たちがあたらしい歌を唄っている、まるでおぼえない歌だからレコード新譜をしらべたが、どのレコード会社の作品でもない。そこで、これはてつきり資徳たちがあたらしい歌をつくって、仲間の少女に唄わせたのだ、このユウコにも知らせないなんて、ひどいじゃないの！

登利丸は額の皺をそのままに、

「そんなはずは、ないんだが……」

「あらア。それではまるで、このユウコがうそつきみたいことになるじゃないの！」

「けっしてそういうわけでは……」

どんな歌なのか、唄ってみなさいといわれたユウコが、にぶい決断のあとで唄いだした。

わたのしツの字は わかれのツの字

あんたのアの字は あきるのアの字

それでいいのよ　ワの字とアの字  
テンボは軽快。

「ここまでなら、問題はないのよ」

「はやく、そのさきを」

「それが、ねえ」

「エーイ、もう、どうなったって、あたしや知らないからねッ、と  
いった調子でユウコは先を唄った。

それでいいのよ　ワの字とアの字

ナンノ掟があるものか

「！」

「？」

「……？！」

「あたしが怒るのも無理はないでしょ！」

「唄うのは裁縫をならいにくる娘さん、だけかね？」

「よくは知らないんです、あたし。でも、裁縫の娘だけじゃないの  
はたしかですよ。げんにですね、今朝もあたし、新宿の駅で、これ  
唄ってる若い衆をみましたから」

「若い衆……娘だけではないね？」

「ユウコよ……」

資徳が口をはさんだ。登利丸よりは貫祿のある声である。貫祿と  
か、貫祿の相違という言い回しを理解するには資徳と登利丸の声を  
ききくらべるのが手っとり早い。

「その若い衆の、顔を見たんだね？」

「はい。でも、あのー……」

その男に見覚えはないかとたずねられた、とユウコはおもったら  
しい。

「いやいや、その男の顔はどんな様子であったかね？」

「まず、娘にさわがれるような様子ではありません」

つまり、ユウコ好みの男ではないということ。

はなしが合わない。

「いい男か、どうかではなくて、わたくしのききたいのは、どんな顔色であったのか、と」

ユウコの興味は、男の顔色なんかにはないらしく、

「しまりのない、アツケラカンとした顔色」

「アツケラカン……幸福そうだった、のかね？」

「幸福なんでしょう。なにしろ、おかしな歌を鼻唄で唄ってるんですから」

「じっくりかんがえなくては、ならんな」

即座に資徳は、「ワの字とアの字」の歌の流行度の調査を登利丸と獅子丸に命じた。

数日してわかったところでは、「ワの字とアの字」の歌はざっと百人に一人の割合で唄われている。「ナンノ掟があるものか」「や」もどれないのか」「波よ聞いてよ」にはおよばないものの、相当の勢いである。

(03)

「レコードにはなっていない、それはたしかなんだね？」

「まちがいなく」

「作詞者、作曲者の名は？」

「不明。だれがともなく、どこからともなく」

「断言しているのか、どうか……」

資徳の顔には、いくらかの躊躇と、かくしきれない微笑。

「替え歌だ、「ナンノ掟があるものか」に替え歌ができた。替え歌ができたのは本歌（ほんか）が東京の民の胸の奥底に根をはやした証拠といえる。根が生えて花が咲いた、それがこの、なんともお粗末、かつ、あっぱれなる「ワの字とアの字」の替え歌だ。東京の民が自分の歌をつくって唄いはじめた」

「よろこんで、いいのですな？」

「よろしい。とって、ここでやすんでは、なんにもならぬ。人間のこころほどもろいものはないのだから」

百姓家住み込み女中のユウコをはじめ少女たちには、あらためて登利丸から事情が説明され、おもてだつての祝いはしないが、それそれ勝手に祝いをやってくれ、とのことである。

カフェー黒竜江のサワにも、登利丸から、各自で祝賀せよと連絡があつた。

開店前のカフェー黒竜江はしずか、サワの瞑想を邪魔するものはないでもない。

「ナンノ掟があるものか」に替え歌ができた、替え歌ができたのはいいことだと藤原さまはおっしゃるそつだ。

あの歌を最初に唄つたのはわたしだ。だから、藤原さまがよろこんでいらつしやるというなら、わたしの喜びでもある。

自分はカフェー黒竜江に住みこんで歌を唄うだけだ。それほどの仕事をしたとはおもわれないが、よくやったとほめられると、うれしい。

それぞれのやりかたで祝いをせよと、藤原さまから指示があつた。わたしは、どうしようかな？

祝いをしなくてはならないという思いが重い気分をさそつて、サワは憂鬱になる。

いつものように歌を唄つて、客に酒を注いでまわつて、腰や股をさわりにくる客の手をうまくはらいのけて、そつそつ、いつものようにするのがサワにふさわしい祝いなんだよ。

そつと決めて、開店準備を手伝おうと二階から下のフロアーに降りようと――

——だめだッ、サワ、降りるな。下には危険が迫っている！

(04)

ケンニこと穴戸六平太とクサカベミヨコとの強制結婚がきっかけになつて、ケンゴ隊長と山階逸男とのあいだに提携が成立した。

はなしてみると、意見が合う。

法皇雅仁が妻桑の伝統を否定しようとしている、それを阻止するためにはまず源氏をそのかして平家打倒に決起させなければならぬとかんがえて平安時代からやってきたという逸男の打ち明けばなしにケンゴ隊長は、「つまりはあんたは「ナンノ掟があるものか」「や」「もどれないのか」「などという怪しからぬ歌がはびこる当世を正さねばならぬというわけだろうか?」

「そのとおり。法皇雅仁さまの手先として、おれとおなじように平安時代からやってきているのがあの藤原資徳だと、おれは知らんでおる。まちがいはない」

「やつぱり、古漬のタクアンめ!」

「タクアン、なんだ、そりゃ?」

「タクアンを知らんのか、おどろいたな。まあ、タクアンのことはいずれわかるとして、あの資徳が「ナンノ掟があるものか」を計画的にはやらせたか、でなければ、歌の流行に乗じてこの世を乱そうとしているにちがいないと、おれは見る」

「きみもそうかんがえていたのか」

「ふたりは同時に膝をすすめ、

「法皇の手先が藤原資徳、その資徳の手先がこの東京に多数潜入しておるはずだ」

「それを、まず捕まえる」

「むずかしい、一筋縄ではいかぬ」

「われに名案あり、さ」

逸男は資徳の一派を「狩り出す」計画を説明した。

「ワナにかける、なるほど。しかし、あれだなあ、平安時代だかなんだか知らないが、悪事にかけてちゃあ、あんたも相当なものだ」

ケンゴに指摘され、逸男は酸っぱいものが胸につかえる気分。

法皇雅仁さまが今様歌なんていう下品なものに血道をあげさえしなければ、なにも自分がわざわざ平安時代からやってくることはなかったのだ。目のまえにいるケンペイ隊長、気が合うには合うが、しょせんは武者である、こんな武者を相手といっしょに橋をわたら



ずにするだもの。

だが、いまは感傷に耽る時ではない。

「わるい計画ではない。手伝おう、やってくれ！」

「ケンペイ隊が手伝ってくれば強気になれる」

(05)

ケンペイ隊あそびのケンペイ隊との提携はうまくいったが、ヤマト・レコードの重役連中は複雑な反応をみせた。

ニセ、デタラメとわかっているプランによるこへるものではないが、とって反対すれば逸男が「資本をひきあげる」と脅しをかけてくるのは、これまたわかりきっている。

クサカベミヨコがいなくなったいま、ニセのレコード製作発表で資徳一派を狩り出すのはヤマト・レコードにかぎらなくてもいいわけだから、弱みは逸男ににぎられている。

「相談役、レコード製作を発表しておいて、それがはじめからニセだったとわかると、ヤマト・レコードの信用はガタおちですぞ！」

「心配するな。ニセモノだなんて、だれにもいわせない、ここだけのはなしだ」

逸男が、すこんだ。

ケンペイ隊との提携についても重役のあいだだけの極秘事項としなければならぬと、逸男はきびしく釘をさした。

「だれもしゃべってはならぬ、そういうことですな」

「さよう、掟である」

梅田重役があわてて口をおさえた。逸男が「掟である」といったその「掟」の連想から、「ナンノ掟があるものか」の文句がのどから出かかったにちがいない。

林重役が身体をピクンとふるわせたのは、「ナンノ掟があるものか」がおもわずしらす口走りかけたのを、必死で止めたものにちがいない。

修二もおなじで、ゲップを呑みこむ真似でこまかして、のどを締

めた。

「相談役さん、しかしですな、資徳一派を摘発して痛めつけた、そのあとからならば「ナンノ掟があるものか」「や」「もどれないのか」「レコードにしてもさしつかえはない、そういうことになりやしませんか？」

「そうだ、そのとおりだッ——林や梅田はもう、鬼の首でも取ったように興奮している。」

「そうだよ、四方部長。なにしろ、レコード会社がレコードをつくらなくてはレコード会社とはいえないからねェ！」

「当たるな、これは！」

逸男は狼狽したが、狼狽をみせるのはまずいから、じーっと耐えて、

「そう、それでいいわけですよ」

重役一同に迎合して時間をかせきながら、逸男はしばしの思案——

「理屈はたしかにそうなるから、これはひよっとすると、おれの負けかもしれない。」

だが、負けかもしれないとおもう反面、そんなはずはないという気もする。

「というのも、資徳一派のことを新聞で大々的に報道させれば世間はおびえきってしまうのが目にみえているから、「ナンノ掟があるものか」のレコード化案そのものがオジャンになるはずだ。」

たとえレコードになったとしても売れるわけがない。となると、そこで自分の意地は貫徹される——よしよし、これでよし。」

「諸君、とにかく実行です」

「えーと、まってくださいよ。わが社がレコードを出すためにはまず藤原資徳一派を狩り出さねばならんと、そういうことですよ？」

「林さん、そういうことになるんですよ」

「どうも、なんか、こう、余計なことをやっているような気がして、ならないんですがね」

「林重役は、この山階がいうことに不満がある、とでも……？」

「とんでもない。ただ、なにが、こう、余計なことのような気が……」

「余計なことではないかと疑う、それがそもそも余計なことだと自分で思わないのかね、林重役は？」

「われわれはいま、言葉遊びをやっているのでしょうか？」

「疑うものは計画に参加しなくてかまわないが、ただし……」

梅田が逸男の肩を抱きかえるようにして、

「相談役さま、林重役は不満があるわけではないのですよ。ただ、経営に責任を負うもののひとりとして、事業をすすめるうえには経費の節約という問題を無視できないわけですから……」

カネなんか——逸男は苦々しい思いにならざるをえない。

逸男がその気になれば、カネなんか、いくらでも調達できるのに、カネをだしても思いどおりになるものではないのは平安時代も昭和も変わらない。それがくやしい、じれったい。

「ヤマト・レコードの一大事業、すこしぐらいの経費膨張は大目のみよう」

相談役が承知してくれるなら重役一同としても異議はない、ということで、いよいよニセ・レコード作戦の開始となる。

(06)

宣伝、宣伝、またまた宣伝。

新聞は書きたてる、ピラがピラ時かれ、ポスターがところかまわず貼ってある、どこにいつても奇抜な新レコード製作のはなしでもちきり。

街の美観をそこね、かつ人心をまどわすゆえに怪しからんという理由でヤマト・レコードはこっぴどく叱られ、ポスターやピラは撤去を命じられるはずだが、それがそうならない。

その筋に手をまわしているからだ、資徳は正確に判断した。

いずれ妨害の動きは出ると予測していたからおどろかないし、仲間の方がこんな幼稚な手に乗るはずはないと信頼しているから、不

安もない。

時間と手間をかけ、えらびにえらんだ昭和の今様唄いの少女たちだ、レコード吹き込みなんかには興味をもつはずがない。彼女たちは歌の種をまくほかには、どんなことにも興味をしめさない。

ところが、その予想がはずれるとは、まさか資徳の思いもよらぬことだった。

ナミヨという女、これは小学校の教師の娘だったのを資徳がさらったのだが、「もどれないのかナ」の替え歌を自分でつくってはやらせたという事実が判明した。

そういうことをしてはならんと、資徳は指示していなかった。だからナミヨには、悪いことをした意識はない。

「ナンノ掟があるものか」の替え歌ができたときに藤原さまはおよるこびになった、それなら次には自分がと、すすんで、「もどれないのかナ」の替え歌をつくった。善意と仕事熱心のあまりの結果なのだ。

ナミヨの持場は銀座だ、昼間の銀座をあるいて花を売りながら、歌を唄う。

ときには鼻唄で、ときには大きな声をはりあげて唄う。

ナミヨが歩きながら唄うと、ナミヨのまわりに人垣ができることもある。声もいい、姿もいいナミヨの流し目に、男も女も、フラフラッと魅入られる。

そのナミヨが「もどれないのかナ」の替え歌をつくったという。

ナミヨが替え歌をつくったことが発覚したのは、こういう次第であつた。

サワが「うれしいわネ、「ナンノ掟があるものか」のつぎに、こんどは「もどれないのかナ」の替え歌ができたそうよ」といった。

そこにいたナミヨが、

「サワさま。あれ、じつは、わたしがつくったんですよ」

ほこらしげに、もらした。

サワは登利丸を通じて資徳に報告してきた——これは悪いことだとおもいます、わたくしたちは歌の種を蒔く、歌の花を咲かせるのではないはずです、と自分の見解をつけて。

( 07 )

資徳は当惑した。放っておいていいものか、どうか、咄嗟の判断がつきかねた。

「放っておくわけにはいかないでしょう、サワが承知しませんよ」と登利丸にいわれて資徳の決心がついた。

「みんなを、あつめてくれ」

音羽の家に全員があつまった。全員が一度にあつまったのははじめてのことだ、重大なことがおこったか、これからおこるんだと、みんな感じている。

資徳はナミヨの名前を出さずに、「もどれないのかな」の替え歌のことをはなした。「ナンノ掟があるものか」のときは事情がちがつて、こんどは仲間のひとりが替え歌をつくってはやらせた事実についてうちあけ、われわれは歌の種を蒔く、歌の花を咲かせはしないと宣告した。

- 1 8 1 -

「藤原さまは卑怯だわ、ずるいワ！」

さげんだのはナミヨであった。

「替え歌をつくったのはあたしだ、ナミヨだって、なぜおっしゃらないんですか！」

「ナミヨちゃん！」

サワがたしなめたが、ナミヨはもう、自分をおさえるよりは、事実のありのままを打ち明けるほうに熱中していた。

「わるい気はなかったんです、ええ、なかったの。エイコちゃんていう、カフェーの女中をしている子と友達になって、そのエイコちゃんか「もどれないのかな」を楽しそうに唄っていたの。唄いなが

ら、「歌詞の意味はよくわからないんだけど、あたし、この歌が大  
好きなのよ」って、ニッコリ笑うんです。それであたし、つい、フ  
ラフラツとなっちゃって、もどれないのかな、あのお布団に、布  
団にもどってゆっくり寝たい、って唄っちゃったんです」

それを我慢しなくてはいけなかったのですか——ナミヨの声には  
痛切な訴えがある。

ほかの女は、するどい視線を資徳にむけている——自分がその場  
にいたら、どうなっていたらつかという深刻な疑問の視線でもある。

「ナミヨを叱るわけではないのだよ。ただ……」

あとがいえない、いうことがない。

妨害がはじまった、これまで以上に警戒しなければならぬ、き  
みたちが逮捕されてるのはうしても避けなくてはならない——そ  
こまでいわなければ納得してくれないと、わかっている。

そして、それをいえば、彼女たちを誘拐して平安時代の京につれ  
ていき、今様歌の稽古をつけたいきさつにもどって告白しなければ  
ならない。

事実を告白すれば彼女たちには恨まれるだろうが、それは仕方が  
ない。

資徳のおそれているのは、事実を告白することが彼女たちの安全  
や幸福につながるかはわからない、そのこと。

「ナミヨを叱る気なんか、ぜんぜんないんだ。ただ、これからは歌  
の花を咲かせることはしないと、どうか約束してくれまいか。きみ  
たちは、その、特別な女なんだから……」

どうか約束してくれ——資徳は祈る。目をつぶって、祈る。

「あたしは、イヤ！」

ナミヨが叫んだ。

「特別の女なんかでなくっても、あたし、かまわない。ふつうの女  
でいいのよ。声なんか良くなっても、かまわない。男が寄りつか  
なくっても、かまわない。ひとりで、いい。ふつうの女で、ふつう

に唄いたい！」

その場が凍結。

資徳は口を「へ」の字の形にしめて、ウンとうなずいた。

ナミヨひとりでおわるか、ほかの女が同調するか？

ナミヨは孤立した。

それでも凜然として、立っている。

資徳はゆつくりとナミヨにちかづき、

「おわかれだ、ナミヨ、いぐるうだった」

「ごめんなさいッ、藤原さま！」

「いいのサ、泣くのはおよし。登利丸、あとはたのむよ」  
「しずかにいって、奥の部屋に消える。」

ナミヨはふつうの女にもどる。品川から六郷をわたり、東海道を西に、平安時代の京にもどる。

「京に着いて、その先はどうします？」

「多々丸と栗王丸がかんがえてくれる。高崎で、多々丸がナミヨにいうんだろう……ここをまっすぐゆけば東京だよ、お父さんとお母さんが待つてるよ。東京にゆくか、京にもどるのか、ナミヨの好きなようにすればいい。おれは東京には付いてゆかないが、それでよければ……ということになるんだろうね」

「もどれますかな、ナミヨは、ふつうの女に……？」

「気がつよい女だからね、ナミヨは。うまくゆくだろうよ」

「さぞお怒りでしょうな、ナミヨを」

「憎いよ」

「なのに、彼女を罰しない、なぜですか？」

「なぜ、なんだろうね。特別の女になるのがイヤだという女をはじめ見て、感動したから、かな？」

「ナミヨのほかの少女は特別の女になる道をえらびましたな」

「それもまた、おもしろい」「」

ヤマト・レコードビルは女の大群に包囲された。「大軍」と書いた新聞もあったが、多人数のちからをたのんで何かをやるうというのではないから「大軍」はまちがい、「大群」が正しい。

レコード歌手になって暮らしをたてようという悲願にもえている様子の女もおおい。

だが、そういう姿ばかりではないのがむしろ異常であった。

とにかく自分の声をレコードに吹きこみたい、レコードになるのがうれしいというだけで朝からつめかけている、そういった雰囲気  
の女がすくなくない。

テストの順番をまつ女が十重二十重にとりかこみ、

アジサバイワシ、イカニクジラニ、

右も左もつごけないのサ、行き止まり

てんでんばらばらの発声練習で、巨大な声の渦巻き。

女があつまるから男もあつまる。

男の群れのなかには登利丸がいる、様子をさぐりにきたのだ。

登利丸の顔色は複雑だ。当惑というのではないが、といって歓喜でもない、だから複雑としかいいようがない。

「おそれいったな。いやもう、今様唄いなどというだけでは威張れたものではなくなってきたわけだ」

どの女もじょうずに歌を唄う、いや、じょうずすぎる。サワやハナエやヨシエの上をゆく連中がざらにいるのだ。

なぜなんだろう——ポカーンとしていた登利丸は、まもなく納得した。

「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」や「波よ聞いてよ」には楽譜もレコードもない。カフェア黒竜江ではじめてサワが唄ったのが本歌ということになるが、このように唄うのが正しいという原典はない。

その場の様子と気分によって自分なりに唄えばいい、いや、その



ように唄うしか方法がない。

じょうずとへたをわけける基準がない。自分の気分で唄って気分がよくなれば、それが最高の歌唱表現である。

で、この日、ヤマト・レコードにつめかけた女たちはだれもみないいい気分をあげわっていた。

顔色がいい。いくらか上気しているが、下品に興奮しているわけではない。

ビルディングのなかで審査がおこなわれている。

番号をよばれてはいつていった女が、しばらくして、出てくる。

落第だから出てきたが、失望の様子はない。

「くやしいなア。落第なのよ、あたし……」

そういう言葉に、言葉ほどの失望の調子がない。

「せつかくだから、ここでお弁当にしましょうか」

「あなたも落第、あたしとおんなじだ。そうそう、あたしもお弁当にしよう」と

なんの屈託もなく地面にすわりこんで、見知らぬ同士があつというまに仲良し、唄ったり、しゃべったり。

「ねーえ、あなた、明日もここへ来ないこと？」

「あした……さア」

「好きなんですよ、唄うの」

「大好きよ、そりゃあ、もう！」

「だったら、ねえ、明日も来ましようよ。約束しないこと？」

「ウフフ、来ちゃおうかしら。でも、うちには何ていえばいいのかな」

「あのねえ、いい考えがあるのよ。一次審査にパスしたから、こんどは二次審査をつけなくっちゃならない……」

キヤーツ、ヒヤーツの歓声があつちこつちにあがつて、それがあつというまに「もどれないのかな」の大合唱やら発声練習になる。

彼女たちは唄っていればいい。

歌手の審査なんかどうでもいい、というわけでもないが、とりあえずはここに来て、唄うのが悦び。

登利丸は納得した。

納得を超えて、いまは感激している。

「藤原さまはおよろこびだ。京の雅仁さまに、一日もはやくお知らせしたい。乙前さまにも、はやくよるこんでもらいたいものだ！」

(09)

ヤマト・レコード株式会社のビル、五階の重役室、相談役の山階逸男、重役の林も梅田も技術部長の四方修二も、ニセ・ケンペイたちも全員がウンザリ、ゲッターリ。

「何人ぐらい？」

「ざっと八千」

梅田が窓の外を見下ろしながら、憤然の口調でこたえる。

部屋には女が五人まとめてよびこまれ、ピアノにあわせてひとりずつ、「ナンノ掟があるものか」か「もどれないのかナ」のどちらかを唄うテストに挑んでいる。

朝からずーっとこれだから、もう聴きたくもない、見たくもない。へたくそだから聴きたくない、というわけではない。おしかけた女たちは——じつはこれがヤマト・レコードの連中にとっては大誤算であったのだが——全員、じつにうまく唄うのだ。

山階逸男の計画では、藤原資徳一派の女はとびきり上等の声と節まわしで唄うはずだから、すぐに発見できるはずだった。じょうずに唄う女が資徳の一味とかぎったわけではないが、それはニセ・ケンペイが得意の身元調査で、たちまち区別できる。

それが、どうだ、女はみんな声がよく、節まわしは絶妙、資徳一派の女なのか、ふつうの歌好きの女なのか、ぜんぜん区別がつかない。

新人歌手募集を途中でやめるわけにはいかないから、この調子な

ら、すくなくともむこう三週間は朝から晩まで「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」のテストにつきあわなくてはならない。それを思つて梅田重役が、もう部屋のなかには目もくれたくない気になるのは当然至極である。

と云つて、それなら、窓の外の光景がここをやすめるのかといふと、これがまた大変な具合だ。

ビルディングのある築地の一帯、大通りも横丁も、声に自信の女でびっしりとうまっている。

ヤマト・レコードの重役連中がこの女の大群に分け入る勇気があれば、数の割にはおそろしいものではないとわかるんだが、その勇氣はなく、ただただあきれ、おびえている。

ヤマト・レコードの内外に敵がいる。

築地は千代田の城から遠くはない。

その築地に、これほど多くの女の大群がおしよせているのにゲンブやケイサツがだまっているのは、二セ・ケンペイのケンゴ隊長がその筋に手をうっているからだ。築地の一帯が少々さわがしくなりますが、この聖なる御世に混乱をおこそうという不逞のやからを一網打尽にやつつける作戦です、しばらくは見つて見ぬふりをねがいま

す、と。  
八千の人数はおおいが、さわがしいというほどではない。秩序紊乱というには、しずかすぎる。

もしもヤマト・レコードが、二週間もつづくテストに恐れをなし、「テスト中止」と発表しようものなら築地の一帯は大騒動、「少々さわがしく」どころではなくなるのだ。

テストを中止するわけにはいかない、資徳一派を「狩り出す」可能性はゼロにちかい——これではたまつたものではないが、ヤマト・レコードはまさにその耐えがたきものに耐えねばならない。

それにしても、八千の女の大群！

「重役一同に報告ッ」

ケンペイがにぎやかに出入りするようになってから、ヤマト・レコードの社員の物の言い方やうごきが急にあらっばく、下品に、紋切り型になった。それを逸男は、掟がうまれてきた好ましい兆候であると、うれしがっている。

「重役一同に報告、テスト応募の女性の数は今日よりは明日、明日よりは明後日と増加すると予想されます。以上、報告おわり！」

「なにをツ、なにをいうんだ！」

「わたくしはただ、予想される事態の……」

「おかしいじゃないか。いいか、今日はこれまでに二百人ちかいテストをやった、夕方には六百人にはなるだろう。のこりの数は減少こそすれ、増加するはずはない。これは簡単な算術計算だよ」

「算術計算はそれでいいのですが、応募者には通じないのであります」

「なぜだ？」

「いちどテストをうけた女たちのほとんどが、くちぐちに「また明日も来ようネ、きつとヨ」なんて約束しているからであります。報告おわりッ」

ガッタン——ピアノストが椅子からすべりおちた。腰をさすり、痛そうに顔をしかめている。

腰の痛みよりは、明日になってもテスト応募者が減らないという深刻な予想からくる神経の痛みであろう。

林重役はおおきく、ポカーンと口をあけ、足元はすでにふらついている。四方修二は放心状態。

さすがに山階逸男だけはしっかりしている——ように見えて、  
「ゆるさぬ。これが、ゆるせるものか！」

椅子の肘をにぎりしめて、さげんでいる。

ピアノストが気をとりなおして椅子にもどり、ポロンピンピーロビヨロビーン、応募者は声をはりあげ、

あれが本当サ あの子にこの子  
いっておやりよ おとなにやなるな

逸男の勇氣も、ここで枯れた。

(11)

ニセ・ケンペイ隊はひまをもてあましている。

ヤマト・レコードの新人歌手募集に名をかりた「藤原資徳一派の狩り出し作戦」におけるケンペイ隊の担当任務は、逸男が「うますぎる、これはアヤシイ」と見当をつけた女の身元を追跡調査することだった。

楽しい仕事になるのが予想されたから、ケンゴ隊長をはじめ隊員一同おおいにはりきってビルディングの別室にひかえたのだが、いつちなつても逸男から「アヤシイ女、発見、尾行せよ」の指示が送信されない。

築地の一帯に約八千の女の大群、本来ならばニセ・ケンペイ隊は本物のケンペイのような顔をして勇んで鎮圧出勤しているところだが、今日の件については、その筋にたいして事前の諒解をとつてあるので、出勤するには至らない。

ヤマト・レコードの重役連中が疲労困憊のきわみにあるのはわかつているが、そうかといつて、かわつてニセ・ケンペイ隊が手を出すわけにはいかない。

窓の外には女の大群がおしよせているのを知つていても、手も足もだせない。危険な敵ではないとわかつているから放置しておいてもいいのだが、人民が五人あつまつたら疑惑の目をひからせよと教育されたニセ・ケンペイとしての習慣はいまや本能になっている、イライラしてくる。

「隊長、これは、どうなるんでしょうか？」

「大山ケンペイ、おれにもわからんさ。しかし、おどろいたよ、レコード歌手になりたい女が、こんなに多いとは、なあ！」

「隊長、自分はくやしくて、ならんのであります！」

「なにが？」

「女にくらべて、男どもの、なんとだらしないことか。ゲンジンにしてやるから名乗ってこいと、いくら募集しても、志願してくるものの数といたら、なさけなくなるほど少ない。この現実が、大山ケンペイはくやしくてならないのであります！」

「うーむ。そりゃ、まあ、レコード歌手とゲンジンをいっしょにするわけにもいかないが」

レコード歌手とゲンジンとを、魅力および立場の観点で比較すればどういふことになるかなど、いささか場違いの論争にふたりがふけているところへ、心身の疲労に耐えられなくなった逸男がやってきて、

「たすけてくれ、なんとかしてくれよ、ケンペイ諸君」

「とって、計画そのものは提携の条文どおりにすすんでいるのだから」

「これが、予定どおりと言えるものか。窓の外をしてみる、八千のだぞ、しかもこの八千の女のなかから藤原資徳一派の女を摘発する可能性はきわめてうすいときている。はずれもはずれ、計画はみごとにはずれた！」

「なんともいえず。なにしろ八千の大群だ、資徳一派の女のひとりやふたり、まぎれこんでいないと断定するのははやい」

「理屈では、そうなるが……」

「最後までやらぬうちは、あきらめてはならん！」

ケンゴ隊長、率直な心境。

みごと成功すれば、この聖なる昭和の御世の乱れを正しておみせする——その筋と約束したのだ。ここで逸男にあきらめられてはおいに困る。

「このわたくしとしても、あきらめたくはないのだ。とはいえ、この人数ではどうにもならない。隊長さん、この八千の女の大群を、

さわぎをおこさずに退散させる手はないものかね？」

「歌好きの女たちがレコード会社をとりかこんでいる、蟻が砂糖のかたまりにあつまつたのとおなじだ、簡単にはいくまいよ。まあ、雪でも降ってくれば……」

「ユキ……？」

逸男は窓の下にはしって、空をみあげる。

「雪やコンコン、降ってくれ！」

悲鳴みたいな叫びである。

そこへはいってきたのが、さっきのヒラ社員。

「報告いたします、事件は重大な様相を呈してまいりました！」

「事件」とか「重大な様相」とか、文字にするとまことに勇ましい感じだが、ヒラ社員の報告の口調には勇ましいところはぜんぜんなくて、つかれはて、きえんばかりにかすれている。「！」の強調記号についても「消えそうな、せつない感じ」と、わざわざ注記する必要があるくらい。

一同、ウンザリして重役室にもどり、ヒラ社員の報告をきかねばならない。

重役室のとなりでは、ピアニストが目もうつろ、指が勝手にキイをたたいてポローンピョローン・ピョロピョロピョーン、応募者の女の声だけがはりきって、

焼いて食おうと食うまいと

ナンノの掟があるものか

ケンペイも参加して重大報告に耳をかたむける。

ヒラ社員の報告によれば、なるほど事態は重大をきわめている。女がワンサとあつまっているのがこの東京の築地だとばかりおもうのはおおまちがい、浅草・神田・上野・吉原など、人出のおおいたころには女があつまって、「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」、そのほかの流行歌を唄って楽しんでるそつだ。

「さては、他社が我が社の真似をやりだしたな！」

「いいえ、そういうことではなさそうです」

「そうでは、ない？」

「新人歌手のテストではないのです。我が社のテストをつけた女が家にもどる途中で唄う、それを別の女がこんで唄ううちにいつのまにか大きな輪ができる、といった次第のようです」

「ケンペイは、どうしたのかね。浅草や神田は作戦の区域のなかにははいつていないはずだが」

「ケンペイもケイサツもグループも、とくに手は打っていないようです」

「何人ぐらいの……？」

「それぞれ五百人、というところですか」

「五百人ぐらいの女の歌の輪が東京のあっちこっちにできている、ということらしい。」

「東京だけではないらしいのです。たとえば鎌倉にも」

「カマクラ、神奈川県、あのカマクラ……？」

(第8章・終)



(51)

ここは鎌倉、鶴岡八幡宮。

境内の池は太鼓橋で東西にわけられ、東を源氏池といって島が三つ、西が平家池で、これまた島をうかべるが、こちらの池は四、三は産に通じて縁起がいいから源氏を、四は死に通じて不吉だから平家を意味するという、合理的で源氏鼻膺にかたよった呪術の設計になっている。

ながい参道には石灯籠がたちならび、無信心のものでも歩をすめるうちに厳肅な気分がたかまるようにと、ありがたい御配慮。

やぶさめ馬場をつきつたあたりの横手、舞殿をかねた下拝殿がある。

時代のふるい旅ごろも、それもなり傷んだのを着た女がひとり、小枝を片手にゆったりと舞い、唄う光景、昭和の神奈川県の鎌倉の鶴岡八幡宮だとはとうてい思えない。

しずやしず

しずのおだまき くりかえし

むかしを いまに なすよしもがなア

「いいぞ、ネエチャン。もっと、やれよ！」

「しずやしず、はっきりじゃ、しずかすぎていけないね。ほかの歌も唄ったら、どうだろうね。「上海リル」とか「ナンノ掟があるものか」とか、さ」

「だまれ、この野郎ッ。ここは神社の拝殿だぞ、そんな下品な歌を唄うわけにゃいかねえってことは、このネエチャンがよくこ存じなんだ。なあ、そうだろうッ、ネエチャン？」

神聖にして厳肅なる神社の境内である、神官が出てきて歌姫と群衆を追いはらう。

すると歌姫、抵抗もせず、うやうやしく一礼のあと、拝殿において参道に出、かえろうとする。

その後を追いつつ、群衆は、「ネエちゃん、もういちど唄っておくれよ。ナーニ神官のばか野郎なんか、ここまでは追ってきやしなによ」とせまる。

神聖なる神官のことを「ばか野郎」などと書いてはもうしわけない次第だが、群衆の切望の声である。

歌姫は足をとめ、唄う。

しずやしず

しずのおだまき くりかえし

むかしを いまに なすよしもがなア

唄い、舞いおわってあるきだすあとを、ぞろりぞろりと群衆が追う。この二、三日、こういった光景がつづいているそつだ。

「この二、三日？」

ケンゴがつつこんで、きいた。

「はあ……」

「わが社の大計画とは関係がないのかな？」

「その女こそ藤原資徳一派の一味なのではありませんまいか！」

(02)

梅田が勇む。

山師逸男も、勇む。

「かもしれぬ、とは思うがね。それなら、なぜ鎌倉なんかに出る、なぜ東京に出てこない？」

「なるほど」

梅田は半分納得、半分は不審の顔。

「えーと、ですね、鎌倉の八幡宮で、しずやしずの歌というと、これはあれではありませんかな。えーと、なんてったかな？」

思いだせないじれったさに、四方修二が頭をかきむしる。

そのあいだにも新人歌手募集大作戦のテストはつづく、ピアノがポロンピョロンポロピョーン、声自慢の女たちが入れかわり立

ちかわり、

あなたはあなた

わたしはわたし

ナンノ掟があるものか

梅田重役が身体をのりだして修二をはげます。

「四方部長、思いだしてくださいよ。きっと大事なことにちがいないんだ！」

「えーっと、あれですな。場所は鎌倉の八幡宮、歌は「しずやしず」

とくると、これはあれなんですよ、あれだ、もちろんこれではなくてあれなんだ。うん、だれでも知っている、ほら、あれですよッ」

「たとえば、常識といったようなもの？」

「そう、常識。知らないと教師にばかにされる……アーッ、そうだ、

義経だ、弁慶だ、静御前だ！」

「ああッ」と梅田。

「あれか！」と林。

「なるほど」とケンゴ隊長。

ひとり山階逸男は怪訝けげんの表情。

「ヨシツネとは……？」

「相談役さまは歴史にはくわしくないのでしたな。義経ですよ、源

義経、九郎判官義経ですよ。源頼朝の弟、幼名は牛若丸」

「ああ、頼朝の弟、ヨシツネ、牛若丸……そういえば知っているよ、知っているどころじゃないね、頼朝が伊豆に流されたあと、弟の牛若丸の行方がわからないので京はおおさわぎ、このわたしなんかも、もしかや牛若丸をかくまっつていやせぬかと家宅搜索なんかやられてね、あれはじつさい不愉快なものさ」

おわりの「家宅搜索は不愉快」のところでケンゴ隊長がピクリと眉をうごかして、つつかかる。

「神聖なる公務なのだ。不愉快とかなんとかいっても、そんな地方のタミの気分なんか気にしていたら、なにもできやしない！」

逸男もだまつてはいない。

「公務かなんか知らんが、不愉快は不愉快だね……そうだッ、あの家宅搜索もさだめし、京の法皇雅仁さまがわれわれ楽人へのいやがらせにやったことかもしれん。うーん、法皇さまよ、いいかげんになさってください！」

「まあまあ、相談役さま、お怒りはわかりますが、いまとなつては済んだこと」

「まあ、それはそうだ。しかし、そのヨシツネと鎌倉の八幡宮の女と、いったい何の関係があるのか？」

「静御前という女は義経の、そのー、つまりオメカケですよ」

「ごんじないのですか、の文句が出かかったのを無理しておさえる。山階相談役の歴史知識のひくさは知っていたが、まさかこれほどとは！」

「ヨシツネがオメカケ、信じられないよ。あいつはほんの子供だ、牛若丸だよ、牛若丸のヨシツネがオメカケなんか持つて、どうする気なんだ。オメカケじゃなくて乳母のまちがいじゃないのかな、乳母だというならはなしはわかるよ」

「静御前が義経の乳母だなんて、冗談じゃないですよ！」

「ひどい、ひどすぎる！」

ケンゴがケンペイ隊長の威厳をもって断をくだした。

「山階さん、みんなのいうとおりだ。静御前が義経の乳母であったなどというのは、ひどすぎる。静御前は九郎判官義経の愛妾であった、これはうごかすことのできぬ国史の常識であるよ」

(03)

山階逸男は四面楚歌。

雲行きがおかしい。

鎌倉の八幡宮におけるあやしき歌姫をこそ問題とすべきなのに、重役会議の議題はいつのまにか、逸男の歴史知識の低さを全員がよってたかつて証明しようという方向にすすんでいる。

「なにもわたしは、静という女が義経の愛妾であつてはならんと主張するものではない。愛妾であつてもよろしい、いや、たぶん、妾なのであろう。そこで、さて、その義経の愛妾がなぜ、どうして単身で鎌倉にあらわれて歌を唄い、舞うのであるか……」

「ああ、それが歴史なんですよ。そういうことになっている、だから歴史である……」

ああ、また歴史だ、歴史の常識だ！

林重役が説明にかかる。

「義経は兄の頼朝と対立して、やぶれ、排斥された。後白河法皇にうまく利用されたのだという説もあるが、ともかくも頼朝に排斥され、逃げなくてはならない。そこで静御前とふたり、手に手をとつて、えーと、あれは熊野だったかな、それとも吉野、ああそうだ、吉野だ、吉野の山のなかを逃げまわるうちにはなればなれ、静は頼朝に身柄を拘束される、悲痛、哀切」

「後白河法皇……それだッ、それが雅仁さまのやりかたなんだ！」  
「とらわれの身の静は鎌倉にひきたてられ、八幡宮の拝殿で舞い、唄わされるのです」

「鎌倉に？ おかしいな、頼朝が流されたのは伊豆だよ、伊豆と鎌倉ではだいがはなれているじゃないか？」

「いいのです、鎌倉でいいのです」

逸男に歴史の常識をおしえているときりがないから、林重役はかまわず、先をいそぐ。

「静は舞いと歌の名手ですから、さあ、ここで唄ってみよ、というわけです」

「イヤ味な男ですな、頼朝は。そのはなしになるたびに、わたし、思うんです」

「イヤ味ではあるが、その気がわからないでもない。憎い弟の愛妾をひつとらえ、さあ、ここで唄え、舞えと命令する、こりゃ、まさに快感そのものでしょう」

「そのまえに頼朝は、義経の行方を白状せよと静にせまったのでは

なかったですか？」

「ああ、そうだった」

「そうです。あたしはイヤです、どうしてもイヤです。義経さまの行方など存じませんとつっぱねる静を無理矢理に拝殿にのぼらせる、仕方なく、静は唄い、唄う」

しずや しず

しずの おだまき くりかえし

むかしを いまに なすよしもがなア

林重役の声は、どちらかというところダミ声である。ところが、この場合、ダミ声がじつにいい効果を発揮したのは意外であった。なすよしもがなア、とのばすところなんか自分の声に酔っているようで、ほんとうにいい感じだ。

いい感じ、それもそのはず、部屋はしずまりかえっている。ピアノニストは手をやすめ、二十人ばかりの応募者も唄うのをやめて、林重役が唄うのに聴き入った。

「すてきだわア、義経と静御前のラヴ・ロマンス！」

「歌詞がいいわネ」

しずの おだまき くりかえし

むかしを いまに なすよしもがなア

林重役が唄うのを手本に、ピアノニストが即興にピョロンポロン、ピンパンピョロリンリン。そこでまた、逸男とケンゴ隊長をのぞく全員の混声合唱。

しずや しず

しずの おだまき くりかえし

むかしを いまに なすよしもがなア

「やかましいッ、テストをつづけろ！」

「はいッ」

ピアノニストは、もうやけくそ、バローン・ドカーン・ディカディカダーン！

逸男は「やかましいッ」と怒鳴ったが、じつは、このピアノのほうがよくばどやかましい。しかし重役室の雰囲気としてはこのほうがふさわしい感じでもあるから、慣れというのはおそろしい。

パローン・ドカーン・ディカディカダーンの、伴奏というよりは騒音のなかで、

「静という女は義経の行方を知らない、つまり義経は遠くに逃げたのであったな。どこであったかな、あれは……」

知ってはいるのだが度忘れしてと、逸男はごまかしたつもり。

「奥州の平泉に逃げ、そこで戦死したということになっているが、なに、死んでなんかいるものが、津軽の岬から大陸に高飛びしたんだという説もありまして、これがなかなか……」

「大陸……？」

「ユーラシア大陸」

「インド・中国・シベリア・ロシア・アフガニスタン・イラン・イラク・トルコ・チベット……きりもなくひろいから手におえない」

「上海かもしれないし、ね」

「上海にリルという女がいるんですが、じつは静御前なのかもしれない」

「満州かもしれないよ。そして義経は黒竜江をわたって、シベリアで静と合流する」

逸男が目をキラキラかがやかせ、ガバーツと席を立つた。

「それだッ、それにちがいない、カフェー黒竜江だ。よめたぞ、藤原資徳の作戦が。あいつはカフェー黒竜江を陰謀の巢にしているんだ。声がいいので評判の女給のサワこそ、静御前の世をしのぶ姿にちがいない！」

ケンゴ隊長の目も山階逸男と同様にキラキラとかがやきだした。危険きわまりないかがやきである。

——サワよ、きこえるか！

——サワよ、そこは危険だッ、降りるな！

——サワよ、二階へ戻れ、二階の窓から外へ、はやく、はやく逃げろ！

(04)

ニセ・ケンペイのケンゴ隊長は以前からカフェー黒竜江をあやし  
いとにらんでいた。そしていま、山階逸男もあのカフェーこそ藤原  
資徳の陰謀の本拠だとみぬいた。

ふたりのねらいの焦点がカフェー黒竜江に合わされた。こんな危  
険な状況はあるまい。

ケンゴと大山ケンペイ、ふたりしかない控室で、ひそひそ声は  
ケンゴ。

「いいか、宍戸ケンペイの隊内居住命令を解除する」

「ばんざーい！」

「シィーッ。大声を出すな」

「これがよろこばずにいられますか。宍戸ケンペイとクサカベミヨ  
コのふたりの純愛がみとめられて正式に結婚できるなんて。隊長、  
ケンペイ一同を代表して感謝もうしあげるのであります！」

「バカモン、だれが正式な結婚をゆるす、などといったか！」

ひそひそ声の叱責、これは意外と迫力がある。大山ケンペイこと  
ケンサンはクシユンとなる。

「おゆるしになるのではない……それなら、なぜ？」

ひそひそ声をもっとちいさくした声でケンゴが説明するので、は  
なしの中身はよくわからないが、

「隊長、それは本当ですか！」

ケンサンの驚愕の声が部屋いっぱいひびいた。

「おおきな声を出すなというのに……」

「もうしわけありません。しかし、まさか、本当に本当なのですか、

隊長？」

「おれのいうのが信用できぬと……」



「いいえ、そういうことではなくて……」

「上司の言葉に疑問をもつなど、あれほど教育されたのをわすれるはずはない」

さあ、行けとせかされて出てゆくケンサンの驚愕の表情は消えない、ああざめている。

足のはこびさえもふらついて、幽霊の家出みたいだ。

「おかしいな。なにかあるぞ、これは……」

ビルディングの横から偵察していた登利丸が、ふらふらしながら出てゆくケンサンの姿を見て、つぶやいた。

登利丸の観察では、五人のニセ・ケンペイのうちでいちばん純情なのがこのケンサンだ。

ケンニこと宍戸六平太とクサカベミヨコが「結婚せよ、そして隊内に居住せよ」と命令され、それがじつは秘密を外に漏らさぬための拘禁措置にほかならないと知ったとき、いちばん胸をいためたのもこのケンサンだった、そういう情報もつかんでいる。

純情ケンペイのケンサンが顔色も青ざめ、ふらふらと出てゆく——  
— おかしい、なにかあるぞと登利丸の警戒感覚がうごきだしたのも無理はない。

ビルディングの外は女の大群で十重二十重に包囲されている。

ケンサンが幽霊の家出みたいな足取りで大群の抜け出るのは容易なことではない。

あっちの女にぶつつかって、

「まッ、スケペイ！」

こっちの女の背中に顔をぶつつけて、

「キヤーツ、気持ち、わるいッ」

こんな調子だから、登利丸がケンサンのあとをつけるのに苦労はない。

苦労はないが、さむいには閉口する。

さむいといえば京もさむかった。さむい京にくらべれば東京はあったかいから、さむさに弱い身体になった。これで京にもどると辛かるうな、なんて思いながらケンサンを尾行する。

(05)

——ケンサンは浅草にゆくはずだ。

登利丸は見当をつけている。

資徳も、「かれらがカフェー黒竜江のサワに気づくのは時間の問題だね、油断はできないよ」といつていた。

拘束され、拷問されれば、サワは仲間のことを吐いてしまうだろう。拷問に耐え、秘密をまもって死ぬのが素晴らしいことだなんていうのは今様唄いの美学ではない。

ケンサンは北にむかっている。

——おかしいな、浅草は東なのに？

数奇屋橋から左に折れ、新橋から市電に乗った。

田村町・虎ノ門・溜池をすぎ、六本木でケンサンは降りた。

まっすぐ霞町にすすめば歩兵第三連隊、右は歩兵第一連隊。

——こりゃあ、おかしいぞ？

ケンベイがグンプの駐屯地を見てまわるのは通常の任務、顔をひきつらせることはない、幽霊の家出みたいにふらふらと歩く必要はない。

ケンサンは第一連隊と第三連隊のあいだの道を通って青山一丁目に出、近衛歩兵第三連隊の北側を通って赤坂見附からまた市電に乗った。

ケンサンの四、五人あとから登利丸も電車に乗ったが、乗ってすぐ、

「やられた！」

登利丸、声にならない絶叫。

登利丸のあとから中年の男や女学生が四、五人乗ってきて、その

あとにつづいた目のするどい青年、こいつにはかすかに見覚えがある、おれを尾行しているんだ。

ケンサンを尾行したつもりの方が、じつは尾行されていた！  
ソクソクツときたのは、さむさではない。

——もうしわけありません、藤原さま！

満員にちかい電車のなか、危害をうけるおそれはないが、電車を降りてからどうするか、かんがえなくてはならぬ。

——いいか、登利丸よ、おまえも平安京では名を知られた人形回しじゃないか、こんなことでへこたれて、たまるものか！

——かんがえる、頭をつかえ！

——おれは、おびきだされた、これはまちがいない。おれが藤原資徳さまの一味であることは察知されてしまった。あいつらは今様唄いの女を発見できなかったが、かわりに、人形回しの登利丸を発見した。

——しかし、ケンサンがあおのビルから出たのはおれをおびきだすだけの目的ではない。あおの足つきは尋常ではない、青ざめた顔はふうつではない、大型爆弾みたいな、なにかしら重大な秘密を知っている顔だ。ということはいいか、ゆっくりかんがえるんだぞ——

——おれをおびきだして身分を確かめると、もうひとつ、その、なにかしら重大なことをやるのと、ふたつのことをやるためにケンサンは築地のビルディングを出て、連隊駐屯地をあるきまわったわけだ。

——フフーン。すると、だな、おれのをあとを尾けてきた、あの青年ケンペイはどうなんだ、知っているのか、大型爆弾みたいな重大秘密を？

——顔色をみればわかるはずだが、あいにくなことに、登利丸も青年ケンペイも進行方向左側の席にすわっているから、顔を見ることはできない。身体をねじれば見えないこともないが、そうすると、気づいているのを気づかれてしまう。

日がくれて、さむさのためにブルブルッと震えがきた。  
ふところに手を入れると、

——あれッ、なんだ、おれはこんなものを持っていたんだなア。  
人形まわしの舞台に手がふれた。クシヤクシヤッと折りたたむと  
着物のふところにおさまってしまいうぐらいの、簡単な仕掛けの舞台  
だ。

ひきだし、膝にのせた。

危険な状況にいる自分をわすれたわけではない。わすれるどころ  
か、おそろしくつて仕方がない。

恐怖を一時でもわすれたい気持ちから、というのがいいんだろう。  
登利丸は膝のうえで人形まわしの舞台をくみたてる。

「つぎはミヤケザカ……」

ガッタン、ゴットン——数奇屋橋までにはまだ間がある。

舞台をくみたてると、つぎには人形を回しててみたくなる。

クルリクルクル、歌は唄わないが、クルリクルクルとまわしてい  
るうちに恐怖がうすれてきたのがわかる。

電車から降りて、どうするか、名案がうかんだわけではないが、

とにかく恐怖がうすれてきたのはわるくない。

ほんの一分か二分のみじかい時間だが、人形回しに没頭したので、  
登利丸には三十分ほどにも長く感じられた。

気づくと、おおぜいの乗客が登利丸のまえにあつまっている。

横にすわっていたはずの老人も立ってきて、くいいるようにして  
人形回しに見入っている。

「いや、これは、その……」

顔に血がのぼったのがわかって、はずかしい、てれくさい。

「おもしろいものですな。なんというか、とても今の世の人形とは  
おもわれない」

吊り輪にぶらさがり、

「ほんとうにねエ。ずーっとむかし、これに似たような人形回しを

観たような気がするんだが、あれは、どこだったかなア」

背伸びしてのぞきこむ男。

ガッタン、ゴットン――

「ねえ、あんた。あたしや数奇屋橋までゆくんだけど、それまで、ずーっとやって見せておくれよ」

「そうだ、そうだ。なーに、車掌さんに叱られることはなかるうよ。チヨイト、車掌さんよ、かまわないだろうね？」

「ええと、さようですな。車内で人形回しをやってはならんという規則はきいたことがないから、まあ、いいでしょう。ただし、オカネのやりとりはいけませんよ、収益事業になりますから」

「オカネなんて、そんなこといつちや、このひとに失礼だよ」

登利丸はすっかりうれしくなった。

そうだ、いつそのこと、と思いついて、

ナンノ掟があるものか

玉の盃 まわせよ まわれ

呑んで吞ませて 吞ませて吞んで

グイツと吞もつと舐めようと

ナンノ掟があるものか

サワが唄ってはやらせたのはゆるいリズムだが、ここでは人形の滑稽なうごきにあわせる必要があるから登利丸は、チヨイチヨイツトー ハアー チヨイチヨイと速い調子でやってのけた。車内は爆笑また爆笑、あたたかい空気も満ちてきた。ガッタンゴントンも騒音ではなくて、伴奏のリズムになった。

「いいものだねエ、ほんとうに。あたしや、活動なんかより、このほうが好きなんだよ」

「数奇屋橋で降りないで、あたし、もっと先までゆこうかな」

(07)

スキヤバシ――あつ、そうだッ、青年ケンペイはどうしたのか？

青年ケンペイは登利丸の顔に頭をくっつけるようにして、人形をのぞいている。尾行しているのを気づかれていないとおもっている。やがるんだろう、癪にさわるやつだ。

ケンサンは——いた、いた。

ただひとり、はじめの席にすわっている。

顔はいよいよ青く、幽霊の間屋みたいで、にぎりしめた掌を膝においているが、よくみるとブルブルふるえている。

うーん、わかったぞ、青年ケンペイはなーんにも知らないんだ。

知らないから、こんなに陽気でいられるんだ。

「スキヤバシ、スキヤバシ……」

ドヤドヤツと、ひとが降りる。

ケンサンのすぐあとにつづいて登利丸は降りた。登利丸の背においかぶさるように、青年ケンペイが降りる。

「おい、ケンペイさま！」

ふたりのケンペイが、同時にピクツとしたのがわかる。いっしょに降りた客は顔をしかめて、やーだねエ、といった顔つき。

登利丸は青年ケンペイに正面きつて向きあい、

「きみは知らないだろう、知らないはずだから、おれがいつてやるよ。おれのうしろにいるきみの上官は重大任務をおおせつかつているのに、それをきみにいわずに、おれを尾行させたんだよ。あの上官はきみを信用していないんだよ。上官に信用されないなんて、つまらないとは思わないのかね？」

青年ケンペイはみるみるうちに悲しそうな顔になった。

「大山ジョウカンツ、この男のいうのは本当なんですか。つまり、ぼくを信用していないというのはい！」

「なにをいうのか、安岡ケンペイ。そいつは敵だぞ、非国民だぞ、非国民で敵でもあるものいうことを鵜呑みにしてはならん！」

青年ケンペイ、すなわちケンイチの名は安岡だ。

「はあ。ではありますが、信用されていないとは、いかに大山上官

の部下とはいえ、重大問題です、個人としての意地の問題でもありません！」

ソーラ、おもしろくなってきた。

「個人とか、意地とか、それはおまえ、危険思想の用語だぞ！」

「そんなことは、ありません。森の石松も個人の意地です、大石良雄も西郷隆盛も……上官は西郷や大石や石松が個人の意地ではないともうされるのですか！」

「そりゃ、無茶だよ」

「無茶でもいいのです。上官、いつてください、重大なる任務とは何でありますか！」

「いえといつても、おまえ、それが無茶というもので……」

ケンサンは進退きわまつた。

「ぼくを信用なさっているなら、どうか、いつてください、証拠です」

「ほらほら、大山さんよ、かわいい部下が涙をながしてたのんでいるんだ。部下を可愛がる気があるなら、重大任務について知らせてあげるべきだよ」

いい捨てて、登利丸は逃げだした。

(08)

数奇屋橋から省線電車の有楽町駅の方角に逃げた。会社がおわつて勤め人があふれている、逃げやすい。

「安岡、追えッ」

「はいッ」

追いかけることになると、ひごろきたえているケンイチに分がある。ガードの下までくると、ケンイチの足音がきこえるまでに追いつめられた。

——こつちに逃げたのはまずかった。どうせ捕まるにしても、一歩でも浅草にちかいところで捕まるべきだった。浅草まで逃げれば、カフェー黒竜江のサワに危険を知らせられたのに——

顔が火照るのは後悔の気持ちのせいか。

オデン屋がならんでいる、客の姿はみえず、不景気らしい。

どこかに飛びこんで、かくまってもらおうか、迷いつつ小走りしている、ガラガラッとガラス戸のあく音がして、いきなり片腕をつかまれた。

「放してくれ、追われているんだ!」

小声でいうのもかまわず、男——男らしい——は強いちからで登利丸をオデン屋にひきこもうとする。

——オデン屋の裏が敵の陰謀の本部で、そこへひっぱりこまれると、山階逸男の拷問が待っているんだ、おれは捕まったが、サワにはなんとかして逃げてほしい。

「いいんだよ、登利丸、おれだ、おれだ!」

ささやく調子の声。

「おれ……?」

店のなかにつれこまれ、裸電球のあかりで相手の顔を見たら、

「アアッ、多々丸!」

「安心して休むがいいよ、まだ先は長い」

オデンの鍋から威勢よく湯気があがっているが、客の姿はない。鍋のうしろで小皿をガチャガチャとあらっていた女が、ふりかえって、

「イラッシャーイ……ふふふ、登利丸さまア」

「ナミヨ!」

「やっぱり、もどってきたちゃったワ。東海道で京へ、京から中仙道に出て、それからまた中仙道を京にかえり、こんどは東海道で東京……ずいぶん長い旅をしたのに、登利丸さんとおわかれしたのが、

つい昨日みたい」

「もどってきたのかア」

「登利丸さん、あたし、ぜーんぶ、わかったのよ」

オデン鍋の横で多々丸が目パチパチやっている、照れかくしの



癖だ。

「ナミヨはなにもかも知ってるよ。つまり、藤原さまやおまえや俺とおなじように、ぜんぶ知っている。旅を急いだものだから」

「平安時代へ行ったり来たりのお秘密がぜんぶわかつちやっただ。でもね、登利丸さんは心配しないでいいのヨ、サワさんやハナエちゃんやヨシエちゃんに会うことはないし、もしばったり顔が合っても、あたしが自分で名乗らないかぎりには気づかれることはないんだから」

「藤原さまは？」

「よくもどってきたねって、よろこんでいただいたわ」

(09)

多々丸がナミヨをつれて東京に潜入する、この筋書きを書いたのは栗丸だ、栗丸が決心した。

二セ・ケンペイ隊と山階逸男とのあいだに提携が成立し、われらの大計画にたいする妨害が強化されるのはもはや避けがたい——云々  
- 209 -

登利丸と獅子丸は奮闘しているが、なにしろ手が足りない、多々丸の援助をおねがいするわけにはまいりませぬかと、資徳は率直に依頼した。

多々丸の存在が貴重きわまりないものであるのは十分にわかっている資徳だから、胸を痛めないわけにはいかなかった。

栗丸に万が一のことがあったとき、栗丸のあとを継いでかしらになるのは多々丸なのだ。その多々丸を、危険な東京に呼びだして働いてもらう。

法皇はまず、乙前の意見をきいた。

「資徳がこのようにもうしてきた。どうすれば、よいのかな？」

「君のおかんがえが、すべて……」

「しかし、今様唄いや人形回しの将来を思えば……」

「これらの将来などは、君のお言葉と思えませぬ」

「わたしがかれらの将来をかんがえるのがおかしい、とでも？」

「おかしゅうございます。なぜともうせば、かれらはすでに、はるかに遠い将来の、昭和時代の東京に出かけて働いているのではありませぬか。かんがえるより先に、われらの仲間はずでに将来に生きているのですよ」

にこやかに、乙前がいった。

「おおッ、そうであった。これは、いかん。いつもながら、おまえにはかなわぬな。また、やられたよ」

雅仁法皇から栗王丸に意見がつかえられると、

「いずれはと、覚悟しておりました。さっそく多々丸を行かせましよう。そしてこの栗王丸は、京の留守番の暮らしにはいります」

ナミヨは栗王丸のはなしをきくと、

「東京にもどります。父や母のところではなく、サワさんや八ナエちゃんやヨシエちゃんのいる東京にもどって、いっしょに唄います！」

「もどるのはよろしいが、サワたちに会うわけにはいかないよ、秘密を知っているのはおまえだけだから。それでも、いいかね？」

一瞬、ナミヨは沈黙したが、やがて唇をかねで、

「サワさんたちには会わずに、東京の、ふつうの女の子として多々丸さんといっしょに働く、それならいいのですね？」

「それで、かまわない。なーに、秘密をいわなければサワたちに会ってもいいのだよ。ただし、誓ってもらわねばならんが」

「誓います」

「だれに、誓いを……？」

「乙前さまに、誓います」

ナミヨは決然といい、つけくわえた。

「東京にゆけばふつうの女の子ですが、ほんとうのナミヨは今様唄いの女なんです、だから乙前さまに誓うのです」

栗王丸と多々丸が顔を見合わせた、ナミヨはすごい女になったものだなと、驚嘆の確認。

東京にやってきた多々丸が有楽町のガード下にオデン屋をひらいたのは、ここなら千代田のお城に近いのと、築地のヤマト・レコードを見張るのに便利がいいという資徳の判断からである。

「登利丸さんの人形回しを見ていたら、京や栗王丸さまのことを思いだして、もう、なつかしくて！」

「ええッ、あれを見ていた？」

「気がつかなかった、でしょ」

長いエプロンをパーツとぬぐと、なんとまあ、ハイカラな女学生の姿のナミヨが笑っている。電車のなかで、背伸びして登利丸の人形まわしをのぞきこんでいた女学生はナミヨだった。

数奇屋橋の停留所で登利丸がケンサンとケンイチを挑発しているあいだにナミヨはオデン屋にもどり、登利丸が逃げてくるのにそなえていたわけだ。

( 10 )

ケンサンは、ケンイチに登利丸を追わせたあともしばらくは数奇屋橋の停留所に立ち、下車した乗客が散るのを待っていた。このひとは私服のケンペイなんだってさ、イヤだわねという声にならぬ声、表情にならぬ表情にさらされる予想が憂鬱だったから。

ケンサンは、叫びだしたい衝動をおさえるのに苦労している——  
ぼくはほんとうのケンペイではないんだ、ケンペイごっこをやっているニセ・ケンペイなんです！

しかし、その言葉を口にすれば、どんなにおそろしいことになるか、これまたよくわかっている。ぼくはニセ・ケンペイ——これが本物のケンペイやケイサツの耳にはいったら最後、東京の街はあるけない。

ケンサンは築地にむかってあるきだした。

ケンゴ隊長にうちあけられた重大任務のことが胸に重い。

生来が気のちいさい男、いまは、築地のビルディングにかえって

ケンゴ隊長の顔をみるのが辛い。おれと、おまえと、ふたりだけなんだぞ、あのことを知ってるのは、わかっているんだろうな、というにちがいない隊長の表情が予想されて、気が重い。

ヤマト・レコードをとりまく女の大群にちかづいてきた。

女たちの気持ちはヤマト・レコードのビルに、姿勢もヤマト・レコードに向いている。ケンサンがすすめばすすむほど女の群れの密集度は濃厚になる、あるきにくい。

女の大群のなかを、顔は青ざめ、足取りもおぼつかないケンサンが苦勞してあるいてゆく、これがどうなるか、結果は知れている。

「ネエ、そんな景気のわるい顔をして、どうしたのよッ。歌を唄えば、そんなつまらない気分なんか、いっぺんに消えて飛んじゃうのよッ、ねえ、あたしたちといっしょに、唄いませよッ」

「さむそうな顔をして、お気の毒だわ。いっしょに唄いませようよ。唄えば、さむさなんかふっ飛んじゃうんだから」

「ナンノ掟があるものか」って歌なら、ござんじでしよ、知らないはずはないわよね。あたしたちといっしょに唄ってから、この焼き芋、たべましょ。雪がふりそうだけでも、あつたかい焼き芋たべれば、雪なんかへっちゃらよ」

焼き芋、おでん、わかい女によるこびそうな小間物売る小屋がけの店があつちこつちに出ている。

「焼き芋ですか」

ケンサンは空腹である。おもわず手が出て焼き芋にかぶりついた。あつたかい、うまい！

焼き芋の、甘くて熱い匂いにむて、ケンサンは悲しくなった。これが、たとえばケンゴ隊長から、あの重大な秘密をうちあけられる前であつたらどんなに気楽に味わえるだろうかとおもつと、余計に悲しい。

甘い焼き芋と重大秘密の板ばさみにうちひしがれ、ケンサンはとぼとぼとあるきだす。

「チヨイト、なによ、それじゃ、食い逃げじゃないの！」

「とんでもない。だって、これはあなたの、つまり、サービスではないのかい？」

「このスケベイ。だれがサーピスなんか、するものですか！」

「でもさ、いつしよに唄いませよ、っていったのは、そっちだよ」

「それは、いつしよに焼き芋たべて、なかよく唄いませよ、っていう約束のしるしなんだよ。焼き芋だけたべて唄わないなら約束やぶったことになる、食い逃げじゃないの！」

「そうだそうだ、このひと、食い逃げなんだってさ、いい男なのに食い逃げなんて、ガツカリだね！」

ケンサンは女の小隊にとりかこまれた。

危害をくわえられるおそれはなさそうだが、それとは別の、いうにいけない恐怖。身分をかせば、それこそ取返しをつかない大変なさわざだ。

「ここは無事に抜けねばならない。」

「焼き芋のオカネ、払います」

「ばかにすんじゃないよ。こっちはね、焼き芋売ってるんじゃないんだから、オカネなんかほしくはないの！」

「それじゃ、どうすればいいんだ！」

( 11 )

ケンサンが大声で怒鳴るなんて、めったにないから、じょうずな怒鳴り方を知らないわけで、それが女たちを恐怖につきおとした。

「どうすればいいんだ、なんていわれても、ねえ……」

「あしたちだって、では、こうしなさい、なんていえるものじゃないわ」

「そうなのヨ、こまっちゃうのヨ」

ケンサンをいじめるつもりなんかない、気のいい女たち。

「いいよ、わかったよ。唄えばいいんだろうー！」

「でもねえ、歌を唄うのは、こころの底から唄うのでなければ、お

もしろくもなんともないのよ」

「そうなのよ。そうでなければ歌のカミサマに失礼なのよ」

「こころの底から自然に唄えば、だれでも、そりゃあじょうずに唄えるんだから！」

「焼き芋たべたかわりに歌を唄うというんじゃ、まるであたしたちが強制したようで、へんだとおもっワ」

「女たちもこまっている、ケンサンもこまっている。」

「たがいに助けあえばいいではないかというわけには、この場合、いかない。」

「ケンサンは女たちにたいして、こまっている。」

「女たちはケンサンにたいして、こまっている。」

「こまるのはおなじでも、女たちのほうが、いくらか分はいい。雪が降ってきてさむいが、それならそれで今夜は夜通しでここに立ちつくし、唄いまくって朝をむかえればいい。」

「ケンサンは、そうはいかない。築地のビルにもどり、ケンゴ隊長に報告し、それからただちに浅草のカフェー黒竜江攻撃作戦に参加しなくてはならない。」

- 2 1 4 -

「こころの底から唄えば、ゆるしてもらえるんだね」

「ゆるす、なんて、そんなんじゃないのよオ」

「それにさア、このひとがこころの底から唄ってるのかどうか、だれにもわからないわけでしょ。ほんとうに、こまつたわねエ」

「女たちの困惑につきあってはもらえない。なんでもいい、こころの底から歌を唄い、この場をきりぬけようとケンサンは決意した。」

「ぼくは唄うよ、こころの底から。だから、聴いてくれ」

「あんたが自分で、こころの底から唄う気になれば、だれも、ちがう、こころの底から唄ってはいない、なんていええないのよ。それがいちばんいいことね」

「で、なにを唄うの？」

「あのね、「ナンノ掟があるものか」を唄うわけには、いかないんだ」

「いい歌よ、あれは。唄いやすいし」

はなせば長くなる、はなせば身分をいわずにはいられない、しかし打ち明けようとケンサンは決意した。

「じつは……ここだけのはなしにしてくれないと、こまるんだが、ほくはケンペイごっこのニセ・ケンペイなんだ」

( 12 )

ポカーンと口をあけ、眉をひそめる女。

びつくりした表情のまま凍りついた女。

腰をぬかした女。

逃げようとして、うしろの女と正面衝突した女。

両手で顔をおおった女。

「おどろくのも無理はないとおもうけど、うそじゃないんだ、仕方がないんだ。ケンペイは綻ばかり、綻が洋服を着てあるいているようなものだから、「ナンノ綻があるものか」を唄うわけにはいかない。ねえ、わかってくれるだろ？」

「顔色がわるいから、ふかい事情はあるんだろうと思ったけど、そうだったの、ケンペイなの！」

奇妙奇天烈ではあるが、同情あふれる解釈だ。

女の小隊の輪がキユキユツとちぢまった。ケンサンの暗い表情の秘密を知った者として、自分たちは、このひとの秘密を洩らさないようにしようという連帯の確認。

「だったらさア……」

秘密を知った者の、あたたかく、ささやく声。

「「もどれないのかナ」や「波よ聞いてヨ」なら、いいんですよ」

「ええと、あの、このひと、なんていう名前だったかしら？」

「大山三郎でありますッ」

「大山さんのところが、ほんとうに、もどりたいな、って思っているのかどうか、それが問題だわね」

「そういうことになるわね。あのね、大山さん、あんた、アアもど

りたいなアって思うこと、ないの?」

「それが、その、ぼくはまずしい家にそだったものだから、あまり、その……」

「まずしさは関係ない、気持ち、こころ。子供のころのことを思うと、気持ちが苦しくなるほどなつかしくなること、ない?」

「いまなら三度々々のメシはたべられるし、着るものにも不自由はないから、子供のころのことを思っても、なつかしくなることは、正直なところ、ないですねえ」

雰囲気は当惑。

だが、女たちは、当惑してもケンサンは見捨てない。

「大山さん。大山さんがいま、いちばん真剣に思っていることは、なに?」

「浅草に黒竜江というカフェーがあります。ぼくは一刻もはやく黒竜江に行って、女給のサワを逮捕しなければならぬんです!」

「それ、お仕事?」

「仕事です。ケンペイごっこの仕事をやっているんです」

「サワというひとは、なにをしたの、ドロボー?」

「ドロボーを逮捕するのはケイサツです、ケンペイはそんなことはやりません!」

ケンサンは胸を張る。ケンペイごっこの職業に誇りをもっているのだ。

「フーン?」

「まあ!」

「びっくりしたわ、あたし!」

自分の仕事に誇りをもっている女は、ここには少ない。ケンペイごっこという職業がどんなものか、よくはわからないにしても、誇りをもっているケンサンがめずらしく見えたから、一斉に尊敬のまなざしをそそいだのである。

「サワは悪い女だけれど、ドロボーではない、とすると……」

ひとりの女が目をつぶり、口をモコモコさせていたかとおもつと、



「できたワ、きいて！」

サワよ 逃げるな 逃げてはならん

ぼくはケンペイ はりきるケンペイ

みだれきつたるこの世をば

アアうつくしく たださんと

イザイザゆかん 浅草へ

悪の華さく ソーレ カフェー黒竜江

「大山さん、こういった気分なんでしょ？」

「それッ、それなんです、いまのぼくの気持ちは！」

「カフェー黒竜江にはサワっていうわるい女がいて、悪の華がさいてるの？ あたし、なんか、こう、ソクソクッとしてきた！」

「だったら、大山さん、この歌を唄わなくてはいけないわ、こころの底から唄うのよ。こころの底から唄えば、かならず天に通ずるのよ、あんたの思いが、ねッ」

ケンサンは、しかし、はずかしそつだ。

はずかしいだけではない。さつきから女の小隊にかまれているものだから、女の匂いに圧倒されている。むせかえりそうになっている。

歌を唄うには口をあけねばならないが、ちょっとでも口をあけたなら最後、のどにつままっている焼き芋がムウエーツの事態になりそつだ。

( 13 )

雪が強くなってきた、冷えもきつい。

東京、昭和十一年二月二十五日の夜は清冽に更(ふ)ける。

ここ、築地のあたりはちがう、なにせ約八千の女の大群だ、女の匂いと歌声とで清冽な空気もにこり、あたたまっている。

サワよ 逃げるな——ケンサンの気分にはピッタリの歌だ。

サワよ 逃げるな——こころの底から唄いたいが、この、あ

たたかい空気のなかでは唄いにくい、唄う勇気がでない。

「サア、大山さん、勇気を出してッ」

「ぐずぐずしていると、その、サワという女、雲を霞と逃げちゃうわよッ」

——クモヲカスミトニゲルなんて、この女はなんと古風な文句を知ってるんだ。

——ああッ、クモとカスミ、それが欲しいんだ、俺は！ この、むせかえるような女の匂いからのがれて、クモとカスミのなかで楽に息をつきたいんだ！

「あのオ、せつかくですが、その「ケンペイの歌」はぼくにはむずかしくて唄えない。かわりの歌では、いけないかな？」

「こころの底から唄いますか？」

「ええ、それは、もう、こころの底から！」

「では、唄ってくださいな」

さくら さくら

野やまも里も 見わたすかぎり

かすみか雲か 朝日におう

さくら さくら 花ざかり

さくら さくら

やよいの空は 見わたすかぎり

かすみか雲か 匂いぞ出<sup>い</sup>ずる

いざや いざや 見にゆかん

ムウエーツとなるといけないから、のどをキューツとしてみても、しずかに唄った。

気のいい女たちは、当惑やら不満やら。

「大山さん、だめよ、それは。こころの底から、なーんていつて、つまりはここから逃げだしたいっていうだけのことなんでしょ？」

「だからこそ、こころの底から、なんです」

「あたしはね、大山さんのいうのにうそはないと思うわよ。こころの底から、ほんとうに、ここから逃げだしたいと思っているのが歌

になったのなら、すばらしいじゃないの。それが証拠に、いまの歌はじょうずだったわ」

「チョイト、あんたはこのケンペイさんに、焼き芋の食い逃げされてもかまわないっていうのかい！」

「だって、さあ」

「ダメでもダメでも、ないの。このケンペイさんは、あたしがせっかく作った「ケンペイさんの歌」が好きだ、自分のいまの気分ピッタリだって、はつきりいったんだよ。それならば、むずかしいから唄えない、なんてことになるはずはないじゃないか！」

「気のいい女たちだから、言い合いになる。 ああでもない、こうでもないと言い合うのは歌を唄うのおなじことだ。」

女の小隊の輪がいちだとせまくなる。

匂いに攻められていたケンサンに、肉体による圧迫の苦痛が加わる。

「唄いたいのはやまやまなんだけど、唄うと気分がわるくなるような気がして……」

正直なところを告白した。

「おかしいな。「さくらさくら」が唄えるのに「ケンペイの歌」は唄えない、なんて」

「それはきつと、この大山さんが心配ごとをかかえているからじゃないの？」

「心配なら、その心配を歌にして唄うのがいいんだけど……」

「それははつきりしているのよ、カフェー黒竜江のサワさん、そうでしょ？」

「なーんだ。それならはなしは簡単よ、みんなで「さくらさくら」を唄いながら浅草までいっしょに行く、これでいいじゃないの！」

「きいたような声——いつのまにか女の小隊にもぐりこんだナミヨの声だ。」

「そうだわッ、そうしましょう。一石二鳥じゃないの！」  
とうとう本降りになった雪。

雪は、八千人の女の大群の上に降る。

雪のなか、ナミヨの提案に教唆された女の一小隊がケンサンを囲んで、浅草めざして進軍する。

(第9章・終)

(01)

「ホチヨートレツ」

「カシラーミギツ」

歩兵第一連隊、歩兵第三連隊、そして近衛歩兵第三連隊の構内がさわがしい。

真夜中の非常呼集、整列、つぎつぎに出てゆく。雪のなかへ、出てゆく。

ケンゴ隊長はケンサンこと大山三郎二セ・ケンペイに重大機密任務を負わせた、歩兵の第一と第三、そして近衛の第三連隊にあやしいうごきがある、探索してこい、と。

なにもなければ、そのまま浅草のカフェー黒竜江にゆき、女給サワをつかまえてドロをはかせろ、容疑は「レコード歌手でもなく、大道芸人の鑑札ももたずに不穩なる歌をやらせた罪」である、と。そしてケンゴ隊長は、文字にするさえもおそろしくて気も凍る命令をケンサンにつたえた。

それというのが――

「ケンペイ穴戸六平太の隊内居住処分を解除し、内妻クサカベミヨコにはヤマト・レコードの新人歌手募集に応募することを命ずる。

穴戸ケンペイは、もしミヨコが合格したらマネージャーになる、との触れ込みでテストに同行する」

「お言葉をかえすようですが、クサカベミヨコはプロの歌手ですよ。新人歌手のテストなんか、うけるまでもない」

そんなことは先刻承知の顔つきでケンゴはひそひそ声になり、おそろしい命令をケンサンにつたえた。

ミヨコとヤマト・レコードとの専属契約は切れたことになっている。だから、ミヨコが新人歌手のテストに合格したと発表しても、八千人の女の大群は怒らずに解散するはずだ、ミヨコの歌のうまさを知ってる連中ばかりだから。

「クサカベミヨコが「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかナ」をレコードに吹きこむのですか？」

「そんなこと、だれがやらせるものか！」

「それなら……」

「発表するのはそれだけじゃない。ミヨコが合格と発表しておき、すぐそのあとから、奇ッ怪千万の事実が発覚したと、追いつきをかける。ミヨコの歌がうまいのも道理、この女こそは、聖なる昭和の東京を攪乱しようとのたくらみで平安王朝から送りこまれた歌のスパイの一味である、とな」

「穴戸ケンペイの運命は……？」

「穴戸ケンペイも一味の片割れ、ということになるのサ」

上官のいうことに疑いをもってはならぬとおしえられたのを忘れたのか、とケンゴ隊長に恫喝されたケンサンは、ケンイチこと安岡竹蔵ケンペイをつれて歩兵連隊の様子をさぐりにゆき、乗りりあわせた帰りの電車のなかで登利丸の人形回し的一幕があり、ケンイチに登利丸の跡を追わせ、そして八千人の女の大群に迷いこみ、いまはこうして女の一小隊にとりかこまれて、浅草めざして進軍しつつある、という次第。

—— おれは浅草に行って女給サワを逮捕する。藤原資徳とかいう男の一味だからサワを逮捕する、それはいいとして、それならなぜ、穴戸六平太やクサカベミヨコまで逮捕しなくてはならないのか？

サワよ 逃げるな 逃げてはならん

ぼくはケンペイ はりきるケンペイ

女たちは美しい声で「ケンペイの歌」を唄い、そのあいだにケンサンが、

さくら さくら

野やまも 里も 見わたすかぎり

女たちにくらべれば美声とはいいかなるが、きくにたえぬというほどでもない声と調子で唄いながら、一歩々と浅草にちかづく。

雪が、降る。

しずかに、雪が、降る。

昭和十一年二月二十五日の夜の築地にも銀座にも、神田にも上野にも、もちろん浅草にも雪が降る。

神田のはずれ、だれともなく、「つかれたわねエ」と声が出て、小休止。

「まだ焼き芋がのこってるわよ」

「すごいッ。あたし、気分がわるくて、どうしたのかしらと思ったら、なんでもないので、おなががへっただけなのよ」

「大山さんにも一本」

またまた焼き芋、もう食えない。おれが欲しいのはカスミかクモなんだ！

黒竜江に入ってミヨコを、ああ、そうじゃない、ミヨコはケンペイ隊にいるんだから、黒竜江はサワだ、そのサワを逮捕して宍戸ケンペイといっしょにして、ケンサンの頭がドタバタと混乱してきた。

「浅草、まだか？」

「大山さん、浅草、知らないのオ？」

「知ってはいるさ。浅草まで、カフェー黒竜江まで行くのがイヤになっちゃったんだ」

「大山さんは、カフェー黒竜江で女給のサワを逮捕するんですよ？だからあたしが「ケンペイの歌」をつくってあげたんじゃないの」

「サワを逮捕しなければ、大山さんはニセ・ケンペイ隊をクビになっちゃうんでしょ？」

「クビか、外出禁止の隊内居住か、どっちかだね」

「クビか、さもなければ隊内居住……？」

「ぼくの同僚の宍戸ケンペイは、江差にかえってニシン獲りになるつもりでクサカベミヨコと結婚しようとした。隊長命令で結婚はできたけど、もうひとつ隊長命令が出て、隊内居住、外出禁止になっただんだ」

「クサカベミヨコって、あの、ヤマト・レコード専属の？」

「そのクサカベミヨコ」

「そうだったのかア。ミヨコのレコードが出ないから、どうなったのかなアって思ってたの。クビにしないで隊内居住なんて、ケンペイ隊って、ひどい」

「大山さんはケンペイ」っこの仕事に誇りをもってる、そうなんですよ？」

「さっきの「ケンペイの歌」はぼくの気持ちにピッタリ」

「なら、サアサア、出発タタ！」

休憩して元気がもどったか、さア、浅草めざして出発！

みだれきつたる この世をば

アア うつくしく たださんと

イザイザ ゆかん 浅草へ

悪の華さく ソーレ カフェー黒竜江

「二、三步すすんだところで、

「ああッ、たいへんだッ！」

「どうしたの、ケンペイさん？」

「大事な仕事、わすれていた！」

「だから、それをやりに、みんなで浅草に行くんじゃないの」

「別の仕事なんです」

ケンペイ隊本部に連絡し、宍戸ケンペイとクサカベミヨコがヤマト・レコードの新人歌手募集に応募させるように段取りをつける、その仕事だ。

これこれしかじか、とはなすと、「ケンペイの歌」の作詞作曲家の女が、

「簡単よ。大山さんが手紙を書けば、あたし、とどけてあげる」

「すまないね」

「お礼なんか、いいのよ」

そういうわけで、あらためて、



「シュッパーツ！」

(03)

「降るね」と藤原資徳。

「降りますね」と獅子丸がうけ、

「やりますか、一杯、多々丸のオデン屋」

「やめておこうよ。おなじところにあつまるのは避けたほうがいい。

どこに敵の目があるか、油断はできない」

築地に歌好きの女が八千人もあつまったときいて、見に来た。オデン屋で祝杯をあげたいのやまやまだが、それよりは、八千人の女の大群をはやく見たい。

「いたぞ！」

有楽町の駅を出ると、いる、いる。

こっちに三人、あちらに五人、あつまるともなくあつまって、唄ってる。雲のしたで、唄ってる。

新人歌手のテストをうけにきたのに、いまはもう、テストなんかどうでもいいのよといってるみたいな、唄ってるだけで楽しいという顔ばかり。

- 2 2 5 -

銀座四丁目をこえて、築地にむかう。

資徳は女の大群を全体として見ている。

獅子丸は、あの群れ、この群れの歌を聴いている。目よりは耳をはたらかせるのが資徳とはちがう。

「おどろきましたな」

「うん。これは、これは……」

いや、その、そういうことではなくて——獅子丸は資徳の誤解に戸惑う。

「わたくしの知らぬ歌が、こんなに多いとは——」

「昭和の東京の流行歌について獅子丸の知識は相当なもの、なら

んでいたが、ちがうのかね？」

「いささかの自信ありとこころえていましたが、だめですな、降参です」

「降参はおおげさにしても、この大群の数にはおどろかないのかね。わたしとしては、このほうがおどろきよ」

「もちろん、おどろいては、いるのです。そこで藤原さま……」

ふたりの側へやってきた若い女、

「ねえ、おじさんたちも唄いなさいよ。あたしたち、今夜はもう帰らないの」

誘うのに愛想のいい笑顔をかえして、

「京の雅仁さまのことが、気にかかります」

「気にかかる……？」

「これではたして雅仁さまは、およろこびになるであらうかと……」

資徳には意外な獅子丸の言葉であった。

資徳は足をとめ、獅子丸よ、お前の不審をのこらずはなしてみな  
いかねと、うながす姿勢。

うながされた獅子丸、歌 歌 歌の洪水のなかで、ゆっくりと語  
る。

- 2 2 6 -

——この女たちはヤマト・レコードの歌手募集に応じたのだが、テストの順番をまつうちに唄いはじめ、そのうちに、テストなんかどうでもいい気分になった。八千人の大群がいつまで解散しないのも、そのためでしょう。

——彼女たちは唄う、ひたすら唄う。わたしのつくった「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかな」や「波よ聞いてよ」や、そのほか、あれこれの歌を唄う。率直にいつてわたしはうれしい。自分の歌がこれほど唄われている、レコードにもならないのに、「こんなに唄われている。

——しかし、ふと、雅仁さまの立場になってみたらどうなのだろうと、かんがえてみた。今夜の、この情景を、雅仁さまはおよろこ

びにはならないのではなからうか、はっきりとした理由はないが、ふと、そんな気がしたので。

——そこで、いま、その理由というのを——

「待てッ。その理由というのを、わたしがかんがえてみようかな？」

「どうぞ、藤原さま」

「今夜だけだ、それがいけない、雅仁さまのお気に入らない、そういうことではないか？」

「それだッ、それなんですよ！」

歩こうよと、資徳が獅子丸をさそった。

足を止めていると興奮しすぎる、興奮しすぎはよくないと資徳が判断した。

歩きだして、

「獅子丸に、はじめて、ほめられたよ」

「藤原さまはおっしゃっておられました、今様唄いの女なら、こんなテストには興味がない、だから「テストをうけてはならんぞ」と指令する必要もない、と」

「あれをおぼえているんだね。わたくしは、あるとき、ふかくはかんがえなかった。今様歌の訓練をうけた女たちは格別のはずだ、ぐらいしか、かんがえなかった。しかし、それだけではないのだな。サワやハナエやヨシエたちは毎日毎晩唄っている、だからレコード歌手には興味がない。毎日がレコードのような生活だから」

築地に近い、女の大群は密集している。

八千の大群、そのひとりひとりが歌を唄ってるんだからさわがしいはずだが、さわがしくない。

声に自信の女が、いい気持ちで唄う、そういうときの歌唱はさわがしくない、しずかで、うつくしい。

声に自信があつて、いい気持ちで唄える女は他人が唄うのを聴くのもうまい、そういうこと。

「藤原さま、やはり今夜は、オデン屋で一杯というわけにはいかないようです」

「獅子丸のいいたいのは、よくわかるよ。築地にあつまってきた女たちが毎日毎晩、いい気持ちで唄えるようにならなければ雅仁さまはおよろこびにならない、と」

「そうなのです。ここにあつまっている女たちは、ふつうの日には歌も唄えない、そういう状況に生きています。雅仁さまは、はるか歴史の後方の平安京に生きていらっしゃるのに、このことがおわかりになっている」

「毎日唄えないから、レコードを聴く」

「レコードとチコンキです」

「雅仁さまは、レコードやチコンキは楽器ではない、したがって敵ではないとおっしゃるのですが、この東京にすれば考えをおあらためになりましょう」

「レコードやチコンキは人間ではない、だから敵ではないと雅仁さまがおっしゃるのもまちがってはいない。レコードを聴かずにはいられない生活を強制するもの、それをこそ、われらの敵としなければならぬ」

「ホチョートレッ、ですな」

「カシラーミギツ、さ」

(04)

歩兵連隊は進軍する。

昭和十一年二月二十五日の夜の東京の雪を蹴って、進軍する。

兵士の顔に緊張の色があるのは、腰の弾盒(だんこう)に実弾を詰めているからだ。

実弾を詰めているからには敵を攻めるわけだろが、敵なんて、いったい、この東京の、どこに？

「ケンゴ隊長ッ！」

ヤマト・レコードの重役室にとびこんできたのはケンシこと、若山ケンペイだ。

「若山ケンペイ。ねむくって、たまらないんだ、おれは」

新人歌手募集のテストは一時中断され、重役たちはソファ・で仮眠をむさぼっている。

ケンゴ隊長は鉛のように重い瞼をやっとの思いであけていたが、とうとうたまらなくなつて、ごろんと横になつたばかり。

「もうしわけありませんが、重大報告であります！」

「ねむいんだ、はやくいえ！」

「はあ、それがその……」

いふべきことが自分で信じられないとき、ひとはこつこつ顔になる。

ケンシは勇気をふるいおこした。

「もうしあげますッ、敵が、敵がやってまいります！」

「敵が……？」

「はあ、敵がやってきます、攻めてくるのであります」

「攻めるって、どこへ……？」

「は、こちらに、いや、もといッ、我が方へ、であります」

「どこへ、攻めてくる……？」

「さようであります。どこへ攻めてくるのでありますッ、報告おわりッ」

ケンシはパーッと拳手の礼をすると、くるりと背をむけて出てゆこうとする。

敵が攻めてくるという極々の重大報告をしておきながら、自分はさっさと出てゆくのはおかしなものだが、手も足もガチガチにこわばっているのを見ると、敵が攻めてくる——おそろしい——どうしていかかわからない——怖いからとにかく逃げよう、という連想の心境になつているらしい。

海のむこうとか、戦国時代とかいうなら敵が攻めてくるのはあたりまえ、怖いといつてもはじまらないが、昭和の東京のまんまんな

か、敵なんかいるはずがないのに、敵がいて、攻めてくるという、あるほど、これは怖い。

「なにをねぼけている。ここは東京、畏れおおくも千代田のお城のすぐそばだ、敵なんかいるわけがない！」

ケンシは、せつかく逃げようとしたのに失敗して、なおさら恐怖の色が濃い。

やとのごとで踏みとどまり、恐怖にみちた声で、

「歩兵連隊が攻めてくるのであります。どうしましょう！」

「歩兵連隊……？」

「はあ。歩兵第一、歩兵第三、そして近衛歩兵第三連隊であります

ッ、報告おわり！」

「コラー、逃げるな！」

出てゆくこととするケンシを怒声でひきとめ、

「歩兵第一、歩兵第三、それに近衛歩兵第三連隊、ああッ、アッハッハー、そうか、やつぱり、アッハッハッハー」

「隊長は、そんな、アッハッハッハーなどとお笑いになりますが、これは訓練出動ではないらしいのであります」

「そうさ、訓練出動なんかではない、そのとおりさ。オイッ、若山ケンペイ、心配するなよ、これは反乱だ、クー・デターだ。こつちを攻めるのではない、政府だよ、くされきつた陸海軍の上層部と資本家を攻めるんだ」

「ごぞんじだったんですか、隊長は！」

「若山ケンペイ。おれたちはケンペイこつこのケンペイ隊、ケンペイ精神に満ちあふれているんだ、これくらいの情報をつかまずにおくものか」

ケンゴは胸をはる。

クー・デターときいて、ケンシもいくらかは落ちついた。

「まえからおしえていただいていたければ、こんなに怖い思いをせずすんだものを、みずくさいじゃありませんか！」

「ハッハッ、ゆるせ、ゆるせ。秘密がもれてはならんのでな」

(05)

カンラカラカラと豪傑わらいのケンゴ隊長の顔が、急にこわばった。

正面から見ているケンシの顔が、ケンゴより、もっとこわばる。

「隊長ッ」

「オイッ、あいつは、あいつはどうしたんだ！」

「あいつ、といますと……？」

「あいつだよ、ほら、ほれ、なんと叫びたかな、あいつだ、あいつ、

ああよわった、名前が出てこない」

「隊長、ドワスレでありますか？」

「ううーん……」

「ドワスレにはワスレナグサの根を弱火で煎じて呑むとよろしいと、おばあちゃんがもうしてありました。おためしになりますか？」

「ワスレナグサは効くだろうが、弱火で煎じるのでは時間がかかってしょうがない」

「しかし、ほかに手がなければ……」

「うるさいッ、あいつめが、そうだ、大山ケンペイだ、安岡ケンペイだ。あのふたりはどうした、鉄砲玉の使いじゃあるまいし、出ていったきり、帰らない」

歩兵連隊に不穩のうごきがある、探索せよとケンサンこと大山ケンペイに指令を発し、ケンサンのあとをケンイチこと安岡ケンペイに追わせ、さらにまたそのあとを若山ケンペイことケンシに尾行させた。

ケンゴ隊長は無駄ばかりやっているようだが、ひとを疑うのがケンペイ隊の組織原則であってみれば、仕方はない。

秘密はケンゴとケンサンだけが知っている、これまたケンペイ隊ならばこそだ。

ケンサンが何も報告してこないから、ケンゴは、歩兵連隊の反乱

は中止、あるいは延期されたのだらうと思ひ、安心して横になったところをケンシにたたきおこされ、歩兵連隊が行動に出たと知らされた。

様子がおかしい。

「大山ケンペイは、どうしたんだ。若山ケンペイ、おまえに大山ケンペイを尾行させたんだぞ」

「はあ、大山ケンペイは女の一小隊から提供された焼き芋をめしあがられつつ、いっしょに浅草方面へ移動されております」

「浅草方面へ……浅草の、どこへ？」

「はあ、悪の華さく、ソーレ、カフェー黒竜江、これを唄って行進してありましたから、浅草のカフェー黒竜江めざしての行進とおもわれます、報告おわりッ」

「なんだとツ、悪の華さく、ソーレ、カフェー黒竜江、そんな歌を大山ケンペイが唄っているのか、女たちといっしょに？」

「いや、大山ケンペイはケンペイ隊員としての義務とセンスに忠実でありたいと、さくらさくら、野やまも里も、であります」

- 2 3 2 -

(06)

ケンサンも駄目なニセ・ケンペイではない、「歩兵連隊に反乱のきざし、なし」と報告してきたからにはそれなりの情報収集あつてのことだらう。

だからこそ第二の行動目標の浅草に移動しつつあるわけだらうが、そうするとケンシが「歩兵連隊が実戦出動してきた」と報告してきたのは、どういうわけなのか？

めちやくちやである、ドタバタである。

「安岡ケンペイはどうした？」

「安岡ケンペイは藤原資徳一派の登利丸を尾行していましたが、有楽町のガード下で行方を見失いました。報告おわりッ」

「見失ったか、しょうがないやつだ。で、それから、どうした、安岡ケンペイは？」



「わかりません」

「わからん？ おまえには安岡ケンペイを尾行して行動を監察する義務があったのだぞ、わからんですむとおもうのか！」

「はあ。しかしその、安岡ケンペイを尾行するよりは歩兵連隊の行動を、隊長によればクー・デターであるそうですが、そっちを監視するほうが重要と判断いたしました！」

「ああ、そうか」

「わたくし、若山ケンペイが推測いたしますには、安岡ケンペイはまもなく歩兵連隊のクー・デターに捲きこまれるものとおもわれま  
す」

「クー・デター」とはおだやかではない、したがってこんなに簡単に使われていいはずがない。

しかも、使っているのがケンペイ隊長とその部下だ、これは「クー・デター」の濫用というべきではないか、ふたりは反省すべきではないか？

「おい、ちょっと待て、おまえ、たしか、「クー・デター」といわ  
なかつたか？」

「わたしがいったのは「敵が攻めてきます」です。それを隊長が「心配するな、クー・デターだから」と説明した、いや、説明されたのであります」

「おかしいな……？」

ケンゴ隊長は首をひねる。

隊長がこんな不安な表情をみせるのはめずらしいから、ケンシもつられて不安そうに、ケンゴの顔を下からのぞく。

「隊長……？」

「だまれ、しゃべるな。これは、おかしい、たしかに、おかしい。  
へんだなア？」

「」

「おいッ、いま何時だ？」

「」

「何時だときいてるんだ！」

ケンシはモジモジしている。

「だまれ、しゃべるな」といわれたのに答えなくてはならない立場の矛盾のせいかとおもわれるが、それにしても、このモジモジはただことではない。顔が真っ赤だ。

「おいッ、返答せよ、何時だ？」

ケンシは反抗を断念、決心して、腰帯につるした鎖をひきあげ、銀色に鈍く光る時計をおそろおそろケンゴ隊長の目の下に捧げた。

「十二時半……ふーむ、やっぱりおかしい」

ケンシがすばやく時計をひきもどす、その一瞬、ケンゴ隊長の鍛えられた目が光った。

「おいッ、それは、銀時計ではないか、くさりも銀ぐさり！」

ケンゴはケンペイ隊の隊長、声よりも目が鍛えられ、するどい視線の武器になっている。

ケンゴの視線に射竦（いすく）められると、たいていのひとは震えあがってしまう。

ケンシもケンペイだが、ケンゴ隊長にくらべれば鍛錬の度合いがはるかにあまいから、「銀時計ではないか、くさりも銀ではないか！」と怒鳴られて、返事もできずに身を竦めるばかり。

「たかがケンペイごっこに二セ・ケンペイのくせに銀時計に銀ぐさり、けしからん、ぜいたくすぎる！」

ケンゴ隊長の激怒、ケンシ隊員の恐怖の原因がわかった、これだ、銀時計と銀ぐさりだ。

隊長の時計がニッケルかなにかの安物なのをケンシは知っている、自分の時計が銀ぐさりつきの銀時計なのを知られた以上はただではすむまいと、覚悟した。

覚悟したから、あきらめた、もうダメであるとあきらめた。

今現在の時間が何時であるのかについて、ケンゴは重大な疑惑をもっていて、それを解決するためにケンシに確認の質問を発したの

だが、そこへ登場したケンシの銀時計の魔力によって魂がひっくりかえり、ケンペイの本能ともいうべき部下いじめに精力を傾倒する結果になった。

そもそもケンペイ隊とは からはじまって、 銀時計などはブルジョアの持物 田舎のカネ持ちの親戚から送金してもらっているんだろう 給料に不満があるなら上申せよ、おまえなんか軍法会議ごっこで即刻死刑判決 と、おもいつくかぎりのいじめをやった。

(07)

ケンゴ隊長の部下いじめには慣れっこのケンシ、 もうしわけありません 反省します おっしゃるとおりです などと機械的に応じているうちに、何がこようとヘツチャラだという気分になってしまい、そのあげくには、ケンペイ隊員になってからこんなに気分のいい日はないというくらい快適そのものの気分になって、ケンゴ隊長の部下いじめの的になっている我が身も忘れ、

ダン・デイデイ・デイデイイン・ジジ・タンタン

チラチカ・チカチン・チンチャカチン

ウッフフ・フフ・フフ・ヒヤラヒヤラチン――

鼻歌を唄いだした。

呆然唾然のケンゴ隊長、

「おい、若山、どうしたんだ……？」

よびかける声にさえ不安の色が満ちている。

ケンシはここでわれにかえり、もう駄目だ、ケンペイゴッコのケンペイ隊の軍法会議で死刑判決だと観念した。

―― ああ、いなかのオバーチャーン！

「おい、なんだ、それは？」

「なんでもいいんです。どうせ自分は、つまり若山ケンペイは、軍法会議で死刑になるんですからッ」

「すねるなよ、悪気あつてのことじゃない。おまえを立派なケンペイに育ててやりたいばかりに、こころを鬼にしての艱難辛苦サ。だから、ねえ、その タン・デイ・デイ・デイ・デイ・ジジ・タンタンというのは、なんのことだね?」

「ああ、これでありませうか、これを唄いながら行進しているのであります」

「行進てーと……?」

東京地区標準語では「行進と、いうと?」と発音さるべきものが、ケンゴ隊長の癖で、切迫して興奮すると、なまって「行進てーと?」となる。

「だから、その、クー・デターですよ、歩兵連隊の反乱軍ですよ」

「そうだッ、それだッ、それにちがいない。おい、いま何時だ?」

ケンシはまたまた銀のくさりをひっぱって銀の時計をとりだし、

「一時半になりました」

おしえてやったのだが、ケンゴは銀の時計にもくさりにも目とまらず、

「一時半!」

隊長は一時間ものあいだこの自分をいじめていたのでありますぞ  
といたい気分のケンシだ。

「若山ケンペイ、これはおかしいと思わぬか?」

「おかしい、というと……?」

「クー・デターとか反乱といったものは、ひとめにふれぬように、こつそりとやるのがいいとは思わず。だがしかし、こつそりと、といったって、限度というものがある。こんな真夜中にうごきだして、これはクー・デターであるぞ、なんていったって、だれも気づきはせぬ、そういうものではないか?」

「そういえば、こつ、隊長のおっしゃるのにも理屈があるような気がしますね、クー・デターはドロボウじゃないのだと……」

「そうさ、まさにそのとおりさ。クー・デターも反乱もドロボウではない、堂々たるものであるべきだ。電光石火、パアッとやって

成功したところへ朝日がサーツとのぼってくる、そういうふうでなければならんと、おれは思うんだよ。そうじゃないか！」

「隊長は赤穂浪士のことをおっしゃっていらっしゃる！」

「吉良邸への討ち入りが何時だったか、くわしくは知らないが、めでたく吉良上野介の首を切りおとして主君浅野長矩の怨みをはらし、血染めの白鉢巻きの晴れ姿、一回うちそろって高輪の泉岳寺へと向かうところにサーツと朝日、ここでなければ絵にもクー・デターにもならない」

「そうです、そのとおりです！」

「この時間の歩兵連隊の出勤、どうかんがえたって遅すぎらア」

「遅すぎるといつか、早すぎるといつのか……」

「すぎる、すぎるよ」

ケンゴとケンシ、完全に意見が一致した。

意見の一致を確認したら、こんどは妙な気分になった。

妙な気分で、ふたり、顔を見合わせる。

(08)

おれたちふたり、なぜ、こんな妙な気分になったのか、わからない。

わからないから、ますます気分がわるい。

「おい、しっかりしてくれよ。もしも、これがクー・デターではないとすると……」

「クー・デターでなければ、われわれケンペイ隊の出る幕はないのです」

「そのとおりなんだよ」

これ以上はない、深刻な状況。

とつぜん、廊下のむこうの部屋で奇怪な物音、ひとか、けもの叫び声のよつである。

「おーッ」

「はいッ」

駈けだしたケンシのほうでケンシよりしっかりしている。

「なんだ、あれは？」

「ピアノのひと、うなされてるんです、「ナンノ掟があるのモカ」夢のなかで弾いているんですね」

「そうか。いや、あいつの気持ちもわかるなア。一日じゅう「ナンノ掟があるものか」の伴奏をやらされて、これがまだ十日以上もつづくっていうんだから」

「なにがなにやら、わからなくなっちゃったな」

隊長のまえではいささか無礼なケンシの言葉づかいだが、いまや気弱なケンゴ隊長、ケンシの無礼を咎める余裕はない。

ダン・ディディ・ディディイン・ジジ・タンタン

ためいきをつくような、ケンシのハミング。

「歩兵連隊の連中は、そういうふうな、つまり ジジ・タンタンなんて唄いながら行進しているのか？」

「いいえ、これはハミングですよ。じっさいには、あの、隊長、ここで唄って、いいんですかア？」

「いいともさ。歌でも聴かなくっちゃ、たまらない気分だもの」

威勢はいい歌なんですがね、とケンシは、まるで自分がつくった歌でもあるかのように謙遜して、

泪羅（べきら）の淵に 波さわぎ

巫山（ふざん）の夢は みだれ飛ぶ

混濁の世に われたてば

義憤にもえて 血潮わく

ぜんぶで十節の「青年の歌」を、ケンシは照れかえった風情で唄いでしたが、途中から自分の声に酔ってる様子になり、唄いおわたときには軽い興奮の気分さえうかべていた。

「威勢がいいに違いはないが、楽しくはない歌でしょう？」

「むずかしい文句がおおくて、紙に書かなけりゃ、覚えられない。

とにかく威勢はいいや。しかしおまえ、つまらない歌だというわり

には、ずいぶん気分を出して唄っていたじゃないか」

「図星をさされた、といった表情のケンシが説明にかかる。

「自分でもおかしな気持ちなのですよ。隊長にさそわれてケンペイ隊……この仲間にはいるまでは、いやな歌だなあとおもっていました。それが、ニセ・ケンペイになってからというもの、なにか唄うとなると、すぐにこの歌が出てくるんです、ダン・デイデイ・デイデイ・ジジ・タンタン……」

もういい、やめてくれというようにケンゴ隊長は手をおおきく振る。

「三上卓というひとの作詞作曲で「青年の歌」というんだそうです  
が、「昭和維新の歌」の別名もあるとか……」

「昭和維新、か。それにしては、だよ、第三節の ああ、ひと栄え、  
国ほろぶ、の文句はまずいじゃないか」

「とんでもない、ここにこそこの歌の精神あり、というものじゃない  
んでしょうか。これがまずいなんていつてしまうと……」

「いやいや、おれはだね、藤原資徳の一味がこの文句を聴いたなら  
と、仮定の状況を想定して心配している。あいつら、非国民の集ま  
りだからね、「国がほろんで民が栄える、おお、そりゃ結構じゃあ  
りませんか」なんていう意見を誘発するような結果になりかねない、  
つまり、ヤブにへびじゃないかと……」

なおもケンゴは額に手をあて、なにかかんがえているようだった  
が、

「ああ、芭蕉だ！」

「ばしょう……？」

「松尾芭蕉だよ、「おくのほそ道」だよ。「国やぶれて山河あり、  
城春（しるはる）にして草木みたり」という有名な文句がある、あ  
れにそっくりなんだな」

「ばしょうというのは、「古池や、かわずとびこむ水のおと」とい  
う俳句をつくった、あのひとのことですか？」

「そうね」

「そうですか……」

ケンシは芭蕉よりも俳句よりもまだ「青年の歌」のほうに興味があるから、

「リズムはマーチ、行進には似合いです」

「クー・デターをやるうというのに、こんな歌なんか唄ってちゃ……」

「ああ、おい、ケンシ！」

「隊長！」

おお、そうだよ、そうだろう、そうなんですよ、そうでなくって、どうする——心中に万歳をさげぶケンゴとケンシ。

「クー・デターなんかじゃ、ないんだ！」

「歌合戦だ！ 八千人の女の大群と歩兵連隊の歌合戦だ！」

「山階逸男のやつめ、おれを出し抜こうとは！」

「そういえば、山階相談役の顔が見えませぬ。ほかの重役連中はグツスリねむりこけているのに」

「大山ケンペイをうたぐって、わるいことしたな。おい、若山ケンペイよ、大山ケンペイにあやまっておいてくれよ。そうだよ、そうさ、大山ケンペイが偵察に行ったとき、歩兵連隊では、その、威勢がいいばかりの歌、ジジ・タンタンの稽古をやっていたんだ。

だから大山ケンペイは、これは反乱ではないと判断した。あいつは、完璧に任務をはたしたんだよ」

「浅草へ急いだのも、それでわかります。歌の名人のサワという女が出てくると、女の大群の威勢があがって歩兵に分がわるくなる、だから、はやいうちにサワの身柄を拘束しておこうという作戦なんですよ」

「そこまではかんがえなかったが、おまえのいうとおりだ。さすが大山ケンペイ、打つべき手は打っておるな」

ケンゴは腕をくんで、

「しかしだなア、なにからなにまでゴチャゴチャばかり、これから先は、いったい、どうなるんだ？」



状況がゴチャゴチャ、これから先がどうなるのか、ケンゴはわれながら判断がつかなくない。

まずは京都の法皇雅仁さまが、おせっかいにも昭和の東京に密使を派遣してきた。歌を唄わせることで人心を正しくする、やわらかくする、とかなんとか理屈をつけて。

ヘーン、余計なことを、しやがる。

人心なんか、どうなってもかまわん。

世がキューンと治まっていさえすればいいわけだから、雅仁さまの密使は弾圧する。

ヤマト・レコード相談役の山階逸男とかいう男、法皇雅仁に恨みがあるとか、ないとか、鎌倉の源頼朝を決起させるとか、させないとか、わけのわからんことをいつているが、味方にして損はないとみたから提携して、法皇の密使の藤原資徳一派の女どもを 狩り出す作戦 をたて、実行した。

八千人もの女の大群がおしよせたのはおどろきだが、このなかに藤原資徳一派の女がまぎれこむ可能性は高い、あきらめることはない、最後までテストをやればいいんだとケンゴは決心したが、山階逸男は堪忍袋の緒を切ったらしい。歩兵連隊と連携をつけ、女の大群との歌合戦にもちこみ、唄い負かして解散においこむ作戦にきりかえたようだ。

スカーツとしたものがケンゴの頭を通過した。

状況が鮮明に把握された。

「山階のやつ、やつぱり地方人、たかが八千の女の大群におそれをなして歩兵連隊に支援を依頼するとは、なア」

「堂々たるところが無い」

「しかも、おれをうらぎった」

「隊長ツ、うらぎられたままで、ほおっておくのですか？」

「冗談じゃない。うらぎられたら応戦する、じゃないと、やられち

「やっぞー！」

「では……！」

「若山ケンペイ、出動だッ」

「出動、承知いたしました！」

ケンシがダダダダーッと階段をかけおり、三階から二階の踊り場、背中の上からケンゴが、

「若山ケンペイ、止まれ！」

「はあッ」

「正直なところを答えろ、いいなッ」

「正直にお答えいたします」

「歩兵連隊が唄っている デイデイ・デイデイインと、「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかな」と、歌としてはどっちが上出来なのか、正直に答えろ！」

ケンシはグウツと詰まる。

「詰まるな、こわがるな、時間がないんだ！」

「……………」

「たのむよウ、ケンシケンペイ、おねがいだ、いってくれ！」

「隊長はそれほどまで……もうしあげます。「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかな」には笑いと哀しみと、そのほかにも楽しさ、親しみ、暖かさといったものが全部そろっています。歩兵連隊が愛唱する「青年の歌」は肩肘はった威勢、緊張感がありますが、笑いも哀しみも暖かみも、ヒトが懐かしいと感じるものは、なーんにもありません！」

「そうか。よく、いった！」

「それで、どうなります？」

「気になって仕方がないんだ、不安に胸がしめつけられる……………」

(10)

雪は降る。

八千人の女の大群はビルディングを包囲するかたちに群れて、唄っている。

真夜中、しかも雪、歌声はいくらかしずかになったが、五人に一人が唄っているとしても千六百人が唄っている。

真夜中、しかも雪、歌声は遠くまで、鮮明に響いてつたわる。

合戦ははじまっている。

歩兵たちは、こちらでは二十人ほどの小隊、あちらでは単独、女たちに歌の合戦を挑む。

泪羅の淵に 波さわぎ

巫山の雲は みだれとぶ

兵士は手をあげ足をふみならして唄い、女に挑む。

挑戦された女たちは「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのか」や「波よ聞いてよ」はもちろん、知ってるかぎりの流行歌で応戦する。

「おれの予想どおり、あきらかに差が出ている」

眼光するどいのは山階逸男、どこで手に入れたか、粗末な衣装、暮らしにはこまらないが、こうみえてもれつきとした生活困窮者でありますといった様子で着込んで、ひとこみにまぎれて歩きまわる。

女が歩兵を圧倒している。

歌としての出来はともかく、声や節まわしではもともと勝負にならないから、歌の合戦にはなっていない。

だが、この合戦を仕組んだ山階逸男は失望してはいない。失望どころか、狙いはピッタリ、そういわんばかりに目を光らせて見守っている。

山階逸男が「差が出ている」という、その「差」とはなんのことだ？

「だめよッ」

兵士が女にいたずらをしかけたみたいだが、そうではなくて、

「だめなのよ、あなた、そんなに興奮すれば音程が外れちゃうでしょ。ふつうのように、いままでとおなじで、たっぷりとした気分で唄えばいいのよ」

「そうなのよ。このひと……あら、あたしまだ、このひとの名前知らないんだけど……このひとのいうとおりよ。ヘイタイさんだからといって唄い方がまずくていいというわけにはいかないでしょ。しずかに、ふつうに唄うのがいちばんいいのよ」

な「るほど、この女、くさいぞ、一応の見当をつけておいて逸男は別の女に近づく。」

焼いて食おうと——ヒーツ——音程を外してしまう女がいる。

これはちがう、資徳一派の歌唄いがこんなへたな唄い方をするはずはないときはなして、また別の女のそばに寄る。

山階逸男は執拗な性格、藤原資徳の一派の女が歌合戦に参加しないはずはない、かならずまぎれこんでいると確信している。

新人歌手発掘の歌唱テスト作戦、資徳一派の女はかならず応募してくると見当をつけたのだが、せいぜい五百人とふんでいたのが八千人の大群に膨張してしまつて、どうにもこうにも処置がつかなくなつた。

あわてて歌合戦による誘い出し作戦にきりかえた。

その筋に手をまわして近衛連隊や歩兵連隊に出動してもらい、築地にあつまっている女の大群に歌合戦を仕掛けた。

仕掛けはうまくいった。女の大群と兵士たちが正面からぶつつかつて、入り乱れ、歌の合戦。

ふだんの調子を外してしまう女、あくまでも自分の音階をまもつて唄う女、ふたつにわかれる。後のほうの女のなかに、かならずまぎれこんでいる、につっき非国民、藤原資徳一派の女が！

がオデンをむしゃむしゃとやっている。京からやってきた多々丸とナミヨが有楽町のガード下ではじめたオデン屋とは別のオデン屋である。

部下のケンシ隊員とのあいだに、これまでになかった親近感がうまれた。

ケンゴ隊長は、竹串のタコのほかにコップ酒をおごってやっても損にならないような気分になさなっているが、勤務ちゅうの立場を配慮して竹串のタコのオデンだけに抑制している。勤務がおわり次第、コップ酒を追加する予定。

「このタコ、硬いけど、タコは硬いのがいい、歯ごたえがある」

タコの硬さについてうんちくをかたむけるケンゴだが、ケンシは返事をしない。ケンシはタコよりもっと大事なことが気になっていて、それについてケンゴ隊長の言葉をききたい。

オデン屋にはいるまえに、歌合戦の現場をあるいた。

ケンゴは「フォーム、フーン」とうなずきながら、あっちこつちと場所をかえて歌合戦を観戦し、オデン屋に足をはこびながら、

「なるほどね。こうして目のまえで比較して聴いておると、くやし  
いが、「青年の歌」はだめだな、太刀打ちできない感じ」

「唄うというよりは叫ぶ歌ですからね。ところで隊長、さっき、気  
になっって仕方がないとおっしゃった、あれは？」

そのとたんにケンゴはけわしい表情、オデン屋めざして早足にな  
り、串のタコにかぶりついて、「硬いけど、やわらかいよりは歯ご  
たえがある」というまで、ギューツと口をつぐんでいた。

タコを仲介にしてケンゴ隊長が和解をもうしこんでおいでになっ  
たとおもわれる。

そこでケンシ、竹串のタコを一口やってから、「およそ食べ物と  
いうものは、やわらかいよりは硬いほうが味わいがありますよね」「  
ぐらいの返事をしておき、それからおもむるに、「ねえ、隊長、さ  
っきの、あれは？」というふうにもってゆくのが順当だろう。

ケンシがタコの串に手をのばしたのが合図になり、  
「歩兵が負けるよ。あんな歌で、なにが歌合戦だ！」  
「ええ、それは……」

ケンシの気分は釈然としている。

歩兵の負け、わかりきったことだ。

ついさつきも、ふたりのまえで、

「どうしたのよ、ヘイタイさん。その、おかしな歌を、もっとも  
っと唄いなさいよ、さけびなさいよ」

「おかしな歌でも、唄ってはいけない理由はないのですから、さあ、  
唄いなさい」

挑発され、気をとりなおした兵士たちは、

### 昭和維新の 春の空

正義にむすぶ ますらおが

唄いはするものの、おわりまで唄いきる元気はない。

気のいい女が多い。

なんとかして兵士の歌を聴いてあげようと思うが、兵士の歌声は  
彼女たちの耳にはとどいても胸の奥まではとどかないし、かといっ  
て、雪雲をつきぬけて天空かなたに昇ってゆく勢いもなく、はらは  
らと雪の地面に落ちて積もるばかりだ。

歌声の死骸である。

昭和十一年二月二十五日の夜の東京の築地のあたりの地面には、  
兵士たちの歌声の累々たる死骸のうえに雪がつもり、そのうえにま  
た歌声の死骸、そしてまた雪の積層状態になっていた。

そういうわけだから歌合戦の結末は知れている。

それなのにケンゴ隊長、オデン屋にひっこんでからもまだ兵士の  
敗戦を気にしているらしく、ケンシには不思議でならない。

「歩兵の負け……それが、どうかしましたか？」

「皇軍（こくぐん）に敗戦はない、敗れるよりは死ねとおしえられている兵士が

負ける、すると、どうなるかね？」

「アアッ……！」

「兵士は実弾をわたされている。それが心配なんだ、おれは」

「やはり、最後はクー・デターということに……」

「こんな場面で実弾ぶっぱなしてもクー・デターなんていえるものじゃないが、単純なものもすくなくないからね、歌で負けたら鉄砲で勝負ッ、となりかねない」

( 12 )

藤原資徳と登利丸、獅子丸は有楽町のガード下で雪を避けている。

歌合戦は有楽町あたりでも展開されている。

歩兵が唄う「青年の歌」には肝もつぶれる思い。

「歌詞の筋としては、この世がみだれているから正しく改める、と  
いうことになっていきますな」

「世を正しくする、なんていうのは天や神の仕事だからね、ヒトは  
神に祈らなければならぬ。だがこの兵士たちは、天や神に祈る気  
持ちがまるでないままに唄っているんだ。顔が真っ赤になっている  
のは、神の代わりを人間がやるんだという、りきみのせいだろうね」

「とにかく、元気いっぱい大声で唄えばいいんだと、それだけで  
訓練されているのじゃないかな」

「なお、わるいよ。元気とか大声とか、唄うにはいちばん邪魔なも  
の。だって、歌は切望なんだからね、元気なら唄う必要なんてない  
じゃないか」

「すると、この女たちは元気ではない……と？」

登利丸には少々意外な獅子丸の見解であるようだ。

「これを元気というなら、まちがってるね。彼女たちは、すくなく  
とも昼間は元気じゃない、しあわせでもない。だから、こうやって  
歌を唄いにあつまってるのさ。雪が降るのに、帰ろうともせず」

獅子丸の見解が登利丸を感動させた。登利丸が肩をおとし、フー  
ッとふかいためいきをついたので、わかる。

「ヘイタイさんだって悲しかろうに、それなのに悲しい歌を唄えない、これはもつと悲しいことなんだな」

「悲しいところを、威勢のいい、傲慢な歌でごまかしている。ここにはごまかしが効くからね、残酷だ」

歌の合戦に負けた兵士は肩から銃をおろし、かなしそうに地面を見つめる。

それをそのままにしておく女たちではない。

「そんなつまらない歌はやめて、ねえ、「もどれないのかな」とか

「上海リル」、「二人は若い」とか、たのしい歌を唄いましょうよ、あたしたちといっしょに！」

「そうよッ。ねえ、知っているんでしょ！」

「知ってはいるんです、でも、唄えないんです」

「アッラ、マ、どうして、なぜ？」

「グンジンは勇敢でなければならぬ、からであります」

「でもサ、あなたたちはヘイタイさんでしょう、ヘイタイさんとグンジンさんはちがうじゃないの？」

するどい質問に兵士はたじたとする。

「それはそうなんです、グンジン勅諭（ちよくゆ）はあるがヘイタイ勅諭はない、したがってヘイタイはグンジンの一種と見なされるべきであると……」

グンジン勅諭とかヘイタイ勅諭なんていうのが出てきたから、ここでは女たちがたじたとした。

「そんなむずかしいこといわないで、さあ、唄いましょう」

「あたしたちといっしょじゃ、いや、とでもいうの——」

「とんでもない……のであります」

「いやでないなら、さあ、いっしょに唄うのよ——」

二、三人の女がグイッとつめよった。

わかい、というより、まだほんの子供の顔の兵士がすっかりおびえてしまい、



「こつちに寄らないでください、おねがいです！」

さげんで、地面から銃をもちあげ、にぎりしめ、近寄る女の顔に食いつくように両眼をギョロリ、

「ああ、ネエチャーン！」

「そういうおまえは、ああッ、邦太郎！」

「ネエチャーン！」

「邦太郎、どうしておまえが、こんなところに……？」

ネエチャンが、ぶつつかるように邦太郎に抱きついた衝撃なのか、邦太郎の、驚愕にわななく指があやまって引金を引いてしまったのか、

ダアーン――

降る雪――深夜――そして、あたり一面、ゴマを煎るような発射音。

一瞬、しずまりかえった。

沈黙の一瞬が永久につづくのを、だれもが祈った。

これでいい、このほかには、何も起こってくれるな！

雪よ、もっと振れ。降って、降って、すべてを凍らせる！

歌の合戦に負けてこわばっていた兵士たちの表情に赤みがもどり、ほがらかで、健康な表情になる。

「ケンゴ隊長ッ、われわれは、いったい、どうすればいいのでありましようか？」

「いまは、なにもしない。見ているだけ」

「いいんですかア？」

「八千人の女の大群は自然に解散になる、歩兵は連隊宿舎にかえる、それでおわり。われらの出番はそのあと、いそがしくなるぞ、超過勤務手当を出せるかもしれんな」

「超過勤務手当……本当ですか？」

「出せる、だろっ」

「勤務の内容は？」

「まだ、わからん。たのしみに待つんだな」

「超過勤務手当が出るなんて、信じられないなあ！」  
幸福の予感に感激するケンシの横を、弾をうちつくした歩兵の小隊が退却してゆく。

(13)

「藤原さま、ここから姿を消した歌好きの女たちは、明日からは唄わなくなるのではないのでしょうか？」

藤原資徳と登利丸、獅子丸は数寄屋橋のほうへあるく。

夜はまだふかい、雪は降る。

「心配にはおよぶまい。そもそも、大勢であつまって唄うのは自然ではないんだからね。ひとりで、しずかに、熱いところをこめて唄うのが歌というものさ」

「登利丸よ。藤原さまのおっしゃるのは、おれにはよくわかる。京の宮廷で、えらそうな顔をした連中をまえに和琴を弾いていたころのおれは、ひとりで琴を弾いていられるところがあつたなら、どこへなりとも飛んでゆくのにと、あこがれていたんだからな」

「それはそれとして、今様唄いはそのはいかんぞ。ひとまえでなくては稼ぎにならぬ」

「今様唄いは稼ぎだからな……あれッ、なんだ、あれは？」

雪あかりを透かすように、獅子丸が腰をかがめる。資徳も登利丸も獅子丸の視線の行方を追った。

八千人の女の大群は散ったが、去らず、つめたい雪のうえにうすぐまっつ朝になるのを待つ数も百や二百ではない。

うすぐまる女の顔を、ひとりずつ点検するようにのぞいている男がいる。

物取りではなさそうだが、といって、知人を探すには荒っばい。あたりにひとつのうごきがないだけに、男のうごきは目立つ。

三人は雪を蹴り、足をはやめて男にちかづいた。

気がついて、男がふりむく。

「山階逸男！」

「しばらくだったな、相良俊輔よ。獅子丸などと名を変えて、いつも藤原資徳といっしょ、まことにオミキドックリ」

「わかったぞ。歩兵連隊を出動させたのは、おまえだ！」

「わかつているなら、なんにもいうな。あっちへ、ゆけ！」

「ホホウ、おまえが山階逸男か、見たような顔だ。ヤマト・レコーズの新人歌手募集はどうかね、うまくいっているかな、ホホッ。いや、これは失礼、まろは藤原資徳」

「おれは登利丸」

「知ってるよ、へたな人形回しで稼ぐ、あわれなる登利丸。法皇雅仁さまの回し者だそつだ」

「山階とかいったな、むだだよ。おまえが狙う今様唄いの女が、こんなところにあられるはずはない」

「むだらしいな」

あくびを連発、目をこすりながら出てきたのは林・梅田・四方のヤマト・レコード重役連中。

「なにかあったのでしょうか。ババーンとうるさい音がしたのは、あれは、なんでしたかなあ？」

「やはりわたしのいうとおりですよ。あれはバクダン・アラレですよ。ねえ相談役さま、バクダン・アラレでしょう？ 塩気が利いていて、いける味」

「家内の店でも売っていますよ。うちの場合は自分でつくるわけではなくて問屋から仕入れますが」

「そのお店は「ハナエちゃんの店」というのじゃありませんか？」

藤原資徳には、こういう残酷なところがある。公家に特有の、残酷をたのしむ性格。

四方修二は貴族とは縁がないから、資徳の残酷な言葉にはなにも感じるものがない。

「われわれが何もしないのに、女の大群は解散したのですなあ」

「この雪ですからね、いつまでも続くはずはないと思っていました

よ。これでゆっくり寝られるわけだ、ねえ、相談役さま……おやッ、相談役さまが見えない」

「こまりますなあ。新人歌手募集のテストを中止しなくてはならぬのに、発案者の相談役さまが行方をくらましては……」

林重役の吐息が寒気に白く凍る。逸男にひっかきまわされた感じのヤマト・レコードの前途をおもえば、林重役の吐息も無理はないわけだ。

山階逸男の行く先、それはもちろん浅草、カフェー黒竜江。

サワよ、どうした？

無事に逃げたのか、サワよ！

( 第10章・終 )

(51)

浅草へ、浅草へ――

大山ケンペイことケンサンは女の小隊にとりかこまれ、「さくらさくら」を唄いながら、浅草めざしてすすむ。

女の小隊にはナミヨがまぎれこんでいる、いざというときにはサワを救出する作戦。

そのあとから山師逸男がゆく。

逸男は黒竜江のサワの存在を確認してはいないが、黒竜江に行けばなにかつかめると確信している。「狩り出し」に失敗したので、こんどは黒竜江で「網を張る」作戦にきりかえた。逸男は執念ぶかい。

そのあとをヤマト・レコードの重役連中がゆく。

相談役の山階逸男にそそのかされ、あるいは脅迫されて、「藤原資徳一派の狩り出し」をやったものの、もともと気がすすまなかった。

レコードをつくらぬのに新人歌手募集のテストをやる虚偽がいやだというのではない。こんなことばかりやっていて、レコードの製作販売からおざかってしまうのが不安だ。レコードを作って売るのが根っから好きな連中なのだ。

八千人の女の大群に包囲された、あの、なんともいえない気の重さ。

わけがわからないが、ともかくも女の大群は消えた。いまさら会社にもどって、ソファーで寝る気はしない。

雪――いいですね、結構ですね――雪、大雪――ゆきやこんこん、あられやこんこん――

いっそのこと、浅草へくりだして騒ごうじゃないか、会社をつく

るときに行った、名前はおぼえていないが、なんとかいうカフェー、あそこへでも行くつや！

なんとなく、そう、初心がなつかしくなって、浅草めざしてすすむ。

そのあとから、

「大山ケンペイを支援しなくてはなりませんよ、隊長」

「ここにはもう、なにもおこらないだろう。行くかね、浅草へ、カフェー黒竜江へ！」

ケンゴ隊長とケンシも浅草へ足をむける。

そのあとを藤原資徳・登利丸・獅子丸がすすむ。

歩兵連隊は浅草には出動しない、歌好きの女たちは五人、十人とかたまり、存分に唄っている。

カフェー黒竜江は、こんなおそい、しかも雪の夜だというのに店をあけている。

カフェー黒竜江がちがくと、ケンサンをとりかこんでいる女たちの唄う歌が「サワよ逃げな、逃げてはならん」に変わった。

「君たち、それを唄うのはやめてくれ！」

ケンサンが女たちに哀願する。

カフェー黒竜江が目まえだというのに、

サワよ 逃げるな 逃げてはならん

ぼくはケンペイ はりきるケンペイ

こんな歌を唄いながら行進してゆけば、サワは逃げてしまう。

「あーら、これはいい歌なのよ。サワよ逃げるな、逃げてはならんというのは大山ケンペイさんの、サワさんにたいするところからの気持ちなんですよ。だからサ、あたしたちがこころの底から唄えば、みんなの気持ちがあつくとサワさんにとどいて、逃げずに待っているわよ！」

理屈はそうなる——？

「だがねえ、芝居でも小説でも、「逃げるな！」といえば犯人はかならず逃げてしまふんだよ」

「芝居は芝居にまかせておけばいいの、これは現実なんだから」

「そうなのよ。あたしたちが唄うのは大山ケンペイさんを援助したいという、あたしたちの愛情なのよ」

「愛情ですかア……」

ケンサンの当惑をはねかえす勢いの サワよ逃げるな、逃げてはならん、の大合唱もるとも、カフェー黒竜江になだれこむ。

(02)

カフェー黒竜江――

女給は唄い、酔い、男の客は酔い、唄う。適当に陽気で適当に賑やかな雰囲気。

ケンサンは女たちの列から一步ふみだし、

「藤原資徳の一味、サワを逮捕する。神妙にしたまえ！」

「すてき！」

勇姿、ケンサンにふさわしいのは、この言葉である。

ケンサンは調子にのって、

「逮捕容疑は秩序紊乱、風俗潰乱、そのほかである。すなわち、当局の許可をつけぬ歌をはやらせた罪である。したがって、人心をまどわせた罪もかさなる」

ますます恰好がいい。

男の客はこそこそと出ていった。

女給たちも、はじめのうちはおどろいていたが、ケンサンの姿が恰好がいいだけで威圧感のないのを見抜いてからは、

「おもしろいわね。さあ、あたしがサワよ、逮捕しなさい！」

「なにをおっしゃるの、サワはあたしなのよ」

「ケンペイさん、だまされないでね。あたしのほかに、サワがいるはずはないでしょ」

ケンサン、たちまち当惑困惑。

サワを逮捕せよと命令されているが、サワの顔を知らない。

「そんなに多くのサワがいるはずはない、サワはひとりである」

「だからさア、その、たったひとりのサワがあたしなのよ」

あたしヨ、あたしなんだヨ——女たちは口々にいつてケンサンにつめよる。正確にいうと、築地からいっしょにやってきた女たちがケンサンをまもるようにとりかこみ、それを黒竜江の女給たちが包囲する位置関係である。

「チヨイト、あんたたち、大山ケンペイさんをいじめると、あたしたちが承知しないんだからね」

「そつちこそ、なによ。逮捕する犯人の顔も知らないケンペイなんかにくつついて、ヘッ、ちゃんちゃらおかしいっていうのは、そつちでしょ！」

また、はじまつちやった。

ケンサンはただもうウロウロするばかり、さっきまでのいい恰好はどこへやら。

- 2 5 6 -

(03)

「大山ケンペイ、いかがでありますか？」

とびこんできたのは若山ケンペイとケンゴ隊長、この様子を一目みて、

「おいッ、若山ケンペイ、出口をかためろ、だれも外へ出すな！」

「はいッ」

「あーら、このふたりは大山ケンペイさんの味方らしいわ。あたしたちも協力しましょうよ」

「名案！」

表も裏も、二階への上がり口も完全に閉ざされた。

カフェー黒竜江の一階フロアーは密室状態になった。

トーン——これはケンゴ隊長が、これから堂々たる宣言をするぞという合図に、サーベルを床に突いた音である。



「このなかにならずサワがいる。逃げようとするのがサワだ、藤原資徳の一味のものだ、法皇雅仁さまの歌声密使だ」

ケンゴ隊長もサワの顔を知らないんだ、これはおどろいた。

しかし、さすがはケンゴ隊長、「このなかにサワがいる。にげようとするのがサワである」と、状況把握は正確をきわめている。

そこへ、ドアをききませてはいってきた山階逸男、

「ウフフ、隊長さん、築地では失敗したが、どうやら、ここでは成功しそうな具合ですなア、藤原資徳一派の狩り出し作戦……」

「ええッ、相談役さま、まだ、おやりになるのですか、あれを？」

うんざりしているのは、ちょうど到着したヤマト・レコード重役連中。

藤原資徳たちの三人が姿をあらわし、異様な光景の意味する危険に気づいて逃げようとしたが、すでに出口をかためられていて、出られない。進入は可能だが出るに出不れ、カフエー黒竜江は蟻地獄の状況になった。

「歌を唄わせてサワを狩り出そうとしても、そうはさせぬ！」

資徳に対抗、逸男が憎々しい顔と声とで反論する。

「おまえの考えは手にとるようにお見通しだよ。サワがわざとへたに唄う、そうすれば今様唄いだとわかりはしない……おまえはこういいたいわけだ」

逸男はニターツと笑う。

おさえようとしてもおさえきれない勝利の予感に、笑いをこらえきれない。

「藤原資徳、おまえにはサワの、というよりは今様唄いの女の誇りというものが、わかっておらん。いまここで逮捕されるのがイヤだといってへたに唄うぐらいなら、逮捕されたほうがずーっとまし、それが誇りなんだ。そうだろう、登利丸さんとやら？」

凶星を衝かれ、登利丸は唇をかむ。

そのとおりなんだ、山階逸男のいうのにまちがいはない。

——ここは生命と安全が優先だ。へたに唄って、身分を悟られないようにする。

指示しても、サワが承知するはずがない。頭は承知したつもりでも、きたえた身体が承知しない。

資徳はなにかいおうとして、グーッと言葉につまる。

獅子丸は、

「コノオーツ、山階の山猫野郎！」

さげんでとびかかろうとしたが、その胸にピタリ、ケンゴがすばやくピストルの狙いをつけて、撃鉄を起こした。

そこへまた、ギーツと鏑(さ)びた音、クサカベミヨコと宍戸六平太ことケンニが登場。

秋葉原のニセ・ケンベイ隊本部から築地に行ってみると、だれもいない、なんにもない。それならばとミヨコはなつかしの浅草めざして走り、それをケンニが追いかけてきたんだらう。

ミヨコはハアハアと息をはずませ、黒貂のコートに降りかかった雪がキラキラとかがやく。昭和十一年二月二十五日の夜から降りはじめ、時計が二十六日になっても、まだ降っている雪だ。

「歌のテスト、ここでやるんでしょ。山階さん、いいこと、「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかな」を吹きこむのはぜったいに、あたし、クサカベミヨコなんですからね。ほかの女にはわたしませんよ！」

梅田重役は口をポカーンとあけていたが、それだけでは感情発露が弱いとかがえたらしく、

「アアーツ、もう、なんでもいい！ あたしや、ただ、レコードをつくって売りたいだけなんだッ」

さげぶついでに、髪の毛をむしゃむしゃとむしった。

(04)

大山ケンペイことケンサンといっしょに築地から行進してきた女

たちが、カフェー黒竜江のなかによびこまれた。

「まあ、これが営業用のチコンキなのね。いかにも、ほんものチコンキって感じが出ているわ！」

「カフェーって、きれいな。あたし、お父さんにいって、カフェーづとめにかわろうかな」

はじめてカフェーというものに触れた女ばかりだから、ひとしきりカフェーに関する感想が披露された。

しかし、彼女たちがカフェー黒竜江によびこまれた理由はもちろん別のところにある。

「みんなで、ここで唄うんだってさ」

「また歌の合戦？」

「こんどは兵隊さんとの歌合戦じゃなくて、勝ち抜き戦らしいわよ」

「それじゃ、築地のビルでやってるテストとおなじじゃないの」

「でもさア、あそこの男のひと、ピストルふりまわして脅してるのよ。こんなところじゃ、あたし、唄いたくないな」

ピストルという言葉が耳にはいったケンゴは、くるりと女たちのほうをふりかえり、

「きみたちは人質なんだ。サワがおとなしく名乗って出れば、きみたちは唄うまでもないんだよ。わかったらう、サワよ、いまのうちに名乗って出てこーい！」

クサカベミヨコは怪訝な表情、なによ、これは、はなしがちがうじゃないの！

そばのケンニに不審な顔つきをむけるが、ケンニもくわしい事情がわからないから、ケンサンにたずねる、ケンサンの答えるのにフムフムとうなずいていたケンニがミヨコに耳打ちする。

ミヨコの顔にサーッと朱の色がさした。

「サワが、なによ！」

激しすぎてきこえにくいミヨコの言葉をわかりやすいようにいいかえれば——あの歌をうまく唄えるのはサワじゃなくてクサカベミヨコである、ウソだというならテストしてみればいい、即座にわか

ることだ。

ケンゴと山階逸男が顔をみあわせ、ニヤリとしたのは無言のうち  
に意見が一致したからにちがいない。

「藤原資徳よ、どうするかね。おまえが、サワはこの女だと指でさ  
すだけで、この場はしずかに……」

おもおもしろく恰好つけた逸男の言葉、それをさえぎって資徳が、

「好きなようにすればよろしい。すなわち……」

「うるさい！」

ドッカーン——ケンゴがピストルを一発、天井にむかってぶっぱ  
なすと、

「さあ、みんな、ひとりずつ唄うんだ！」

ケンゴがつけつけたピストルにおびえ、おもわず一歩さがった女  
たちのなかから、透き通る声があがった、まぎれこんでいるナミヨ  
である。

(05)

「ネーエ、大山ケンペイさん……」

「はい。ぼくは、ここですよ」

「ケンペイは「ナンノ掟があるものか」や「もどれないのかな」や

「波よ聞いてよ」のような歌を唄ってはならない——たしか、そう  
だったわね」

「そういう指示が出ております」

「唄ってはいけない歌なら、それを他人に唄わせるのもいけない、  
そういう理屈になるでしょう？」

「そういう理屈です。理屈は理論ともいいます」

ケンゴは呆気にとられ、ケンサンとナミヨを交互に見ていたが、

「ばかやろめ！」

さけば、ピストルの柄でケンサンの横つつらをなぐりつけた。

「秘密をべらべらとしゃべってしまいやがって！」

「でも、隊長。これが秘密であるとは、大山ケンペイ、おしえられ

てはいないのであります」

ケンゴは苦々しい表情になったが、それもすぐに爽快な顔つきにかわった。苦境をきりぬける名案がうかんだにちがいないのだ、ほんとうにケンゴはしつこい。

「山階相談役、あんたはケンペイじゃないから、自由だ。このピストルを貸すから、おもうぞんぶんによつてくれ」

なるほど、ケンゴの名案というのがこれであつたか。

ところが、である、こんどは逸男の表情が爽快にならない。

「さあ、思いきつて！」

逸男はケンゴのほうに、モソモソとむきなおり、

「おれは権力をつかつた経験がない、なにしろ正真正銘の最下級公家なんだからね。やつてくれといわれても、方法がわからない」

「なにをいうんだ、権力なんていうものは、おまえ、人間の本能の初期だぞ、さあ、やるぞと決心したときにはもうすでに権力の何たるか、いかにして権力を行使すればいいのか、すかーつとわかつているんだ！」

「本能はいいとしても、権力のほうは、だめだなア」

ケンゴはなおもあきらめず、権力行使がどんなに気分のいいものであるか、人間と生まれて権力をつかわずに死ぬのはいかに無益無意味であるのかを説いたが、逸男はただ「いや、おれは駄目だよ、おれは権力というものをつかつた体験がないのだから」と、ケンゴの誘いを迷惑におもう心境をかくさない。

「あの一、それならば……」

梅田重役が何かいいかけたのを、林と四方修二があわててひときめる。

「おいっ、そつちに何か名案があるんじゃないのか。あるなら、はやく提案すべし！」

逸男とケンゴがほとんど同時にさげぶ。ヤマト・レコードの重役連中にこの苦境をきりぬける名案があるのなら、このさいである、なんでもいいなりになってしまおうという気持ちの姿勢になつてい

るのがわかる。

「名案なんか、この梅田重役の頭から生まれるわけがないんですよ」と林重役。

「梅田重役は、はやくレコードをつくって売りだしたい、そうしなければヤマト・レコードはつぶれてしまう、そういいたいだけなんですよ。ねえ、梅田さん、そうですね」と修二。

四方修二が梅田重役の発言を封じるやりかたはなかなか暴力的である。

相手はピストルをちらつかせて脅しているのだから、ここで下手にうごくとは怪我をしますよ、なんていう雰囲気を見せながら、そのじつ、うしろから肩を抱くようにみせつつ、掌で梅田の口をがっちり押しつけ、猿ぐつわをかませている。

空いているほうの片手で、梅田の耳をおもいつき強くひっぱつりながら、ケンゴや山階にはきこえない声で、「一言もしゃべるんじゃないませんか」と吹きこんでいる。

そろそろこのあたりで山階逸男やケンペイ隊との提携関係を解消しなければ会社がつぶれてしまうと、修二はまじめにかんがえているのである。

- 262 -

「今夜はすばらしい夜になったわねえ！」

クサカベミヨコが、こころのそこから嬉しそうな顔で、いう。

「テストなんか、する必要はなかったのよ。レコード界のトップ歌手はクサカベミヨコだってことが、これではつきりしたわけね。あたし、ほんとうにうれしいの」

カフェーの明かりで見るクサカベミヨコ、なるほど美しい。自信に満ちて、寄せられる視線にキラキラした笑顔でこたえている、というか、視線をはなっかえしているというか。

「すごいッ。クサカベミヨコさんの、こんなに近くにいられるなんて、あたし、夢見ているんじゃないかしら！」

ナミヨの芝居もたいしたもの。

「ネーエ、みなさん、ミヨコさんにサインをねだっちゃいませうよ！」

「うわー、それがいい。ねえ、ミヨコさん、あたたちの願いとわがまま、聞いていただけますわね」

「もち、よ。今夜は特別、ルージユでサインしてあげましょ、キャーッという歓声のなかで、

「ルージユって、なんだ？」

「おまえが知らぬものを、おれが知ってるわけがない」

獅子丸は機嫌がわるい。

「口紅さ」と資徳がおしえてやる。

「口紅のサインが、そんなにうれしいことなのかね？」

「らしいね。おれは、気味が悪いけど」

登利丸と獅子丸がブツブツいつてるあいだに、ミヨコは上機嫌でサインをやってやる。

「ええっと、「歌声よいつまでも。昭和十一年二月二十五日の雪の夜の思い出に。クサカベミヨコ」、どう、いい文句でしょ」

「もう二月二十六日だよ」

「もうすぐ朝ね」

「ミヨコはますます上機嫌。」

「隊長ッ、重大報告でありますッ」

(06)

雪まみれの姿で登場したのは安岡ニセ・ケンペイ、すなわちケンイチである。

気づいた登利丸、あわてて獅子丸のうしろに、かくれる。

「安岡ケンペイ。なんだ、重大報告とは？」

「歩兵連隊が反乱をおこしました。首相官邸や警視庁、そのほか重要施設を占拠しつつあります。報告、おわりッ」

「まさか。歩兵連隊は歌の練習をやっていたんだ、反乱なんかおこすはずがない！」

ケンサンは叫ぶ。

ケンサンが「はずはない！」と叫んでも、この場の雰囲気はケンイチに味方する。

頭から顔から、全身に雪をかぶったケンイチがウソの報告をするはずはないと、みんなは思ってしまった。雪は白く真実も白い、雪は真実の親類だといった幻想があるから、ケンイチには有利、ケンサンには不利、気の毒な状況だ。

ケンゴ隊長はカフエー黒竜江自慢の大型柱時計をじいーっとらんでいたが、

「クー・デターをおこすには適当な時間ではあるな。安岡ケンペイの報告は真実をつたえているかもしれぬ」

ケンサンにとっては致命的な隊長の一言だ。

「ぼくを信じてくださらないのですか、隊長ッ」

絶望の声を最後に、ケンサンはその場に卒倒した。

「キャーッ、大山ケンペイさーん、しっかりしてエ！」

女たちがかけよる、そのすきにナミヨはすばやく二階にかけあがり、サワの身のまわりのものをかきあつめ、クルクルッとまるめて風呂敷包みにして降りてくると、バタバタとあわただしくケンサンのそばに駆け寄った。

あたしの大山ケンペイさんだよ、ほかの女の手には触らせないよとでもいうように耳に口をあてて、

「大山さーん、なにか、いいたいこと、あるんでしょ？」

ケンサンの唇がちよつとうごく。

「なーに？ もっとはつきりいつてちょうだいッ」

ナミヨがケンサンの口許に耳をよせると、

「あーら、大山ケンペイさんは歌を唄っていらっしやる！」

ナミヨのいうとおり、ケンサンは目をつぶったまま、ちいさな声で唄っていた。

泪羅の淵に 波さわぎ

巫山の雲は みだれとぶ



混濁の世に われたてば

義憤にもえて 血潮わくウ

気をうしなつたまま、ケンサンは唄っていた。ひくいが、はっきりした声である。

「こりゃ、いけるぞ！」と梅田重役が歓喜の声をあげる。

「いい歌とはいえないが、その点にかえって商品価値はあるかもしれない」と林重役。

「単音節のくりかえし、現在の日本の録音技術にはもってこいの歌ですよ」と技術担当重役の四方修二。

(07)

グループが反乱、となればさつさと現場にかけつけるのがケンペイの任務のはずだが、どういいうわけか、ケンゴ隊長、

「いいがあツ、みんなよつくきけよ、おれはまだ、サワの逮捕をあきらめてはいないんだからな！」

たかだかと宣言した。

執念ぶかいのはいいとしても、この時になってもまだ、サワの逮捕なんていうテーマにこだわっていて、いいものだろうか？

敵とはいえ、藤原資徳としてもそのあたりのことが気にかかるし、

「さつさと千代田の城にかけつけて上司の指示をあおがなくていいのか？ 怠慢の罰をうけても、おれは知らんぞ」

「余計な口出し、やめてくれ！」

「隊長さん。ここよ、元気をふるって頑張るのよ。失敗しても平気なのよ、あたしのレコードはじゃんじゃん出るし、ミヨコにやしなってもらうのがイヤなら、ケン二さんの故郷の江差に行って、ニンをとってくらせばいいんだからね！」

「ありがと、ミヨコよ。おれはおまえに、ひどいことばかりやったのに、それをうらみませず、そんな優しいことをいってくれるなんて。おれは、おれは……」

ケンゴは泣き声になり、涙も出ている。

ブルブルツと顔をふるって涙をはらい、

「今日から、「ナンノ掟があるものか」「もどれないのか」「波よ聞いてよ」以上の三曲を唄うのは厳禁とする。どうしても唄いたいというやつは唄ってもかまわんが、そのときは、いいか、そいつをサワと見なして逮捕する。安寧秩序を破壊する不逞のやからとして裁判にかけるから、覚悟しろよ！」

「名案ですツ、隊長。反乱兵士と同様の罪ですね！」

「そうとも。安岡ケンペイ、おまえなかなか頭がいいではないか」

「あーら、隊長さん。それじゃ、あたしが、クサカヘミヨコが、「ナンノ掟があるものか」「なんかをレコードに吹きこむのも悪いことなんでしょうか、ひどいわよツ」

ついついさつきはミヨコの親切に感激して涙をながしたばかりのケンゴだが、と違って、情と業務とをゴチャ混ぜにする男ではない、安寧秩序の破壊にたいしては断固として禁止するのである。いくらミヨコが抗議しても、こればかりはゆずれない。

「安岡ケンペイよ、反乱兵士どもは何か歌を唄ってはいなかったか？」

「ああ、そういえば……しかし、あれが歌といえるのでしょうか、ディンディダ・ディディディン・ディンディダタン……ぼくはおとっちゃんのためならエーンヤコーラのほうで歌としての完成度がたかいたおもうのですが」

「だまれ、おまえの好みを聞いているのではない。さーっ、いそがしくなるぞー！」

ドッカーン——ケンゴはまたまた一発、天井にぶっぱなした。景気づけの一発のつもりらしい。

(08)

ケンゴの目はキラキラとかがやき、唇のはしっこに泡さえ吹いているのは、これからやる大演説の、予想される大反響に、はやくも

自分で興奮しているからだ。

「反乱軍は歩兵の第一連隊と第三連隊、それに近衛歩兵連隊、兵力合計は約千四百、これくらいで権力を奪取できるはずはない。重要施設を二、三日のあいだ占拠するのが精一杯だろう。それにもかかわらず、かれらは決起した、なぜだ？」

ケンペイ隊員はこたえない、こたえるべき知識がない。

女たちはこたえない、反乱なんかに興味がない。

「かれらは歌を唄っているそうだ…… デインディダ・ディディイン・ディンディダタン。かれらは築地の歌合戦で負けたが、負けたままでひっこむのはゆるされるものではない。ゆえにかれらは誓のために決起した。千代田のお城を中心とする官庁街を占拠し、たんなるクー・デターとおもわせておいて…… いいか、資徳よ、サワよ、よつく聞けよ…… 「ナンノ掟があるものか」「もどれないのか」「波よ聞いてよ」など、このけしからぬ歌の全面禁止作戦を展開しようというんだな。たとえ鼻唄だろうと、ハモングだろうと

」

「お言葉ですが、ハモングではなくてハミングであります！」

「大山ケンペイの発言は僭越の罪に相当するが、このさいである、特別に許可する…… その、ハミングであろうと、唄うものをかたっぱしから検挙する。われわれケンペイは単なるクーデターは防止しなければならぬが、クー・デターとみせかけての不良歌謡撲滅作戦は断固として支持するものである！」

「とすると、隊長、あの 泪羅の淵に、を支持することになるのでありますか？」

ケンシが渋い顔つきでたずねたのは、隊長ケンゴがかならずしも

「青年の歌」には感心していないのを知っているからだ。

「結果として、そうなる。まあ、仕方がないよ」

「結果として…… ああ、そうですか」

「さあ、諸君。不信と逡巡とに訣別して、目標にむかつてすすむうではないか。けしからぬ歌を唄うものを発見し、摘発し、かたっぱ

しから牢屋にぶちこむ。いそがしくなるぞ。もちろろん超過勤務手当については、おれがうまくそろばんをはじいてやる、一カ月すればケンペイ隊はカネモチ隊だ」

「ぼくはチコンキが買ったかったですよ、隊長！」

「安岡ケンペイ。チコンキは上等の舶来、レコードはヤマト・レコードのラーベルをどっさりだ！」

利益誘導の罪にあたるのではないかな、梅田重役が、だれにいうともなく、つぶやいた。

「吹雪だ！」

カフェー黒竜江のドアが風にあおられてボタンボタンと音をたてている。

「はやくかえらないと、と閉じこめられちゃうよッ」  
それをきっかけに、女たちは出てゆこうとする。

「ちよっと待った、このままお別れするのも名残おしいから……」  
ケンゴは首をかしげてかんがえる様子だったが、様子だけではなくて本当にかんがえていたらしく、

「ケンペイ全員、整列せよ！」

ドアのまえに部下全員をならべて立たせ、

「女のかたがたがすべてサワさんだということにして、サワさんにお別れの挨拶をする、わかったか！」

「隊長、よくわかりましたッ」

ひとりずつ、女たちが出てゆく。

そのひとりひとりに、五人のニセ・ケンペイが、

「さようなら、サワさん。また会いましょうね。」「ナンノ掟があるものか」を唄うと、このぼくが逮捕しなくてはならないから、唄ってはいけませんよ」

「サワさん、お元気で……」

「サワさん、こんど会ったら「上海リル」を唄ってください」

調子にのった女は、

「ウフフ、じつは、あたしがサワなのよ。でも、「もどれないのかナ」を唄ってはいけないというのは、ほんとうに残念だわね」

「仕方がないんです、サワさん、お元気で」

「達者でね、サワさん」

クサカベミヨコはこの場にのこり、ケンペイの横にすくと立ち、最後に出てゆく女にむかって、

「もしかすると、あんたがサワさんなのかもしれないんだわ。歌の勝負ができなかったのは残念だけど、いつか、きっと、チャンスはあると思うわ」

「フフフ、そうよ、あたしがサワなのよ。ミヨコさん、ええ、いつか歌の勝負ができるのをたのしみにしています。さようなら」

ドッカーン——ケンゴ隊長がぶっぱなし、カフェー黒竜江の場に幕をおろした。

(09)

ニセ・ケンペイ諸君はいそがしい。

寝てる間も、めしを食う時間もない。

それでもケンペイ諸君は文句もいわず、つかれた様子もみせずにはりきっている。

歩兵連隊による政府重要施設の占拠はながくはつづかないとわかっていいるから、そのあいだにひとりでも多くの禁令違反者を摘発しようとして奮闘している。

超過勤務手当の件も非公式ながら諒解されたというつわさもあり、はりきらざるをえない状況になっている。

「おいッ、コラ、おまえはいま、なんといったか？」

「はあ。わたしはただ、「そのアジの干物を三枚」と」

「いかん、いかん。アジという言葉をつかってはいかん。それはおまえ、「ナンノ掟があるものか」の第三節の文句ではないか、唄ってはならんだ」

「唄ってなんかいませんよ。おさかなのアジを注文しただけじゃあ

りませんか!」

「注文でも、いかん。「ソレを三枚」でじゅうぶんに意味はつうじ  
る」

「横暴だ!」

「なんといわれても、そのこと自体を犯罪容疑とはせぬが、アジと  
いうのはいかん」

「すると宍戸ケンペイさん、クジラ取りといってもいけないわけ……

……?」

宍戸六平太ことケンニとクサカベミヨコは晴れて夫婦となり、錦  
糸町の魚屋の二階の間借りでくらしはじめた。その魚屋の亭主が質  
問したのである。

「もちろんですよ。クジラ取りなんていうけしからん言葉じゃなく  
ても、捕鯨という立派な言葉があるんだからね。おじさん、気をつ  
けてくれないと、おれとミヨコの立場まずくなるんだからね」

反乱部隊は政府重要施設の占拠に多忙をきわめ、反乱の本来の目  
的たる——とケンゴ隊長が思いこんでいる——不良歌謡禁止には手  
がまわらない。総員がたった五人しかいないニセ・ケンペイ隊が連  
日連夜の超過勤務に目をまわしているのは、このためだ。

反乱については新聞もラジオもほとんど報道しないが、口から口  
へとつたわって、

「あの歌、唄っちゃいけないだとさ。政府の取締りがゆるいか  
ら歩兵連隊が怒って、反乱になったんだってね」

「いい歌なのに、ねえ」

「シィーッ。あなた、そんなこと、たとえ頭や胸で思っても、口に  
出しちゃ、だめよ。ケンペイさんに連れてゆかれて、おしまいにな  
っちゃうんだから」

五人のニセ・ケンペイが取り締まるだけならたいしたことにもな  
らないのだが、歩兵連隊のクーデターが重みを効かせている。

二月二十六日、二十七日——時間がたつにつれて東京の街から、ナンノ掟があるものか」「もどれないのかナ」「波よ聞いてよ」「メロディは消えた。

「ねえ、うちにもあの歌のレコードがあったんじゃないかしら。はやいうちに捨ててしまわないと……」

アヤが修二にいう。

「レコード?」

「そうよ。「ナンノ掟があるものか」とか「もどれないのかナ」とか、さ」

エーッ——修二はしばらく首をひねっていたが、

「なにをいつてる。捨てるも捨てないも、あの歌のレコードなんか、あるわけ、ないんだよ」

「だって、どうして?」

「どうもごつもない。そもそも、あの歌はレコードには吹きこまれていないからさ」

「へーえ。そうだったの、知らなかったね。あんなにはやったのに、レコードになつていなかったなんて、あたし、信じられないよ」

アヤにいわれて、修二も信じられない気分。

(10)

「どうも……やられましたな」

「やられた、ね」

「歩兵連隊の反乱と、これと、そもそも関係はないのでしょ?」

「たかが歌だよ、歌を禁止するために反乱を起こすなんて、きいたことがない」

「しかし、ケンコ隊長は思いこんでいる」

「思いこんだ強み……それにやられた」

「サワたちは、どうしているかね?」

「安全なところに避難しております。ほとぼりがさめれば、また唄

いだすでしょう。ただひとつ……」

「だれか、女の子が？」

「トキコが行方不明です」

「トキコ……サーカス団にいた……」

「検束されたのでは？」

「まさかとは思うんだがね、千代田のお城に手をまわして、しらべてみよう」

トキコが検束された事実はない、これはたしかなことだと判明したが、トキコから音羽の家に連絡はない。

( 11 )

「青年の歌」の歌をレコードに吹きこむヤマト・レコードの事業企画は挫折した。反乱軍の愛唱歌をレコードにするなど、とんてないと叱責されてしまったのだ。

山階逸男は、箱根の関所でカフェー黒竜江の宣伝マッチをひろったときに道をまちがえたらしいといいだし、もういちどやりなおすからと、ヤマト・レコードに辞表をだした。

幹部連中は慰留したが、

「フッフ、諸君がほしいのはわたしのカネでしょう。心配にはおよばない、あれは無償で提供するから、まあ、せいぜい稼いでくれたまえ」

「これから、どちらへ？」

「まず、箱根の関所へ。そこから先が、どうなるかな」

「伊豆ではありませんか。源頼朝がながされたのは伊豆の（ま）葦山ですよ、葦山の蛭ヶ小島、説明板がたっていますから、すぐにわかります。ちかくには、伊豆代官の江川太郎左衛門がつくった反射炉など

も……」

「反射炉……軍事施設としては見のがせぬ！」

逸男の目がきらりと光った。



(12)

二月二十九日の朝――

「アヤさん、はやくはやく、ラジオつけて！」

「テイコさん、どうしたの。あんたのこのラジオは？」

「安物はだめだね、ガーガーピーピーで、なに言ってるんだか、まるつきり聞こえない」

「なにか、あつたの？」

「あつた、らしいのよ」

「このラジオはアメリカ製だ。」

アヤがスイッチをいれると真空管があつたまつて、

「天皇陛下の勅命が発せられたのである……あくまでも抵抗したならば勅命に反することになって賊名をおびねばならぬ……天皇陛下に背き奉り、逆賊としての悪名を永久にうける様なことがあつてはならぬ。今からでも決しておそくないから……」

「ヘイタイさんが気の毒だわ」

「逆賊になる、なんていわれて、ほんとにねえ」

「反乱がおさまったら、あれは、どうなるんだろっ？」

「あれ、つて？」

「あの歌を唄つてはいけない、唄えば逮捕するっていう、あれよ」

「そうねえ。どうなるかわからないけど、唄わないほうがいいんだろっね。歌ぐらいで逮捕されちゃ、間尺(ましゃく)にあわないものね」

(13)

おなじ二十九日、東京の空にアドバルーンがあがった。

「勅命下る。軍旗に手向かうな」

市民がアドバルーンを見上げる空に、飛行機が飛んできて、ピラをまいた。

「一、下士官、兵に告ぐ。今からでも遅くないから原隊へ帰れ」

「二、抵抗する者は全部逆賊だから射殺する」

「三、お前達の父母兄弟は国賊となるのを皆泣いて居るぞ」  
ヒラヒラとヒラがおちてくる。

「おいッ、あれを見る！」

「どこを？」

「あのアドバルーンだ、アドバルーンのロープを見るッ」

「ロープ、ロープ……ああッ、だれか、つかまっている！」

「人間だ、女の子だ！」

「藤原さま、あれはトキコです！」

「しずかに、しずかに……たしかにトキコだ！」

「なにか、いつてる！」

「唄ってるんだ！」

風にゆれるアドバルーンのロープにつかまって、上に上に、よじのぼりながら、トキコは唄っている。

ナンノ掟が あるものか

玉のさかずき まわせよ まわれ

呑んで吞ませて 吞ませて呑んで

グイツと干そうと 舐めようと

ナンノ掟が あるものか

風に邪魔され、トキコの歌声は途切れるが、見ているものの耳にははつきりと聴こえている。この三日というもの、いちども公然と唄われたことのない「ナンノ掟があるものか」だ。

トキコを見上げるひと——ヒト——人。

だれも黙っている。

しかし、胸のなかで、みんな唄っている。

焼いて食おうと 食うまいと

ナンノ掟が あるものか！

トキコといっしょに、声をあわせて唄っている。

不安な予感に胸をいためながら、トキコといっしょに、声をあわ

せて唄っている。

その筋が放置しておくはずはない。銃弾一発、たったそれだけで、トキコの身体に穴があく。

「登利丸よ、チャンスはただ一度だけ」

「承知しております」

「藤原さま、登利丸の腕に、すべてを賭けましょう」

「登利丸の吹矢の腕に……！」

キラリ——登利丸の口から一本の光の矢がはしって、ロープを切断した。

「ああッ、アドバルーンが！」

ロープを切られたアドバルーンは寒風にふきまくられ、あつというまに天空たかく飛びさってゆく。

トキコは、飛びさるアドバルーンにつかまっている。

トキコが背中中で、「勅命下る、軍旗に手向かうな」の「軍」の文字を隠そうとしているのがわかる。

トキコは、口をあけて唄っているように見える。

唄いながら、天の彼方に、トキコは消えた。

(14)

京の法住寺殿。

法皇雅仁は藤原資徳からの書状を読みおわった。

「やられたようだ。獅子丸がつくってサワに流行らせた昭和の今様歌は消えてしまったということだ」

「それでも、東京の者が歌を唄うのをやめたわけではありません。ま、い？」

法皇雅仁の横から、しずかに口をそえるのは乙前である。

「それは、そのとおり。いま東京で流行のレコードは「ああそれなのに」というのだそうだ」

法皇雅仁は、そら、これがと、楽譜を乙前に手渡した。

乙前は楽譜を見て、

「おもしろそうな……この、アドバルーンというのを見たいものですね」

「いずれ資徳がかえってきて、アドバルーンをつくらうといいだと思いますよ」

「これから、どうなさります」

「乙前におしえてもらった今様の歌と曲と、唄うときの心得とを書物にして昭和の時代にのこす、この方法が次善の策かと、かんがえておる。どう思つかね、乙前は？」

「けっこうでございますよ。ですが……」

乙前の躊躇の様子に、雅仁は不安の色をあらわした。

「書物ということになりますと、われらの出る幕ではございません」

「いやいや、昭和の東京とかぎるものではあるまい」

「治天の君に、そのようにいっていただければ、栗王丸にも励みとなりましょう」

法皇雅仁は安心した様子。

巻紙をひらき、端のところにも『梁塵秘抄・巻一』と書いて、

「りょうじんひしょう」と読む

乙前の食い入るような視線、その意味を察する雅仁がゆっくりと語る。

——むかしむかし、唐の国に虞公（ぐこう）、韓娥（かんが）という唱歌の名人がいた。ふたりが唄うと、歌の心が屋根裏の梁にもつもった塵につたわり、塵はふうわりと舞い上がって空をただよい、三年のあと、元の場にふうわりと舞い落ちる。

「虞公、韓娥の技にあやかりたい気持ちをこめて『梁塵秘抄』と名づける」

「よろしゅうございませう。で、わたくしは、どんな役をいたせば……」

「我が師よ……」

乙前は放浪の芸人の身の上、その乙前を法皇雅仁は「我が師」と

よび、みずからを乙前の門弟として位置づけている。

「すでに、おわかりのはず、と推察しております」

「……わたくしから、申せと？」

「無礼ながら」

「ならば、申しましょう、わたくし乙前は女王蜂になります。女王蜂になって、何百人、何千人のサワヤハナエ、登利丸や獅子丸、多々丸を産みます。彼女、彼らを……」

「人心乱れる東国へ送るのは……」

「おそれながら、東国ばかりではございません」

「人心が乱れる国ならば、どこへでも」

「治天の君さまの聖なるお役目」

(15)

十カ月すぎて、

東京の空には何本ものアドバルーンがひるがえっている。

あれを買いえ——これを見る——初恋の味カルピス——お歳暮大売出し。

- 277 -

しかし、東京市民の多くは、ふと、アドバルーンの広告文字に女の子が乗っているような錯覚にとらわれ、それが錯覚にすぎないのを知ると、まわりにひとのいないのを確認してから、そーっと唄う

なんの掟があるものかアー

(16)

テイチク・レコードの十一月新譜は「あそれなのに」、星野貞志(ほしのていし)作詞・古賀政男作曲、美ち奴(みちやつこ)という女の歌手が唄う。

空にや今日も アドバルーン

さぞかし会社で いまごろは

おいそがしいと 思うたに

ああそれなのに それなのに  
ねえ おこるのは おこるのは  
あつたりまえでしょう

(『日本流行歌史・戦前編』)

「美ち奴の「ああそれなのに」が売れているんだろ。どうしてヤマト・レコードから出さなかったのよ？」

「そんなことをいったって、おまえ……」

レコード会社の競争は激烈——そんなことをアヤにはなしても仕方がないと思うから、修二はくちこもる。アヤも、ふかくはきかない。

「テイコさんがいったわ。美ち奴は浅草の黒竜江というカフェーの女給で、本名はサワ。あの、「ナンノ掟があるものか」を流行はやらせたのは、このサワだっという噂があるそうよ」

「ふーん。噂があるのか」

二月二十六日の朝のカフェー黒竜江——ケンペイの挨拶をうけて出ていった女たち、あのなかにサワがいた。

あの女のうちの、だれが、サワだったのだろう。

「いまごろ、どうしているのかなあ、その、サワという女は？」

「だから、噂になっているのよ。美ち奴という歌手になって、天のむこうに飛んでいったアドバルーンのことを「ああそれなのに」の歌にして唄ったんだって……」

(第11章・終)

(大尾)